

國民文化研究會・聖德太子研究會著

聖德太子佛典講說

維摩經義疏の現代語譯と研究

(中卷)

黒上正一郎謹言
聖徳太子維摩經義疏

自行外化を憶して以て心を
調伏すと雖も若し自他の
二境を存して修行せば
則ち修する所廣からずして
物と其の苦樂を同じく
すること能はず。故に

勤めて應に著を離る
べしと明すなり

若し天下の道理を論せ
ば悪を遣り善を取るは
必ず己れに始まりて方に能
く人を勤む。若し自ら能
くせざれば安んず人を勤む
さ得む

写真の説明：渋谷の国文研事務所会
議室に、小田村寅二郎先生の御遺影と
並び、掲げてある額縁のお言葉は、維
摩經義疏第五章文殊問疾品のなかの
聖徳太子のお言葉であり、黒上正一郎
先生の直筆である。この写真の裏側には
（念のための記）として、「黒上先
生のこの色紙は先生が御在世中に菘
田胸喜先生に贈られたものでありま
すが、昭和十六年に国文研の前身であ
る精神科学研究所（田所廣泰理事長）
が創立された時に菘田先生から同研
究所に贈られたものである。昭和十八
年、同研究所が、東京憲兵隊に解散さ
れて以降、約三十七年間、小生が保管、
本日改めて額縁に入れ、国文研会議室
（当時は銀座）に掲げることにした。
昭和五十六年二月十一日 小田村寅
二郎」とある。

目次

中卷目次(附 上・下卷目次大要) 1
凡例 14

中 卷

第四 菩薩章

顯徳序 菩薩章の科段分け 一
「別序の科段分け表」「顯徳序 彌勒菩薩に命ず」 二
顯徳序 「彌勒菩薩・堪へずと辭すの科段分け表」・「堪へずと辭すの科段分け」 三
顯徳序 彌勒菩薩・「直ちに辭す」「辭するを釋すの科段分け」 四
顯徳序 彌勒菩薩・呵の縁由を出す 五
顯徳序 彌勒菩薩・正しく呵の事を出すの科段分け 七
顯徳序 彌勒菩薩・執する所の四事を遣るの科段分け 七
顯徳序 彌勒菩薩・生は空なるが故に受記無しと明すの科段分け 八
顯徳序 「彌勒菩薩・有に就きて受記無しと明すの科段分け」・「三世を擧げて總じて難ず」 九
顯徳序 「彌勒菩薩・別して三世を擧げて難ず」・「三世に定め無きを擧げて釋し難ず」 一
顯徳序 彌勒菩薩・空に就きて受記無しと明す 一三
顯徳序 彌勒菩薩・有と空との合門に就きて受記無しと明すの科段分け 一四

顯徳序	彌勒菩薩・生と滅との定めを立てて難ず……………	十五
顯徳序	彌勒菩薩・眞如の理を擧げて釋し難ず……………	十七
顯徳序	彌勒菩薩・四の眞如を擧げて難を結す……………	十八
顯徳序	彌勒菩薩・生は空なるが故に受記無しと明すの科段分けに關する太子獨自のご見解……………	十九
	〔研究〕太子の私釋について……………	二一
顯徳序	彌勒菩薩・次第を以て執する所の四事を遣るの科段分け……………	二二
顯徳序	彌勒菩薩・受記をやる……………	二二
顯徳序	彌勒菩薩・菩提を遣る……………	二三
顯徳序	彌勒菩薩・滅度を遣る……………	二五
顯徳序	彌勒菩薩・勝行を遣る……………	二七
顯徳序	彌勒菩薩・著を捨てよと勸むるを結す……………	二八
顯徳序	彌勒菩薩・廣く菩提の相を明す……………	三〇
顯徳序	〔彌勒菩薩・呵に因り時の衆は益を得〕・〔彌勒菩薩・堪へざるを結す〕……………	四二
顯徳序	光嚴菩薩に命ず……………	四三
	〔光嚴菩薩に命ず科段分け表〕「顯徳序 光嚴菩薩・堪へずと辭すの科段分け」……………	四四
顯徳序	〔光嚴菩薩・直ちに辭す〕・〔光嚴菩薩・辭するを釋すの科段分け〕……………	四五
顯徳序	光嚴菩薩・呵の縁由を出す……………	四六
顯徳序	光嚴菩薩・正しく呵の事を出すの科段分け……………	四八
顯徳序	光嚴菩薩・諸行に就きて道場を明す……………	四九

顯徳序	光嚴菩薩・縁に就きて道場を明す……………	五五
顯徳序	光嚴菩薩・外化に就きて道場を明す……………	五八
顯徳序	光嚴菩薩・仰ぎて佛地の功德を學するに就きて道場を明す……………	六〇
顯徳序	光嚴菩薩・總じて上の四重を結す……………	六一
顯徳序	「光嚴菩薩・呵に因り時の衆は益を得」・「光嚴菩薩・堪へざるを結す」……………	六三
顯徳序	持世菩薩に命ず……………	六四
持世菩薩に命ずの科段分け表……………	……………	六五
顯徳序	「持世菩薩・堪へずと辭すの科段分け」・「持世菩薩・直ちに辭す」……………	六六
顯徳序	持世菩薩・辭するを釋すの科段分け……………	六六
顯徳序	持世菩薩・呵の縁由を出す……………	六七
顯徳序	持世菩薩・正しく呵の事を出す……………	七〇
顯徳序	持世菩薩・天女を求むるを明す……………	七一
顯徳序	持世菩薩・天女の爲に法を説くの科段分け……………	七三
顯徳序	持世菩薩・天女の爲に正しく法を説くの科段分け……………	七四
顯徳序	持世菩薩・正しく法を説く……………	七四
顯徳序	持世菩薩・正しく法を説く持世菩薩・法樂を説きて五欲の樂に代ふの科段分け……………	七五
顯徳序	持世菩薩・法樂を用ふべしと勸む……………	七六
顯徳序	持世菩薩・天女等法樂の相を問ふ……………	七七
顯徳序	持世菩薩・廣く法樂を列すの科段分け……………	七八

顯徳序	持世菩薩・三寶に就きて法樂を明す……………	七九
	〔研究〕三寶歸依に關する太子のお考へについて……………	七九
顯徳序	持世菩薩・惡を厭離する門に就きて法樂を明す……………	八一
顯徳序	持世菩薩・善を修する門に就きて法樂を明す……………	八一
顯徳序	持世菩薩・善惡雜門に就きて法樂を明す……………	八二
	語釋〔衆魔〕について……………	八四
顯徳序	持世菩薩・法樂を結す……………	八五
顯徳序	持世菩薩・魔は天女に告げて共に天宮に還らんとすの科段分け……………	八六
顯徳序	持世菩薩・魔は天女に告げて天宮に還らんと欲す……………	八七
顯徳序	持世菩薩・天女は辭して還らんと欲せず 魔は天女を放たんことを淨名に求む……………	八八
顯徳序	持世菩薩・淨名は天女を放つことを許す……………	八九
顯徳序	持世菩薩・天女は天宮に住するの法を請問す……………	九〇
顯徳序	持世菩薩・淨名は天宮に住するの法を説く……………	九一
顯徳序	持世菩薩・天女は敬を致し魔に隨つて天宮に還る……………	九二
顯徳序	持世菩薩・堪へざるを結す……………	九三
顯徳序	善得菩薩に命ず……………	九四
	善得菩薩に命ずの科段分け表……………	九五
顯徳序	善得菩薩・堪へずと辭すの科段分け……………	九五
顯徳序	〔善得菩薩・直ちに辭す〕・〔善得菩薩・辭するを釋すの科段分け〕……………	九六

顯徳序	善得菩薩・呵の縁由を出す……………	九七
	〔参考〕『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』に於ける「善得菩薩が呵を被る所以」に関する記述……………	九九
顯徳序	善得菩薩・正しく呵の事を出すの科段分け……………	一〇一
顯徳序	善得菩薩・法施を挙げ其の財施を呵す……………	一〇二
顯徳序	善得菩薩は法施を問ふ……………	一〇三
顯徳序	善得菩薩・略して法施を舉げて問ひに答ふ……………	一〇四
顯徳序	善得菩薩復法施の體相を問ふ……………	一〇五
顯徳序	善得菩薩・廣く法施の體相を列すの科段分け……………	一〇六
顯徳序	善得菩薩・正しく法施の體相を明すの科段分け……………	一〇六
顯徳序	善得菩薩・法施の中の自行を明す……………	一〇七
	〔参考〕『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』に於ける「無我の法を以て屢堤波羅蜜を起す」に関する記述……………	一一三
顯徳序	善得菩薩・法施の中の外化の行を明す……………	一一五
	〔参考〕『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』に於ける	
	「若し自行能はずんば安んぞ衆を濟ふことを得ん」に関する記述……………	一二一
顯徳序	善得菩薩・法施を勸むるを結す……………	一二三
顯徳序	善得菩薩・呵に因りて益を得の科段分け……………	一二四
顯徳序	善得菩薩・時の衆益を得……………	一二四
顯徳序	善得菩薩益を得るを明すの科段分け……………	一二五
顯徳序	善得菩薩・自らの益を得ることを言ふ……………	一二五

第五 文殊師利問疾章

顯徳序 善得菩薩・三業を以て讚嘆す……………	一一六
顯徳序 善得菩薩・財施を以て恩を報ずの科段分け……………	一二七
顯徳序 善得菩薩・瓔珞を解きて恩を報ず……………	一二七
顯徳序 「善得菩薩・淨名は瓔珞を受けず」・「善得菩薩受けよと請ふ」……………	一二八
〔研究〕「肯て取らず」の御解釋について……………	一二九
顯徳序 善得菩薩・淨名は瓔珞を受けて善く財施を爲す……………	一三一
顯徳序 善得菩薩・更に財施を擧げて法施を弘通す……………	一三三
〔参考〕『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』に於ける 「維摩居士が善得菩薩に如來と乞人とに平等の財施をすすめられた太子の御言葉」に関する記述……………	一三四
顯徳序 善得菩薩・貧人は發心し益を得……………	一三六
顯徳序 善得菩薩・堪へざるを結す……………	一三七
顯徳序 菩薩章・總じて堪へざるを結す……………	一三八
文殊師利問疾章の名称の由来……………	一三九
「正説の科目段分け表」・「正説の科目段分け」……………	一四〇
三根の人を化するの科段分け……………	一四一
上根の人を化するの科段分け……………	一四二
文殊師利問疾章の科段分け……………	一四三

「文殊師利問疾章の科段分け表(其の一)」・「問疾の縁由の科段分け」 佛命ず……………	一四四
文殊師利問疾章の科段分け表(其の二)	一四七
文殊師利問疾章の科段分け表(其の三)	一四八
「文殊師利問疾章の科段分け表(其の四)」・「文殊旨を承くの科段分け」	一四九
「淨名の難酬の徳を嘆ずるの科段分け」・「惣じて嘆ず」	一五〇
「法門を擧げて別して嘆ずの科段分け」・「四辨に據りて嘆を爲す」	一五一
雜門に就きて嘆を作す……………	一五二
二智を擧げて嘆を結す……………	一五四
旨を受けて行く可きを明す……………	一五五
大衆は文殊と共に往かんと願ふ・文殊は大衆と共に方丈に入る……………	一五六
淨名は其の室内を空にすることを明す……………	一五七
室を空するに因りて五事を生じ、疾を現するに由りて六論を生ず……………	一五八
「淨名と文殊とは略して寶主の禮を申ぶの科段分け」・「主先づ寶を讚す」……………	一六三
賓謙答すの科段分け……………	一六五
直ちに述べ……………	一六六
釋し述べ……………	一六七
正しく問疾を明すの科段分け……………	一六八
佛の問意を傳ふ……………	一六九

文殊、私の懐ひを陳ぶの科段分け……………	一七〇
方丈の内事に就きて論を作すの科段分け……………	一七一
「病ひに因りて論を作すの科段分け」・「文殊三事を以て淨名に問ふ」……………	一七二
「淨名其の三問に答ふの科段分け」・「先ず後の二問に答ふの科段分け」……………	一七四
正しく後の二問に答ふ……………	一七五
雙べて釋す……………	一七六
譬へに寄せて重ねて答への意を顯す……………	一七八
追て其の第一の問ひに答ふ……………	一七九
文殊三事を以て問ひ、淨名答ふ。これについての太子御解説……………	一八〇
文殊、淨名に問ふ……………	一九〇
淨名、文殊の問ひに答ふの科段分け……………	一九一
「其の室空なるやの問ひに答ふの科段分け」・「理の空を擧げて正しく」……………	一九二
六番問答を擧げて疑ひを除くの科段分け……………	一九三
境の空を明す……………	一九四
智の空を明す……………	一九六
正しく答ふ……………	一九九
釋す……………	二〇〇
疾の相に因りて論を作すの科段分け……………	二〇一
「文殊問ふ」・「淨名答ふの科段分け」……………	二〇二

病相無しと言ふ……………	二〇三
疑ひを除く……………	二〇四
病相の無きことを結す……………	二〇七
諸の新學の菩薩の爲に論を作すの科段分け並びに慰諭の三つの別……………	二〇八
慰諭を明すの科段分け……………	二〇九
文殊問ふ……………	二一〇
淨名答ふの科段分け……………	二一二
「正しく答ふの科段分け」・「別門に就きて慰諭を明す」……………	二一三
雜門に就きて慰諭を明す……………	二一六
「参考」『聖德太子の信仰思想と日本文化創業』に於ける……………	二一八
「己の疾を以て彼の疾を慰む」に關する記述……………	二二〇
答へを結す……………	二二〇
調伏の三つの別並びに病ひある菩薩の調伏を明すの科段分け……………	二二二
文殊問ふ……………	二二三
淨名答ふの科段分け……………	二二四
自行と外化とに就きて調伏を明すの科段分け……………	二二五
自行を憶ひて調伏を明すの科段分け……………	二二五
假名の空を觀じて調伏を明すの科段分け……………	二二六
直ちに假名を觀じて調伏を明すの科段分け……………	二二六

直ちに實なしと観じて調伏を明す……………	二二七
釋す……………	二二八
病ひの本を觀知して調伏を明す……………	二二九
實法の假名に過ぎたるを擧げて調伏を明す……………	二三一
實法の空を觀じて調伏を明すの科段分け……………	二三三
實法を計するの心を離るべしと明す……………	二三四
離るる所の法を出す……………	二三五
畢竟空を擧げて結を爲す……………	二三八
外化を憶ひて調伏を明す……………	二三九
〔参考〕『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』に於ける 「設ひ身に苦有りと、…」に關する記述……………	二四二
病ひを除く方法を明す……………	二四三
雙べて上の二重を結すの科段分け……………	二四六
法説を擧げて結を爲す……………	二四七
譬を擧げて結を爲す……………	二四八
著を離るることを勸めて調伏を明すの科段分け……………	二四九
正しく著を離るべしと勸む……………	二五〇
愛見の悲の捨離を釋す……………	二五二
〔参考〕『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』に於ける……………	

「菩薩は客塵煩惱を斷除して大悲を起す。…」に關する記述……………	二五四
縛と解とを擧げて重ねて釋を顯はす……………	二五八
〔参考〕『聖德太子の信仰思想と日本文化創業』に於ける	
「若し自らに縛有りて能く彼の縛を解くは、…」に關する記述……………	二六三
縛と解との相を辨ずの科段分け……………	二六四
直ちに縛と解との體を顯はす……………	二六五
妙に縛と解とを辨ずの科段分け……………	二六六
四章門を列す……………	二六七
四章門を釋す……………	二六九
「無縛を觀ぜよと勸むることを結す」「方便と智慧とを料簡す」……………	二七二
「中道の行を明して調伏の義を結成すの科段分け」「惣じて中道の端を開く」……………	二七四
諸の中道の行を列す……………	二七七
時の衆は益を得る……………	二七八
第六 不思議章	
「不思議章の名稱の由來」・「不思議章の科段分け」……………	二九〇
不思議章の科段分け表（其の一）……………	二九三
不思議章の科段分け表（其の二）……………	二九四
身子の坐を念ふことを明す……………	二九四
身子の求め有るを譏りて求め無きを明すの科段分け……………	二九五

身子の來る意を問ふ・身子答ふ	二九六
求め有るを譏るの科段分け	二九七
坐を念ふを呵す	二九八
法の爲に來ることを呵すの科段分け	二九九
理の中には求むること無しと明す	三〇〇
求むること無きを釋す	三〇一
無相の形顯を擧げて釋す	三〇二
求む可きこと無しと結す	三〇四
時の衆は益を得るを明す	三〇五
座を燈王に借りて求むる所に應ずるを明すの科段分け	三〇六
淨名は妙高の座を文殊に問ふ	三〇六
文殊答ふ	三〇七
淨名は座を燈王如來に借る	三〇八
「燈王如來は座を遣はす」・「大衆は未曾有の相を見る」	三〇九
淨名は大衆に座に就くことを勸むの科段分け	三一〇
大衆に勸む	三一〇
別に身子に勸む	三一二
「不思議の迹を現ずることを明すの科段分け」・「身子の嘆ずるを明す」	三一四
「不思議の迹を明すの科段分け」・「迹を明さんと欲して其の本を擧ぐ」	三一五

廣く不思議の釋を明す・結す……………三二六

迦葉、新學の發心を勸むることを明すの科段分け……………三二二

迦葉、未曾有なりと嘆ず……………三二三

正しく慨嘆の事を出す……………三二四

聲聞は盲者の如しと明す……………三二五

天子の發心するを明す……………三二七

淨名は迦葉の嘆を述成することを明す及び此の項の科段分け……………三二八

上卷 目次大要

總序

第一 佛國章

第二 方便章

第三 弟子章

下卷 目次大要

第七 觀衆生章

第八 佛道章

第九 不入二門章

第十 香積佛章

第十一 菩薩行章

第十二 見 阿 閼 佛 章
第十三 法 供 養 章
第十四 嘱 累 章

凡 例

- 一、太子『義疏』本文（原漢文）の「現代語譯」は「あります體」とした。「註」はその節の末尾に附す。
- 一、太子『義疏』本文（原漢文）の「訓讀文（訓み下し文）」は五字下げとした。（註）はその節の末尾に附す。
- 一、『維摩經』經典本文（原漢文）は「訓點文（返り点・送りがななど）」・「訓讀文」・「現代語譯」の順とした。現代語譯の文體は「である體」とした。
- 一、共同研究者の「研究」の文體は、「あります體」とした。
- 一、「現代語譯」「訓讀文」中のゴシック活字は經典の語句の引用であることを示す。
- 一、用字法について―漢字は正漢字を用ひたが一部、当用漢字も使用。かなづかひは歴史的かなづかひを用ひる。但し、漢字音のふり仮名については、現代かなづかひを併用した。
- 一、底本及び主たる参考書について―底本として、法隆寺藏版『昭和會本・維摩經義疏』を使はせて戴き、主たる参考書として四天王寺藏版『四天王寺會本・維摩經義疏』を利用させて戴いた。
- 一、佛教語の解説について―「註」の佛教語の解説は、主として次の辭典を使はせて戴いた。

『織田・佛教大辭典』織田得能著

『模範佛教辭典』聖典刊行會編纂部編

『新・佛教辭典』石田瑞麿他著

『佛教大辭典』中村 元著

目 次

第四 菩薩 章

〔顯徳序 菩薩章の科段分け〕（現代語譯）

此の經典の第四章は菩薩章であります。これは顯徳序の中の第二に、釋迦如來が菩薩たちに維摩居士の病氣を見舞ふやう命ずるのであります。それ故に、「菩薩」をもつて此の章の題目としてゐます。菩薩章の中について、一二つの項目に分けます。

第一に、四人の菩薩に病氣見舞ひに行くやう、別々に命じます。

第二に、八千人の菩薩たちを總まとめにして、全員が維摩居士の病氣を見舞ふ力量がなく、その任に堪へないことの結びの文言を示します。

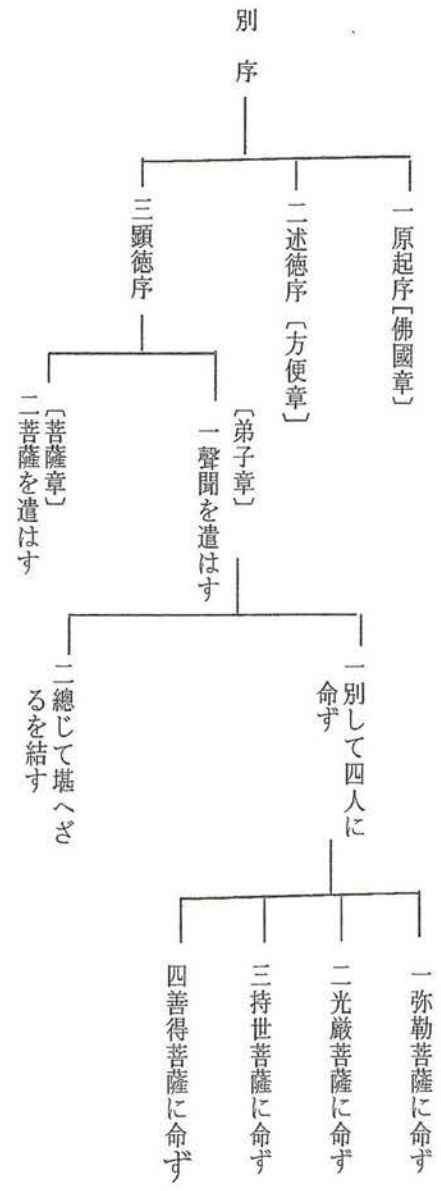
（訓讀文）

菩薩章第四なり。此は是れ顯徳の中の第二に菩薩に命じて疾を問はしむ。故に因りて章の目と爲すなり。中に就きて開きて二と爲す。

第一に別して四人に命ず。

第二に總じて八千人は皆堪へざるを結す。

別序の科段分け表



〔顕徳序 彌勒菩薩に命ず〕（現代語譯）

四人の菩薩たちに維摩居士の病氣見舞ひに行くやう命ずる中の第一に、彌勒菩薩に命じます。この中について亦、第一に釋迦如來が命じ、第二に見舞ふ力量がありませんと辭退する、二つの項目があります。

（訓讀文）

第一に彌勒菩薩に命ず。中に就きて亦命ずと辭すと有り。

經典（彌勒菩薩に命ず）

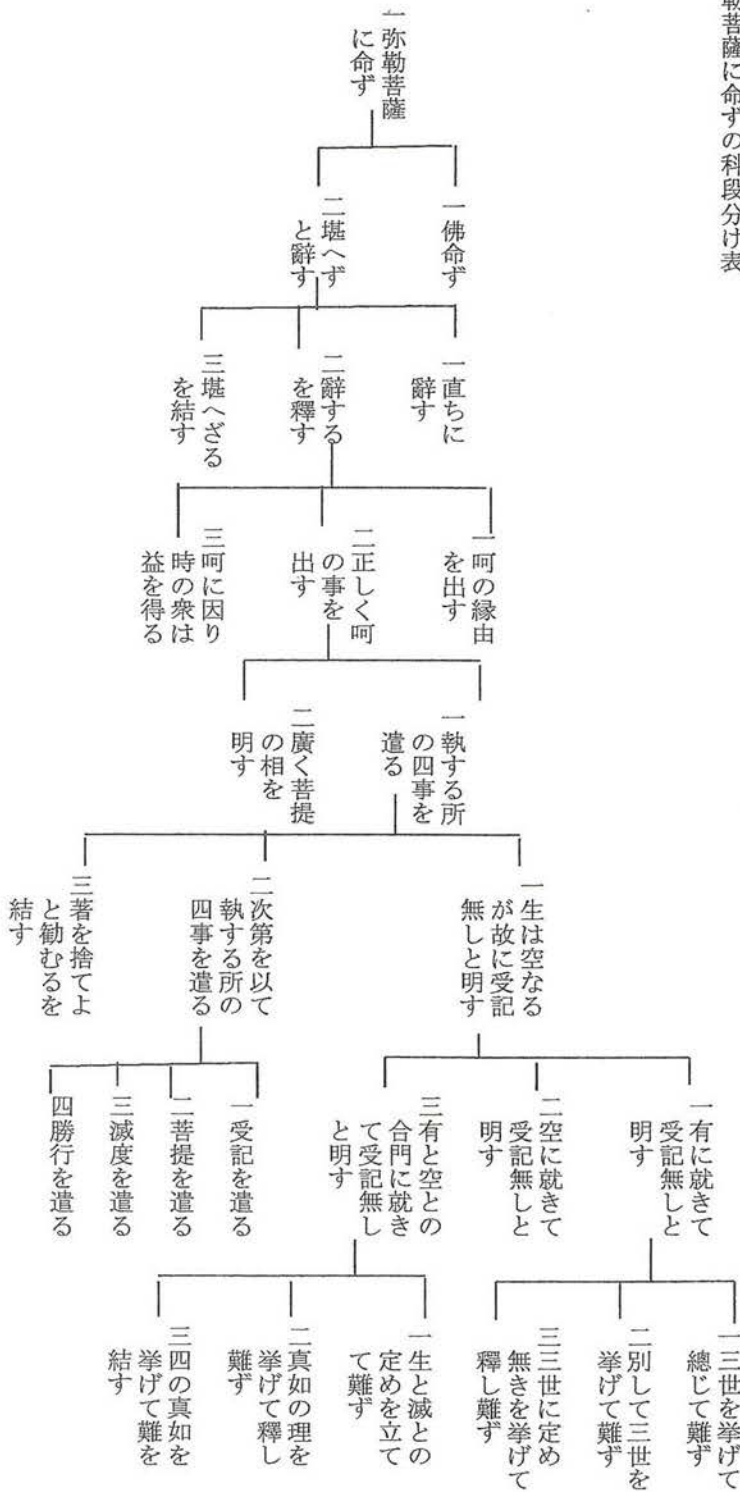
於テ是ニ佛告ツニ彌勒菩薩ニ。汝行ニ詣シテ維摩詰ニ一問ヘト疾ヲ。

經典訓讀文

菩薩章 是に於て佛彌勒菩薩に告ぐ。汝維摩詰に行詣して疾を問へと。

佛弟子すべてが辭退したので、佛陀釋尊は彌勒菩薩に申し付けられた。「汝は維摩居士のところへ行つて病氣を見舞ひなさい」と。

彌勒菩薩に命ずの科段分け表



〔顯徳序 彌勒菩薩・堪へずと辭すの科段分け〕(現代語譯)

彌勒菩薩に命ずる中の第二に、見舞ふ力量がありませんと辭退します。その中の三つの項目は亦、前述の弟子品の辭退と同様であります。

(第一に、彌勒菩薩は直ちに辭退します。)

(第二に、辭退する理由を釋き明します。)

(第三に、見舞ふ任に堪へないことの結びの文言であります。)

(訓讀文)

辭する中の三重は亦前の如し。

〔顯徳序 彌勒菩薩・直ちに辭す〕

(この箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

經典

彌勒。白シテ佛ニ言ク。世尊。我不_ニ堪_ニ任_セ詣_テレ彼ニ問フニ疾ヲ。

經典訓讀文

彌勒、佛に白して言はく。世尊、我彼に詣りて疾を問ふに堪任せず。

經典現代語譯

彌勒菩薩は佛陀に申しあげて言つた。「世尊よ、私は維摩居士のもとへ行つて病氣を見舞ふ、その任を果す力量はありません。」

〔顯徳序 彌勒菩薩・辭するを釋すの科段分け〕(現代語譯)

菩薩章
維摩居士の病氣を見舞ふ力量がありませんと辭退する中の第二の、辭退する理由を釋き明す中について亦、三つの項目に分けま

す。

第一に、維摩居士から叱責された由來を述べます。

第二に、時に維摩詰から以下は、維摩居士から正しく叱責された事を述べます。

第三に、是の法を説く時から以下は、維摩居士が説法し叱責したことに因つて、その説法の座に居合せた人々は利益を得たことを示します。

(訓讀文)

第二に辭するを釋する中に就きて亦開きて三と爲す。

第一に呵を致すの由を出す。

第二に時に維摩詰從り以下、正しく呵の事を出す。

第三に是の法を説く時從り以下、呵に因りて時の衆は益を得。

〔顯徳序 彌勒菩薩・呵の縁由を出す〕(現代語譯)

(辭退する理由を釋き明す中の第一に)、維摩居士から叱責される由來を述べます。彌勒菩薩は佛陀釋尊の滅後に、その地位を補ふべく成佛することが既に定つてゐる菩薩であります。昔その彌勒菩薩が兜率諸天(1)のために、不退轉の階位にある八地・九地・十地の菩薩の行を説法しました。これが叱責を被る由來となります。一説では次のやうに云ひます。――不退(修行によつて得たさとり)の境地から退くことはない)とは、八地の菩薩に名づけるのである。七地以下の菩薩の修行は八地の階位に到達する因となるものであるから、「行」と稱するのである。今、彌勒菩薩は兜率諸天のために七地の菩薩の行を説法するのであるから、經典において「不退地の行」と述べてゐるのである。――と。

菩薩章

しかしながら維摩居士は何故叱責するのかと申しますと、今彌勒菩薩は四つの執著心をもつてゐるからであります。第一に彌勒菩薩は勝行(すぐれた菩薩行)を修したと思つてをります。第二に、受記(未來に成佛するであらうと佛陀から約束される)を得てゐると

思つてをります。第三に、菩提（さとりの智慧）を得たと思つてをります。第四に、滅度（煩惱を滅したさとりの境地）に達したと思つてをります。前の二つは因に關する執着であり、後の二つは果報に關する執着であります。今兜率諸天の機根は、差別對立を離れた空の行を聞くべき時に達してをります。それにも拘らず四つの執著心をもつたままで彌勒菩薩は説法しますので、その説法は兜率諸天の機根に相應することができないのであります。それ故に維摩居士は彌勒菩薩を叱責するのであります。

(一) 兜率諸天 欲界の六天のうちの第四天。この天の内院は、將來佛となるべき菩薩の住處とされ、釋尊もかつてここで修行し、現在彌勒菩薩がここで説法してゐるとされる。

(訓讀文)

呵を致すの由とは、彌勒は既に是れ補處の菩薩なり。昔兜率諸天の爲に八地以上三不退地の行を説く。一に云はく、八地を不退と名づく。七地以下は八地の爲に因と作るが故に行と稱す。今は爲に七地の行を説くが故に不退地の行と云ふと。

然るに淨名呵を致す所以は、今彌勒に凡そ四の執有り。一に己に勝行有りと存す。二に受記を存す。三に菩提の果を存す。四に滅度涅槃を存す。

前の二は是れ因の執、後の二は是れ果の執なり。今諸天の機は應に無相空の行を聞くべきなり。而るに今此の四の存を以て爲に説くが故に、則ち説くところ機と差へり。所以に淨名此の呵を致すなり。

經典 (呵の緣由を出す)

所以は者何ん。憶念スルニ我昔。爲ニ兜率天王及び其ノ眷屬ノ一説ケリニ不退轉地之行ヲ一。

經典訓讀文

所以は何ん。憶念するに我昔、兜率天王及び其の眷屬の爲に不退轉地の行を説けり。

經典現代語譯

「見舞ひを辭退する理由は何故かと申しますと、憶ひおこしますに昔私は、兜率天の王及びその從者たちのために、不退轉の境地にある菩薩の行を説法してをりました。

〔顯徳序 彌勒菩薩・正しく呵の事を出すの科段分け〕（現代語譯）

病氣見舞ひを辭退する理由を解き明かす中の第二の、彌勒菩薩が叱責されることを正しく説明する中について、最初に二つの項目に分けます。

第一に、初めから心身を以ても得可からずに訖るまでは、彌勒菩薩が執著してゐる四つの事を否認し取り除きます。

第二に、寂滅は是れ菩提なりから以下は、菩提（さとり）のありさまを廣汎に説明します。

（訓讀文）

第二の正しく呵を被ることを明す中に就きて、初めに開きて二と爲す。

第一に初め従り心身を以ても得可からずに訖るまで、其の執する所の四事を遣る。

第二に寂滅は是れ菩提なり従り以下、廣く菩提の相を明す。

〔顯徳序 彌勒菩薩・執する所の四事を遣るの科段分け〕

彌勒菩薩が叱責されることを正しく説明する中の第一の、彌勒菩薩が執著してゐる四つの事を否認し取り除く中について亦、三つの項目に分けます。

第一に、ひと通り「生」を列舉し、「生」は固定的實體の無い空である故に受記は無いことを説明します。

第二に、若し彌勒受記を得ばから以下は、受記・菩提・滅度・勝行を順次に擧げて、彌勒菩薩が執著してゐる四つの事を否認し取り除きます。

第三に、彌勒。當に此の諸天子をして…しむべしから以下は、執著を捨てなさいと勸める結びの文言であります。また執著する

はたらしきを取り除くと言つてもよいでせう。

(訓讀文)

第一の四事を遣る中に就きて、亦開きて三と爲す。

第一に一往生を擧げて受記無きことを明す。

第二に若し彌勒受記を得ば者以下、次第を以て其の執する所の四事を遣る。

第三に彌勒。當に此の諸天子をして：しむべし従り以下、著を捨てよと勸むるを結す。亦可なるべし。其の能封の心を遣るなり。

〔顯徳序 彌勒菩薩・生は空なるが故に受記無しと明すの科段分け〕(現代語譯)

彌勒菩薩が執著してゐる四つの事を否認し取り除く中の第一の、ひと通り「生」を列擧し、「生」は空である故に受記は無いことを説明する中について亦、三つの項目に分けます。

第一に、過去・未來・現在の生は實在するといふ「有」の觀點から、「生」には定まりがない、即ち固定的實體の無い空である故に受記は無いことを説明します。また諸事象は生滅変化してやまない無常であるといふ教法の觀點から、受記がないことをしてゐる、と言つてもよいでせう。

第二に、若し無生を以てから以下は、諸事象は因縁所生であつて固定的實體は無いといふ「空」の觀點から、「生」は實體の無い空である故に受記は無いことを説明します。

第三に、如の生に從つて：爲んやから以下は、諸事象は有であり空でありとするが、兩者は一體不二であるといふ教法の觀點から、「生」は生滅の無い空である故に受記は無いことを説明します。

(訓讀文)

第一の一往生を擧げて受記無きことを明す中に就きて、亦開きて三と爲す。

第一に有に就きて生定まり無きが故に授記無しと明す。亦可なるべし。無常門に就きて授記無きことを明すなり。
 第二に若し無生を以て従り以下、空に就きて生は空なるが故に授記無しと明す。
 第三に如の生に従つて…爲んや従り以下。空と有との合門に就きて生は空なるが故に授記無しと明す。

〔顯徳序 彌勒菩薩・有に就きて授記無しと明すの科段分け〕（現代語譯）

ひと通り「生」を列舉して授記が無いことを説明する中の第一の、「生」は實在するといふ「有」の觀點から、授記は無いことを説明する中について、三つの項目に分けます。

第一に、直ちに三世の「生」をまとめて擧げ、彌勒菩薩を難詰します。

第二に、過去なりやから以下、三句があります。三世を別々に擧げて、「生」には過去・未來・現在の定まりがあることを前提にして難詰します。

第三に、若し過去の生ならばから以下は、再びまた三世を擧げて、過去・未來・現在の夫々の「生」には定まりの無い理由を釋き明し、難詰します。

（訓讀文）

第一の有に就きて授記無しと明す中に就きて開きて三と爲す。

第一に直ちに三世を擧げて總じて難詰す。

第二に過去なりや従り以下、三句有り。別して三世を擧げて定を作して難詰す。

第三に若し過去の生ならば従り以下、還三世に定無きを擧げて釋を作して難詰す。

〔彌勒菩薩・三世を擧げて總じて難詰す〕（現代語譯）

「生」は實在するといふ「有」の觀點から授記は無いことを説明する中の第一に、維摩居士は三世の「生」をまとめて擧げて、彌

勒菩薩を難詰します。

經典に「一たび生じて」とありますが、これを解釋するのに要約して二種類あります。

(經典の「一生」につき花山氏は「一生にして」、昭和會本、四天王寺は「一生」と訓んでゐる。太子の二説は「一たび生じて天宮」「一たび生じて壤佐」であるので「一たび生じて」と訓むべき。)

第一には次のやうに云ひます。―此の現象世界に於て煩惱を滅しその後、一たび天人の宮殿に生まれて成佛するのである、―と。

第二には次のやうに云ひます。―天人の宮殿に於て煩惱を滅し、一たび佐王(註)の家生まれ成佛するのである、―と。

(註) 壤佐王は佛教辭典には見當らない。諸橋轍次著『大漢和辭典』(卷一―九六五頁)には次の解説がある。但し「僕」の字が用ひられてをり、訓み方も異なる。

佐王 シヤウカ 神の名。(釋書) 佛說彌勒成佛經、其先轉輪王名僕佐。

(訓讀文)

生を解するに略して二種有り。一に云はく。此に没して後に一たび天宮に生じて即ち成佛すと。二に云はく。天宮從り没し、一たび佐王の家に生じて乃ち成佛すと。

經典

時ニ維摩詰來テ謂テレ我ニ言ク。彌勒。世尊授ケテニ仁者ニ記ヲ一。一タビ生ジテ當ニ得ニ阿耨多羅三藐三菩提ヲ。爲ルヤ下用テ何レノ生ヲ一得ルト^中受記ヲ乎上。

經典訓讀文

時^{トキ}に維摩詰^{ゆいまきつぎた}來りて我^{われ}に謂^いひて言^いはく。彌勒^{みろく}、世尊^{せそん}仁者^{にんじや}に記^きを授^{さづ}けて、一たび生^{しょう}じて當^{まさ}に阿耨多羅三藐三菩提^{あのおくたらさんみやくさんぼだい}を得^うべしと。何れ^{いづ}の生^{しょう}を用^{もつ}て受記^{じゆき}を得^うると爲^なるや。

經典現代語譯

「その時、維摩居士がやつて来て私に言ひました。『彌勒さんよ、世尊はあなたに成佛の約束を與へて、一たび他の世界に生をうけて必ず無常絶對のさとりを得るであらうと申された。それでは何れの生に於て受記を得ると考へてをられますか。』」

〔顯徳序 彌勒菩薩・別して三世を擧げて難ず〕（現代語譯）

「生」は實在するといふ「有」の觀點から受記は無いことを説明する中の第二に、三世を別々に擧げて、「生」には過去・未來・現在の定まりがあることを前提にして難詰します。

經典を御覽なさい。

（訓讀文）

第二に定め難ずることは見つ可し。

經典（別して三世を擧げて難ず）

過去ナリヤ耶。未來ナリヤ耶。現在ナリヤ耶。

經典訓讀文

過去なりや。未來なりや。現在なりや。

經典現代語譯

「『受記を得るのは、過去の生ですか。未來の生ですか。現在の生ですか。』」

〔顯徳序・三世に定め無きを擧げて釋し難ず〕

「生」は實在するといふ「有」の觀點から受記は無いことを説明する中の第三に、過去・未來・現在の三世の夫々には定まりの無いことを擧げ、定まりの無い理由を釋き明して難詰し、定まりのない證しを示します。ただ定まりの無い理由を釋き明すについ

ては、若し過去の生に於て受記を得るとならば、過去の生は已に過ぎ去つてゐて現實には存在しません。それ故に受記がある筈がありません。若し未來の生に於て受記を得るとならば、未來の生には未だ到達してゐないので、すから現實には存在しません。それ故に受記は存在しません。若し現在の生に於て受記を得るとならば、現在の生は一瞬々に生じ滅し遷り變つてゆくものであつて一つの狀態に止まつてゐることはありません。それ故に亦受記があらう筈がありません。現在の生については佛陀釋尊の眞實なる所説を示して、現在の生が生滅變化することの證しとしてゐます。即時に亦生じ亦老し亦滅すが佛陀の所説であります。現在の生といふものは一瞬たりとも一つの狀態に停止してゐることは無いことを説明してゐます。しかしながら、ただ現在の生のみに佛陀の眞實なる所説を示して、現在が生滅變化する證しとしてゐる理由は、過去と未來とは現實には存在してゐないといふ道理は明らかであります。それ故に「過ぎ去つてゐる」「未だ来てゐない」といふ一言で信ずることができません。ただ現在は今現實に存在してゐるといふ認識がありますから、「生滅變化する」といふ一言で、それについて疑念を抱くことなく信じさせることは難しいのであります。それ故に佛陀の所説を示して證しとするのであります。

(訓讀文)

但第三に三世に定め無きを擧げて釋し難じ證するに就きて、若し過去の生ならば。過去の生は已に滅す。故に受記無かる可し。若し未來の生ならば、未來の生は未だ至らず。故に受記無かる可し。若し現在の生ならば、現在の生は則ち念念に遷滅して住まらず。故に亦受記無かる可し。即ち佛の誠言を引き證と爲す。即時に亦生じ亦老し亦滅すとは、暫くも停住すること無きを明す。然るに但現在のみに佛の誠言を引き證を爲す所以は、過去と未來とは但義にして未だ實ならず。故に則ち一言にて信ず可し。但現在は今有るが故に、一言のみを以ては去り難し。所以に佛の言を引き證と爲す。

經典 (三世に定め無きを擧げて釋し難す)

菩薩章 若シ過去ノ生ナラバ。過去ノ生ハ已ニ滅ス。若シ未來ノ生ナラバ。未來ノ生ハ未ダレ至ラ。若シ現在ノ生ナラバ。現在ノ生ハ無シレ住マルコト。如シニ

佛ノ所説ノ。比丘。汝ハ今即時ニ亦生ジ亦老シ亦滅スト。

經典訓讀文

若し過去の生ならば、過去の生は已に滅す。若し未來の生ならば、未來の生は未だ至らず。若し現在の生ならば、現在の生は住まること無し。佛の所説の如し。比丘、汝は今即時に亦生じ亦老し亦滅すと。

經典現代語譯

「受記を得るのが若し過去の生ならば、過去の生は滅し存在しません。若し未來の生ならば、未來の生はまだ來てゐません。若し現在の生ならば、現在の生は一つの状態に止まつてゐることはありません。現在の生は、佛陀が、佛弟子たちよ、お前たちは今即時にして生まれ、そして老い、そして滅するのだと、説いてをられる通りです。」

〔顯徳序 彌勒菩薩・空に就きて受記無しと明す〕（現代語譯）

ひと通り「生」を列擧して受記が無いことを説明する中の第二に、若し無生を以てから以下は、諸事象は因縁所生であつて固定的實體は無いといふ「空」の觀點から、「生」は實體の無い空である故に受記は無いことを説明します。

若し無生を以て受記を得とならばとは、「空」の觀點から教法を擧げるのであります。無生は即ち是れ正位なりとは、無生（因縁所生ではなく、生滅變化を離れてゐる生）は歸着するところ、それは眞如（あらゆる存在のありのままの眞實の姿）の正位（永遠不變のさとの境地）に相即するといふのであります。正位の中に於ては亦記を受くること無し。亦菩提を得ることも無しとは、受記の無いことを正しく説明してゐます。その意味は、空の正位の中に於ては、始めにさとりを得るとの約束を與へられることも無く、終りに無上絶對のさとの果報を得ることも無い、と言ふのであります。云何が彌勒、一たび生じて記を受くるやとは、「生」は實體の無い空である故に受記は無いことの、結びの文言であります。

（訓讀文）

若し無生を以て從り以下、第二に空に就きて受記無きを明す。

若し無生を以て受記を得とならば者と、章門を埒ぐ。無生は即ち是れ正位なりとは、無生を會して眞如の正位に即するなり。正位の中に於ては亦記を受くること無し。亦菩提を得ることも無しとは、正しく受記無きことを明す。言ふところは空の正位の中には始め記を受け終りに菩提の果を得ること無きなり。云何が彌勒、一たび生じて記を受くるやとは、生は空なるが故に受記無きことを結す。

經典 (空に就きて受記無しと明す)

若シテ無生ヲ得トナラバニ受記ヲ一者。無生ハ即チ是レ正位ナリ。於テハニ正位ノ中ニ一。亦無シレ受クルコトレ記ヲ。亦無シレ得ルコトモニ阿耨多羅三藐三菩提ヲ一。云何が彌勒。受ルヤニ一タヒ生ジテ記ヲ一乎。

經典訓讀文

若し無生を以て受記を得とならば、無生は即ち是れ正位なり。正位の中に於ては、亦記を受くること無し。亦阿耨多羅三藐三菩提を得ることも無し。云何が彌勒。一たび生じて記を受くるや。

經典現代語譯

「若し無生(生滅變化を離れた生)に於て受記を得るといふのであれば、無生は即ち正位(永遠不變のさとり境地)です。正位の中に於ては、亦さとりを得るとの約束を與へられることはありません。亦無上絶對のさとりを得るといふこともありません。彌勒さんよ、どうして他の世界に一たび生を受けて、受記を得ることがありませうか。」

〔顯徳序 彌勒菩薩・有と空との合門に就きて受記無しと明すの科段分け〕(現代語譯)

菩薩章

ひと通り「生」を列擧して受記がないことを説明する中の第三に、如の生に従つて…爲んやから以下は、諸事象は有であり空で有りとするが、兩者は一體不二であるといふ觀點(眞如あらゆる存在のありのままの眞實の姿)から「生」は生滅の無い空である故に受記は無いことを説明します。上述ではただ有の教法の觀點と空の教法の觀點とを別々に擧げて「生」は空である故に受記は無

いことを説明しました。それだけの説明では衆生は、有と空とを一體不二と観ずる時、(即ち眞如に於ては)、或いは受記を得ることができないのではないか、と思ふであります。それ故に有と空とを一體不二と観ずる時も亦、受記を得ることはできないと、此の箇所を説明するのであります。

その中について亦、三つの項目があります。

第一に、眞如に「生」と「滅」との定めがあるものとして難詰します。

第二に、若し如の生を以てから以下は、眞如の道理を擧げて受記が無い事の理由を釋き明し、難詰します。

第三に、一切の衆生は皆如なりから以下は、四つの眞如の事例を擧げて、難詰する事の結びの文言とします。

(訓讀文)

如の生に從つて…爲んや從り以下、第三に空と有との合門に就きて生は空なるが故に受記無しと明す。上來は但空と有との別門に就きて生は空なるが故に受記無しと明す。物は空と有と合する時は若しくは得可しやと謂はん。故に此に空と有と合する時も亦得可からずと明す。中に就きて亦三有り。

第一に定めを立てて難詰す。

第二に若し如の生を以て從り以下、理を擧げて釋し難詰す。

第三に一切の衆生は皆如なり從り以下、四の如を擧げて難詰を結す。

〔顯徳序 彌勒菩薩・生と滅との定めを立てて難詰す〕(現代語譯)

(諸事象の存在について有と空とは一體不二であるといふ觀點—眞如—から、「生」は生滅の無い空である故に受記は無いことを説明する中の第一に、眞如に「生」と「滅」との定めがあるものとして難詰します)。

如の生に從つて受記を得ると爲んやとは、「眞如」は空の別の名稱であり、「生」は有の別の名稱であります。經典の意味するところは、(以下は加藤拙堂氏の説を参考とした。)初めて眞如(空)を體得することを生(有)といふのであるが、これを以て受記を得ると、彌勒菩薩は誤り考へてゐるのではないか、と言ふのであります。如の滅に從つて受記を得ると爲んやとは、「滅」も亦有の別の名稱であります。眞如(空)を體得し終つた菩薩の最後の心を滅(有)といふのであるが、或いはこれを以て受記を得ると、彌勒菩薩は誤り考へてゐるのではないか、と言ふのであります。一説では次のやうに云ひます。―彌勒菩薩は、眞如を體得すれば道理として智慧が生じ、煩惱を滅することができると、誤り考へてゐる。そこで維摩居士は眞如に生と滅との定めがあるものとし、眞如に相即せしめて難詰しようと思へた。それ故に經典の意味は眞如を體得すれば道理として智慧を生ずるが、それを以て受記を得ると誤り考へてゐるのではないか。眞如を體得すれば道理として智慧を生じ更に煩惱を滅するが、それを以て受記を得ると誤り考へてゐるのではないか、と云ふのである。―と。

(訓讀文)

如の生に從つて受記を得ると爲んやとは、如は是れ空の異名、生は是れ有の別目なり。言ふところは汝は如と生と合するを受記を得ると爲すと計するや。如の滅に從つて受記を得ると爲んやとは、滅も亦た有の別名なり。或いは如と滅と合するを受記を得ると爲すと計するや。

一に云はく。彌勒は如の理は智を生じ煩惱を滅することを得ると計す。故に將に合し定めんと欲す。故に云ふ、計するに如の理は智を生ずるを以て受記を得るや。如の理は智を生じ煩惱を滅して受記を得るや、と。

經典(生と滅との定めを立てて難す)

爲ンヤ下 從テニ 如ノ生ニ 一 得ルト中 受記ヲ上 那。 爲ンヤ下 從テニ 如ノ滅ニ 一 得ルト中 受記ヲ上 那。

經典訓讀文

菩薩章
如の生に從つて受記を得ると爲んや。 如の滅に從つて受記を得ると爲んや。

「眞如を體得したところの生によつて受記を得るのですか。眞如を體得したところの滅によつて受記を得るのですか。」

〔顯德序 彌勒菩薩・眞如の理を擧げて釋し難す〕（現代語譯）

諸事象の存在については有と空とは一體不二であるといふ觀點（眞如）から、「生」は生滅の無い空である故に受記は無いことを説明する中の第二に、若し如の生を以てから以下は、眞如の道理を擧げて受記が無いことの理由を釋き明し、彌勒菩薩を難詰します。

若し如の生を以て受記を得るとせば、如には生有ること無しとは、眞如は道理として生滅を超えてゐるもので、本來「生」はありません。眞如にいかなるものが合體して受記を得るとするのであらうか、といふことを説明してゐます。一説では次のやうに云ひます。―若し眞如を體得すれば道理として智慧が生ずるとし、それを以て受記を得るとするならば、眞如は生滅を離れてゐるのであつて、眞如の中に智慧が生ずることは無いのである。―と。

若し如の滅を以て受記を得るとせば、如には滅有ること無しとは、眞如は道理として生滅を超えてゐるもので、本來「滅」はありません。眞如にいかなるものが合體して滅を得るとするのであらうか、といふことを説明してゐます。一説ではつぎのやうに云ひます。―若し眞如を體得すれば道理として智慧を生じ更に煩惱を滅するとし、それを以て受記を得るとするならば、眞如は生滅を離れてゐるのであつて、眞如の中に煩惱を滅することは無いのである。―と。

（訓讀文）

若し如の生を以て從り以下、第二に理を擧げて釋し難す。

若し如の生を以て受記を得るとせば、如には生有ること無しとは、如には本生無し。如と誰と合して受記を得んやと明すなり。一に云はく。若し如の理は智を生ずるを以て受記を得ると爲さば、如の中には智の生ず可きもの無しと。

若し如の滅を以て受記を得るとせば、如には滅有ること無しとは、如には本滅無し。如と誰と合して受記を得んやと明す。

一に云はく。若し如の理は智を生じ煩惱を滅するを以て受記と爲さば、如の中には煩惱の滅す可きもの無きなりと。

經典（眞如の理を擧げて釋し難す）

若シ以テニ如ノ生ヲ一得ルトセバニ受記ヲ一者。如ニハ無シレ有ルコトレ生。以テニ如ノ滅ヲ一得ルトセバニ受記ヲ一者。如ニハ無シレ有ルコトレ滅。

經典訓讀文

若し如の生を以て受記を得るとせば、如には生有ること無し。若し如の滅を以て受記を得るとせば、如には滅有ること無し。

經典現代語譯

「もし眞如の中に生ずることを以て受記を得るとするならば、眞如には道理として生ずるといふことはありません。若し眞如の中に滅することを以て受記を得るとするならば、眞如には道理として滅するといふことはありません。」

〔顯徳序 彌勒菩薩・四の眞如を擧げて難を結す〕（現代語譯）

諸事象の存在について有と空とは一體不二であるといふ觀點（眞如）から、「生」は生滅の無い空である故に受記は無いことを説明する中の第三に、一切の衆生は皆如なりから以下は、眞如の四つの事例を擧げて、彌勒菩薩を難詰することの結びの文言とします。

此の中には四つの文言が有り、二つの對句に分けます。一切の衆生は皆如なり。一切の法も亦如なり。此の二句は我（衆生）と我所（我に所屬するもの―一切の法、即ち衆生以外のあらゆる事象）とを相對して對句を爲してをり、兩者は固定的實體の無い空であつて、異なるところは無いことを説明してゐます。亦或る説では次のやうに云ひます。―此の二句は、有情（感情や意識を有するもの）と無情（草、木、山、河など）とを相對して對句を爲してゐる、―と。衆の聖賢も亦如なり。彌勒に至りても亦如なり。此の二句は自己（彌勒菩薩）と他者（諸々の聖賢）とを相對して對句を爲してをり、兩者は固定的實體の無い空であつて、異なるところは無いことを説明してゐます。亦或る説では次のやうに云ひます。―此の二句は、客體と主體とを相對して對句を爲してゐる、―と。今ここ

で一切の衆生、一切の諸法、諸々の聖賢、彌勒菩薩の四つは、皆固定的實體の無い空であつて、何ら異なるところは無いことを説明してゐるのは、兜率天の諸々の天子たちの爲に、全く異なるところの無い空の中に於て一たび生をうけ、無上絶對のさとりを得るといふ説法を、どうして説くことが出来ませうか、といふのであります。

(訓讀文)

一切の衆生は皆如なり従り以下、第三に四の如を擧げて難を結す。

四句有り。分ちて二雙と爲す。一切の衆生は皆如なり。一切の法も亦如なり。此の二句は我と我所と相對して、空にして異なり無きを明す。亦云はく。有情と無情と相對すと。衆の聖賢も亦如なり。彌勒に至りても亦如なり。此の二句は自と佗と相對して異なり無きを明す。亦云はく。賓と主と相對すと。今此の四處は皆空にして異なり無きを明すは、異なり無き空の中に、豈諸の天子の爲に一たび生じて菩提を得べしとの記を説くことを得んやとなり。

經典(四つの眞如を擧げて難を結す)

一切ノ衆生ハ皆如也。一切ノ法モ亦如也。衆ノ聖賢モ亦如也。至テモニ於彌勒ニ一亦如也。

經典訓讀文

一切の衆生は皆如なり。一切の法も亦如なり。衆の聖賢も亦如なり。彌勒に至りても亦如なり。

經典現代語譯

「(執著心を捨てて觀ずれば)、一切の衆生は皆眞如です。一切の存在、事象も亦眞如です。諸々の聖者や賢者も亦眞如です。彌勒さん、あなたも亦眞如です。」

〔顯徳序 彌勒菩薩・生は空なるが故に受記無しと明すの科段分けに關する太子獨自の「見解」〕

科段分けに關する私の解釋は少しく異なつてをります。先づ第一に過去・未來・現在の「生」は固定的實體の無い空である故に

受記は無いことを説明する中について、ただ二つの項目に分けます。(上述では、有に就きて受記無しと明す。空に就きて受記無しと明す。有と空との合門に就きて受記無しと明す。以上の三つの項目に分けてみます。)

第一に、過去・未來・現在の三世の生は實在するといふ「有」の觀點から、「生」は實體の無い空である故に受記は無いことを説明します。

第二に、諸事象は因縁所生であつて固定的實體は無いといふ「空」の觀點から、「生」は實體の無い空である。故に受記は無いことを説明します。

生は實在するといふ「有」の觀點から、「生」は實體の無い空である故に受記は無いことを説明する箇所についての私の解釋は、上述したものと同じであります。

但し「空」の觀點から受記は無いことを釋き明す中について、これを二つの項目に分けます。(太子私釋はこの箇所を更に二項目に分けられますので、上述の説と同じく全體は三項目になります。)

第一に、直ちに「空」の觀點から受記が無いことを説明します。(經典のこの箇所について上述では、「直ちに」の語句はありませんが、同じく空に就きて受記無しと明す、につき太子私釋と同じです。)

第二に、如の生に從つて…爲んやから以下は、再び「空」の觀點から、此に煩惱を滅し彼に生を受ける、といふ誤つた考へを否認し取り除くのであります。(研究參照)

經典の「滅」といふ語は「沒」と同じであります。第二の項目の意味するところは、空(眞如)を體得すれば生滅を離れてをりますから、煩惱を滅するとか、天宮に生をうけるとかは、本來無いと言ふのであります。

(訓讀文)

私の釋は少しく異なり。第一に先づ生は空なるが故に受記無しと明す中に就きて、只開きて二と爲す。

第一に有に就きて受記無しと明す。

第二に空に就きて受記無しと明す。

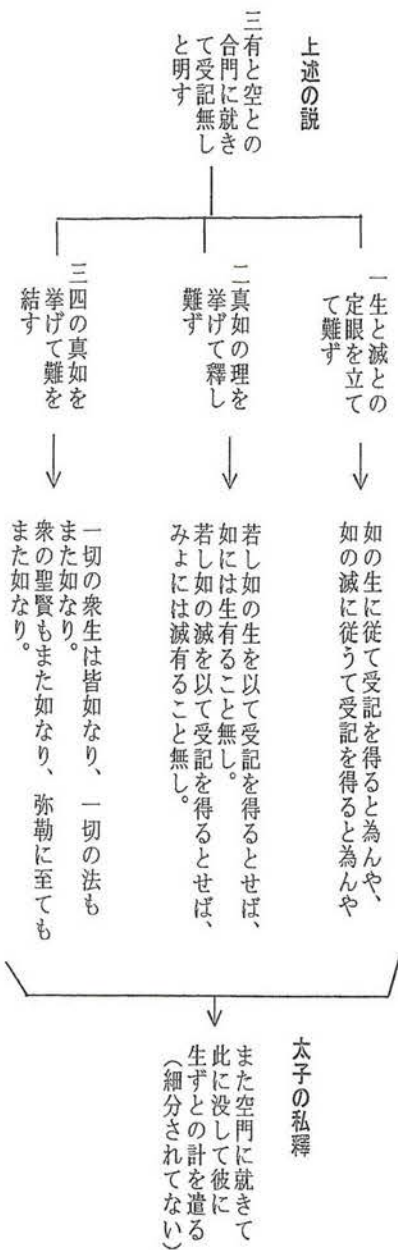
有に就きて受記無しと明すの有は前の釋の如し。
但し空門に就きて受記無きを明す中に開きて二と爲す。
第一に直ちに空門に就きて受記無しと明す。
第二に如の生に従つて爲んや従り以下、還空門に就きて、其の此に没して彼に生ずとの計を遣る。

滅の言は没なり。言ふところは空の中には本此に没して彼に生ずといふこと無きなり

〔研究〕

○太子の私釋について

太子の私釋と上述の説とが異なつてゐるのは、左記の經典に關する科段分けであります。



如の生に従つて…以下について上述の説では「有と空との合門に就きて受記無しと明す」とし、これを更に三つの項目に細分してゐます。太子私釋は「また空門に就きて、此に没して彼に生ずとの計を遣る」とされ、これを細分してはをられ

ません。これが科段分けの相違であります。

經典には如には生あること無し、如には滅有ること無し、とあり、従つて眞如（空）に於ては受記は無いといふのであります。ですから太子私釋の「空（眞如）を體得すれば生滅は無い。煩惱を滅するとか、天宮に生をうけるとかの誤つた考えを否認し取り除く」といふ項目の設定の通りだと思ひます。

太子は「有と空との合門に就きて」といふ點に對して異なる解釋をなさつたわけであります。しかし上述の科段分けで細分された三つの項目は、夫々經典の内容に合致してゐると思ひます。従つて太子も上述の科段分けを否定されないうで、先にお述べになられたのだと思ひます。

〔顯徳序 彌勒菩薩・次第を以て執する所の四事を遣るの科段分け〕（現代語譯）

彌勒菩薩が執著してゐる四つの事を否認し取り除く中の第二に、若し彌勒から以下は、受記・菩提・滅度・勝行の四つを順次に擧げて、彌勒菩薩が執著してゐる四つの事を否認し取り除きます。四つの事を否認し取り除きますから當然の如くに四つの項目があります。

（訓讀文）

若し彌勒從り以下。其の執する所の四事を遣る中の第二に、正しく次第を以て其の存する所の四事を遣るが故に自ら四有り。

〔顯徳序 彌勒菩薩・受記をやる〕（現代語譯）

受記・菩提・滅度・勝行の四つを順次に擧げて、彌勒菩薩が執著してゐるその四つを否認し取り除く中の第一に、彌勒菩薩が受記（未來に成佛するであらうと佛陀から約束される）を得てゐるとするのを否認し取り除きます。

若し彌勒受記を得ば、一切衆生も亦應に記を受くべしとは、彌勒菩薩と衆生とは、受記に關して兩者は同等であると斷定します。

所以は何んから以下は、受記に關して兩者は同等である理由を釋き明します。彌勒菩薩と衆生とは、そのあるがままの眞實の本性に於ては差別對立を超えてゐる空であつて、二者の區別はありませんから、受記を得るとか受記を得ないとかについて、兩者は等しいことを説明してゐます。

(訓讀文)

第一に其の受記を遣る。

若し彌勒受記を得ば、一切衆生も亦應に記を受くべしとは、竝べて結す。所以は何ん従り以下、竝べたるを釋す。彌勒と衆生とは性は空にして二無きが故に、記も不記も亦等しと明すなり。

經典(受記を遣る)

若シ彌勒得バニ受記ヲ一者、一切衆生モ亦應ニレ受クレ記ヲ。所以ハ者何ン。夫レ如ハ不二不異。

經典訓讀文

若し彌勒受記を得ば、一切衆生も亦應に記を受くべし。所以は何ん。夫れ如は不二不異なればなり。

經典現代語譯

「彌勒さん、若しあなたが受記を得るならば、一切の衆生も亦きつと受記を得るにちがひありません。理由は何かと申しますと、あるがままの眞實の本性に於ては、あなたと衆生とは不二であり、何ら異なるところは無いからです。」

〔顯徳序 彌勒菩薩・菩提を遣る〕(現代語譯)

受記・菩提・滅度・勝行の四つを順次に擧げて、彌勒菩薩が執著してゐるその四つを否認し取り除く中の第二に、彌勒菩薩が菩提(さとり)の智慧を得てゐるとするのを否認し取り除きます。

若し彌勒菩提を得ば、一切衆生も皆亦應に得べしとは、これも亦、彌勒菩薩と衆生とは、菩提に關して兩者は同等であると斷定

します。一切衆生は即ち菩提の相なればなりとは、菩提に關して兩者は同等である理由を釋き明します。

衆生は即ち菩提の相なりについて、四種類の解釋があります。第一には次のやうに云ひます。―菩提とは、これは佛陀の無上絶對の智慧である。その意味は、因縁所生を超越した究極絶對の眞理に於ては彌勒菩薩のあるがままの眞實の本性と、衆生のあるがままの眞實の本性とは、一つの相であつて二者の區別は無く、菩提を得るとか得ないとかの區別も無い、と言ふのである。それ故に若し彌勒菩提を得ば、一切衆生も亦得べしと云ふのである、―と。第二には次のやうに云ひます。―今ここで菩提と言ふのは、因縁所生を超越した究極絶對の眞理を指してゐる。彌勒菩薩と衆生とは皆、(あるがままの眞實の本性としては)、究極絶對の眞理に到達し得るのである。それ故に一切衆生も亦得べしと云ふのである、―と。第三には次のやうに云ひます。―衆生の本來あるがままの本性は差別對立を超越し得る可能性を有してゐるものであり、それは差別對立を超越して諸事象を觀ずることのできる智慧である。それ故に一切衆生も亦得べしと云ふのである、―と。第四には次のやうに云ひます。―一切の衆生は皆、その本性に於ては究極のさとの智慧に達し得るといふ理がある。それ故に一切衆生も亦得べしと云ふのである、―と。

(訓讀文)

第二に菩提を遣る。

若し彌勒菩提を得ば、一切衆生も皆亦應に得べしとは、亦並べて決す。一切衆生は即ち菩提の相なればなりとは、並べたるを釋す。

衆生は即ち菩提の相なりとは、四種の解有り。

一に云はく。菩提は即ち是れ佛の無上智なり。言ふところは眞諦の中には彌勒の空と衆生の空とは一相無二にして得と不得と無し。故に若し彌勒菩提を得ば、一切衆生も亦得べしと云ふと。

二に云く。今菩提と言ふは即ち是れ眞諦なり。彌勒と衆生と皆即ち眞諦なり。故に一切衆生も亦得べしと云ふと。

三に云はく。衆生の性の空なるは即ち智の無相の空なり。故に一切衆生も亦得べしと云ふと。四に云はく。一切衆生は皆菩提智の理を有す。故に一切衆生も亦得べしと云ふと。

經典（菩提を遣る）

若シ彌勒得^バ阿耨多羅三藐三菩提^ヲ者^一。一切衆生モ皆亦應^ニ得^{ベシ}。所以ハ者何^ン。一切衆生ハ即チ菩提ノ相ナレバナリ。

經典訓讀文

若シ彌勒阿耨多羅三藐三菩提を得ば、一切衆生も皆亦應に得べし。所以は何ん。一切衆生は即ち菩提の相なればなり。

經典現代語譯

「彌勒さん、もしあなたが無上絶対のさとりを得るならば、一切の衆生も皆亦きつと無上絶対のさとりを得るにちがひありません。理由は何故か。一切の衆生は無上絶対のさとりに到達し得る本性をもとと有してゐるからです。」

〔顯徳序 彌勒菩薩・滅度を遣る〕（現代語譯）

（受記・菩提・滅度・勝行の四つを順次に擧げて、彌勒菩薩が執著してゐるその四つを否認し取り除く中の第三に、彌勒菩薩が滅度——煩惱を滅したさとりの境地——に達してゐるとするのを否認し取り除きます。）

若し彌勒滅度を得ば、一切衆生も亦（應に）滅度すべしについて、四種類の解釋があります。第一には次のやうに云ひます。——上述の菩提についての第一の解釋と同じである。即ち彌勒菩薩と衆生とのあるがままの本性は、一つの相であつて二者の區別は無い。それ故に彌勒菩薩が滅度を得れば、衆生も亦滅度を得るにちがひあるまい。滅度を得なければ、衆生も亦得ないであらう。衆生のあるがままの本性が差別對立を超離し得る可能性を有してゐることは、本來自らにして存在するのである。究極絶対の眞理に於てはまた更に煩惱を滅して涅槃を得るといふことはない。それ故に經典で、「また更に煩惱を滅することは無い」と云つてゐるのである、——と。

菩薩章

第二には次のやうに云ひます。——衆生のあるがままの本性が差別對立を超離し得る可能性は、それはそのまま涅槃（究極のさとりの差別對立の超離に相即する。衆生の本性がまた更に煩惱を滅して後に、涅槃の差別對立の超離に相即するのではない。それ故に

經典で、「また更に煩惱を滅することは無く、即ち衆生の本性は涅槃の相と同じであつて」と云つてゐるのである、——と。第三には次のやうに云ひます。——衆生のあるがままの本性が差別對立を超越し得る可能性は、究極のさとり即ち涅槃を得るのである。それ故に經典で、「衆生の本性は涅槃の相であつて、また更に煩惱を滅することは無い」と云つてゐるのである、——と。第四には次のやうに云ひます。衆生は本來煩惱を滅するといふ理がある。それ故に經典で、「衆生の本性は涅槃の相であつて、また更に煩惱を滅して後に涅槃に相即するのでは無い」と云つてゐるのである、——と。

(訓讀文)

若し彌勒滅度を得ば、一切衆生も亦(應に)滅度すべしとは、亦四種の解有り。一に云はく。上の如し。空にして二無きが故に、得れば亦同じく得ん。得ざれば亦同じかるべし。衆生の性の空なるは本來自ら空なり。復更に滅して涅槃を得べきこと無し。故に復た更に滅する無しと云ふと。二に云はく。衆生の性の空なるは涅槃の空に即す。方に更に滅して即するに非ず。故に復更に滅すること無く、即ち涅槃の相にしてと云ふと。三に云はく。即ち衆生の性の空なるを以て涅槃と爲す。故に即ち涅槃の相にして復更に滅する無しと云ふと。四に云はく。衆生には本より滅の理有り。故に即ち涅槃の相にして復更に滅して即するに非ずと云ふと。

經典

若シ彌勒得バニ滅度ラ一者。一切衆生モ亦應ニ滅度ス一。所以ハ者何ン。諸佛ハ知ルニ一切衆生ハ畢竟寂滅ナリ。即チ涅槃ノ相ニシテ不トニ復更ニ滅セ一。

經典訓讀文

若し彌勒滅度を得ば、一切衆生も亦應に滅度すべし。所以は何ん。諸佛は一切衆生は畢竟寂滅なり、即ち涅槃の相にして復更に滅せずと知る。

「彌勒さん、若しあなたが煩惱を滅したさとり境地を得るならば、一切の衆生も亦さとり境地を得るにちがひありません。理由は何故か。諸佛は、一切の衆生のあるがままの本性は煩惱を滅した究極における安らぎを得る。即ち涅槃の相を有してゐて、また更に煩惱を滅して後に涅槃を得るのではないと認識してゐるのです。」

〔顯徳序 彌勒菩薩・勝行を遣る〕（現代語譯）

受記・菩提・滅度・勝行の四つを順次に擧げて、彌勒菩薩が執著してゐるその四つを否認し取り除く中の第四に、是の故にから以下は、彌勒菩薩が勝行（すぐれた菩薩行）を修したとするのを否認し取り除きます。

此の法を以て諸の天子を誘ふこと無かれといふ中の此の法をとは彌勒菩薩が執著してゐる、八地・九地・十地の菩薩たちが修するすぐれた不退の行法を言ふのであります。實には菩提心を發す者無く、亦退く者無しといふ中の（菩提）心を發す者とは、彌勒菩薩のことを言つてをり、亦退く者無しとは、彌勒菩薩以外の未だ菩提心を發してゐない衆生のことを言つてゐます。一説では次のやうに云ひます。―（菩提）心を發す者とは、菩薩の階位（十信・十住・十行・十廻向・十地）の十住以下の初めて菩提信を發した人たちのことを言つてゐる。退く者無しとは、八地・九地・十地の不退の行を修した菩薩たちのことを言つてゐる、―と。「菩提心を發す者」と「退く者無し」との解釋が反對になつてゐます。」

或る説では次のやうに云ひます。―此の法を以て諸々の天子を誘ふこと無かれとは、上述した彌勒菩薩が執著してゐる受記・菩提・滅度の三つを以て兜率諸天に説法しそれを行ずるやう誘つてはならぬ、といふことについての總體的な結びの文言である。實には（菩提）心を發す者無しから以下は、彌勒菩薩が執著してゐる勝行を正しく否認し取り除くのである、―と。

（訓讀文）

是の故に從り以下、第四に其の勝行を遣る。

此の法を以て諸の天子を誘ふこと無かれとは、此の法とは其の存する所の三不退地の勝行の法を謂ふなり。

實には菩提心を發す者無く、亦退く者無しとは、心を發す者とは彌勒を謂ひ、退く者無しとは餘人の未發心の類を謂ふ

なり。一に云はく。心を發す者とは住下の初發心を謂ふなり。亦退く者無しとは八地以上の三不退を謂ふなり。或は云はく。此の法を以て諸々の天子を誘ふこと無かれとは、總じて上の存する所の三事を以て諸の天子を誘ふこと無かれと結するなり。實には（菩提）心を發す者無し従り以下、正しく存する所の勝行を遣るなり。

經典（勝行を遣る）

是ノ故ニ彌勒。無レ下以テニ此ノ法ヲ一誘フコト中諸ノ天子ヲ上。實ニハ無ク下發スニ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ一者上。亦無シニ退ク者一。

經典訓讀文

是の故に彌勒、此の法を以て諸の天子を誘ふこと無かれ。實には阿耨多羅三藐三菩提心を發す者無く、亦退く者無し。

經典現代語譯

「以上説いてきた通りですから彌勒さん、あなたが執着してゐる行法を以て兜率諸天に説法し行ずるやう誘つてはなりません。究極絶対の眞理に於ては、無上絶対のさとりを求め願ふ心は本来具つてゐるのであつて、その心を發す者も無く、亦そのさとりから退く者も無いのです。」「

〔顯徳序 彌勒菩薩・著を捨てよと勸むるを結す〕（現代語譯）

彌勒菩薩は受記あり、菩提あり、滅度あり、勝行ありと執着してゐますが、その四つの執着を否認し取り除く中の第三に、彌勒、當に此の諸の天子をして：しむべしから以下は、その執着を捨てなさいと勸めることの結びの文言であります。或る説では次のやうに云ひます。—經典の此の箇所より前は、彌勒菩薩が執着してゐる四つの事を否認し取り除くのである。經典の此の箇所から以下は、その執着してゐる心を否認し取り除くのである、—と。

菩薩章

此の結びの文言の中について亦二つの項目があります。第一に、執着を捨てなさいと直ちに勧めます。第二に、所以は何んから以下は、執着を捨てなさいと勸める理由を釋き明します。菩提（無上絶対のさとり）は形質ある存在ではありませんから、その身體

の修行を以てしても得ることはできないし、思考し認識するなど心の対象でもありませんから、その心の修行を以てしても得ることはできない、といふことを説明してゐます。一説では次のやうに云ひます。―菩提は差別對立を超越した絶對の空である故、身心の修行を以てしても得ることはできない、―と。

(訓讀文)

彌勒。當に此の諸の天子をして…しむべし従り以下、其の執する所の四事を遣る中の第三に。著を捨てよと勸むるを結す。或は云はく。此より上は其の執する所の四事を遣る。此従り以下は其の封心を遣ると。中に就きて亦二有り。

第一に直ちに著を捨てよと勸む。

第二に所以は何ん従り以下。著を捨てよと勸むるを釋す。

菩提は色に非ざるが故に身を以ても得可からず、心に非ざるが故に心を以ても得可からずと明すなり。一に云はく。菩提は空なるが故に身心を以てす可からざるなりと。

經典(著を捨てよと勸むるを結す)

彌勒。當ニ令ム下 此ノ諸ノ天子ヲシテ。捨テ中 於分ニ別スルノ菩提ヲ一之見ラ上。

所以ハ者何シ。菩提トハ者。不レ可ラニ以テモレ身ヲ得一。不レ可ラニ以テモレ心ヲ得一。

經典訓讀文

彌勒、當に此の諸の天子をして、菩提を分別するのを見を捨てしむべし。

所以は何ん。菩提とは、身を以ても得可からず、心を以ても得可からず。

經典現代語譯

菩薩章
「彌勒さんよ、此の兜率諸天たちに、相對的存在ではない菩提について、あれこれ分別して考へる誤つた見解は當然すてさせなければなりません。」

「その理由は何故かと申しますと、絶対的存在である菩提とは、身體の修行を以てしても得ることはできず、心の修行を以てしても得ることはできません。」

〔顯徳序 彌勒菩薩・廣く菩提の相を明す〕（現代語譯）

彌勒菩薩が叱責されることを正しく説明する中の第二に、寂滅は是れ菩提なりから以下は、菩提（さとり）のありさまを廣汎に説明します。

上述では菩提の諸々のありさまについては言及しないで、菩提とはみな因縁所生を超えた空であつて、身心の修行を以てしても得ることはできないと言いました。それでは衆生は、菩提を願求しようと思へても據るべきところがありません。それ故此の箇所、菩提とはいかなるものかについて名稱を擧げ、差別對立の相を遠離してゐる菩提、これこそすぐれた菩提である、と説明します。一説では次のやうに言ひます。——上述の（菩提心を發す者無く、亦退く者無し）までは、菩提といふ果報を得た人そのものが、差別對立を超えた空であることを説明し、當に此の諸の天子をして：しむべしから以下は、果報として得た菩提そのものが、差別對立を超えた空であることを説明している、——と。

此の中について全部で二十五句があります。菩提を言ひ表す文言は各々が異なつてをります。しかし今は、各々の文言に隨つて解釋すべきでせう。

菩薩章
寂滅（涅槃、諸事象にとらはれることのない心靜かな安らぎ）は是れ菩提（さとり）なり、の菩提とは、印度の國の bodhi の音寫であります。これを中國では道種智（一切の實踐を學んで衆生を濟度する菩薩の智慧）と釋して言ひます。此の道種智は寂滅の境地を明らかに照らし觀ることができまので、その境地に基づいた名稱を用ひ、「寂滅は菩提である」と言ひます。諸相を滅するが故にとは、寂滅が菩提である理由を釋き明すのに、「寂滅は諸事業の差別の相を離れてゐる、それ故に菩提である」と説明してゐます。一説では次のやうに云ひます。——道種智の本體は差別對立を遠離してゐる空である故に、寂滅は是れ菩提なりと云ふのである。諸相を滅するが故にとは、道種智はさとりの境地に從つて生ずる。道種智の本體が既に寂滅である故に、諸事象の差別の相を離れてゐる。

それ故に「寂滅は諸事象の差別の相を離れてゐる故に、菩提なのである」と云ふのである、——と。

不観（觀察しない、即ち諸事象の差別にとらはれない）は是れ菩提なりとは、道種智は現前の諸事象について差別の相を以て觀察することはないことを説明してゐます。諸縁を離れたるが故にとは、縁（諸事象を存在せしめてゐる間接的原因）は既に固定的實體のない空である故に、その差別の相にとらはれて觀察することはないことを説明してゐます。一説では次のやうに云ひます。——差別の相にとらはれないで觀る、即ち空、これが觀察の本體である。それ故に**不観**（差別の相にとらはれて觀察することはない）と云ふのである。諸縁を離れたるが故にとは、觀察の本體は即ち空である故に諸事象を存在せしめてゐる諸々の間接的原因に對して差別の相を以て觀察することはない、それ故に**不観**は菩提なりと言ふのである、——と。

不行（差別の相にとらはれて行ずることはない）は是れ菩提なりとは、道種智は現前の諸事象について差別の相にとらはれて行ずることではないのであります。憶念無きが故にとは、現前の諸事象について差別の相を以て思ひを保ちつづけたことがない故に、といふのであります。一説では次のやうに云ひます。——差別の相にとらはれないで行ずる、即ち空、これが行ずることの本體である故に、**不行**（差別の相にとらはれて行ずることはない）である。差別の相を以て思ひを保ちつづけることではない故に、**不行**である、——と。

斷（惑ひを斷ち切る）は是れ菩提なりとは、諸々の誤つた見解を盡く無くしてしまふ、これを菩提とするのであります。何故ならば惑ひを斷ち切れば、諸々の誤つた見解を超越できるからであります。然しながら惑ひを斷ち切ることは、道種智そのものではありません。ただ道種智を更にすぐれたものに高めますので、その高めるはたらきを以て菩提を説明するのであります。又他の解釋では次のやうに直ちに捨て去ると云ひます。——道種智は誤つた見解を捨て去ることができるので、斷は是れ菩提なりと言ふのである、——と。

離（諸事象の差別の相を捨離する）は是れ菩提なり。諸の妄見（經典 妄想）を離るるが故にとは、道種智の本體は、諸々の妄想の顛倒した考へを見事に斷ち切ります。一説では次のやうに云ひます。——斷と離とは皆空の別の名稱である。斷は是れ菩提なりとは、惑ひを斷ち切るのとは差別の相にとらはれない故、斷は菩提であるとすることができる。離は是れ菩提なりとは、五見（一）（五つの誤つた見解）を捨離できるのは空なる故であり、離は菩提であるとすることができる、——と。

障しょう（欲望をさまたげる）は是れ菩提ぼだいなり。諸願しよがんを障さふるが故ゆゑには、道種智どうしゆぢは生死しじに迷ふ衆生の諸々の欲望をさまたげ、生ぜしめないやうにします。

不入ふにゅう（生死の迷ひに入らない）は是れ菩提ぼだいなり。貪著こんぢやく無きが故ゆゑには、道種智どうしゆぢはむさぼり執着しやくぢやくすることはありません。六塵ろくじん（色・聲・香・味・觸・法）にとらはれ汚よごされることなく、生死の迷ひに入いることはありません。それ故ゆゑに生死の迷ひに入いらないのは菩提である、と云ふのであります。一説では次のやうに云ひます。―差別の相にとらはれず觀察くわんさつすれば煩惱ぼんごうは固定的實體くわんじていのない空くうである。それ故ゆゑに、六根ろくこん（目・耳・鼻・舌・身・意）がその対象の六境ろくきやう（色・聲・香・味・觸・法）と合して煩惱ぼんごうが生ずるが、それを空くうと達觀たつくわんできるのである、―と。

順じゆん（眞如に順ふ）は是れ菩提ぼだいなり。如によに順したがふが故ゆゑには、道種智どうしゆぢは眞如しんじよに順したがつて、差別の相を超越くわうした空くうであります。

住じゆう（眞如にとどまる）は是れ菩提ぼだいなり。法性ほふじやうに住じゆうするが故ゆゑには、道種智どうしゆぢは究極眞實くわうきよくしんじつの空くうなる本性ほんしんにとどまつてゐて、道種智どうしゆぢの本體ほんたいは差別の相を超越くわうした空くうであります。空くうなる法性ほふじやう（一切の存在の本體、即ち眞如）を出離しゅつらいすることはないのであります。

至し（眞如に至る）は是れ菩提ぼだいなり。實際じつさいに至るが故ゆゑには、道種智どうしゆぢは究極くわうきよくに至いたつて實際じつさい（究極の根據、即ち眞如）を照てうし觀くわんます。一説では次のやうに云ひます。―道種智どうしゆぢの本體ほんたいは差別の相を超越くわうした空くうであつて、至極しよくすれば空際くうさい（空の究極、實際、眞如）と同じである、―と。

不二ふに（一切の存在は一體不二といふ理）は是れ菩提ぼだいなり。意いと法ほふとを離はなるが故ゆゑには、道種智どうしゆぢは一切の存在、事象じじやうは一體不二であるといふ理ことわりを觀くわん知ちします。意いとはさとりの智慧ぢぢであります。法ほふとは認識にんしされる一切の存在、事象じじやうであります。離りといふ言葉は、空くうと同じであります。さとりの智慧ぢぢも一切の存在も差別の相を超越くわうした空くうを以て觀くわん知ちすれば、一體不二であります。

等とう（一切の存在は平等であるといふ理）は是れ菩提ぼだいなり。虚空こくうに等ひとしきが故ゆゑには、道種智どうしゆぢは一切の存在は平等であるといふ理ことわりを觀くわん知ちします。虚空こくうに高下かうげが無いのと同様に一切の存在には優劣ゆうりやくの差はありません。一説では次のやうに云ひます。―さとりの智慧ぢぢも認識にんしされる一切の存在も皆差別の相を超越くわうした空くうであつて、虚空こくうに何らの差別さべつが無いのと同様である、―と。

無畏むゐ（生滅變化を超えた常住絶對の眞實、眞如）は是れ菩提ぼだいなり。生しやうと住じゆうと滅めつと無なきが故ゆゑには、道種智どうしゆぢは差別の相を超越くわうした空くうの理ことわり

を觀知します。そして、一切の事象が生起すること、生起したすがたに住まること、終には滅すること、この三相は因果關係において生滅變化する有爲法であります。道種智は三相を無爲（因果關係を離れてゐる存在）と觀ます。一説では次のやうに云ひます。——さとり智慧も認識される一切の存在も皆差別の相を超越した空であるので、これらは無爲である。無爲は、一切の事象が生起すること、生起したすがたに住まること、終には滅すること、それらの生滅變化を超越して常住のものと觀る。故に菩提である、——と。

知（佛果の一切智）は是れ菩提なり。衆生の心行を了するが故にとは、果報として得る佛陀の一切の智慧は、衆生の心のはたらしの差別を明らかに認識します。これは菩提であります。

不會（六根と六塵とが合しない）は是れ菩提なり。諸入會せざるが故にとは、道種智は差別の相にとらはれることなく觀察するので、六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）がその對象の六塵（色・聲・香・味・觸・法）にはたきかけて煩惱を生ずる、その十二のかかはりありを空と達觀するのであります。

不合（煩惱が聚合しない）は是れ菩提なり。煩惱の習を離るるが故にとは、道種智は、煩惱は固定的實體の無い空であると觀知し、更に煩惱を斷ち切つた残りの汚れも實體は無いと觀知します。それ故に、煩惱が聚り合して生ぜしめる生死の迷ひも實體は無いと觀知します。一説では次のやうに云ひます。——六根が六塵にはたきかけて生ぜしめる煩惱を、實體の無い空と觀するのは菩提である。何故かと言へば、それを實體の無い空と觀する時は、煩惱を斷ち切つた残りの汚れも空と觀するが故である、と——。

無處（認識の場が無い）は是れ菩提なり。形色無きが故にとは、差別の相を超越して一切の事象を空と觀する空觀は、すがた形を認識する場も同じく實體のない空と觀じます。これは菩提である、と説明してゐます。

假名（假に付せられた名稱）は是れ菩提なり。名字空なるが故にとは、道種智は種々の存在を空と觀じますが、ものの名稱までも、それはものを區別するために假に名づけられたもので、實體のない空だと觀知します。

如化（神通力等を以て變化せしむる如き）は是れ菩提なり。取も捨も無きが故にとは、變化せしめられたるものは實體のない空であり、萬有一切はこのやうに空であることを説明してゐます。一説ではつぎのやうに云ひます。——道種智の本體は實體の無い空であ

つて、神通力等を以て變化せしめられたるものが實體が無いのと同様である。それ故に一切の存在に執着することもなければ、捨て去ることもないのである、——と。

無亂（心を亂さない）は是れ菩提なり。常に自ら靜なるが故にとは、佛陀が心を安定せしめる禪定は、常に心を亂すことなく寂靜であり、これは菩提であります。道種智の本體は差別の相を超越した空であつて、心の動搖散亂を斷ち切つてをります。何故ならば、差別の相を超越した究極絶對の眞理においては、心は常に亂れることなく自らにして寂靜なる故であります。

善寂（涅槃寂靜）は是れ菩提なり。性清淨なるが故にとは、佛陀は寂滅（涅槃、寂靜にして一切の相を離る）の理に順つて常に靜淨であります。一説では次のやうに云ひます。——道種智の本體は善寂（涅槃寂靜）であつて本來靜淨なのである、——と。

無取（執着がない）は是れ菩提なり。攀縁を離るるが故にとは、現前の諸事象について差別の相を以て執着することがないことを説明してゐます。攀縁を離るるが故にとは、攀縁（認識の對象）の本體は實體の無い空である故に離れるのであります。一説では次のやうに云ひます。——道種智の本體は差別の相を超越してゐる空であり、一切の存在に執着することはない。何故ならば、認識の對象を超越してゐる故である、——と。

無畏（諸事象を分けへだてなく觀する）は是れ菩提なりとは、現前の諸事象について分けへだてなく觀知します。諸法等しきが故にとは、一切の諸事象は皆、實體の無い空であつて平等である故にとも説明してゐます。一説では次のやうに云ひます。——諸佛の功德は等しい故に無畏と云ふ。諸佛の十種類の力や説法する畏れない四種の智慧などは等しいが故に、諸法等しきが故にと言ふ、——と。

無比（比較できない）は是れ菩提なり。喻ふ可き無きが故にとは、道種智は比較相對の相を超越してゐて、譬へることはできません。一説では次のやうに云ひます。——金剛（菩薩五十一位の等覺）以下の菩薩たちは未だすがた形を恃むところがあるが、佛陀はそれらを全て斷ち切つてゐる。それ故に無比と言ふのである、——と。

微妙（はかり知れぬほどすぐれて觀察）は是れ菩提なり。諸法知り難きが故にとは、道種智の本體は極めて奥深く不可思議で、穢れや束縛を一切斷ち切つてをります。衆生の智慧を以ておしはかることはできません。それ故に「知り難い」と云ふのであります。

(1) 五見 五つの誤つた見解。①有身見。身心に實體的自我が存すると執する我身と、一切の事物を我がものと執する我所見とを合せたもの。②邊執見。一切は斷絶する、或いは一切は常住であると一方の極端に偏する誤つた見解。③邪見。因果はないと見なす誤つた見解。④見取見。自己の見解が最高であるとする誤つた見解。⑤戒禁取見。外道の戒律や誓ひを守ることのみを解脱の眞の原因と解する見解。

(訓讀文)

寂滅は是れ菩提なり従り以下、正しく呵する中の第二に、廣く菩提の相を明す。

上には則ち衆相を除蕩して皆空にして不可得といふ。則ち物の情寄るところ無し。故に此には名に就きて用て無相の相は是れ菩提の妙相なりと明す。一に云はく。上は能く果を得たる人の空を明し、當に此の諸の天子をして：しむべし従り以下は、所得の菩提の果は空なりと明すと。

中に就きて凡そ廿五句有り。分段は各各不同あり。而るに今は文に隨つて宜しく釋すべし。寂滅は是れ菩提なりとは、菩提とは是れ西國の音なり。此には道種智と言ふ。此の智は明らかに寂滅の境を照すが故に、境に従つて名を立てて、寂滅は是れ菩提なり、といふ。諸相を滅するが故にとは、寂滅は是れ菩提なる所以を釋して、諸相を存せざる故なりと明すなり。一に云はく。智の體は即ち空なるが故に、寂滅は是れ菩提なりと云ふ。諸相を滅するが故にとは、種智は境に従つて而も生ず。智の體は既に寂なるが故に、諸相は不得なり。故に諸相を滅するが故に、と云ふと。不觀は是れ菩提なりとは、智は前境を存して觀す可からざるを明す。諸縁を離れたるが故にとは、縁の體は既に空なるが故に觀ぜずと明す。一に云はく。觀の體は即ち空なり。故に不觀と云ふ。諸縁を離れたるが故にとは、觀の體は即ち空なるが故に、諸縁を縁せざる故なりと。

不行は是れ菩提なりとは、智は前境を行ぜずとなり。憶念無きが故にとは、前境は能く憶念を生ずること無きが故なり。一に云はく。行の體は即ち空なるが故に不行なり。憶念無きが故に不行なりと。斷(惑ひを斷ち切る)は是れ菩提なりとは、諸見盡く亡せるを菩提と爲す。何となれば則ち諸見を離るるが故なり。然るに斷は種智に非ず。但能く

智を嚴るが故に能嚴を以て菩提を明すなり。又解して直ちに云はく。智は能く諸見を捨つるが故に断は是れ菩提なりと言ふと。

離は是れ菩提なり。諸の妄見(想)を離るるが故にとは、智の體は妙に妄想の諸倒を絶す。一に云はく。断と離とは

皆是れ空の異名なり。断は是れ菩提なりとは亦空是なり。離は是れ菩提なりとは五見は空なるが故に亦是なりと。

障は是れ菩提なり。諸願を障ふるが故にとは、智は生死の諸願を障ふ。

不入は是れ菩提なり。貪著無きが故にとは、智は貪著無し。六塵と相ひ涉りて生死に入らざるが故に、不入は是れ

菩提なり、と云ふなり。一に云はく。煩惱は即ち空に達するが故に、十二入は相ひ會入するを見ずと。

順は是れ菩提なり。如に順ふが故にとは、智は眞如に順じて空なり。

住は是れ菩提なり。法性に住するが故にとは、智は眞の空性に住して、智の體は即ち空なり。空の法性を出でざるなり。

至は是れ菩提なり。實際に至るが故にとは、智は至りて實際を照す。一に云はく。智の體は空にして、極は實際に同じ

なりと。不二は是れ菩提なり。意と法とを離るるが故にとは、智は不二の理を觀す。意とは智なり。法とは境なり。離の言は空

なり。智と境と皆空にして不二なり。等は是れ菩提なり。虚空に等しきが故にとは、智は平等の理を觀ず。虚空の高下無きが如きなり。一に云はく。智も境

も皆空にして虚空の差別無きが如しと。無畏は是れ菩提なり。生と住と滅と無きが故にとは、智は空の理を觀じて、三相の有爲なるを見ず。一に云はく。智も

境も皆空なれば、則ち是れ無爲なり。無爲は生と住と滅と無し。是れ菩提なりと。(經典は知) 智(知)は是れ菩提なり。衆生の心行を了するが故にとは、佛果の圓智は明らかに衆生の心行の差別を了す。是れ

菩提なり。(經典は知)

不ふ會えは是これ善ぼだい提だいなり。諸しよ入にゆう會えせざるが故ゆゑにとは、智ちは能よく根こんと塵じんとの十二じふに入にゆう相あひ和わ會えするを見みざるなり。不ふ合ごうは是これ善ぼだい提だいなり。煩ぼんのう惱のうの習しゆうを離はなるるが故ゆゑにとは、智ちは煩ぼんのう惱のう即すなはち空くうなり。乃至乃至餘よ習しゆうも無なしと觀かんず。故ゆゑに煩ぼんのう惱のう聚じゆ合ごうの生しやうじ死じ無なし。一いちに云いはく。六ろく塵じんと合ごうせざるは是これ善ぼだい提だいなり。何なんとなれば則すなはち合ごうせざる時ときには能よく煩ぼんのう惱のうの習しゆうを離はなるるが故ゆゑなりと。

無む處じよは是これ善ぼだい提だいなり。形ぎやうしき色しき無なきが故ゆゑにとは、空くう觀かんの形ぎやうしき色しきの所しよ處じよを見みざるは、是これ善ぼだい提だいなりと明あかすなり。

假け名なは是これ善ぼだい提だいなり。名な字じ空くうなるが故ゆゑにとは、智ちは乃至乃至名な字じも皆みな空くうなりと觀かんず。

如に化けは是これ善ぼだい提だいなり。取しゆも捨しやも無なきが故ゆゑにとは、一いつ切さい皆みな空くうなるを明あかすなり。一いちに云いはく。智ちの體たいは即すなはち空くうにして化けの如ごとし。故ゆゑに取しゆも捨しやも無なしと。

無む亂らんは是これ善ぼだい提だいなり。常つねに自おのづから靜じやうなるが故ゆゑにとは、佛ぶつの定じやうは常つねに是これ靜じやうなり。是これ善ぼだい提だいなり。智ちの體たいは即すなはち空くうにして動どう亂らんを絶ぜつす。何なんとなれば則すなはち眞しん諦たいの理りは常つねに自おのづから靜じやうなるが故ゆゑなり。

善ぜん寂じやく（涅槃ねはん寂じやく靜じやく）は是これ善ぼだい提だいなり。性しやう清じやう淨じやうなるが故ゆゑにとは、佛ぶつは寂じやく滅めつの理りに順じゆんつて常つねに靜じやう淨じやうなり。一いちに云いはく。智ちの體たいは善ぜん寂じやくにして本ほん來らい靜じやう淨じやうなりと。

無む取しゆは是これ善ぼだい提だいなり。攀はん緣えんを離はなるるが故ゆゑにとは、前ぜん境きやうの取しゆる可べきを見みずと明あかす。攀はん緣えんを離はなるるが故ゆゑにとは、攀はん緣えんの體たいは即すなはち空くうなるが故ゆゑなり。一いちに云いはく。智ちの體たいは空くうにして取しゆ無なし。何なんとなれば則すなはち攀はん緣えんを離はなるるが故ゆゑなりと。

無む畏ゐは是これ善ぼだい提だいなりとは、前ぜん境きやうの異いなる可べきを見みず。諸しよ法ぽう等とうしきが故ゆゑにと、一いつ切さい皆みな空くうにして平へい等とうの故ゆゑなるを明あかす。一いちに云いはく。諸しよ佛ぶつの功こう齊じしき故ゆゑに無む異いと云いふ。十じゆ力りき・四し無む畏ゐ等とうしきが故ゆゑに諸しよ法ぽう等とうしきが故ゆゑにと言いふと。

無む比ひは是これ善ぼだい提だいなり。喩たじふ可べき無なきが故ゆゑにとは、智ちは譬ひ況きやうの及およぶ所しよに非あず。一いちに云いはく。佛ぶつは並ならべて金こん剛かう以下いげの形ぎやう待たいする所しよを絶ぜつするが故ゆゑに無む比ひと言いふと。

微み妙めうは是これ善ぼだい提だいなり。諸しよ法ぽう知ち難がたきが故ゆゑにとは、智ちの體たいは微み妙めうにして塵じん累らいを絶ぜつす。下げ情じやうの測はかる所しよに非あず。故ゆゑに知ち難がた

しと云ふなり。

經典（廣く菩提の相を明す）

寂滅ハ是レ菩提ナリ。滅スルガニ諸相ヲ一故ニ。

不觀ハ是レ菩提ナリ。離タルガニ諸縁ヲ一故ニ。

不行ハ是レ菩提ナリ。無キガニ憶念一故ニ。

斷ハ是レ菩提ナリ。捨ツルガニ諸見ヲ一故ニ。

離ハ是レ菩提ナリ。離ルルガニ諸ノ妄想ヲ一故ニ。

障ハ是レ菩提ナリ。障フルガニ諸願ヲ一故ニ。

不入ハ是レ菩提ナリ。無キガニ貪著一故ニ。

順ハ是レ菩提ナリ。順フガニ於如ニ一故ニ。

住ハ是レ菩提ナリ。住スルガニ法性ニ一故ニ。

至ハ是レ菩提ナリ。至ルガニ實際ニ一故ニ。

不二ハ是レ菩提ナリ。離ルルガニ意ト法トヲ一故ニ。

等ハ是レ菩提ナリ。等キガニ虚空ニ一故ニ。

無爲ハ是レ菩提ナリ。無キガニ生ト住ト滅ト一故ニ。

知ハ是レ菩提ナリ。了スルガニ衆生ノ心行ヲ一故ニ。

不會ハ是レ菩提ナリ。諸入不ルガレ會セ故ニ。

不合ハ是レ菩提ナリ。離ルルガニ煩惱ノ習ヲ一故ニ。

無處ハ是レ菩提ナリ。無キガニ形色故ニ一。

菩薩章

假名ハ是レ菩提ナリ。名字空ナルガ故ニ。

如化ハ是レ菩提ナリ。無キガニ取モ捨モ一故ニ。

無亂ハ是レ菩提ナリ。常ニ自ラ静ナルガ故ニ。

善寂ハ是レ菩提ナリ。性清淨ナルガ故ニ。

無取ハ是レ菩提ナリ。離ルルガニ攀縁ヲ一故ニ。

無異ハ是レ菩提ナリ。諸法等シキガ故ニ。

無比ハ是レ菩提ナリ。無キガレ可キレ喩フ故ニ。

微妙ハ是レ菩提ナリ。諸法ハ難キガレ知ルコト故ニ。

經典訓讀文

寂滅じやくめつハ是レ菩提ぼだいナリ。諸相しよそうを滅めつするガ故ゆゑニ。

不觀ふくわんハ是レ菩提ぼだいナリ。諸縁しよえんを離はなれたるガ故ゆゑニ。

不行ふぎやうハ是レ菩提ぼだいナリ。憶念おくねん無なきが故ゆゑニ。

斷だんハ是レ菩提ぼだいナリ。諸見しよけんを捨すつるガ故ゆゑニ。

離りハ是レ菩提ぼだいナリ。諸しよの妄想もうもうを離はなるるガ故ゆゑニ。

障しやうハ是レ菩提ぼだいナリ。諸願しよがんを障さふるガ故ゆゑニ。

不入ふにゆうハ是レ菩提ぼだいナリ。貪著とんじやく無なきが故ゆゑニ。

順じゆんハ是レ菩提ぼだいナリ。如によに順しんふガ故ゆゑニ。

住じゆうハ是レ菩提ぼだいナリ。法性ほつしやうに住じゆうするガ故ゆゑニ。

至しハ是レ菩提ぼだいナリ。實際じつさいに至いたるガ故ゆゑニ。

菩薩章
不二ふにハ是レ菩提ぼだいナリ。意いと法ほうとを離はなるるガ故ゆゑニ。

等とうは是これ菩提ぼだいなり。虚空こくうに等ひとしきが故ゆゑに。

無むい爲こは是これ菩提ぼだいなり。生しやうと住じゆうと滅めつと無なきが故ゆゑに。

知ちは是これ菩提ぼだいなり。衆生しゆじやうの心行しんぎやうを了りするが故ゆゑに。

不ふえ會こは是これ菩提ぼだいなり。諸入會しよにゆうえせざるが故ゆゑに。

不ふごう合こは是これ菩提ぼだいなり。煩惱ぼんのうの習しゆうを離はなるるが故ゆゑに。

無むしよ處こは是これ菩提ぼだいなり。形ぎやう色しき無なきが故ゆゑに。

假けみまう名こは是これ菩提ぼだいなり。名みまう字じ空くうなるが故ゆゑに。

如によけ化こは是これ菩提ぼだいなり。取しゆも捨しやも無なきが故ゆゑに。

無むらん亂こは是これ菩提ぼだいなり。常つねに自おのづから静じやうなるが故ゆゑに。

善ぜんじやく寂こは是これ菩提ぼだいなり。性しやう清じやう淨じやうなるが故ゆゑに。

無むしゆ取こは是これ菩提ぼだいなり。攀はんえん緣えんを離はなるるが故ゆゑに。

無むい異こは是これ菩提ぼだいなり。諸しよ法ほう等とうしきが故ゆゑに。

無むひ比こは是これ菩提ぼだいなり。喻たとふ可べき無なきが故ゆゑに。

經典現代語譯

「寂滅（涅槃、諸事象にとらはれない心静かな安らぎ）は菩提（さとり）です。寂滅は諸事象の差別の相を離れてゐる故にです。」

「不觀（觀察しない、即ち諸事象の差別にとらはれない）は菩提です。不觀は諸緣（諸事象を存在せしめてゐる諸々の間接的原因）の差別の相を離れてゐる故にです。」

「不行（差別の相にとらはれて行ずることはない）は菩提です。不行は差別の相を以て思ひを保ちつづけることが無い故にです。」

菩薩章
「斷（惑ひを斷ち切る）は菩提です。斷は諸諸の誤つた見解を捨て去ることが出来る故にです。」

- 「離（諸事象の差別の相を捨離する）は菩提です。離は諸々の妄想を捨離することが出来る故にです。」「
- 「障（欲望をさまたげる）は菩提です。障は諸々の欲望をさまたげ抑制することが出来る故にです。」「
- 「不入（生死の迷ひに入らない）は菩提です。不入は一切のものに對してむさぼり執着を起さない故にです。」「
- 「順（眞如に順ふ）は菩提です。順は眞如に順ふことができる故にです。」「
- 「住（眞如にとどまる）は菩提です。住は法性（一切の存在の本體、即ち眞如）にとどまるが故にです。」「
- 「至（眞如に至る）は菩提です。至は實際（究極の根據、即ち眞如）に至るが故にです。」「
- 「不二（一切の存在は一體不二といふ理）は菩提です。不二は意（智慧）と法（一切の存在）とを超越できる故にです。」「
- 「等（一切の存在は平等であるといふ理）は菩提です。等は虚空に何らの差別がないのと同じである故にです。」「
- 「無爲（生滅變化を超えた常住絶對の眞實・眞如）は菩提です。一切の事象が生起すること、生起した姿に住まること、終には滅すること、それらが無い故にです。」「
- 「知（佛果の一切智）は菩提です。衆生の心のはたらきの差別を明らかに認識することが出来る故にです。」「
- 「不會（六根と六塵とが合しない）は菩提です。六根が六塵に働きかけて煩惱を生ぜしめることが無い故にです。」「
- 「不合（煩惱が聚合しない）は菩提です。煩惱を斷ち切つた後に未だ残つてゐる汚れも無い故にです。」「
- 「無處（認識の場が無い）は菩提です。一切のすがた形を空と觀する故にです。」「
- 「假名（假に付せられた名稱）は菩提です。ものの名稱は區別のために假に付せられたもので、實際の無い空と觀する故にです。」「
- 「如化（神通力等を以て變化せしむる如き）は菩提です。一切の存在に執着すること、また捨て去ること、共に無い故にです。」「
- 「無亂（心を亂さない）は菩提です。究極絶對の眞理に於ては、心は常に亂れることなく自らにして寂靜なる故にです。」「
- 「善寂（涅槃寂靜）は菩提です。本來の性は常に清淨なる故にです。」「
- 「無取（執着がない）は菩提です。認識の對象にとらはれることが無い故にです。」「
- 「無異（諸事象を分けへだてなく觀する）は菩提です。一切の諸事象は實體の無い空であつて平等なるが故にです。」「

「//無比(比較できない)は菩提です。比較相對の相を超越してゐて、譬へることができない故にです。//」
「//微妙(はかり知れぬほどすぐれた觀察)は菩提です。一切を存在あらしめてゐる根本は極めて奥深く知り難い故にです。//」

〔顯徳序 彌勒菩薩・呵に因り時の衆は益を得〕(現代語譯)

維摩居士の病氣見舞ひを辭退する理由を釋き明す中の第三に、世尊から以下は、維摩居士が説法し叱責したことに因つて、その説法の座に居合せた人々は利益を得たことを示します。

(訓讀文)

世尊從り以下、第三に因りて時の衆は益を得。

經典(呵に因り時の衆は益を得)

世尊。維摩詰説クニ是ノ法ヲ一時。二百ノ天子得タリニ無生法忍ヲ一。

經典訓讀文

世尊。維摩詰是の法を説く時、二百の天子無生法忍を得たり。

經典現代語譯

「世尊よ。維摩居士が以上の説法をし終つた時、兜率天の二百人の天子たちは無生法忍(生滅を離れた絶對の眞理)を得ました。」

〔顯徳序 彌勒菩薩・堪へざるを結す〕(現代語譯)

彌勒菩薩が維摩居士の病氣を見舞ふ力量がありませんと辭退する中の第三は、故に我彼に詣りて疾を問ふに堪任せずであり、これは見舞ふ任に堪へないことの結びの文言であります。

(訓讀文)

故に我彼に詣りて疾を問ふに堪任せずとは、辭の中の第二に、堪へざるを結す。

經典（堪へざるを結す）

故に我不レ任ヘ詣テ彼ニ問フニ疾ヲ。

經典訓讀文

故に我彼に詣りて疾を問ふに任へず。

經典現代語譯

「以上の次第でありますから、彌勒は維摩居士のもとへ行つて病氣を見舞ふ、その任を果す力量はありません。」

〔顯徳序 光嚴菩薩に命ず〕（現代語譯）

四人の菩薩たちに維摩居士の病氣見舞ひに行くやう命ずる中の第二に、光嚴菩薩に命じます。この中について亦、第一に釋迦如來が命じ、第二に見舞ふ力量がありませんと辭退する、二つの項目があります。

（訓讀文）

第二に光嚴菩薩に命ず。中に就きて亦命ずと辭すと有り。

經典（光嚴菩薩に命ず）

佛告グニ光嚴童子ニ。汝行ニ詣シテ維摩詰ニ一問ヘトレ疾ヲ。

經典訓讀文

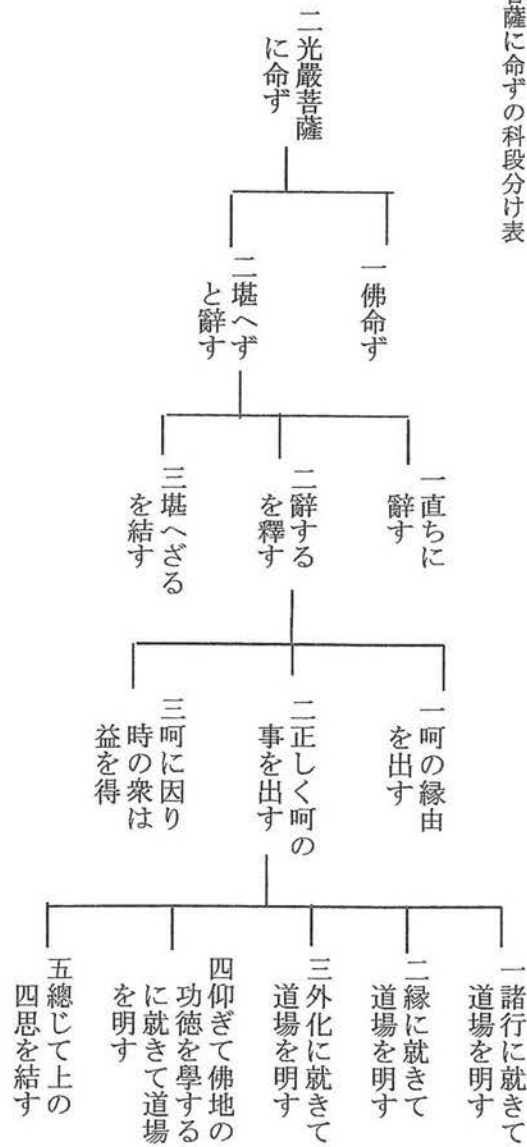
佛光嚴童子に告ぐ。汝維摩詰に行詣して疾を問へと。

經典現代語譯

菩薩章

佛陀釋尊は光嚴菩薩こうこんぼさつに申しつけられた。「汝は維摩居士のところへ行つて病氣を見舞ひなさい」と。

光嚴菩薩に命ずの科段分け表



〔顯徳序 光嚴菩薩・堪へずと辭すの科段分け〕(現代語譯)

光嚴菩薩に命ずる中の第二に、見舞ふ力量がありませんと辭退します。その中の三つの項目は亦、前述の彌勒菩薩の辭退と同様であります。

(第一に、光嚴菩薩は直ちに辭退します。)

(第二に、辭退する理由を釋き明します。)

(第三に、見舞ふ任に堪へないことの結びの文言であります。)

(訓讀文)

辭する中の三重は亦前の如し。

〔顯徳序 光嚴菩薩・直ちに辭す〕

(この箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

經典(直ちに辭す)

光嚴。白シテ、佛ニ言ク。世尊。我不_ニ堪_ニ任_セ旨_テ、彼ニ問フニ疾ヲ。

經典訓讀文

光嚴、佛に白して言はく。世尊、我彼に詣りて疾を問ふに堪任せず。

經典現代語譯

光嚴菩薩は佛陀に申しあげて言つた。「世尊よ、私は維摩居士のもとへ行つて病氣を見舞ふ、その任を果す力量はありません。」

〔顯徳序 光嚴菩薩・辭するを釋すの科段分け〕(現代語譯)

維摩居士の病氣を見舞ふ力量がありませんと辭退する中の第二の、辭退する理由を釋き明す中について亦、三つの項目があります。

第一に、維摩居士から叱責された由來を述べます。

第二に、直心は是れ道場なりから以下は、維摩居士から正しく叱責された事を述べます。

第三に、是の法を説く時から以下は、維摩居士が説法し叱責したことに因つて、その説法の座に居合せた人々は利益を得たことを示します。

(訓讀文)

第二に辭するを釋する中に就きて亦三有り。

第一に呵を致すの由を出す。

第二に直心は是れ道場なり従り以下、正しく呵の事を出す。

第三に是の法を説く時従り以下、呵に因りて益を得。

〔顯德序 光嚴菩薩・呵の緣由を出す〕（現代語譯）

病氣見舞ひを辭退する理由を釋き明す中の第一の、維摩居士から叱責される由來を述べる中について亦、四つの項目があります。第一に、維摩居士と光嚴菩薩とが出逢ふことを説明してゐます。第二に、光嚴菩薩は、維摩居士にうやうやしく禮をなし、何處からお出でにられましたかと問ひかけることを説明してゐます。第三に、維摩居士は道場（さとりを開く場所）より來たと答へます。第四に、光嚴菩薩は、道場は何處にありますかと更に問ひかけます。

しかしながら維摩居士は何故叱責するのかと申しますと、道理について論ずるなば、八地以上の菩薩の萬善の行は利益して佛陀のさとりといふ果報を皆に同じく得さしめます。それ故に八地以上の菩薩に於てはあらゆる場所や所作がさとりを開く道場となるのであります。而るに光嚴菩薩は、佛陀釋尊がさとりを開いた摩訶陀（王舎城の在る所）だけを道場だと認識してゐて、「摩訶陀は此處から遠いのに維摩居士は何と疾く來たものだ、或いはまた此の近くにさとりを開く道場があるのでらうか」と疑問を抱きます。それ故に「道場は何處にあるのでせうか」と、維摩居士に教へを請ふのであります。そこで維摩居士は、光嚴菩薩がさとりを開く道場について廣く認識してゐないことを叱責するのであります。

（訓讀文）

第一の呵を致すの由の中に就きて亦四有り。第一に淨名と光嚴と相逢ふことを明す。第二に光嚴敬を致し其の從來する所の處を問ふことを明す。第三に淨名は道場従り來ると答ふ。第四に光嚴復道場は何れの所か是なりやと問ふ。然るに此の光嚴の呵を被むる所以は、理に就きて論を爲さば、大士の萬行は皆能く衆生を利益して同じく佛果に歸せ

しむ。故に道場に非ざる莫し。而るに光嚴は、但釋迦の道を得し摩訶(陀)の道場のみを識りて、則ち路遠きに來ること疾し。更に復近きに道場有りやと疑ふ。故に何れの所か是なりやと請問するなり。是を以て淨名其の未だ廣く識らざるを呵するなり。

經典(呵の緣由を出す)

所以ハ者何ン。憶念スルニ我昔。出ツニ毘耶理大城ヲ。時ニ維摩詰方ニ入ルニ城ニ。

我即チ爲ニ作シテ禮ヲ而問テ言ク。居士。從リニ何レノ所一來ルヤト。

答テ。我ニ言ク。吾從リニ道場一來ルト。

我問フ。道場トハ者何レノ所カ是ナリヤト。

經典訓讀文

所以何ん。憶念するに我昔、毘耶理大城を出づ。時に維摩詰方に城に入る。

我即ち爲に禮を作して問ひて言はく。居士、何れの所従り來るやと。

我に答へて言はく。吾道場従り來ると。

我問ふ。道場とは何れの所か是なりやと。

經典現代語譯

「見舞ひを辭退する理由は何故かと申しますと、憶ひおこしますに昔私は、道場を求めて毘耶理大城を出ようとしてをりました。その時、維摩居士が城に入つてきました。」

「そこで私は丁寧に禮を作し、維摩居士さん、どちらからお出になられましたか、と問ひかけました。」

「維摩居士は私の問ひに答へて言ひました。『私は道場から來ました』と。」

「私は再び問ひました。維摩居士さんの言はれる道場は何處にあるのでせうか、と。」

〔顯德序 光嚴菩薩・正しく呵の事を出すの科段分け〕（現代語譯）

病氣見舞ひを辭退する理由を釋き明す中の第二の、光嚴菩薩が叱責されることを正しく説明する中について亦、五つの項目があります。

第一に、初めから有爲法を捨するが故にに訖るまでは、直心など、心を修する諸々の行を擧げて、それがさとりを開く道場であることを説明します。

第二に、四諦は是れ道場なりから以下は、苦・集・滅・道の四諦の理など、解脱を得るための間接的な原因となるものを擧げて、それがさとりを開く道場であることを説明します。

第三に、降魔は是れ道場なりから以下は、魔を降伏して教化するなど衆生を教化濟度する外化の行を擧げて、それがさとりを開く道場であることを説明します。

第四に、十力無畏は是れ道場なりから以下は、十力（佛陀の十種の智力）など、佛陀のさとりの境地における功德を仰ぎ學ぶことを擧げて、それがさとりを開く道場であることを説明します。

第五に、是の如く善男子から以下は、以上の四つの項目について、總體としての結びの文言であります。

（訓讀文）

第二の正しく呵の事を出す中に就きて亦五階有り。

第一に初め従り有爲法を捨するが故にに訖るまでは、諸行に就きて場を明す。

第二に四諦は是れ道場なり従り以下、縁に就きて場を明す。

第三に降魔は是れ道場なり従り以下、外化に就きて場を明す。

第四に十力無畏は是れ道場なり従り以下、仰ぎて佛地を學するに就きて場を明す。

第五に是の如く善男子従り以下、總じて上の四重を結す。

〔顯徳序 光嚴菩薩・諸行に就きて道場を明す〕（現代語譯）

（光嚴菩薩が叱責されることを正しく説明する中の第一に、直心など、心を修する諸々の行を擧げて、それがさとりを開く道場であることを説明します。）

直心は是れ道場なり。虚假無きが故に。について、道場の「道」とは、その本質には智慧が自由自在にはたらくといふ理があります。「場」とは、その本質には善惡を判別できるといふ理があります。「道」は、佛陀のさとりである一切に通達する智慧に未來に於て到達するものであり、「場」は、佛道を學ぶ境界に於て正しい善惡の判別に導かれるのであります。佛道を學ぶ境界に於て修する直心（純一、清らかで、すなほな心）は、とらはれの心がありませんから、よく善惡の判別ができ、遠い將來に於て佛陀のさとりを果報として受ける、といふことを説明してゐます。それ故に「直心は道場です」と云ふのであります。

虚假無きが故にとは、信（説かれるところの理に従ふ）といふことは人がらがすなほな故であり、うそ偽りが無いといふことについて、その意味を釋き明してゐるのであります。

此の直心から以下、三十七品は是れ道場なり。有爲法を捨するが故に。に訖るまでの善行は皆、心を修めるすぐれた善行であり、いづれも皆同様に佛道を弘める道場であります。

發行は是れ道場なり。能く事を辯ずるが故に。とは、直心が既に確立すれば、諸々の善を行じようと決意を固くして修行することが出来ます。決意を固くして修行できる理由は、諸々の現象面のはたらきを區別し正確に把握できるからであります。

深心は是れ道場なり。功徳を増益するが故に。とは、諸々の善行を既に積むならば、衆生を思ひやる心は益々深くなります。衆生を思ひやる心が益々深ければ、諸々の功徳は更に増します。

菩薩章
菩提心は是れ道場なり。錯謬無きが故に。とは、直心を確立すれば發行（決意を固くして善行を修行する）することができ、決意を固くして善行を修することにより深心（他を深く思ひやる心）は益々深くなります。深心は菩提心（さとりを求め、衆生を教化濟度しよと願ふ心）に變つてゆきます。菩提心が道場であるのは何故かと申しますと、菩提心たる上弘佛道（上なる佛陀を仰いで佛道を弘め、

さとりを求める」と下化蒼生（下なる衆生を憐愍して教化濟度する）とには謬りの心は生じないからであります。

菩薩の實踐徳目である六度（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧）の修行は自行（自らのさとりを求めて修行する）と外化（他者を教化濟度する）とを兼ねてをりますから、これらは皆すぐれた眞實の道場であります。

四無量心（衆生を救ふための四つの無量な心。樂しみを與へる慈。苦を抜く悲。他の喜びをわが喜びとする。怨親などの差別の相を捨てる。）とは、八地以上の菩薩が廣く衆生を教化濟度するための肝要な善行であります。それ故にこれらの善行は亦、尊ぶべき道場であります。

神通とは、さとりを求める修行の段階における五通（五つの超人的な能力。一切のものを見通す天眼通。一切の音聲を聞くことのできる天耳通。他者の心の中を見通せる他心通。前世のありさまを全て知る宿命通。どこにでも自在に行ける神足通。）をはたらかせることに由つて、さとの境地に到達すれば六通（五通と漏盡通―煩惱のけがれが無くなったことを知る智）を得ることができまので、神通は道場であります。

解脱（肉體、煩惱をもつた身のままで、それらの束縛から解放される）とは、八解脱（滅盡定―六識の心のはたらきを滅し盡した安らかな境地―に至る八種類の解脱）を言ひます。

方便とは、衆生の苦しみを察し、その苦しみを救ふに適應したてを考へ、衆生を教化して佛道に導き入れるのであります。四攝とは、布施・愛語・利行・同事の四つの行であり、絶えず衆生に接し、この四つの行を以て教化濟度するのであります。方便と四攝法との二つは皆、菩薩が衆生を教化濟度する巧みな善行であり、さとりを開くための肝要な道場であります。それ故に「方便と四攝法とは道場です」と云ふのであります。

伏心とは、心をととのへるために眞諦（究極の立場における眞理）と俗諦（世俗の立場における眞理）とを修行することでありま。而も眞諦と俗諦との理をさとすることは、あらゆるものの根本の道理を正しく觀ずることにあひ通するのであります。

道品（三十七道品―三十七種の修行方法。）とは、これを悉く修行することができれば、生死のとははれ及び因縁によつて生滅する一切の事象に對するとははれを捨て去ることが出來ますので、「三十七道品は道場です」と云ふのであります。

（訓讀文）

直心は是れ道場なり。虚假無きが故にとは、道は是れ能く通ずる義と爲す。場は判を決するを以て義と爲す。道は佛果の圓智を當とし、場は學地に據りて明すことを爲す。學地の直心は能く善惡を判じて、遠く佛果を感ずといふことを明す。故に直心は是れ道場なりと云ふ。虚假無きが故にとは、信は質直にして虚假無きことを釋するなり。

此従り以下。三十七品は是れ道場なり。有爲法を捨するが故に訖るまで以來は、皆是れ心を修するの美行、佛道を弘むるの平等の場なり。

發行は是れ道場なり。能く事を辯するが故にとは、直心既に立てば則ち能く衆善を發行す。能く發行する所以は能く事を辯するが故なり。

深心は是れ道場なり。功德を増益するが故にとは、衆善既に積まば其の心轉深し。其の心轉深ければ則ち諸の功德を増益す。

善提心は是れ道場なり。錯謬無きが故にとは、夫れ直心に由れば則ち能く發行し、善行を發すに由りて則ち心轉深心なり。深心は變じて善提心と爲る。何となれば則ち上弘佛道と下外蒼生とは錯謬する所無ければなり。

六度は自行と外化とを兼ねるが故に、皆是れ眞道の美場なり。四無量心とは、乃ち是れ大士の廣く衆生を化するの要行なり。故に亦是れ道の尊場なり。

神通とは、因地の五通に由りて能く果上の六通を得るが故に、是れ道場なり。解脱とは、八解脱を謂ふなり。

方便とは、善く藥と疾との宜しきを察し、衆を化し道に入らしむ。四攝とは、從ひ已りて化す。二つは皆大士化物の巧みなる行にして、成道の要場なり。故に是れ道場なりと云ふ。

伏心とは、心を修する二諦の理なり。而も理の如く解して乃ち正觀に稱ふ。道品とは、若し能く備に修すれば則ち能く生死有爲の法を捨するが故に是れ道場なりと云ふ。

經典（諸行に就きて道場を明す）

答テ曰ク。

直心ハ是レ道場ナリ。無キガニ虚假一故ニ。

發行ハ是レ道場ナリ。能ク辯ズルガレ事ヲ故ニ。

深心ハ是レ道場ナリ。増ニ益スルガ功德ヲ一故ニ。

菩提心ハ是レ道場ナリ。無キガニ錯謬一故ニ。

布施ハ是レ道場ナリ。不ルガレ望マレ報ヲ故ニ。

持戒ハ是レ道場ナリ。得ルガニ願具ハルコトヲ一故ニ。

忍辱ハ是レ道場ナリ。於テニ諸ノ衆生ニ一、心無礙ナルガ故ニ。

精進ハ是レ道場ナリ。不ルガニ懈怠ナラ一故ニ。

禪定ハ是レ道場ナリ。心調柔ナルガ故ニ。

智慧ハ是レ道場ナリ。現ニ見ルガニ諸法ヲ一故ニ。

慈ハ是レ道場ナリ。等クスルガニ衆生ヲ一故ニ。

悲ハ是レ道場ナリ。忍ブガニ疲苦ヲ一故ニ。

喜ハ是レ道場ナリ。悦ニ樂スルガ法ヲ一故ニ。

捨ハ是レ道場ナリ。増愛斷ズルガ故ニ。

神通ハ是レ道場ナリ。成ニ就スルガ六通ヲ一故ニ。

解脱ハ是レ道場ナリ。能ク背捨スルガ故ニ。

方便ハ是レ道場ナリ。教ニ化スルガ衆生ヲ一故ニ。

四攝ハ是レ道場ナリ。攝ムルガニ衆生ヲ一故ニ。

多聞ハ是レ道場ナリ、如クノ聞ノ行ズルガ故ニ。

伏心ハ是レ道場ナリ、正シク觀ズルガニ諸法ヲ一故ニ。

三十七品ハ是レ道場ナリ、捨スルガニ有爲法ヲ一故ニ。

經典訓讀文

答へて曰はく。

直心ハ是レ道場ナリ。虚假無きが故に。

發行ハ是レ道場ナリ。能く事を辯ずるが故に。

深心ハ是レ道場ナリ。功德を増益するが故に。

菩提心ハ是レ道場ナリ、錯謬無きが故に。

布施ハ是レ道場ナリ、報を望まざるが故に。

持戒ハ是レ道場ナリ、願具はることを得るが故に。

忍辱ハ是レ道場ナリ、諸の衆生に於て心無礙なるが故に。

精進ハ是レ道場ナリ、懈怠ならざるが故に。

禪定ハ是レ道場ナリ、心調柔なるが故に。

智慧ハ是レ道場ナリ、現に諸法を見るが故に。

慈ハ是レ道場ナリ、衆生を等しくするが故に。

悲ハ是レ道場ナリ、疲苦を忍ぶが故に。

喜ハ是レ道場ナリ、法を悦樂するが故に。

捨ハ是レ道場ナリ。増愛斷するが故に。

菩薩章
神通ハ是レ道場ナリ、六通を成就するが故に。

解脱げだつは是れ道場どうじょうなり、能く背捨はいしやするが故ゆゑに。
 方便ほうべんは是れ道場どうじょうなり。衆生しゆじやうを教化きやうけするが故ゆゑに。
 四攝ししやくは是れ道場どうじょうなり。衆生しゆじやうを攝をさむるが故ゆゑに。
 多聞たもんは是れ道場どうじょうなり、聞もんの如く行ぎやうずるが故ゆゑに。
 伏心ぶくしんは是れ道場どうじょうなり、正ただしく諸法しよほうを觀かんずるが故ゆゑに。
 三十七品さんじちゆしちほんは是れ道場どうじょうなり、有うい爲法ほうを捨しやするが故ゆゑに。

經典現代語譯

「維摩居士は答へて言ひました。

「直心じきしん（純一、清らかで、すなほな心）は道場です。うそ偽りが無い故にです。」

「發行ほつぎやう（決意を固くして善行を修する）は道場です。現象面のはたらきを區別し正確に把握できる故にです。」

「深心じんしん（他を深く思ひやる心）は道場です。功德を更に増す故にです。」

「菩提心ぼだいしん（さとりを求め、衆生を教化濟度しようと願ふ心）は道場です。謬り偽りの心が生じない故にです。」

「布施ふせ（財物を施し、また法を説く）は道場です。果報を求めることが無い故にです。」

「持戒ちかい（戒律を守つて犯さない）は道場です。誓願を成就できる故にです。」

「忍辱にんにく（苦難を耐へ忍び、瞋恚の念を起さない）は道場です。諸々の衆生に對して心にこだはりやさし障りが無い故にです。」

「精進しやうじん（精魂こめて務め勵む）は道場です。なまけ怠ることが無い故にです。」

「禪定ぜんじやう（心靜かに冥想し心を動搖させない）は道場です。心が柔軟であり適應能力がある故にです。」

「智慧ちゑ（事物の實相を照らし、さとりを完成するはたらき）は道場です。一切の事象をありのままに見きはめるが故にです。」

「慈じ（衆生に樂しみを與へる）は道場です。衆生を平等に慈しむが故にです。」

「悲ひ（衆生の苦を抜く）は道場です。自己の疲れや苦は忘れて、衆生の苦しみをとり去るが故にです。」

「喜（他の喜びをわが喜びとする）は道場です。法を説いて相手が喜んでくれるならば、わが喜びも盡きることがない故にです。」
「捨（怨親など一切の差別を捨てる）は道場です。憎しみとか愛とかの一切の差別を断ち切るが故にです。」
「神通（超人的な能力）は道場です。六通（天眼通・天耳通・他心通・宿命通・神足通・漏盡通）の不可思議な力を成就することができる故にです。」

「解脱（肉體、煩惱をもつた身のまままで救はれる）は道場です。よく煩惱の束縛から解き放たれるが故にです。」

「方便（衆生を導くための巧みなてだて）は道場です。衆生を教化濟度する故にです。」

「四攝（布施・愛語・利行・同事）は道場です。衆生を救ひとる故にです。」

「多聞（佛法を廣く聞き知る）は道場です。教へを聞いた通りに實行する故にです。」

「伏心（心を制伏し静めととのへる）は道場です。一切の事象を正しく觀する故にです。」

「三十七品（三十七種の修行方法）は道場です。因縁所生の一切事象についての迷ひを捨て去るが故にです。」

〔顯徳序 光嚴菩薩・縁に就きて道場を明す〕（現代語譯）

光嚴菩薩が叱責されることを正しく説明する中の第二に、四諦は是れ道場なりから以下は、解脱を得るための縁（間接的な原因）となるものを擧げて、それがさとりを開く道場であることを説明します。

四諦は是れ道場なり、世間を誣さざるが故に。とは、苦・集・滅・道の四諦の理を觀することを間接的な原因としてよく智慧とさとりとを生じ、最終的には如來に具つてゐる惑ひの一切ない境地といふ果報を得るのであります。或る經典研究家は次のやうに云ひます。―苦・集・滅・道の四諦は眞實なる眞理であつて、これを觀することによつて世の中の人々は惑ひを無くすることができ、―と。

菩薩章

縁起は是れ道場なり、無明乃至老死皆盡くること無きが故に。について、縁起とは十二因縁（一）（衆生の生存の状態を無明―過去世の無始の煩惱―から老死までの十二に分類して説いたもの）であります。因とそれを助ける縁とは、順次に前のものが後のものを成立さ

せる條件となつて、因と縁とは盡きることがありません。亦次のやうに解釋するのもよいでせう。——因と縁とは次々と遷り變つてゆく固定的な實體のない空くうであり、かかる空なるものは連綿と續いて永遠に盡きることはない。若し此の因縁の本來の意義を悟れば、自らおのづかにしてもの事を明らかに見通す智慧が得られる。善惡を明らかに判斷する智慧が生ずれば、自らおのづかにしてさとりを求め衆生を濟度しようと願ふ心が成就する。それ故に「縁起を觀ずることは道場です」と云ふのである、——と。

諸もろもろの煩惱ぼんのうは是れ道場どうじやうなり、如実にじつを知るが故ゆゑに。とは、煩惱ぼんのうをありのままに觀ずれば、それは固定的な實體のない空くうであることを悟り、それによつてさとりの智慧と解脱げつたつが得られ、佛陀の境地きんぢに到達するが故ゆゑであります。

衆生しゆじやうは是れ道場どうじやうなり、無我むがを知るが故ゆゑに。一切いっさいの法ほうは是れ道場どうじやうなり、諸法しよほうの空くうなるを知るが故ゆゑに。とは、此の二句は、前項の煩惱ぼんのうの解釋と同様どうじやうであります。

(1) 十二因縁 衆生が過去の業により現世の果報をうけ、現世の業により未來の果報をうける因果の關係を十二に分類して説いたもの。

- ①無明。過去世の無始の煩惱をいふ。②行。過去世の煩惱によつて作られる善惡の行業をいふ。③識。過去世の業によつて受ける現世の受胎の一念をいふ。④名色。胎中にあつて漸く心身の發育するをいふ。⑤六處。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が具足して將に胎中を出ようとするをいふ。⑥觸。二、三歳の頃、事物に對して何らの識別もなく、ただ物に觸れるをいふ。⑦受。六、七歳以後、漸く事物に對して苦樂を識別してこれを感じ受けるをいふ。⑧愛。十四、五歳以後、種々の愛欲を生ずるをいふ。⑨取。成人以後、愛欲愈々盛んとなりこれに執着するをいふ。⑩有。有とは業で、種々の業を作つて當來の果報を受けるをいふ。⑪生。現在の業によつて未來に生を受けるをいふ。⑫老死。來世に於て老い死するをいふ。
- 過去には始まりが無く、未來には終りが無いので、これを無始無終の生死輪廻じふじゆんといひ、縁學えんがくはこれを觀じて終に惑業を斷じ、涅槃ねはんを證するとされる。

(訓讀文)

四諦しだいは是れ道場どうじやうなり従り以下、第二だいにに縁えんに就つきて場じやうを明あかす。

四諦は是れ道場なり、世間を誑さざるが故にとは、四諦を縁と爲し能く智と解とを生じて、終に如來の誑さざるの果を得るなり。或は云はく。四諦は眞實にして世間を虚誑せずと。

縁起は是れ道場なり、無明乃至老死皆盡くること無きが故にとは、縁起とは十二因縁なり。因縁相ひ感じて盡くること無きなり。亦かなるべし。因縁は即ち空にして、空は盡くる可きこと無きなり。若し能く此の因縁の由る所を悟れば則ち智自ら明らかなり。智心既に明らかなれば則ち道心自ら成ず。故に縁起は是れ道場なりと云ふと。

諸の煩惱は是れ道場なり、如實を知るが故にとは、煩惱は即ち空なりと解し、仍りて明と解とを生じ、佛を得るが故なり。

經典(縁に就きて道場を明す)

四諦は是れ道場ナリ。不ルガニ世間ヲ一故ニ。

縁起は是れ道場ナリ。無明乃至老死皆無キガレ盡キルコト故ニ。

諸ノ煩惱ハ是レ道場ナリ。知ルガニ如實ヲ一故ニ。

衆生ハ是レ道場ナリ。知ルガニ無我ヲ一故ニ。

一切ノ法ハ是レ道場ナリ。知ルガニ諸法ノ空ナルヲ一故ニ。

經典訓讀文

四諦は是れ道場なり、世間を誑さざるが故に。

縁起は是れ道場なり、無明乃至老死皆盡くること無きが故に。

諸の煩惱は是れ道場なり、如實を知るが故に。

菩薩章
衆生は是れ道場なり、無我を知るが故に。

一切の法は是れ道場なり。諸法の空なるを知るが故に。

經典現代語譯

「苦・集・滅・道の四諦の理を觀ずることは道場です。世の中の人々の惑ひを無くするが故にです。」

「十二因縁を觀ずることは道場です。無明（過去世の無始の煩惱）に始まつて老死に終る十二項目の因縁は盡きることが無いと悟るが故にです。」

「諸々の煩惱を觀ずることは道場です。煩惱の眞實なる實相は空であることを知るが故にです。」

「凡夫たる衆生を觀ずることは道場です。我なる存在は空であり無であると知るが故にです。」

「世の中のあらゆる事象を觀ずることは道場です。あらゆる事象は固定的な實體のない空であると知るが故にです。」

〔顯徳序 光嚴菩薩・外化に就きて道場を明す〕（現代語譯）

光嚴菩薩が叱責されることを正しく説明する中の第三に、降魔は是れ道場なりから以下は、外化（衆生を教化濟度する）の行を擧げて、それがさとりを開く道場であることを説明します。

降魔は是れ道場なり、傾動せざるが故に。とは、惡魔の諸々の誘惑に心を動かさないことを説明してゐます。惡魔を降伏するといふのは、故に強い力をもつて相手を苦しめるものではありません。ただ惡業を改めさせて善行を實踐させ、信を生ぜしめて佛道に導き入れようと欲するのであります。それ故に「降魔」は外化の行であるとわかるのであります。

三界は是れ道場なり、所趣無きが故に。とは三界（欲界・色界・無色界）に於て迷ひ苦しむ衆生を、ただ教化濟度しようとするのであります。教化すれば三界に所在する衆生と雖も、業の束縛から解き放たれます。それ故に「所趣（迷ひの世界）は無い」と云ふのであります。

菩薩章

獅子吼は是れ道場なり、畏るる所無きが故に。とは、説法して衆生を教化濟度するのに全く畏れることがないのは、百獸の王が獅子吼するのと同様であります。

(訓讀文)

降魔は是れ道場なり従り以下、第三に外化に就きて場を明す。

降魔は是れ道場なり、傾動せざるが故に。とは、魔の爲に動せざることを明すなり。魔を降すとは故に強勢をもつて逼悩するに非ず。但悪を改め善に従ひ信を生じて道に入らしめんと欲す。故に外化の行なりと知る。

三界は是れ道場なり、所趣無きが故に。とは、但物を化せんと欲す。三界に處ると雖も業の繋ぐ所に非ず。故に所趣無しと云ふ。

獅子吼は是れ道場なり、畏るる所無きが故に。とは、説法して衆を度するに一も畏るる所無きこと獅子吼の如きなり。

經典 (外化に就きて道場を明す)

降魔ハ是レ道場ナリ。不ルガニ傾動セ一故ニ。

三界ハ是レ道場ナリ。無キガニ所趣一故ニ。

獅子吼ハ是レ道場ナリ。無キガニ所畏ルル一故ニ。

經典訓讀文

降魔は是れ道場なり。傾動せざるが故に。

三界は是れ道場なり。所趣無きが故に。

獅子吼は是れ道場なり。畏るる所無きが故に。

經典現代語譯

「悪魔を降伏して佛道に導き入れることは道場です。悪魔の諸々の誘惑に心を動かすことがない故にです。」

「三界の衆生を教化濟度することは道場です。衆生が三界に所在しながらも迷ひの世界から離れるが故にです。」

「説法するに獅子吼して衆生を教化濟度することは道場です。何ものにも畏れるところがない故にです。」

〔顯徳序 光嚴菩薩・仰ぎて佛地の功德を學するに就きて道場を明す〕（現代語譯）

光嚴菩薩が叱責されることを正しく説明する中の第四に、力・無畏は是れ道場なりから以下は、佛陀のさとりの境地における功德を仰ぎ學ぶことを擧げて、それがさとりを開く道場であることを説明します。

力（佛陀の十種の智力）・無畏（説法するに四種の畏れがないこと）・不共法（十八不共法。佛陀に具つてゐる十八の特質）は是れ道場なり、諸過無きが故に。とは、これらの佛陀の徳を仰ぎ學べば、諸々の惡業を永遠に絶ち切りますので諸々のあやまちを犯さないのであります。

三明（天眼通・宿命通・漏盡通）は是れ道場なり、餘の礙無きが故に。とは、佛陀の三明を仰ぎ學べば、心を開くしてゐる迷ひは永遠に消えてしまつて、心の滞りやさし障りは全く無くなるのであります。

一念に一切の法（一切の現象的存在）を知るは是れ道場なり、一切智を成就するが故に。について、「一念に一切の法を知る」とは金剛心（菩薩の心が堅固不壞なことを）を言ひます。「一切智を成就す」とは佛陀のみが得てをられる一切を知る智慧を仰ぎ學ぶのであります。

（訓讀文）

力・無畏・是れ道場なり従り以下、第四に仰ぎて佛地の功德を學するに就きて場を明す。

力・無畏・不共法ハ是れ道場ナリ。無キガ諸過故ニ。とは、永く諸惡を絶つが故に過無きナリ。

三明は是れ道場なり、餘の礙無きが故に。とは、諸闇永く盡きて滞と礙と無きナリ。

一念に一切の法を知るは是れ道場なり、一切智を成就するが故にとは、一念に一切の法を知るとは、金剛心を謂ふ。一切智を成就すとは、仰ぎて佛果の一切智を學ぶなり。

經典（仰ぎて佛地の功德を學するに就きて道場を明す）

力・無畏・不共法は是れ道場ナリ。無キガニ諸過一故ニ。

三明ハ是れ道場ナリ。無キガニ餘ノ礙一故ニ。

一念ニ知ルハニ一切ノ法ヲ一是れ道場ナリ。成ニ就スルガ一切智ヲ一故ニ。

經典訓讀文

力・無畏・不共法は是れ道場ナリ、諸過無キが故に。

三明は是れ道場ナリ、餘の礙無キが故に。

一念に一切の法を知るは是れ道場ナリ、一切智を成就するが故に。

經典現代語譯

「力（佛陀の十種の智力）・無畏（説法するに四つの畏れがない）・不共法（佛陀の十八の特質）を仰ぎ學ぶことは道場です。諸々のあやまちを犯すことがない故にです。」

「三明（天眼通・宿命通・漏盡通）を仰ぎ學ぶことは道場です。心の滞りやさし障りが全く無くなる故にです。」

「一念の中に一切の現象的存在を知り盡くすことは道場です。佛陀のみが得てをられる一切を知る智慧を仰ぎ學ぶ故にです。」

〔顯徳序 光嚴菩薩・總じて上の四重を結す〕（現代語譯）

光嚴菩薩が叱責されることを正しく説明する中の第五に、是の如く善男子から以下は、前述の四つの項目について、總體としての結びの文言であります。

菩薩若し諸々の波羅蜜に應じてとは、八地以上の菩薩は現象世界とそれを超えた本源の世界との兩者を共に明らかに観すること
ができ、現象世界に所在しようとは本源の世界に所在しようとは、その心のあり方は永遠に變ることなく、八萬にもおよぶ波羅蜜（涅槃、即ちさとりに到る行法。布施・持戒などの六波羅蜜ほか）の夫々に相應じた實踐をします。

菩薩章
それ故に「諸の波羅蜜」と云ひます。此の句は自行（自らがさとりを求めて修行する）を説明してゐます。衆生を教化するから以

下は、外化（他を教化濟度する）を説明してゐます。諸有所作、學足、下足は皆道場従り來りてとは、八地以上の菩薩の一舉手一等投足あらゆる所作は皆、あらゆる善行であり、福德をもたらす善根であり、これらの諸行を實踐することによつて佛陀のさとりといふ究極の果報に向ふのであります。佛法に住するとは、佛陀のさとりといふ究極の果報に到り、まさにその境地にとどまるのであります。佛陀のさとりの境地から言へば「來る」と表現し、さとりに向つて修行してゐる因の時から言へば「去る」と表現します。或る經典研究家は次のやうに云ひます。一八地以上の菩薩のあらゆる所作は、悉くが佛法そのものであつて、佛法ならざるものはない。それ故に「佛法にとどまる」と云ふのである、一と。

（訓讀文）

是の如く善男子従り以下。第五に総じて上の四重を結す。

菩薩若し諸々の波羅蜜に應じてとは、八地以上の菩薩は有無並べて照らし。永く出入の異なく、能く八萬の波羅蜜と相應するを以ての故に、諸の波羅蜜と云ふ。此の句は自行を明す。衆生を教化する従り以下、外化を明す。諸有所作、學足、下足は皆道場従り來りてとは、八地以上の菩薩の所有施爲は皆萬善・功德の諸行に乗じて來りて佛果に向ふ。佛法に住するとは、佛果に至りて方に住す。佛果従り望みて來ると爲し、因従り望みて去ると爲す。或は云はく。諸有進止佛法に非ざることを無し。故に住すと云ふなりと。

經典（總じて上の四重を結す）

如ク是ノ善男子。菩薩若シ應ジニ諸ノ波羅蜜ニ。教ヲ化スル衆生ヲ一諸有所作。學足。下足ハ當ニ知ル下皆従リニ道場一來テ住スルコトヲ於佛法ニニ矣。

經典訓讀文

菩薩章
是の如く善男子。菩薩若し諸の波羅蜜に應じ、衆生を教化する諸有所作、學足、下足は當に皆道場従り來りて佛法に住することを知るべし。

經典現代語譯

「光嚴菩薩さん、是の如しですよ。八地以上の菩薩が諸々の波羅蜜（布施・持戒などのさとりに到る行法）の夫々に應じて實踐すること、衆生を教へ導くに際しての一舉手一投足、あらゆる所作は皆、さとりを開く道場そのものなのです。その實踐を積み重ねて遂には佛陀のさとりといふ究極に到達し、そこにとどまる、それをするべきですよ。」

〔顯徳序 光嚴菩薩・呵に因り時の衆は益を得〕（現代語譯）

維摩居士の病氣見舞ひを辭退する理由を釋き明す中の第三に、是の法を説く時から以下は、維摩居士が説法し叱責したことに因つて、（その説法の座に居合せた人々は）、利益を得たことを示します。

（訓讀文）

是の法を説く時から以下、第三に呵に因りて益を得。

經典（呵に因り時の衆は利益を得）

説クニ是ノ法ヲ一時。五百ノ天人皆發シキニ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ一。

經典訓讀文

是の法を説く時、五百の天人皆阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。

經典現代語譯

「維摩居士が以上の説法をし終わった時、その場に居合せた五百人の天人たちは皆、無上絶對のさとりを求め、衆生を教化濟度しようとして願ふ心を發しました。」

〔顯徳序 光嚴菩薩・堪へざるを結す〕（現代語譯）

光嚴菩薩が維摩居士の病氣を見舞ふ力量がありませんと辭退する中の第三は、故に我彼に詣りて疾を問ふに任へずであり、これは見舞ふ任に堪へないことの結びの文言であります。

(訓讀文)

故に我彼に詣りて疾を問ふに任へずとは、辭の中の第三に、堪へざるを結す。

經典(堪へざるを結す)

故に我不任に詣りて彼に問ふ疾ヲ。

經典訓讀文

故に我彼に詣りて疾を問ふに任へず。

經典現代語譯

「以上の次第でありますから、光嚴は維摩居士のもとへ行つて病氣を見舞ふ、その任を果す力量はありません。」

〔顯徳序 持世菩薩に命ず〕(現代語譯)

四人の菩薩たちに維摩居士の病氣見舞ひに行くやう命ずる中の第三に、持世菩薩に命じます。この中について亦、第一に釋迦如來が命じ、第二に見舞ふ力量がありませんと辭退する、二つの項目があります。

(訓讀文)

第三に持世菩薩に命ず。中に就きて亦命ずと辭すと有り。

經典(持世菩薩に命ず)

佛告グニ持世菩薩ニ。汝行ニ詣シテ維摩詰ニ問ヘト疾ヲ。

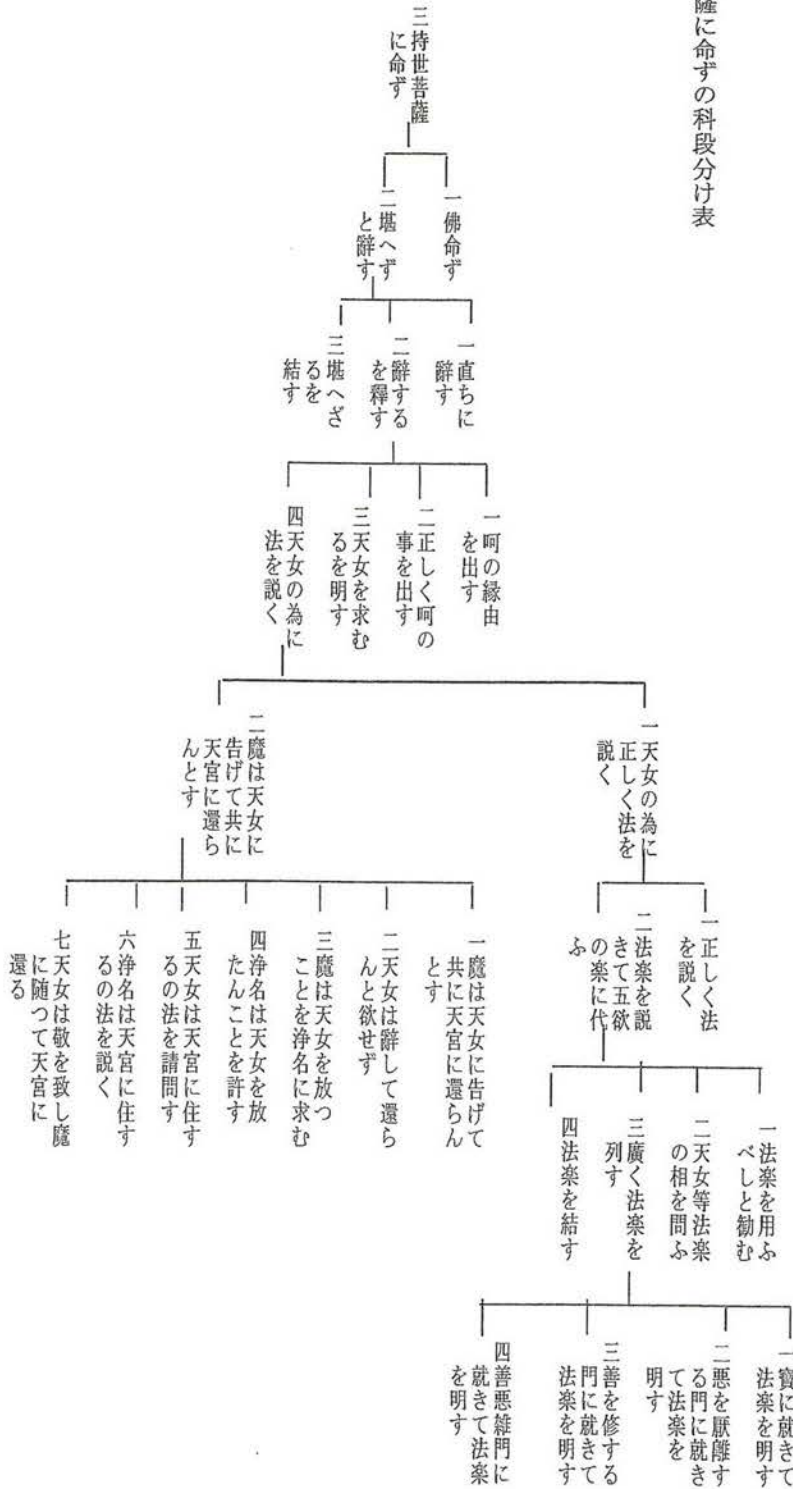
菩薩章

經典訓讀文

ぶつじぜぼさつ
佛持世菩薩につぐ。
なんぢゆいまきつ
汝維摩詰に行詣して疾を問へと。
ぎょうけい
しつと

佛陀釋尊は持世菩薩に申しつけられた。「汝は維摩居士のところへ行つて病氣を見舞ひなさい」と。

持世菩薩に命ずの科段分け表



〔顯徳序 持世菩薩・堪へずと辭すの科段分け〕（現代語譯）

持世菩薩に命ずる中の第二に、見舞ふ力量がありませんと辭退します。その中の三つの項目は亦、前述の光嚴菩薩の辭退と同様であります。

（第一に、持世菩薩は直ちに辭退します。）

（第二に、辭退する理由を釋き明します。）

（第三に、見舞ふ任に堪へないことの結びの文言であります。）

（訓讀文）

辭する中の三重は亦前の如し。

〔顯徳序 持世菩薩・直ちに辭す〕

（この箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない）

經典（直ちに辭す）

持世。白シテ、佛ニ言ク。世尊。我不_ニ堪_ハ任_テ。彼ニ問フニ、疾ヲ。

經典訓讀文

持世、佛に曰して言はく。世尊、我彼に詣りて疾を問ふに堪任せず。

經典現代語譯

持世菩薩は佛陀に申しあげて言つた。「世孫よ、私は維摩居士のもとへ行つて病氣を見舞ふ、その任を果す力量はありません。」

維摩居士の病氣を見舞ふ力量がありませんと辭退する中の第二の、辭退する理由を釋き明す中について亦、四つの項目があります。

第一に、維摩居士から叱責された由來を述べます。

第二に、言ふ所未だ訖らざるにから以下は、維摩居士から正しく叱責された事を述べます。

第三に、即ち魔に語りて言はく。から以下は、諸々の天女たちを我に與へよと、維摩居士が魔に對して女たちを求めることを明します。

第四に、爾の時に維摩詰から以下は、維摩居士が諸々の天女たちに對して佛法を説きます。

(訓讀文)

第二に辭するを釋する中に就きて亦四有り。

第一に呵を致すの由を出す。

第二に言ふ所未だ訖らざるに従り以下、正しく呵の事を出す。

第三に即ち魔に語りて言はく従り以下、淨名女を魔に求むるを明す。

第四に爾の時に維摩詰従り以下、淨名天女の爲に法を説く。

〔顯德序 持世菩薩・呵の緣由を出す〕

病氣見舞ひを辭退する理由を釋き明す中の第一の、維摩居士から叱責される由來を述べる中について亦、四つの項目があります。

第一に、惡魔波旬が持世菩薩を訪ねて來たありさまを説明します。第二に、惡魔は帝釋天に姿を變へてゐたので、持世菩薩はそれが惡魔であると知らなかつたことを説明します。我意に是れ…と謂つて以下の經典がこれでありませうと、申し出たことを説明します。第三に、惡魔は引き連れて

來た天女たちを持世菩薩に與へませうと、申し出たことを説明します。即ち我に語りて言はくから以下の經典がこれでありませうと、申し出たことを説明します。

第四に、惡魔の申し出を持世菩薩は辭退し受諾しないことを説明します。

しかしながら維摩居士は何故叱責するのかと申しますと、悪魔波旬は、持世菩薩が坐禪して心を寂靜に保たうとしてゐるのを邪魔し惑はさうと意圖してゐました。但し悪魔の姿のままでは持世菩薩が心を動かさないうであらうと考へたので、帝釋天に姿を變へてやつて來たのでした。帝釋天は佛法の守護者で、諸々の佛弟子は帝釋天を敬ひ重んじてゐる故にです。而るに持世菩薩はそれを見抜くことができず、悪魔を帝釋天だと思ひこんでをりました。それ故に維摩居士は持世菩薩を叱責するのであります。

(訓讀文)

第一の呵を致すの由の中に就きて亦四有り。

第一に魔の至來の相を明す。

第二に持世は是れ魔なりと識らざることを明す。我意に是れ…と謂つてと従り以下是なり。

第三に魔は天女を以て持世に施すことを明す。即ち我に語りて言はく従り以下是なり。

第四に持世は辭して受けざることを明す。

然るに淨名呵を致す所以は、魔は將に持世の宴坐の心を燒さんと欲す。但し持世の相與せざらんことを恐る。故に帝釋は是れ佛の壇越にして諸の弟子は敬重す。所以に形を變じて帝釋と作りて來れるなり。而るに持世は此の事を識らず。故に淨名此の呵を致すなり。

經典(呵の緣由を出す)

所以ハ者何シ。憶念スルニ我昔。住セリ。於靜室ニ。時ニ魔波旬。從ヘテ。萬二千ノ天女ヲ。狀如クニ。帝釋一。鼓樂絃歌シテ來。詣ス我ガ所ニ。與ニ其ノ眷屬一稽。首シ我ガ足ヲ一。合掌恭敬シテ。於テニ。一面ニ。立テリ。

經典訓讀文

菩薩章 所以は何ん。憶念するに我昔、靜室に住せり。時に魔波旬。萬二千の天女を從へて狀帝釋の如く、鼓樂絃歌して我が所に来詣

す。其の眷屬と我が足を稽首し、合掌恭敬して、一面に於て立てり。

經典現代語譯

「見舞ひを辭退する理由は何故かと申しますと、憶ひおこしますに昔私は、靜かな部屋で坐禪を行じてをりました。その時惡魔波旬が一萬二千人の天女たちを従へ、帝釋天のやうな姿をしてさまざまな音樂を奏でながら私の所へやつて來ました。その従者と共に私の足をいただいて禮拜し、敬ひ合掌し、私の前に立ち並びました。」

經典

我意ニ謂テニ是レ帝釋ナリト一而語テレ之ニ言ク。善ク來レリ。橋戸迦。雖モニ福應シトロ有ル不レ當ラニ自ラ恣ニス一。當ニ觀ジテニ五欲ノ無常ナルヲ一以テ求メニ善本ヲ一。於テニ身・命・財ニ一而修ス堅法ヲ上。

經典訓讀文

われこゝろに是れたいしやくと謂つて之に語り言はく。善く來れり。橋戸迦、福有るべしと雖も自ら恣にすべからず。當に五欲の無常なるを觀じて以て善本を求め、身・命・財に於て堅法を修すべしと。

典現代語譯

「私は帝釋天が訪ねてきたものだと思ひこんで、説法して言ひました。よくお出でになられた、橋戸迦（帝釋天の昔の姓）さんよ、福德をもつてゐて何事も意のままになるのでせうが、自分の好き勝手に振舞つてはなりませんよ。五欲（眼・耳・鼻・舌・身による欲望）の快樂は一時のはかないものだとして、さとりのもととなる善行に努め、身・命・財を捨離すべく佛法を修行すべきですよ。」

經典

即チ語テレ我ニ言ク。正士。受ケケテニ是ノ萬二千ノ天女ヲ一。可シトレ。備フニ。掃灑ニ一。

菩薩章

經典訓讀文

すなは 即ち我に語りて言はく。正士、是の萬二千の天女を受けて掃灑に備ふ可しと。

經典現代語譯

「そこで彼は私に向つて言ひました。『菩薩さんよ、この一萬二千の天女たちを差しあげますので受けとつて下さい。清掃などに使つて下さい』と。」

經典

我言ク。橋戸迦。無シテ此ノ非法ノ之物ヲ。要スルコト。我沙門釋子ニ。此レ非ズトニ我ガ宜キニ。

經典訓讀文

我言はく。橋戸迦、此の非法の物を以て我沙門釋子に要すること無し。此れ我が宜しきに非ずと。

經典現代語譯

「私は言ひました。『橋戸迦さんよ、私は釋迦世尊の弟子となり出家して修行してゐる身です。その私には佛法に歸依してゐない天女たちは全く必要ありません。とても應諾できることではありません』と。」

〔顯徳序 持世菩薩・正しく呵の事を出す〕（現代語譯）

病氣見舞ひを辭退する理由を釋き明す中の第二に、言ふ所未だ訖らざるから以下は、維摩居士から正しく叱責された事を説明してゐます。

帝釋に非ざるなりとは、惡魔波旬が帝釋天に姿を變へて來た、それを持世菩薩は見抜くことができなかつた事を直ちに叱責する

のであります。是は為魔來りて汝を燒固するのみ。とは、惡魔波旬がやつて來たのは持世菩薩の坐禪を邪魔し惑はさうとの意図であつた、それを持世菩薩は見抜くことができなかつた事を叱責するのであります。

(訓読文)

言ふ所未だ訖らざる従り以下、第二に正しく呵せらるるを明す。

帝釋に非ざるなりとは、直ちに己形を変ずと識らざるを呵するなり。是は為魔来りて汝を燒固するのみ、とは、己魔の来れる意を識らざるを呵するなり。

經典(正しく呵の事を出す)

所レ言フ未ダレ訖ラ時ニ。維摩詰来テ謂テレ我ニ言ク。非ルナリニ帝釋ニ一也。是ハ為魔来テ燒固スルノ汝ヲ一耳ト。

經典訓読文

言ふ所未だ訖らざる時に、維摩詰来りて我に謂ひて言はく。帝釋に非ざるなり。是は為魔来りて汝を燒固するのみと。

經典現代語

「問答が未だ終つてゐないその時、維摩居士がやつて来て私に言ひました。『その者は帝釋天ではありませんよ。これは悪魔波旬がやつて来て、あなたの坐禪を邪魔し惑はさうとしてゐるのですよ』と。」

〔顯徳序 持世菩薩・天女を求むるを明す〕(現代語譯)

病氣見舞ひを辭退する理由を釋き明す中の第三に、即ち魔に語りて言はくから以下は、維摩居士が天女たちを私に譲りなさいと要求したことを説明します。その中については四つの項目があります。第一に、維摩居士が天女たちを私に譲りなさいと直ちに要求します。第二に、魔即ち驚き懼れてから以下は、悪魔波旬は恐れをのき、天女たちは捨ててしまつて自分は姿を隠さうとしたことを説明します。第三に、即ち空中に…を聞くにから以下は、空中から聲が發せられて、維摩居士に譲りなさいと勧めます。

第四に悪魔は、天女たちと維摩居士に譲ることを説明します。魔畏るるを以ての故に倨仰して與へたりといふ經典がこれでありま

菩薩章
す。

以て我に與ふ可し。我の如きは應に受くべし。とは、その意味するところは次の通りであります。持世菩薩は出家して佛道を修行してゐる身ですから、女を近づけることはできません。それ故に、天女たちを譲り受けることはできないのです。維摩居士は世俗の生活をしてゐる人です。それ故に、天女たちを譲り受けても何ら差し支へはないのです。

以上が第一項に關する解説ですが、次の三つの項目については經典を御覽なさい。

(訓読文)

魔に語りて言はく従り以下、第三に淨名女を求む。中に就きて即ち四有り。第一に直ちに索む。第二に魔即ち驚き懼れて従り以下、魔怖畏して隠れ捨て去らんと欲することを明す。第三に即ち空中に…を聞くに従り以下、空中に聲を出して與へよと勸む。第四に魔女を奉ることを明す。魔畏るるを以ての故に俛仰して與へたりといふ是なり。以て我に與ふ可し。我の如きは應に受くべし。とは、言ふところは、持世は是れ出家の菩薩なり。故に受くるに宜しからず。淨名は白衣なり。故に受くるに應ふなり。次の三重は見つ可し。

經典

即チ語テ魔ニ言ク。是ノ諸ノ女等可シニ以テ與ラロ我ニ。如キハ我ノ應ニ受ク。

魔即チ驚キ懼レテ念ヘラク。維摩詰將ニ無カランカト惱スコトレ我ヲ。欲スレドモニ隱シテ形ヲ去ント一而モ不レ能ハレ隱ルルコト。盡セドモニ其ノ神力ヲ一亦不レ得レ去ルコトヲ。

即チ聞クニ空中ノ聲ヲ一曰ク。波旬。以テ女ヲ與ヘバ之ニ乃チ可シト得レ去ルコトヲ。魔以テノ畏ルル故ニ俛仰シテ而與ヘタリ。

經典訓讀文

即ち魔に語りて言はく。是の諸の女等以て我に與ふ可し。我の如きは應に受くべしと。

菩薩章 魔即ち驚き懼れて念へらく。維摩詰將に我を惱すこと無からんかと。形を隠して去らんと欲すれども而も隠ること能はず。其

の神力を盡せども亦去ることを得ず。
 即ち空中の聲を聞くに曰はく。波旬、女を以て之に與へば乃ち去ることを得可しと。
 魔畏るるを以ての故に俛仰して與へたり。

經典現代語譯

「そして維摩居士は惡魔波旬に向つて言ひました。『その諸々の天女たちを私に譲つて下さい。私は世俗の者ですから、天女たちを譲り受けるのに相應しいですよ』と。」

「それを聞いて惡魔波旬は驚き恐れ、維摩居士は自分を苦しめ悩ますのではあるまいかと思ひ、姿を隠してその場から立ち去らうとしたが、どうしても立ち去ることができなかつた。波旬の不可思議な力をふりしぼつて立ち去らうとしたが、やはり立ち去ることができなかつた。その時空中のどこからともなく聲が發せられ、その聲の曰はく。「波旬よ、女たちを維摩居士に譲り渡しなさい。さうすれば立ち去ることができる」と。

惡魔波旬は維摩居士の神力を恐れるが故に、維摩居士の前にひれ伏し、仰いで天女たちを譲り渡した。

〔顯徳序 持世菩薩・天女の爲に法を説くの科段分け〕（現代語譯）

病氣見舞ひを辭退する理由を釋き明す中の第四に、爾の時に維摩詰から以下は、天女たちの爲に佛法を説きます。その中について亦、二つの項目があります。

第一に、天女たちの爲に正しく佛法を説きます。

第二に、是に於て波旬から以下は、惡魔波旬は維摩居士の説法が終るのを見て、天上の宮殿へ一緒に歸らうと天女たちに言ひます。

（訓讀文）

爾の時に維摩詰從り以下、第四に天女の爲に法を説く。中に就きて亦二有り。

第一に正しく爲に法を説く。
第二に是に於て波旬従り以下、魔は説法の竟るを見て、女等に告げて共に天宮に還らんとす。

〔顯徳序 持世菩薩・天女の爲に正しく法を説くの科段分け〕（現代語譯）

天女たちの爲に正しく佛法を説く中について亦、二つの項目があります。

第一に、維摩居士は、正しく佛法を説きます。

第二に、汝等已に道意を發せばから以下は、維摩居士は、再び天女たちの爲に法樂（佛法の教へを信受する喜び）を説き、それによつて天女たちに五欲の樂（眼・耳・鼻・舌・身の五官による悅樂）を捨てさせます。

（訓讀文）

第一の正しく爲に法を説く中に就きて、亦二有り。

第一に正しく法を説く。

第二に汝等已に道意を發せば従り以下、復爲に法樂を説きて以て其の五欲の樂に代ふるなり。

〔顯徳序 持世菩薩・正しく法を説く〕（現代語譯）

天女たちの爲に正しく佛法を説く中の第一の、正しく佛法を説く中について亦、三つの項目があります。

第一に、維摩居士は、惡魔波旬が天女たちを自分に譲り渡したことを告げます。

第二に、今や汝から以下は、天女たちに、佛道に入つてさとりを求め、衆生を濟度しようとする願ふ心を起しなさいと勧めます。

第三に、即ち所應に隨つてから以下は、天女たちそれぞれの素質・能力に適應して佛法を説くのであります。

（訓讀文）

第一の正しく法を説く中に就きて、亦三有り。

第一に己に屬すと知らしむ。
第二に今や汝従り以下、發心を勸む。
第三に即ち所應に隨つて従り以下、各宜しき所に從つて爲に説くなり。

經典（正しく法を説く）

爾ノ時ニ維摩詰。語テニ諸ノ女ニ一言ク。魔ハ以テニ汝等ヲ一與フレ我ニ。

今ヤ汝。皆當ニ發ス阿耨多羅三藐三菩提心ヲ一。

即チ隨テニ所應ニ一。而爲ニ説キレ法ヲ。令ムレ發サニ道意ヲ一。

經典訓讀文

爾そのときに維ゆい摩ま詰けつ、諸もろの女をんなに語かたりて言いはく。魔まは汝等なんぢらを以もつて我われに與あたふ。

今いまや汝なんぢ、皆みな當まさに阿耨多羅三藐三菩提心あのたたらさんみくさんぼだいしんを發おこすべしと。

即すなはち所應しょうおうに隨したがつて爲ために法ほうを説とき、道意どういを發おこさしむ。

經典現代語譯

「その時に維摩居士は、諸々の天女たちに向つて言ひました。『惡魔波旬は、貴女たちを私に譲り渡したよ。』」

『今や我が従者であるから、貴女たちは皆、佛道に入つてさとりを求め、衆生を教化濟度しようと呼ぶ心を發しなさい。』と。』

そして維摩居士は、天女たち夫々の素質・能力に適應して佛法を説き、天女たちに佛道のさとりを求める心を發さしめた。

〔顯徳序 持世菩薩・法樂を説きて五欲の樂に代ふの科段分け〕（現代語譯）

天女たちの爲に正しく佛法を説く中の第二の、復言はく。汝等から以下は、維摩居士は、再び天女たちの爲に法樂（佛法の教へを信受する喜び）を説きます。そもそも女の人たちは生れつき五欲の樂（眼・耳・鼻・舌・身の五官による悅樂）を楽しむことを好ましく思

つてゐます。若し法樂を説明し、それによつて法樂が五欲の樂にまさつてゐることを教へなければ、恐らくは女の人たちは五欲の樂を忘れることができないのでありませう。それ故に、此の法樂を説明し、それによつて天女たちに五欲の樂を捨てさせるのであります。

この中について亦、四つの項目があります。

第一に、維摩居士は、法樂を説示し、これを以て楽しみなさいと勧めます。

第二に、天女たちは、法樂とは如何なるものかを質問します。天女即ち問ふ。何をか法樂と謂ふとの經典がこれであります。

第三に、答へて言はく。常に佛を信するを樂しみから以下は、數多くの法樂を列擧します。

第四に、結びの文言であります。是を菩薩の法樂と爲すの經典がこれであります。

(訓讀文)

復言はく。汝等従り以下、第二に復爲に法樂を説く。夫れ女人の性は樂しむを以て美しと爲す。若し法樂を明して以て其の五欲の樂に代へざれば、恐らくは其の五欲の樂を忘れ難からん。所以に此の法樂を明して以て其の五欲の樂に代ふるなり。中に就きて亦四有り。

第一に淨名法樂を開きて用ふべしと勸む。

第二に天女等法樂の相を問ふ。天女即ち問ふ。何をか法樂と謂ふ是なり。

第三に答へて言はく。常に佛を信するを樂しみ従り以下、廣く法樂を列す。

第四に結す。是を菩薩の法樂と爲すいふ是なり。

〔顯徳序 持世菩薩・法樂を用ふべしと勸む〕

(この箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

經典（法樂を用ふべしと勸む）

復言ク。汝等已ニ發セバニ道意ヲ一。

有リニ法樂ノ可キニ以テ自ラ娛ム一。

不ルニ應ニニ復樂ムニ五欲ノ樂ヲ一也。

經典訓讀文

復言はく。汝等已に道意を發せば、

法樂の以て自ら娛しむ可き有り。

應に復五欲の樂を樂しむべからざるなり。

經典現代語譯

「維摩居士は再び説法して言ひました。『貴女たちは佛道を志したのであるから、法樂（佛法の教へを信受する喜び）を以て自らが樂しむべきである。再び五欲の樂（五官による悅樂）を樂しむことがあつてはならない。』」

〔顯徳序 持世菩薩・天女等法樂の相を問ふ〕

（この箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。）

經典（天女等法樂の相を問ふ）

天女即チ問フ。何ヲカ謂フトニ法樂ト一。

經典訓讀文

天女即ち問ふ。何をか法樂と謂ふと。

經典現代語譯

「そこで天女は質問して言ひました。 // 法樂とは如何なるものを言ふのでせうか。 // と」

〔顯徳序 持世菩薩・廣く法樂を列すの科段分け〕(現代語譯)

維摩居士が法樂(佛法の教へを信受する喜び)を説いて、五欲の樂(眼・耳・鼻・舌・身の五官による悅樂)を捨てさせる中の第三の、數多くの法樂を列舉する中について亦、四つの項目に分けます。

第一に、佛・法・僧の三寶について法樂を説明します。

第二に、五欲を離るるを樂しみから以下は、惡行を厭ひ捨て去る教へについて法樂を説明します。

第三に、道意を隨護するを樂しみから以下は、善行を修める教へについて法樂を説明します。

第四に、衆魔を降伏するを樂しみから以下は、善行を修めることと惡行を厭ひ捨て去ることとが、いりまじつてゐる教へについて法樂を説明します。

羅網の意で、「しげし」の訓みは無い。(諸橋)「つらなる」花山も同じ。

(訓讀文)

第三の廣く法樂を列する中に就きて亦開きて四と爲す。

第一に三寶に就きて法樂を明す。

第二に五欲を離るるを樂しみ従り以下、惡を厭離する門に就きて法樂を明す。

第三に道意を隨護するを樂しみ従り以下、善を修する門に就きて法樂を明す。

(昭和會本 護の字漏れ)

第四に衆魔を降伏するを樂しみ従り以下、善惡雜門に就きて法樂を明す。

(昭和會本 降の字漏れ)

〔顯徳序 持世菩薩・三寶に就きて法樂を明す〕（現代語譯）

（數多くの法樂を列擧する中の第一に、佛・法・僧の三寶について法樂を説明します。）

そもそも此の世の中の徳行の種類は極めて數多くありますが、徳行とは要するに、惡行を捨て去つて善行を修めることにあります。惡行を捨て去り善行を修める本となるのは、佛・法・僧の三寶に歸依することであり、さういふ理由で先づ第一に、三寶に歸依する法樂（佛法の教へを信受する喜び）について説明します。

（訓讀文）

（第一の三寶についての御解説）

夫れ天下の事品は羅ると雖も、要は惡を離れて善を取るに在り。惡を離れ善を修するは、必ず三寶を以て本と爲す。所以に第一に先づ三寶に就きて明すことを爲すなり。

經典（三寶に就きて法樂を明す）

答テ言ク。樂シミ常ニ信ズルヲ。佛ヲ。樂シミ欲スルヲ。聽ント。法ヲ。樂シム供ニ養スルヲ衆ヲ。

經典訓讀文

答へて言はく。常に佛を信ずるを樂しみ、法を聽かんと欲するを樂しみ、衆を供養するを樂しむ。

經典現代語譯

「維摩居士は、天女の質問に答へて言ひました。『法樂とは、佛陀釋尊に歸依することを喜びとし、佛陀所説の教へを聽くことを喜びとし、佛陀に歸依しその教へを實踐し廣めてゐる僧たちに奉仕することを喜びとするのである。』」

〔研究〕

○三寶歸依に關する太子のお考へについて

太子は佛・法・僧の三寶歸依について、この箇所「惡を離れ善を修するは、必ず三寶を以て本と爲す」と仰せられてをりますが、このお考へは憲法拾七條にも表現されてをります。即ち太子は憲法拾七條に於て、「和を以て貴しと爲し」の第一條に引きつづき、第二條に三寶歸依を擧げてをられます。『義疏』と第二條との表現は異なりますが、實生活の大道の實踐は三寶歸依を本とされる。太子の一貫したお考へが示されてゐると思ひます。

二に曰く、篤く三寶を敬へ。三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸萬國の極宗なり。何れの世、何れの人か、是の法を貴ばざる。人尤惡しきもの鮮し。能く教ふれば之に従ふ。其れ三寶に歸せずんば、何を以てか枉れるを直さむ。此の憲法第二條について、黒上正一郎先生は次のやうに述べてをられます。

『太子がその一代の政治に於いて常に制度政策の外形よりも之を統御すべき國民的信念の實現にその根底を置かせ給ひし御心は、内治外交と表裏して三寶興隆に盡させたまひ、常に教育教化を以て國家人民を護らんとし給うたのである。憲法第二條に「篤く三寶を敬へ」と仰せられたるは太子に於いては決して單なる外來宗教に對する歸依をすすめ給ひしものではない。それは「四生の終歸萬國の極宗」即ち中外に悖るなき眞實の信念に依つて個我迷執の弊を正し、之を以て和合協力の實生活を開道して、上、皇室に仕へ、下、國民を養育すべきところの大道を實現せしめんがためである。これ即ち憲法第一條と第二條、また第三條（詔を承りては必ず謹め。…）との關連するところの内容である。太子はここに第二條に「人尤惡しきもの鮮し。能く教ふれば之に従ふ」と仰せられ、我が國民の靈性を信ぜさせ給ひて、これが内的救済の念願を貫かせ給うたのである。一代の堂塔建立、又宮中講經の如きは、この御精神と離れて之を理解しまつるべきではない。』（前掲書 二七頁）

なほ佛・法・僧の三寶に關する黒上先生の御解説は次の通りです。

『此に歸依の對象たる「佛」も、單なる宗教的偉聖として信仰されるのではなく、衆生の共に歸趨すべき常住法身の體現人格なるを以て、一切を養育する化父として歸敬されるのである。「法」も亦此の佛陀の所説なるが故に、法身を顯示して衆生の靈性を長養する所の尊貴の意義を有するのである。「僧」即ち和合、換言すれば宗教的團體生活も亦この佛に歸依し、

この法を體現して三世十方に悖るなき大道を實修する所に其の眞義があるのである。』(前掲書四一頁)

〔顯徳序 持世菩薩・惡を厭離する門に就きて法樂を明す〕(現代語譯)

數多くの法樂を列擧する中の第二に、惡行を厭ひ捨て去る教へについて法樂を説明します。此の惡行を捨て去る教へは、もつぱら自行(さとりを求めて自らが修行する)であります。

(訓讀文)

第二に惡を厭ふ。純らはれ自行なり。

經典(惡を厭離する門に就きて法樂を明す)

樂シミ離ルルヲニ五欲ヲ一。樂シミ觀ズルヲニ五陰ハ如シトニ怨賊ノ一。樂シミ觀ズルヲニ四大ハ如シトニ毒蛇ノ一。樂シム觀ズルヲニ内入ハ如シトニ空聚ノ一。

經典訓讀文

五欲を離るるを樂しみ、五陰は怨賊の如しと觀ずるを樂しみ。四大は毒蛇の如しと觀ずるを樂しみ、内入は空聚の如しと觀ずるを樂しむ。

經典現代語譯

「法樂とは、五欲(眼・耳・鼻・舌・身による悅樂)を捨て去ることを喜びとし、五陰(人間存在の五つの構成要素。色・受・想・行・識)はものを奪ふ怨賊の如きであると觀ずることを喜びとし、四大(物質を構成してゐる地・水・火・風・の四つの元素)は毒蛇の如きであると觀ずることを喜びとし、内入(眼・耳・鼻・舌・身・意の六根)は假に結合して身體を形成してゐるのであつて、實體のないむなしなものだと觀ずることを喜びとするのである。』

〔顯徳序 持世菩薩・善を修する門に就きて法樂を明す〕(現代語譯)

數多くの法樂を列擧する中の第三に、善行を修める教へについて法樂を説明します。その中には自行（さとりを求めて自らが修行する）と外化（他を教化濟度する）とがあります。經典を御覽なさい

〔訓讀文〕

第三の修繕の中に就きて自行と外化とを兼ねて明す。則ち見つ可し。

經典

樂シミ隨ニ護スルヲ道意ヲ一。樂シミ饒ニ益スルヲ衆生ヲ一。樂シミ敬ニ養スルヲ師ヲ一。樂シミ廣ク行ズルヲ施ヲ。樂シミ堅ク持スルヲ戒ヲ。樂シミ忍辱柔和ヲ。樂シミ勤メテ集ムルヲ善根ヲ一。樂シミ禪定ニシテ不ルヲ亂レ。樂シミ離垢ノ明慧ヲ。樂シム廣ムルヲ菩提心ヲ一。

經典訓讀文

道意を隨護するを樂しみ、衆生を饒益するを樂しみ、師を敬養するを樂しみ、廣く施を行ずるを樂しみ、堅く戒を持するを樂しみ、忍辱柔和を樂しみ。勤めて善根を集むるを樂しみ、禪定にして亂れざるを樂しみ。離垢の明慧を樂しみ、菩提心を廣むるを樂しむ。

經典現代語譯

「法樂とは、佛道のさとりを求める心を護つて勤めることを喜びとし、衆生に利益を與へることを喜びとし、師を敬ひ師に奉仕することを喜びとし、廣く布施を行ずることを喜びとし、堅く戒律を守ることが喜びとし、苦難を耐へ忍び温順で怒らないことを喜びとし、善行に勵み勤めることを喜びとし、瞑想して心を平靜に保ち亂さないことを喜びとし、けがれないすぐれた智慧を喜びとし、菩提心（さとりを求め衆生を教化濟度しようとする願ふ心）を廣めることを喜びとするのである。」

〔顯徳序 持世菩薩・善惡雜門に就きて法樂を明す〕（現代語譯）

數多くの法樂を列擧する中の第四に、善行を修めることと惡行を厭ひ捨て去ることが、いりまじつてゐる教へについて法樂を

説明します。この中には亦、自行と外化とがあります。

(訓讀文)

第四の雜門の中に亦兼ねて自行と外化とを明す。

經典 (善惡雜門に就きて法樂を明す)

樂シミ降^レ伏スルヲ衆魔ヲ一。樂シミ斷スルヲニ諸ノ煩惱ヲ一。樂シミ淨ムルヲニ佛國土ヲ一。樂シミ成^レ就スルガ相好ヲ一故ニ修ムルヲニ諸ノ功德ヲ一。
樂シミ莊^レ嚴スルヲ道場ヲ一。樂シミ聞^テ深法ヲ一不^レルヲ畏^レ。樂シミ三脱門ヲ不^レ樂マニ非時ヲ一。樂シミ近クヲニ同學ニ一。樂シミ於^テ非同
學ノ中ニ一心ニ無キヲニ悲礙一。樂シミ將^レ護スルヲ惡知識ヲ一。樂シミ親^レ近スルヲ善知識ニ一。樂シミ心ニ喜ブヲニ清淨ヲ一。樂シム修スルヲニ無量
ノ道品ノ之法ヲ一。

經典訓讀文

衆魔を降伏するを樂しみ、諸の煩惱を斷ずるを樂しみ、佛國土を淨むるを樂しみ、相好を成就するが故に諸の功德を修むるを
樂しみ。道場を莊嚴するを樂しみ、深法を聞いて畏れざるを樂しみ。三脱門を樂しみ非時を樂しまず、同學に近づくを樂しみ。非
同學の中に於て心に悲礙無きを樂しみ。惡知識を將護するを樂しみ、善知識に親近するを樂しみ、心に清淨を喜ぶを樂しみ、無
量の道品の法を修するを樂しむ。

經典現代語譯

「法樂とは、諸々の惡魔を降伏することを喜びとし、諸々の煩惱を斷ち切ることを喜びとし、佛陀に導かれるこの世の中を清淨
にすることを喜びとし、顔かたちを立派になして諸々の福德を修めることを喜びとし、さとりを開く道場を莊嚴にすることを喜び
とし、佛陀の深遠な教へを聞いて畏れずに信ずることを喜びとし、三脱門(一)(さとりに至る三つの道)を喜びとして二乗の究竟を
極めない果報を喜びとせず、佛道を求める同學の人に近づくことを喜びとし、己のさとりのみを求める二乗の人の中に於ても心に
修道のさまたげが無いことを喜びとし、佛の教へに従はず惡行におちてゐる人を導き護ることを喜びとし、佛陀の教へに従ふ高德

の人に親しみ近づくことを喜びとし、清淨な心をもつて他者の善行を讚嘆することを喜びとし、さとりに至るための無量の善行を修することを喜びとするのである。"」

(1) 三脱門 三解脱門。さとりの境地に至るための三つの解脱門。①空脱門は、一切の存在を實體のない空と観ずる。②無相解脱門は、一切の存在が空である故に、一切の差別の相が無いことを観ずる。③無願解脱門は、一切の差別の相が無い故に、願ひ求めるものは一切無いことを観ずる。

〔御語釋〕(現代語譯)

衆魔しゆまとは、煩惱魔ぼんのうま(身心を惱ます煩惱)と五陰魔ごおんま(種々の苦しみを生ずる色・受・想・行・識)と死魔しま(死)と他化自在天魔たけじざいてんま(人の善行を妨げる他化自在天の魔王)との四つの惡魔であります。深法じんぽうとは、自己のさとりを求めると共に衆生を教化濟度する大乘の教へであります。己のさとりのみを求めて衆生を教化濟度することは煩はしいと考へてゐる二乘にじゆう(聲聞乘・緣覺乘)の人たちは、大乘の教へに畏れたためらひますので、「深法を聞いて、畏れることなく(信ずる)」と言ふのであります。亦或る説では次のやうに云ひます。

—深法じんぽうとは、生滅變化を超越してゐる絶對の眞理である。凡夫が若しこれを聞いたならば畏れてしまつて信ずることはできない。それ故に「畏れることなく」と云ふのである、——と。三脱門さんだつもんとは、空解脱門くうげだつもん(一切の存在を實體のない空と観ずる)、無相解脱門むさうげだつもん(一切の存在が空である故に、一切の差別の相が無いと観ずる)、無願解脱門むがんげだつもん(願ひ求めるものは一切無いと観ずる)の三つの空を觀ずる教へであります。非時ひじとは、二乗の人たちが三脱門の究竟くきやうを極めず、中途の果をもつて満足してゐることです。同學どうがくとは、さとりを求め衆生を教化濟度しようとして願ふ心ねがひこころを發し、同じく佛陀のさとりを求める人たちであります。一説では次のやうに云ひます。—同學とは、自分は佛道を求める決意をしたと語る人たち、それを皆同學と言ふのである——と。非同學ひどうがくとは、二乗の人たちを言ひます。二乗の人たちは、大乘の菩薩が行ずる所を同じく行しようとはしないので、「同學に非ず」と云ふのであります。亦或る説では次のやうに云ひます。—佛道を求めてゐる自分の志と相違する者は皆、非同學である、——と。惡知識あくちしきとは、惡行も止むを得ないものだと認め

菩薩ぼさつを求めてゐる自分の志と相違する者は皆、非同學である、——と。惡知識とは、惡行も止むを得ないものだと認め、佛陀の教へに従はない者たちであります。善知識ぜんちしきとは、誤つた考へを改め慎んで佛陀の教へに従ふ者たちであります。心に

清淨を喜ぶとは、他者が善行を修して徳を成就することを讚嘆し、嫉妬の心を起さないのであります。

(訓讀文)

衆魔とは、四魔なり。深法とは、大乘の法なり。二乗は畏るるが故に畏ること莫しと言ふ。亦云はく。深法とは是れ無生の理なり。凡夫の若し聞かば畏れて信ぜず。故に畏れずと云ふと。三脱門とは、三空門なり。非時とは二乗の中途の果なり。同學とは、菩提心を發し同じ佛果を求むるの類なり。一に云はく。凡そ同學とは己が志の述ぶる所を謂ふと。非同學とは、二乗を謂ふ。大士の所行に同せざるが故に同學に非すと云ふ。亦云はく。凡そ我が志に違する者は皆是れ非同學なりと。惡知識とは、惡を忍して聖教に従はざる者なり。善知識とは、改め慎みて聖教に従ふ者なり。心に清淨を喜ぶとは、佗の善を隨喜して嫉妬せしめざるなり。

〔顯德序 持世菩薩・法樂を結す〕(現代語譯)

維摩居士が天女たちの爲に、法樂(佛法の教へを信受する喜び)を説いて五欲の樂(眼・耳・鼻・舌・身の五官による悅樂)を捨てさせる中の第四に、法樂についての結びの文言であります。是を菩薩の法樂と爲すといふ經典がこれであります。

(訓讀文)

是を菩薩の法樂と爲すは、第四に結す。

經典

是ヲ爲ストニ菩薩ノ法樂ト一。

經典訓讀文

是を菩薩の法樂と爲すと。

經典現代語譯

「以上列舉したのが大乘の菩薩の法樂といふものである。」と。

〔顯德序 持世菩薩・魔は天女に告げて共に天宮に還らんとすの科段分け〕（現代語譯）

維摩居士が天女たちの爲に佛法を説く中の第二に、是に於て波旬から以下は、惡魔波旬は維摩居士の説法が竟るのを見て、天上の宮殿へ一緒に歸らうと天女たちに言ひます。此の中について七つの項目があります。

第一に、惡魔波旬は、天上の宮殿へ一緒に歸らうと天女たちに言ひます。

第二に、諸の女の言はくから以下は、天女たちは波旬の誘ひを斷つて歸らうとしません。

第三に、魔言はく。居士から以下は、波旬は、天女たちを解き放して下さいと維摩居士に願ひします。

第四に、維摩詰の言はくから以下は、維摩居士は天女たちを解き放すことを許します。

第五に、是に於て諸の女、…に問ふから以下は、天女たちは天上の魔の宮殿に於ける修道のあり方を維摩居士に質問します。

第六に、維摩詰の言はくから以下は、維摩居士は天女たちの爲に、天上の魔宮に於ける修道のあり方を説き聞かせます。

第七に、爾の時に天女から以下は、天女たちは維摩居士に敬意を表し、惡魔波旬に隨つて天上の魔宮に歸ります。

（訓讀文）

是に於て波旬從り以下、説法の中の第二に魔は説法の竟るを見て、天女に告げて天宮に還らんとす。中に就きて七重有り。

第一に魔は女等に告げて天宮に還らんと欲す。

第二に諸の女の言はく從り以下、天女は辭して還らんと欲せず。

第三に魔言く。居士從り以下、魔は放たんことを淨名に求む。

第四に維摩詰の言はく從り以下、淨名放つことを許す。

第五に是に於て諸の女、…に問ふ從り以下、天女は天宮に住するの法を請問す。

第六に維摩詰の言はく従り以下、爲に天宮に住するの法を説く。
第七に爾の時に天女従り以下、天女は敬を致して魔に随つて天宮に還る。

〔顯徳序 持世菩薩・魔は天女に告げて天宮に還らんと欲す〕（現代語譯）

（惡魔波旬は維摩居士の説法が終るのを見て、天上の魔宮へ一緒に歸らうと天女たちに告げる中の第一に、波旬が天上の宮殿へ一緒に歸らうと天女たちに言ひます。）

我汝と俱に天宮に還らんと欲すとは、上述に於て天女たちを維摩居士に譲り渡したのは、どこからともない空中からの聲を聞き、維摩居士の神力を畏れて譲り渡したにすぎません。波旬の本心は譲り渡す考へなど無かつたのです。それ故に波旬は本心に立返つて天女たちに、「一緒に天上の魔宮へ歸らう」と誘ふのであります。

（訓讀文）

我汝と俱に天宮に還らんと欲すとは、上に與へしは、空中の聲を聞き畏れて與へしのみ。其の心に非ず。故に還らんと欲すと求むるなり。

經典（魔は天女に告げて天宮に還らんと欲す）

於テレ 是ニ波旬。告ゲテニ 諸ノ女ニ一 言ク。我欲ストニ 與レ 汝俱ニ還ントニ 天宮ニ一。

經典訓讀文

是に於て波旬、諸の女に告げて言はく。我汝と俱に天宮に還らんと欲すと。

經典現代語譯

「惡魔波旬は維摩居士の説法が終るのを見て、天女たちに向つて言ひました。『私はお前たちと一緒に天上の魔宮へ歸りたい。』」

〔顯徳序 持世菩薩・天女は辭して還らんと欲せず 魔は天女を放たんことを淨名に求む〕(現代語譯)

(惡魔波旬が天上の魔宮へ一緒に歸らうと天女たちに告げる中の第二は、天女たちは波旬の誘ひを斷つて歸らうとしません。第三は、天女たちが歸らうとしないので、波旬は、天女たちを解き放して下さいと維摩居士にお願ひします。)
右の第二と第三とは、經典を御覽なさい。

(訓讀文)

第二、第三は見つ可し

經典 (天女は辭して還らんと欲せず)

諸ノ女ノ言ク。以テニ我等ヲ一與フニ此ノ居士ニ。有リテニ法樂一我等甚ダ樂シ。不ルニ復樂マニ五欲ノ樂ヲ一也ト。

經典訓讀文

諸の女の言はく。我等を以て此の居士に與ふ。法樂有りて我等甚だ樂し。復五欲の樂を樂しまざるなりと。
經典現代語譯

「天女たちは言ひました。『あなたは私たちを維摩居士さんに譲り渡したではありませんか。私たちは法樂の教へを聞いて甚だ楽しいのです。再び魔宮に歸つて五欲の樂を樂しまうとは思ひません。』と。」

經典

魔ノ言ク。居士可シレ捨ツニ此ノ女ヲ一。一切ノ所有施スニ於彼ニ一者。是ヲ爲ストニ菩薩ト一。

經典訓讀文

菩薩章
魔の言はく。居士此の女を捨つ可し。一切の所有彼に施す者、是を菩薩と爲すと。

「惡魔波旬は言ひました。『維摩居士さん、天女たちを解き放して私に返して下さい。大乘の菩薩は、自己の所有してゐる一切のものを他に施すといふのではありませんか。』と。

〔顯徳序 持世菩薩・淨名は天女を放つことを許す〕（現代語譯）

「惡魔波旬が天上の魔宮へ一緒に歸らうと天女たちに告げる中の第四に、維摩居士は天女たちを解き放すことを許します。

我已に捨てぬ。汝便ち將ひて去れとは、維摩居士が天女たちを譲り受けたのは、本來天女たちに佛法を説く爲であります。既に天女たちに佛法を説きをはりました。維摩居士のもとに天女たちを引き留めておく必要はないのであります。一切の衆生をして法の願ひ具足するを得しむべしとは、大乘の菩薩は恆に衆生の求め願ふところに基づいて、衆生を救ひとらうといふ心を發します。それ故に維摩居士は、「波旬よ、お前の願ひのとほり天女たちを返してやつたのであるから、お前も一切の衆生に對して、佛法を求め願ふ心を満ち足らしめなさい。」と云ふのであります。維摩居士は、波旬の天女たちを返して貰ひたいと願ふ心に基づき、天女たちを返して波旬の願ひを満ち足らしめた、それが菩薩の心であります。

（訓讀文）

第四に淨名捨つるを許す。

我已に捨てぬ。汝便ち將ひて去れとは、本説法の爲の故に受く。法を説くこと既に竟りぬ。惜む可きこと無きなり。一切の衆生をして法の願ひ具足するを得しむべしとは、大士は恆に事に因りて願を發す。故に一切の衆生をして、法の願ひ具足するを得しむべしと云ふ。魔は女を得て願ふ心満つるが如きなり。

經典

菩薩章 維摩詰ノ言ク。我已ニ捨テヌ矣。汝便チ將ヒテ去レ。令ベシトニ一切ノ衆生ヲシテ得ニ法ノ願ヒ具足スルヲ。

經典訓讀文

維摩詰の言はく。我已に捨てぬ。汝便ち將ひて去れ。一切の衆生をして法の願ひ具足するを得しむべしと。

經典現代語譯

「維摩居士は言ひました。『私はとづくに天女たちを解き放してゐるよ。はやく連れて歸りなさい。お前も一切の衆生に對して、佛法を求め願ふ心を満ち足らしめなさい。』と。」

〔顯徳序 持世菩薩・天女は天宮に住するの法を請問す〕（現代語譯）

惡魔波旬が天上の魔宮へ一緒に歸らうと天女たちに告げる中の第五に、天女たちは天上の魔の宮殿に於ける修道のあり方を維摩居士に質問します。

我等云何んが魔宮に止まるべきとは、天女たちは以前は惡魔波旬の同類でありましたが、維摩居士の説法を聞いた現在は、菩薩の道を修めようと發心してをります。正道を求むる者と邪惡な全く異なつた道を歩むのでありますから、天上の魔宮に波旬と一緒に住むには如何になすべきでせうか、と言ふのであります。

（訓讀文）

第五に天女は天宮に住するの法を問ふ。

我等云何んが魔宮に止まるべきとは、昔は魔の類爲りしも、今は菩薩と作れり。則ち邪と正と別有れば、那ぞ共に魔宮に住するを得んやと

經典

於レ是ニ諸ノ女。問フニ。維摩詰ニ。我等云何ンガ止ルベキトニ。魔宮ニ。

經典訓讀文

是に於て諸の女、維摩詰に問ふ。我等云何んが魔宮に止まるべきと。

經典現代語譯

「一緒に魔宮に歸りなさいとの言葉を聞いて天女たちは、維摩居士に質問しました。// 私たちは魔宮に住むに際していかなる修道を爲すべきでありませうか。と。」

〔顯徳序 持世菩薩・淨名は天宮に住するの法を説く〕(現代語譯)

惡魔波旬が天上の魔宮へ一緒に歸らうと天女たちに告げる中の第六に、維摩居士は天女たちの爲に、天上の魔宮に波旬と共に住むに際しての修道のあり方を説き聞かせます。その中について二つの項目があります。第一に、正しく無盡燈の教へを擧げ、これを學びなさいと勧めます。第二に、汝等魔宮に住すと雖もから以下は、無盡燈の教へを天上の魔宮に傳へひろめなさいと勧めます。

みな經典を御覽なさい。

(訓讀文)

第六に爲に共に魔に住する法を説く。中に就きて亦二有り。第一に正しく無盡燈の法門を擧げて學ぶことを勧む。第二に汝等魔宮に住すと雖も從り以下、流通を勧む。見つ可し。

經典(淨名は天宮に住するの法を説く)

維摩詰ノ言ク。諸姊。有リニ法門一名ツクニ無盡燈ト。汝等當ニ學フ。無盡燈トハ者。譬ヘバ如シニ一燈ヲ以テ然スガニ百千ノ燈ニ。冥キ者ノ皆明ナリ。明ハ終ニ不レ盡キ。如クレ是ノ諸姊。夫レ一リノ菩薩。開ニ導シテ百千ノ衆生ヲ。令ムレ發サニ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ。於テニ其ノ道意ニ亦不ニ滅盡セ。隨テニ所説ノ法ニ。而モ自ラ増ニ益ス一切ノ善法ヲ。是ラ名ツクルニ無盡燈ト也。

菩薩章
汝等雖モ住ストニ魔宮ニ。以テニ是ノ無盡燈ヲ。令ムレバニ無數ノ天子・天女ヲシテ發サニ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ者。爲ストニ報ジニ佛

恩ヲ一亦大ニ饒^ニ益スト一切衆生ヲ也。

經典訓讀文

維摩詰の言はく、諸姊、法門有り無盡燈と名づく。汝等當に學ぶべし。無盡燈とは、譬へば一燈をもつて百千の燈に然すが如し。冥き者皆明なり、明は終に盡きず。是の如く諸姊、夫れ一りの菩薩、百千の衆生を開道して、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ。其の道意に於て亦滅盡せず。所説の法に隨つて、而も自ら一切の善法を増益す。是を無盡燈と名づくるなり。

汝等魔宮に住すと雖も、是の無盡燈を以て、無數の天子・天女をして阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむれば、佛恩を報じ亦大いに一切衆生を饒益すと爲すと。

經典現代語譯

「天女たちの質問に答へて維摩居士は言ひました。『天女さんたちよ、無盡燈と名づけるすばらしい教へがあります。皆さんはこれを學ぶべきです。無盡燈とは、譬へば一つの燈火を以て次の燈火に火をともし、それを次から次へと傳へて行つて、百千萬の燈火に火をともしやうなものです。暗闇は盡く明るくなり、次から次へと火をともしますから明りが消えることはありません。天女さんたちよ、これと同じやうに一人の菩薩が百千萬の衆生を導いて無上絶對の菩提心を發させますが、菩薩の菩提心が盡きることはありません。百千萬の衆生は佛法を説くことによつて、一切の善法がますます自分の身に具つてくるのです。これを無盡燈と名づけるのであります。』」

「『皆さんは波旬と共に魔宮に住まうのであるが、この無盡燈の教へによつて魔宮の世界の無數の天子・天女たちを導き、無上絶對の菩提心を發さしむれば、それは佛陀釋尊の御恩に報いることであり、また一切の衆生に大いなる利益を與へることとなるのである。』と。」

〔顯德序 持世菩薩・天女は敬を致し魔に隨つて天宮に還る〕(現代語譯)

菩薩章 惡魔波旬が天上の魔宮へ一緒に歸らうと天女たちに告げる中の第七に、爾の時に天女から以下は、天女たちは維摩居士に敬意を

表し、悪魔波旬に随つて天上の宮殿に歸ることを説明してゐます。

(訓讀文)

爾そのとき時にてんによ天女よ従り以下いげ、第七だいしちにてんによ天女よは敬きやうを致いたし魔まに随したがつて天宮てんぐうに還かへることを明あかす。

經典 (天女は敬を致し魔に随つて天宮に還る)

爾そノとき時てんによニ天女よ。頭面ずめんヲモツテ禮れいシニ維摩詰いまくつノ足あしヲ一。随したがテ還かへルニ宮みやニ。忽然こつぜんトシテ不げんレ現げんゼ。

經典訓讀文

爾そのとき時にてんによ天女よ、頭面ずめんをもつて維摩詰いまくつの足あしを禮れいし、魔まに随したがつて宮みやに還かへる。忽然こつぜんとして現げんぜず。

經典現代語譯

「維摩居士が無盡燈の教へを解き終つた時、天女たちは維摩居士の足に額を接して禮拜し、悪魔波旬に随つて天上の宮殿へ歸りました。その姿は忽然として消え去りました。」

〔顯徳序 持世菩薩・堪へざるを結す〕(現代語譯)

持世菩薩が維摩居士の病氣を見舞ふ力量がありませんと辭退する中の第三は、見舞ふ任に堪へないことの結びの文言であり、世尊せそんから以下がこれであります。

(訓讀文)

世尊せそん従り以下いげ、辭じの中なかの第三だいさんに堪たへざるを結けつす。

經典 (堪へざるを結す)

菩薩章
世尊。維摩詰ニ有リニ如キノ、是ノ自在ノ神力・智慧・辯才。故ニ我不レ任ヘニ詣テ、彼ニ問フニ疾ヲ。

經典訓讀文

世尊、維摩詰に是の如きの自在の神力・智慧・辯才有り。故に我彼に詣て疾を問ふに任へず。
經典現代語譯

「世尊よ、維摩居士には以上のやうに自由自在にはたらく不可思議な力・智慧・巧みな辯舌があります。以上の次第でありますから、持世は維摩居士のもとへ行つて病氣を見舞ふ、その任を果す力量はありません。」

〔顯徳序 善得菩薩に命ず〕（現代語譯）

四人の菩薩たちに維摩居士の病氣見舞ひに行くやう命ずる中の第四に、善得菩薩に命じます。この中について亦、第一に釋迦如來が命じ、第二に見舞ふ力量がありませんと辭退する、二つの項目があります。

（訓讀文）

第四に善得菩薩に命ず。中に就きて亦命ずと辭すと有り。

經典（善得菩薩に命ず）

佛告ツニ長者子善得ニ。汝行ニ詣シテ維摩詰ニ一問ヘト。疾ヲ。

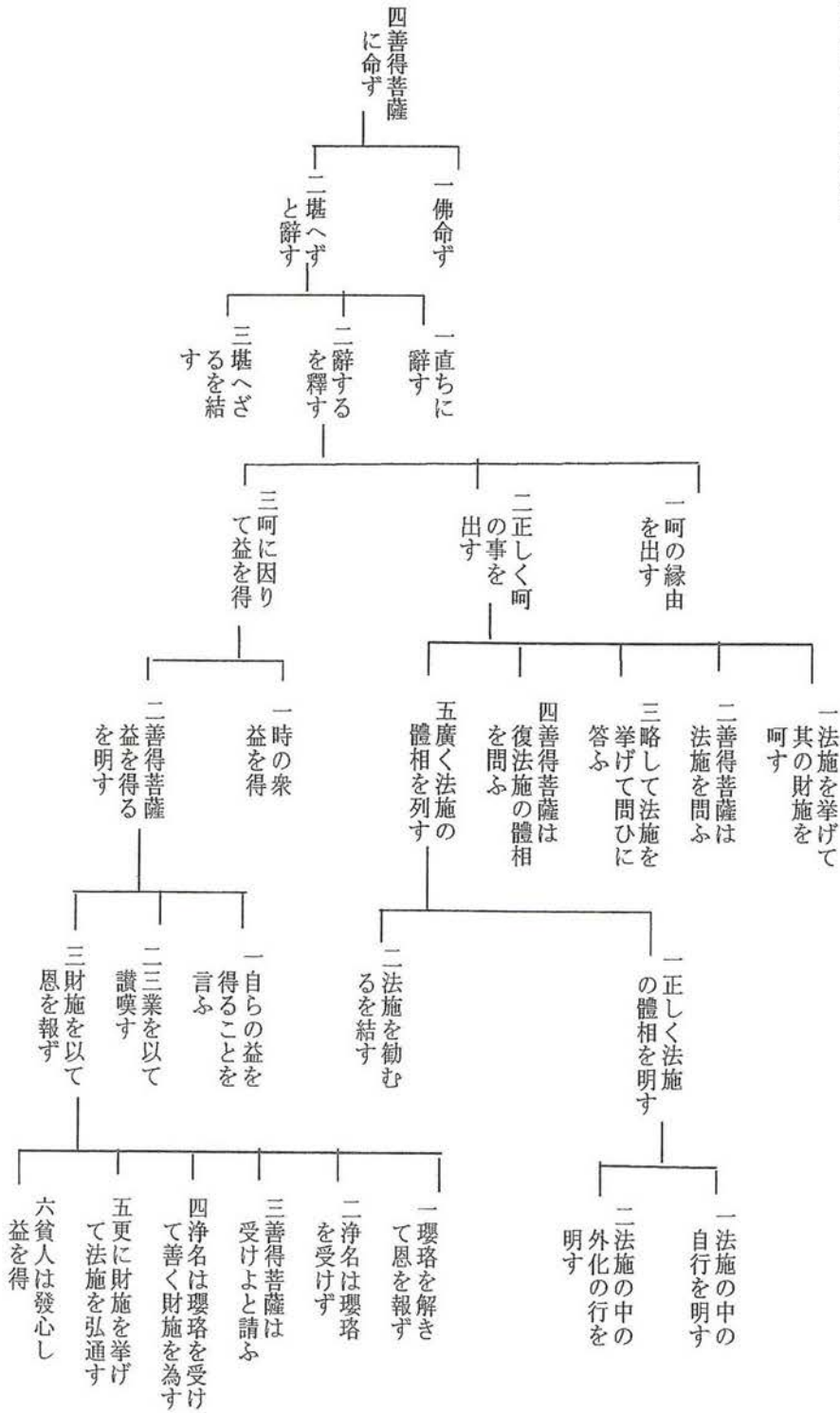
經典訓讀文

佛長者子善得に告ぐ。汝維摩詰に行詣して疾を問へと

經典現代語譯

佛陀釋尊は善得菩薩に申しつけられた。「汝は維摩居士のところへ行つて病氣を見舞ひなさい」と。

〔顯徳序 善得菩薩・堪へずと辭すの科段分け〕（現代語譯）



善得菩薩に命ずる中の第二に、見舞ふ力量がありませんと辞退します。その中の三つの項目は亦、前述の持世菩薩の辞退と同様であります。

(第一に、善得菩薩は直ちに辞退します。)

(第二に、辞退する理由を釋き明します。)

(第三に、見舞ふ任に堪へないことの結びの文言であります。)

(訓讀文)

辭する中の三重は亦前の如し。

〔顯徳序 善得菩薩・直ちに辭す〕

(この箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

經典(直ちに辭す)

善得。白シテレ佛ニ言ク。世尊。我不堪ニ任セ詣テレ彼ニ問フニ疾ヲ。

經典訓讀文

善得。佛に白して言はく。世尊、我彼に詣りて疾を問ふに堪任せず。

經典現代語譯

善得菩薩は佛陀に申しあげて言つた。「世尊よ、私は維摩居士のもとへ行つて病氣を見舞ふ、その任を果す力量はありません。」

〔顯徳序 善得菩薩・辭するを釋すの科段分け〕(現代語譯)

維摩居士の病氣を見舞ふ力量がありませんと辞退する中の第二の、辞退する理由を釋き明す中について亦、三つの項目がありま

す。

第一に、維摩居士から叱責された由來を述べます。

第二に、時に維摩詰から以下は、維摩居士から正しく叱責された事を述べます。

第三に、世尊、是の法を説く時から以下は、維摩居士の叱責の説法に因つて、その場に居合せた人々や善得菩薩が利益を得ることを述べます。

(訓讀文)

第二の辭する中に就きて亦三有り。

第一に呵を致すの由を出す。

第二に時に維摩詰従り以下、正しく呵の事を出す。

第三に世尊、是の法を説く時従り以下、呵に因りて益を得。

〔顯徳序 善得菩薩・呵の縁由を出す〕(現代語譯)

(維摩居士の病氣見舞ひを辭退する理由を釋き明す中の第一に、維摩居士から叱責された由來を述べます。)

善得菩薩が何故に維摩居士から叱責されたかと申しますと、此の善得菩薩は布施行を修めようと決意し、三年間に亘つて財物を集め、それを七日間に亘つて人々に大いに施し與へました。

維摩居士が、その善得菩薩の財施(財物を施す布施行)を叱責するのは、四つの趣意があります。第一には、財施は、どんなに財物が多いからと言つても、いづれは盡きて無くなりません。第二には、財施は人々の精神を豊かにすることはできません。第三には、最初の頃には上等な品物を施して貰ひますが、最後の頃には粗末な品物しか施して貰へません。第四には、布施を行ずる時に於ても、先に施しを受ける者、後に施しを受ける者があり、人々に對して一時に等しく與へることは出来ません。

右の趣意がありますので、維摩居士は法施(佛法を説き聞かせる布施行)を擧げて、善得菩薩の財施を叱責するのであります。然し

ながら、菩薩は衆生の根機に随つて、衆生を悉く教化濟度すると言ひますから、善得菩薩の財施も衆生を濟度しない筈はありません。且つ布施行は六度（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧のさとりに到る六つの修行）の初めに修すべき行であり、亦布施行は四攝法（布施・愛語・利行・同事の衆生を導くための四つの徳）の中の一つでもあります。それにも拘らず善得菩薩の財施を叱責する本意は何かと申しますと、財施は止めてしまいなさいと言ふのではなく但善得菩薩が自分の財施を最高至極の布施行だと思ひこんでゐますので、維摩居士はその至極だとするのを叱責するのであります。

そもそも善得菩薩の財施を叱責しようと思ふならば、財施の終るのを待たないで、早めに叱責すべきであります。それなのに七日間に亘る財施の満了の時、まさに維摩居士がやつて来て、財施を叱責する理由は何かと申しますと、財施は布施行として法施の優れてゐることに及ばないといふものの、佛道修行の道理として先づ財施を修行しをはり、而る後法施に進まねばなりません。若し七日間に亘る財施が満了しない中に叱責したとすれば、善得菩薩は財施を修行しをはるといふ順序を踏まないことになり、善得菩薩が志してゐる佛道修行は成就しないことになります。それ故に七日間に亘る財施の満了の時、まさに維摩居士はやつて来て、善得菩薩の財施について叱責するのであります。

(訓讀文)

然るに呵を被る所以は、此の善得意を立てて、三年財を集めて、七日に大いに施せり。淨名の呵するは、即ち四の意有り。

一には財施は多しと雖も猶窮竭有り。

二には財は神を益せず。

三には前に來るは精を得るも、後に來るは麤を得

四には施す時に當りても猶先後有り。一時に等しく與ふること能はず。

所以に今法施を擧げて己が財施を呵す。然るに既に菩薩は機に随ひて化を施すが故に、則ち爲さざる所無しと言ふ。且つ布施は是れ六度の初行にして、亦四攝に入れり。何の意をもつて呵を爲すやとならば、財施を絶ちて是れ爲す可

らずといふには非ず、但己が財施を極と爲すが故に、淨名此の呵を致すことを明すなり。
 其れ呵せんと欲せば、即ち應に早く呵すべし。既に七日に満ちて方に來り呵する所以は、財施は法施に如かずと雖も、
 亦理として修せざるには非ず。若し七日に満たざれば、則ち其の指す所次第無からん。所以に七日に満つるを須ちて方
 に來りて呵するなり。

經典（呵の緣由を出す）

所以ハ者何ン。憶念スルニ我昔。自ラ於テニ父ノ舍ニ。設ケテニ大施會ヲ。供ニ養スルコト一切ノ沙門・婆羅門。及ビ諸ノ外道・貧窮・下賤・
 孤獨・乞人ヲ。期滿テリニ七日ニ。

經典訓讀文

所以は何ん。憶念するに我昔、自ら父の舍に於て、大施會を設けて、一切の沙門・婆羅門。及び諸の外道・貧窮・下賤・孤獨・
 乞人を供養すること、期七日に満てり。

經典現代語譯

「見舞ひを辭退する理由は何故かと申しますと、憶ひ起しますに昔私は、自ら布施行を志し、父の家に於て財物を施す大きな催し
 を致しました。一切の佛門の僧・婆羅門教の僧及び諸々の佛道以外の教へを奉ずる人たち。貧しい人たち・下層階級の人たち・身
 寄りのない人たち・乞食を行ずる人たちに財物を與へて供養すること、その期間は七日を以て満了いたしました。」

〔參考〕

○ 先師 黒上正一郎先生は、この善得菩薩が呵を被る所以の太子『義疏』を引用されて次のやうに述べてをられますので、
 参考として記します。

『太子は之を開發すべき教育教化を論じて、

「人尤だ悪しきもの鮮し。能く教ふれば之に従ふ。それ三寶に歸せずんば、何を以てか枉れるを直さむ。」（憲法第二條）と仰せ給ひ、同胞哀愍の救済の念願と表裏してここに宗教教化と政治的施設の一切を御心に綜合しこれを國政の實際に示し給うたのである。全體協力の信を制度政策に表現すべき政治生活の理想は、この現世名利の追求を排し、永遠眞實の大道を念じて個我を全體に没し、國家生活のため献身し給ひたる偉大希有の御精神に依つてのみ實現せられたのである。勝曼經義疏の御文に衆生のため身命財の常捨を念じたまひ、大陸佛敎の個人超脱の理想を打破して、一切の外的效果を求め給はぬ御心を以て衆生教化に献身すべき内心の信を光闡し、此に生死解脱を現實に體驗したまひたる御思想の表現は、正しく之が實内容を示すのである。國民がこの御心を仰ぎまつるとき、内心の信は生死動亂の現生の痛苦と障礙とを打破し、ここにまことの協力生活は實現せられ、國家は永久の生を相續せらるべきである。ここに國家統治は生死解脱の問題の解決にその原理を窮むべく、又共同の信念と平等の感激が組織と秩序の根底となるべきを知らしめ給ふのである。太子が維摩經義疏（菩薩品）に維摩居士の善徳長者が財施を福德の行として修せるに對し、之を彈呵して法施をすすめし所以を釋し給ひ、

「然るに呵を被る所以は此の善徳の意を立つることは、三年財を集めて、七日大に施しき、淨名の呵には即ち四の意あり。一には財施は多しと雖も、尚窮竭あり。二には財は神を益せず。三には前に來れば精を得、後に來れば麤を得。四には施す時に當りても猶先後あり。一時に等しく與ふること能はず。故に今法施を擧げて己が財施を呵す。然れども既に菩薩は機に隨ひて施化するが故に、則ち爲さざるなしと言はん。且布施は、六度の初行にして、亦四攝に入れり。何の意ぞ、呵するとならば財施を施して是れ爲すべからずといふにはあらず、但己が財施を極と爲すが故に淨名が此の呵を致すことを明すなり。」

とある内容はまた以上の御精神を顯すものである。此に財施とは政治經濟的施設を又法施とは宗教教化を暗示するものと見まつるのである。太子は此に維摩が財施を彈呵せる所以を論じ給ひ、「然れども既に菩薩は機に隨ひて施化するが故に則ち爲さざることなしと言はん」と仰せ給ふのは、衆生教化は正に個性境遇を洞察し、之が實際的救護と内信開發と、補足關連し

て成就せらるべきを開示し給うたのである。而も之が彈呵の眞義を釋して、「財施を施して是れ爲すべからずといふにはあらず、但己が財施を極と爲すが故に淨名此の呵を致すことを明すなり」とのたまふ深甚微妙の御解は特に心を留めてよみまつべきである。この御心はまた「自行能はずんば安んぞ衆を齋ふことを得む」(維摩經義疏菩薩品)と示して、自ら教化的念願を其の行化の上に體現して範を國民に示させ給ひ、常にこの内的希求を相續して、統治の大業に盡させ給うたのである。内治外交と三寶興隆とが常に表裏せしめられしは全くこの御心に基づくのである。

太子は自ら全國民を包含する教化活動を念じたまひ、維摩經義疏(菩薩行品)に「下を慈み上を敬ふは天(下)の大義なり」とのたまひ、其の意義内容をしめすに「愚人の一徳は知者の師なり」「匹夫匹婦といへども一能豫に勝れり」といふ如き言葉を以てしたまひしは、無名下層の民のまことををさめたまひ、平等教化を希求したまひし廣大の御心を反映するのである。太子はこの大願を啻に當代のみならず、更に永遠の國民生活に及ぼしたまひ、國家生活の暇なき御生活に自ら三經義疏を撰述して大陸文化批判綜合の内的表現の裡に、この念願に基づく教化精神を永久の世にとどめ給うたのである。内憂外患の國家生活を荷ひて、この大業につくさせ給ひ、苦痛と動亂のうちに唯一の信を貫かしましたし御心に、太子は釋迦牟尼佛を憶念せさせ給うたのである。』(前掲書八七頁〜九〇頁)

〔顯徳序 善得菩薩・正しく呵の事を出すの科段分け〕(現代語譯)

維摩居士の病氣見舞ひを辭退する理由を釋き明す中の第二の、維摩居士から正しく叱責された事を述べる中について、五つの項目に分けます。

第一に、直ちに法施(佛法を説き聞かせる布施行)を擧げて、善得菩薩の財施(財物を施す布施行)を叱責します。

第二に、我言はく。居士から以下は、善得菩薩は法施とは如何なるものかと維摩居士に質問します。

第三に、法施の會とはから以下は、法施の具體的なありやうは省略して法施の概要を述べ、善得菩薩の質問に直ちに答へます。

第四に、善得菩薩は法施のありやうについて、また質問します。何の謂ぞやがこれであります。

第五に、謂はく。菩提を以てから以下は、數多くの法施を具體的に列擧します。

(訓讀文)

第二に正しく呵の事を出す中に就きて、開きて五重と爲す。

第一に直ちに法施を擧げ其の財施を呵す

第二に我言はく。居士從り以下、善得は法施を問ふ。

第三に法施の會とは從り以下、一往略して法施を擧げ、直ちに其の問ひに答ふ。

第四に善得は復法施の體相を問ふ。何の謂ぞやといふ是なり。

第五に謂はく。菩提を以て從り以下、廣く法施の體相を列す。

〔顯徳序 善得菩薩・法施を擧げ其の財施を呵す〕(現代語譯)

(維摩居士から正しく叱責されたことを述べる中の第一に、維摩居士は直ちに法施を擧げて、善得菩薩の財施を叱責します)。

夫れ大施會は汝が設くる所の如くすべからずとは、善得菩薩が三年間に亘つて財物を集め、それを七日間に亘つて人々に施したことは、布施行としては至極のものではないことを説明してゐます。此の句は、善得菩薩の財施を非難するのであります。當に法施の會を爲すべしとは、法施を行すれば、初めの段階では精神の自由をもたらし、迷ひの束縛から解き放たれ、最終的にははかり知れぬほど深くすぐれた佛陀のさとりに到達する、といふことを説明してゐます。此の句は、善得菩薩に法施を勧めるのであります。何ぞ是の財施の會を用ひること爲んとは、財施は布施行の至極ではないことの結びの文言であります。

(訓讀文)

夫れ大施會は汝が設くる所の如くすべからずとは、三年財を聚めて七日施を行すべからざることを明す。此の句は正しく其の財施を非とす。當に法施の會を爲すべしとは、法施は始めには神を資すけ解を益すこと有り、終りには微妙の極果を得ることを明す。此の句は法施を勧む。何ぞ是の財施の會を用ひること爲んとは、財施は爲すべからずと結する

なり。

經典（法施を擧げ其の財施を呵す）

時ニ維摩詰來ニ入シテ會中ニ。謂フレ我ニ言ク。長者子。夫レ大施會ハ不レ當ニレ。如クスニ汝ガ所ノロ設クル。當ニレ爲スニ法施之會ヲ。何ソ用ルコトヲニ是ノ財施ノ會ヲ一爲ント。

經典訓讀文

時に維摩詰會の中に入して、我に謂ひて言はく。長者子、夫れ大施會は當に汝が設くる所の如くすべからず。當に法施の會を爲すべし。何ぞ是の財施の會を用ひることを爲んと。

經典現代語譯

「人々に財物を施し終つた時、維摩居士がその場にやつて来て、私に言ひました。『善得菩薩さんよ、大きな布施の催しは、あなたが行つてゐることだけでは駄目ですよ。法施の催しを爲すべきです。財施の催しだけを用ひてはいけませんよ。』と。」

〔顯徳序 善得菩薩は法施を問ふ〕（現代語譯）

維摩居士から正しく叱責された事を述べる中の第二に、我言はく。居士、何をか法施の會と謂ふやとは、善得菩薩は法施とは如何なるものかと、維摩居士に質問します。

（訓讀文）

我言はく。居士、何をか法施の會と謂ふやとは、第二に善得法施を問ふ。

經典（善得は法施を問ふ）

我言ク。居士。何ヲカ謂フヤトニ法施之會ト一。

經典訓讀文

我言はく。居士、何をか法施の會と謂ふやと。

經典現代語譯

「私は質問して言ひました。 // 維摩居士さん、法施とは如何なることでありませうか。」と。

〔顯徳序 善得菩薩・略して法施を擧げて問ひに答ふ〕（現代語譯）

維摩居士から正しく叱責された事を述べる中の第三に、法施の會とはから以下は、法施の具體的なありやうは省略して法施の概要を述べ、善得菩薩の質問に直ちに答へます。

法施の會とは、前無く後無く、一時に一切の衆生を供養するとは、財施には四つの缺點（財物は盡きて無くなる。精神を豊かにできない。先の者は上等な物、後の者は粗末な物の施しをうける。一時に等しく與へることはできない。）がありますが、法施にはその缺點は無く、一言高らかに佛法の教へを唱へれば、衆生はみな同じく教へを聞いてその各々が利益を得、その教へは最終的には佛陀のさとりを得るについての資けとなる、といふことを説明してゐます。是を法施の會と名づくとは、法施についての結びの文言であります。

（訓讀文）

法施の會とは従り以下、第三に一往略して法施を擧げて直ちに其の問ひに答ふ。法施の會とは、前無く後無く。一時に一切の衆生を供養するとは、法施は財施に四劣の異有るには同じからず、一言をもつて宣唱するに有識同じく聞きて各各益を得て、遠く法身の慧命に資するを明す。是を法施の會と名づくとは、法施を結す。

經典（略して法施を擧げて問ひに答ふ）

法施ノ會トハ者。無ク、前無ク、後。一時ニ供ニ養スル一切衆生ヲ。是ヲ名ツクニ法施ノ會ト一。

經典訓讀文

法施の會とは、前無く後無く、一時に一切の衆生を供養する、是を法施の會と名づく。

經典現代語譯

「法施とは、一切の衆生は平等に、一時に、佛法の教へを説き聞かせて貰ひ佛陀のさとりに導かれる。これを法施を實踐する道場と名づけます。」

〔顯徳序 善得菩薩復法施の體相を問ふ〕（現代語譯）

維摩居士から正しく叱責された事を述べる中の第四に、何の謂ひぞやとは、善得菩薩は法施の具體的なありやうについて再び維摩居士に質問します。

上述に於て法施は布施行の中で最も勝れてゐて、一切の衆生に對して一時に、平等に利益を與へることができると聞きましたが、まだ法施の具體的なありやうは聞いてをりません。それ故に今、善得菩薩は法施の具體的なありやうについて再び質問するのであります。

或る經典研究家は次のやうに云ひます。―何の謂ひぞやと言ふのは、善得菩薩が質問したのではない。これは維摩居士が法施の具體的なありやうを數多く説明しようとして考へて、自らが「法施とは具體的には如何なることを言ふのか」と、問ひを發したのである、―と。

（訓讀文）

何の謂ひぞやとは、第四に善得復法施の體相を問ふ。

上に法施は最勝にして一時に同じく益すと聞くと雖も、而も未だ其の體相を聞かず。故に今復其の體相を問ふなり。或は云はく。此に何の謂ひぞやと言ふは、善得の語に非ず。此は是れ淨名將に廣く法施の相を明さんと欲するが故に、更に自ら問ひを立てて何の謂ひぞやといふなりと。

經典（善得は復法施の體相を問ふ）

曰ク何ノ謂ソヤ也。

經典訓讀文

何の謂ひぞや。

經典現代語譯

「法施とは具體的にはどのやうなことを言ふのでありませうか。」

〔顯徳序 善得菩薩・廣く法施の體相を列すの科段分け〕（現代語譯）

維摩居士から正しく叱責される事を述べる中の第五に、謂はく。菩提を以てから以下は、法施を數多く具體的に列舉して説明します。その中について二つの項目があります。

第一に、正しく法施を具體的に列舉して説明します。

第二に、是の如し、善男子から以下は、法施を修めなさいと勧める、その結びの文言であります。

（訓讀文）

謂はく。菩提を以て從り以下、第五に廣く法施の體相を明す。中に就きて即ち二有り。

第一に正しく法施の體相を明す。

第二に是の如し、善男子從り以下、法施を勧むるを結す。

〔顯徳序 善得菩薩・正しく法施の體相を明すの科段分け〕（現代語譯）

菩薩章
法施を數多く具體的に列舉して説明する中の第一に、正しく法施を具體的に列舉して説明しますが、その中には三十二句あります。これを二つの項目に分けます。

第一に、初めの十六句は、法施の中の自行（さとりを求めて自らが修行する）を説明してゐます。

第二に、身・命・財に於てから以下の十六句は、法施の中の外化の行（衆生を教化濟度する行）を説明してゐます。

（訓讀文）

第一に正しく法施の體相を明す中に就きて、即ち三十二句有り。分ちて二と爲す。

第一に初めの十六句は自行を明す。（昭和會本は十七句、十六句が正しい）

第二に身・命・財に於て従り以下、十六句は外化の行を明す。（昭和會本は十五句、十六句が正しい）

〔顯徳序 善得菩薩・法施の中の自行を明す〕（現代語譯）

（法施を具體的に列擧して説明する中の第一に、初めの十六句は自行を説明します。）

謂はく。菩提を以て慈心を起すとは、二種類の解釋があります。第一の解釋は、衆生として佛陀のさとりといふ果報を得さしめようと説き聞かせれば、教へを聞いた衆生は當然に他を慈しむ心を起す、と云ひます。第二の解釋は、先達が佛陀のさとりの樂しみを衆生に與へようとしてゐるのを若し見れば、その慈心與樂を説き聞かせて、衆生に他を慈しむ心を起させる、と云ひます。此の句以下の諸々の句は、この二種類の解釋が成り立ちます。好むに隨つていづれかの解釋を用ふればよいでせう。

衆生を救ふを以て大悲心を起すとは、衆生の苦しみを取り除くのは、必ず大悲心によつて爲し得ることを説明してゐます。

正法を持するを以て喜心を起すとは、嫉妬心は諸々の善行のさまたげとなりますので、當然に喜びの心を起すべき、といふことを言つてゐます。

智慧を攝むるを以て捨心を行はずとは、正しい智慧は差別相對を超えた眞實の理解であります。若し捨心（一切の執著を離れてゐる心）でなければ正しい智慧を得ることはできる筈がありません。それ故に捨心を起すのであります。

慳貪を攝むるを以て檀波羅蜜を起すとは、衆生にむさぼり惜しむ心を捨てるやう教へて布施行を起させるのであります。

菩薩章
犯戒を化するを以て尸羅波羅蜜を起すとは、衆生に戒律を犯さないことを教へて持戒の行を起させるのであります。

無我の法を以て屬堤波羅蜜を起すとは、一切のものを耐へ忍ぶ心がなければ、自己と他者といふ相對觀念にとらはれて一切を平等に觀ずる心は生じ得ません。それ故に一切を耐へ忍ぶ忍辱の行を起すのであります。

身心の相を離るるを以て毘梨耶波羅蜜を起すとは、身心に對する執著を捨て去ることは、必ず精進（物事に精魂こめて努め勵む）によつてなし得ることを言つてゐます。或る經典研究家は次のやうに云つてゐます。―身心に對する執著から離れ得ないならば、精進の行は成就することはない、―と。

菩提の相を以て禪波羅蜜を起すとは、佛陀のさとといふ果報は、心靜かに瞑想する禪定の行によつて必ず得るが故に、さう言ふのであります。

一切智を以て般若波羅蜜を起すとは、一切を知る智慧は修行の果であり、智慧をはたらかせる行はその因であります。果の智慧は、因の智慧のはたらきを解明することによつて必ず成就するものであることを説明してゐます。

衆生を教化して而も空を起すとは、衆生を教化濟度しようとしても、若し空（一切に執著することのない虚空の如き心）を以て爲さなければ、その教化は偏りあるものとなります。それ故に空の心を起します。

有爲の法を捨てずして而も無相を起すとは、差別對立のある現實の諸現象があるがままに觀する心と、それを超離して觀する心と、兩者を併せ用ひることによつて、萬事について悉くその眞實なる相を觀することができ故に、さう言ふのであります。

受生を示現して而も無作を起すとは、無作（一切の人爲的なからひを捨て去つた心）は空と同じであります。即ち上の句と同じく、生・老・病・死の眞實なる相を觀することができるのであります。

正法を護持して方便力を起すとは、正法とは、善を行じなさいと勸める、惡行は爲してはならぬと誡める、如來のこの二つの教へであります。この教へは眞理に違背することがありませんから、「正」と言ひます。衆生が實踐すべき法則となりますから、「法」と言ひます。若し方便（巧みな手だて）がなければ正法を護持し廣く傳へることはできませんから、さう言ふのであります。

衆生を度するを以て四攝法を起すとは、四攝法（布施・愛語・利行・同事）は衆生を教化濟度するに際しての要めの行であります。一切に敬事するを以て除慢の法を起すとは、よく知られてゐる事であります。

(訓讀文)

謂はく。菩提を以て慈心を起すとは、解するに二種有り。一に云はく。衆生を化して菩提の果を得せしめんと欲せば、應に慈心を起すべし。

二に云はく。若し前の人の菩提の樂を以て衆に施さんと欲するを見れば、教化して慈心を起さしむ。下の諸句も亦然なり。欲するに随つて用ふ可し。

衆生を救ふを以て大悲心を起すとは、拔苦は必ず大悲を以てするを明す。

正法を持するを以て喜心を起すとは、嫉妬は能く諸善を障ふるが故に、應に喜心を起すべきを言ふ。

智慧を攝むるを以て捨心を行ず（昭和會本は「起」であるが經典は「行」とは、智慧は是れ無相の眞解なり。若し捨心に非ざれば則ち正智は攝む可き由無し。故に捨心を起す。

慳貪を攝むるを以て檀波羅蜜を起すとは、教へて布施行を起さしむ。

犯戒を化するを以て尸羅波羅蜜を起すとは、教へて持戒の行を起さしむべし。

無我の法を以て屬堤波羅蜜を起すとは、若し忍に非ざれば則ち彼我を存して平心なる能はず。故に忍を起す。

身心の相を離るるを以て毘梨耶波羅蜜を起すとは、能く身心を存せざることは必ず精進に由りて得るを言ふ。或は云はく。若し身心を存すれば則ち精進成ぜずと。

菩提の相を以て禪波羅蜜を起すとは、菩提の果は必ず禪定に由りて得るが故なり。

一切智を以て般若波羅蜜を起すとは、一切智は是れ果にして、波若は是れ因なり。果の智は必ず因の解に由りて成ずることを明す。

衆生を教化して而も空を起すとは物を化せんと欲すと雖も、若し空に由らざれば則ち化は偏を存するが故なり。

有爲の法を捨てずして而も無相を起すとは、有と無と並べ用ひて萬事備さに成ずるが故なるを言ふ。受生を示現して而

も無作を起すとは、無作は是れ空なり。即ち上の句に同じ。

正法を護持して方便力を起すとは、正法とは如來の勸と誠との二教なり。理と違はざるが故に正と稱す。物の爲に則と作るが故に法と言ふ。若し方便に非ざれば以て正法を護通すること無きが故なり。衆生を度するを以て四攝法を起すとは、四攝は化物の要行と爲す。一切に敬事するを以て除慢の法を起すとは、知る可し。

經典（法施の中の自行を明す）

謂ク。

以テニ 菩提ヲ一 起スニ 於慈心ヲ一。

以テレ 救フヲニ 衆生ヲ一 起スニ 大悲心ヲ一。

以テレ 持スルヲニ 正法ヲ一 起スニ 於喜心ヲ一。

以テレ 攝ムルヲニ 智慧ヲ一 行ズニ 於捨心ヲ一。

以テレ 攝ムルヲニ 慳貪ヲ一 起スニ 檀波羅蜜ヲ一。

以テレ 化スルヲニ 汜戒ヲ一 起スニ 尸羅波羅蜜ヲ一。

以テニ 無我ノ法ヲ一 起スニ 羼提波羅蜜ヲ一。

以テレ 離ルルヲニ 身心ノ相ヲ一 起スニ 毘梨耶波羅蜜ヲ一。

以テニ 菩提ノ相ヲ一 起スニ 禪波羅蜜ヲ一。

以テニ 一切智ヲ一 起スニ 般若波羅蜜ヲ一。

教ヲ 化シテ 衆生ヲ一 而モ 起スニ 於空ヲ一。

不シテレ 捨テニ 有爲ノ法ヲ一 而モ 起スニ 無相ヲ一。

示ヲ 現シテ 受生ヲ一 而モ 起スニ 無作ヲ一。

護ニ持シテ正法ヲ一起スニ方便力ヲ一。

以テレ度スルヲニ衆生ヲ一起スニ四攝法ヲ一。

以テニ敬ニ事スルヲ一切ニ一起スニ除慢ノ法ヲ一。

經典訓讀文

謂はく。

菩提を以て慈心を起す。

衆生を救ふを以て大悲心を起す。

正法を持するを以て喜心を起す。

智慧を攝むるを以て捨心を行す。

慳貪を攝むるを以て檀波羅蜜を起す。

汜戒を化するを以て尸羅波羅蜜を起す。

無我の法を以て羼提波羅蜜を起す。

身心の相を離るるを以て毘梨耶波羅蜜を起す。

菩提の相を以て禪波羅蜜を起す。

一切智を以て般若波羅蜜を起す。

衆生を教化して而も空を起す。

有爲の法を捨てずして而も無相を起す。

受生を示現して而も無作を起す。

正法を護持して方便力を起す。

菩薩章

衆生を度するを以て四攝法を起す。

一切に敬事するを以て除慢の法を起す

經典現代語譯

「維摩居士は答へて言ひました。衆生に佛陀のさとりを得さしめようと説き聞かせれば、衆生は慈しみの心を起します。衆生の苦を救ひとらうと説き聞かせれば、衆生は大悲心（他者の苦を悲しむ心）を起します。衆生に佛陀の教へを奉持することを説き聞かせれば、衆生は喜びの心を起します。

衆生に正しい智慧を得さしめようと説き聞かせれば、衆生は捨心（一切に執着しない心）を起します。

（以上は衆生をして慈・悲・喜・捨の四無量心を起させる）

衆生にむさぼり惜しむ心を捨てることを説き聞かせれば、衆生は施しをなす布施行を起します。

衆生に戒律を犯さないことを説き聞かせれば、衆生は戒律を守る持戒の行を起します。

衆生に我執を離れることを説き聞かせれば、衆生は一切を耐へ忍ぶ忍辱の行を起します。衆生に身心についての執着を捨て去ることを説き聞かせれば、衆生は物事に努め勵む精進の行を起します。

衆生に佛陀のさとりがありやうを説き聞かせれば、衆生の心靜かに瞑想する禪定の行を起します。

衆生に一切を知る智慧を得さしめようと説き聞かせれば、衆生は智慧をはたらかせる行を起します。

（以上は衆生をして布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜を起させる）

衆生を教化するに空（一切の執着することのない虚空の如き心）を以てすれば、衆生は空の心を起します。

衆生に差別對立のある現實の諸現象の眞義を説き聞かせれば、衆生は無相（現實の諸現象を超越する）を觀する心を起します。

衆生に生・老・病・死の眞義を説き聞かせれば、衆生は無作（一切の人爲的なからひを捨て去る）を觀する心を起します。

（以上は衆生をして空・無相・無作の三解脱門を起させる）

衆生に佛陀の教へを護持することを説き聞かせれば、衆生は方便力（巧みな手だて）を起します。

菩薩章
衆生を教化濟度するに四攝法（布施・愛語・利行・同事）を以てすれば、衆生は四攝法を起します。衆生一切の人々を敬ふことを説

き聞かせれば、衆生は除慢じよまんの法ほう（慢心を取り除く心）を起します。〃

【参考】

○先師 黒上正一郎先生は、「無我の法を以て羸せん堤だい波羅蜜はらみつを起す」の經典について、大陸諸師の釋と太子『義疏』とを併せ述べられ、次のやうに論じてをられますので参考として記します。

『さればこそ維摩經菩薩品（善徳長者章）の「以無我法一起羸せん堤だい波羅蜜はらみつ」と無我の法を以て忍辱にんじやくを起すべきを説く文に對し、羅什法師が、

「初め忍を行ずる時は則ち我が爲に福を求む。習行既に深ければ則ち我を忘れて忍ぶ。復次またに若し能く我に即して無我なれば則ち苦を受くる者なし。苦を受くる者なきが故に能く事として忍ばざるはなし。若し無我を以つて忍を行ぜば、即

ち其の福無盡なり。」（註維摩詰經卷四）

と釋し、また吉藏師が、

「我なくして忍を起す、是れ人空にんくうにして身心の相を離ることなり。」（維摩經義疏卷二）
といひ、或は天台大師が、

「以無我法一起羸せん堤だい」とは施の寶諦を觀ずるに即ち我無我に於て不二なり。是れ眞無我なり。若し眞無我を見れば則ち悲いからず、忍ばず。是れ眞の羸せん堤だいなり。爲に衆生を化すこと前に例す。」（維摩經略疏卷第六）

といふ如き、即ち羅什師が我に即して無我なる者は受苦なきが故に忍を得べしと論じ、又吉藏師が人空を觀じて身心の相を離れ以て無我に依つて忍を起すべきをいひ、又天台大師が中道實相の理に依つて眞無我を修し、不悲いか不忍なればよく衆生を教化すべしと説くもの、すべて無我与忍辱の内的關連に對し、大乘の見地に基く解釋を示し、その解釋法の異同の反映に就いては見るべきものがある。殊に天台が中道觀による無我を談じ瞋しん恚いの純化を説く如き其の教義の特色を示すのである。けれども尚同じくこれ抽象的説明であつて、而も個人内觀の修養法に基く瞑想觀念の沒我境を示すに對し、太子が、

「以無我法一起屬堤波羅蜜」とは、若し忍に非ざれば則ち彼我を存して平心なること能はざるが故に忍を起す。」と無我を以て彼我の平心にあるをのたまひ、自他の融合にこの教義を徹底せしめて、忍辱の行を示すに、團體精神の實修として現實道德活動の根底たるべき融和感を以てしたまふのは、正しくこれ前の四大喩の御釋に照應せらるべきと共に、また次の御言葉と對照して、これらの御言葉は實にかくの如く解しまつるべきを信知するのである。

即ち維摩經文殊問疾品に有疾の菩薩にその心の調伏の方法を示し、著（執著）を離るべきをすすむる文中、愛見の大悲を捨つべきことを示し「作スニ是ノ觀ヲ一時於テ諸ノ衆生ニ若シ起サバニ愛見ノ大悲ヲ即チ應ニ捨離ス。」とある語に就いて、「此の愛見の悲は善なりといへども、猶ほ是れ相を存し、自他の二境を平等にして廣く衆生を化すること能はず、故に應に之を捨つべきなり。」

と示し給ふ御言葉である。又惹を離るべき所以の大意を釋して、

「自行外化を憶して以て心を調伏すと雖も、若し自他の二境を存して修行せば、則ち修するところ廣からずして、物と其の苦樂を同じくすること能はず。所以に勸めて應に著を離るべしと明すなり。」

と示させ給ひしも亦すでに引用せし所であるが、これらを此に仰ぎまつるによりて、われらはなほ明らかに大御心を窺ひ得べきである。凡そ著を存し愛見の悲を執するは總て無我觀念に洞徹せざるが故となすのは即ち佛教本來の教旨であつて、此の經典所説の内容も亦無我空理を背景とすることは云ふ迄もない。この御文とこの箇所に対する肇・慧遠・吉藏等大陸諸師の解釋との比較はすでに之を終つたのである。之に對する天台大師の釋と雖も、その中道實相の教義を以て説明する外、多くそれらの諸師と異なる心理的内容を見ぬのである。（維摩經略疏卷五）「彼我を平等にす」或は「自他の境を等しうす」これらの御言葉は異れども大御心は、これ一つである。經に無我を説き、執著を離るるをすすむるもの、これ併しながら太子に於いては常に自他融合の心理的根底を融化し給ひ、又群生と苦樂を同じうする平等協力の大悲心に徹到せしめて、團體協力の實人生の憶念が此等の思想を生命化し、ここに理智的煩瑣の教學理論の垢穢を拂拭せしめたまふのである。拾七條憲法第一條に「和を以て貴しと爲し、杵ふこと無きを宗と爲す」と團體協力の精神を示すに「人皆黨あり、亦達れる者少し。是を

以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ」と人間生活の内的洞察に基きて個我執著の弊を教へ給ひ、また第拾五條に「私に背きて公おほやけに向ふは是れ臣の道なり。凡そ人私あれば必ず恨あり、憾うらみあれば必ず同ぜず、同ぜざれば則ち私を以て公を妨ぐ。憾起れば則ち制に違ひ法を害す。故に初章に云く、上下和諧せよと。其れ亦是の情なるか」と教誨きょうかいせさせ給ひたるも、實に以上の内容と表裏するのであつて、われを省みずして國のため人のため盡すところに公正の眞實内容の存すべきを宣説して、これ即ち個我没入の眞信なることを示し、ここに律法の世界を攝持して、團體生活の圓通進展を實現すべき内的根底を求めさせ給ふのである。宗教教義と政治生活法則とはかくて人生體驗に融一し、無我思想の内的化はここに至極するのである。大陸諸師は哲學的教理に依つて空無我を觀修したけれども、遂にそこには實人生の道德活動に開展すべき體驗的内容は表現されてをらぬのである。彼等の無我思想は、或は中道實相の諦觀を力説し、之を直ちに隱遁枯淡の思想法とのみ云ひ得ないのであるけれども、その個人能力に基く特殊の觀法は遂に個人中心の無我思想であつて、また太子の如き全民衆の情意を照し、共なる生に苦樂を同じうする人生の信の顯示ではないのである。その四大の假和合を以て無我を説きて、多く之が人生化の成就を見られざる如き、また太子の御思想と對照して總合的に直感すべき人生を分析的に解明しようとする機械的論理の空虚の形骸をしめすのである。彼等は無相空觀を談じ、三諦圓融を明かし、宇宙人生の融明無礙を理論に於いて説いたけれども、遂に黒闇と光明と、悲哀と歡喜の錯綜する實人生を徹見して、融和協力の生を實現すべき内的生命の光明を示してはをらぬのである。彼等の教義とその言葉はつひに興國の民の聲ではなかつたのである。外來の教義を内的化して實人生法則を示し給ふ痛切深刻の信念體驗によつてこそ、大聖釋尊の求道精神に發したる無我觀念と、又その開展に渾融せる東洋特有の無我意識に基く宗教教義は現實世界に生きしめられ、家族的國家の團體精神はその統一の威力の光輝を示すのである。』(前掲書一五三頁〜一五七頁)

〔顯德序 善得菩薩・法施の中の外化の行を明す〕(現代語譯)

法施を具體的に列擧して説明する中の第二に、身・命・財に於てから以下の十六句は、外化の行を説明します。

身・命・財に於て三堅の法を起すとは、煩惱を生ずる身體・壽命・財物に關する執著を捨離し、永遠不變の眞理である法身と、その法身の壽命である智慧と、佛法の教へである法財とを修行するのであります。

六念の中に於て思念の法を起すとは、戒律と、布施と、天(天上の神々の世界、理想郷)と、佛陀釋尊と、佛法の教へと佛法を説く僧との六つを、心に深く念じて忘れないのであります。

六和敬に於て質直の心を起すとは、その六つの事とは、最初の三つは身體と言葉と心であります。第四は飲食で、時にこれを他者と共にします。第五は持戒で、戒律を清く保ちます。第六は煩惱を斷じ盡した智慧を修業します。この六つを共にして修行すれば、衆生とお互ひに相和し敬愛し合ふのであります。直心(純一、清らかで、すなほな心)を以て行じなければ、この六つの修行は成就いたしません。

正しく善法を行じて淨名を起すとは、正しく善行を修めようと欲するならば、邪心を以て日常生活を營んではならぬ、といふことを説明してあります。それ故に「淨名を起す」(清淨な生活を營む)と云つてあります。佛法即ち眞實の理法に従つて財物を得るのが清淨な生活であります。

心淨く歡喜して賢聖に近づくことを(起す)とは、高德の賢聖の方に近づき親しめば、その人は心が淨く、温和になり、喜びを生じます。愚者に親しみ近づけば、その人は心が淨く、温和になり、喜びを生じます。愚者に親しみ近づけば憂ひや苦しみが生じます。

惡人を憎まずして調伏の心を起すとは、若し自らの心を調伏(身心をととのへ靜めて惡を制する)すれば、三毒(貪欲・瞋恚・愚癡)は起りません。それ故に惡人を憎むことはないのであります。

出家の法を以て深心を起すとは、家を出て、佛道修行に勵むのは難しいことであり、堅い決心を要します。堅い決心なくして成就する事はできません。それ故に深心(佛道を深く求める心)を起します。

如説の行を以て多聞を起すとは、佛陀の説く教への通りに修行しようとしても、佛陀の説く教へを數多く聞かなくては實踐できませんから、「多聞を起す」と言ふのであります。

無淨むじやうの法ほうを以て空閑處くうげんじよを起すおことは、靜寂な環境を選べば、他者とあひ争ふことは無くなりますから、「空閑處くうげんじよ（靜寂な環境）を起す」と言ふのであります。

佛慧ぶつゑに趣向しゆじやうして宴坐えんざを起すおことは、座禪によつて瞑想し心を統一しなければ、佛陀の智慧に向ひ近づくことはできませんから、「宴坐を起す」と言ふのであります。

衆生しゆじやうの縛ばくを解ときて修行しゆじやうの地ぢを起すおことは、自らが修行に勵み、さとりを成就すること無くして、どうして衆生を教化濟度するに
とがでよいか、と言ふのであります。

相好さうこうを具ぐし及び佛土ぶつどを淨きよむるを以て福德ふくとくの業ごうを起すおことは、あらゆる善行を修すること無くして、人相や姿が美しくなる、及び此の世の中を淨めることなど爲し得ませんから、「福德の業を起す」と言ふのであります。

一切衆生いつしやうじゆじやうの心念しんねんを知り應おつの如ごとく説ときて智業ちごうを起すおことは、修行時に於て智業ちごう（差別相對の世界に於てはたらく智慧。分別し、識別する智慧）を修めなければ、佛陀のさとりを得ることはできません。此の句は、差別相對のある諸現象の存在をそのまま認めて修行することについて説明してゐます。

一切法いつしやうほうの不取ふしゆ捨しやなるを知りて一相門いちぢやうもんに入りて慧業えごうを起すおことは、諸現象の差別の相を超えた空くうを觀くわんずることについて説明してゐます。佛陀のさとりを得たいと願うて、色彩や形や生滅や苦樂などの諸現象の存在を否定し、諸現象の空なることを眞に理解する者ひとは、必ず修行時に於て、當然に慧業えごう（諸現象の差別の相を否定して平等なるを知る智慧）を修して得るのであります。

一切いつしやうの煩惱ぼんのうと一切いつしやうの障礙しやうげと一切いつしやうの不善法ふぜんぽうとを斷たんじて一切いつしやうの善業ぜんごうを起すおことは、ただ善行のみが諸々の悪行をとり除くのであります。一切いつしやうの智慧ちゑと一切いつしやうの善法ぜんぽうとを得るを以て一切いつしやうの助佛道じよぶつだうの法ほうを起すおことは、この中の佛道の法といふのは、衆生を教化濟度することを先とする大乘の佛道であり、煩惱の無くなつた境地であります。

(訓讀文)

身しん・命みちう・財さいに於おて從より以下いげ、第二だいにに外化げけの行ぎやうを明あかす。

身しん・命みちう・財さいに於おて三堅さんけんの法ほうを起すおことは、煩惱ぼんのうの身しん・命みちう・財さいを捨すてて法身ほつしんと慧命えみちうと法財ほうさいとを修しゆするなり。

六念の中に於て思念の法を起すとは、戒と施と天と佛と法と僧とに於て思念して忘れざるなり。
 六和敬に於て質直の心を起すとは、身・口・意を三と爲す。四には時に重養を得て人と之を共にす。五には持戒清し。
 六には漏盡の慧を修す。若し六を行ずれば即ち物と相和して而も敬ひ有り。直心に非ざれば以て六法を具すること無し。

正しく善法を行じて淨名を起すとは、若し正しく善法を行ぜんと欲せば邪心を以て命と爲さざれと明す。故に淨命を起すと云ふ。法の如くに財を得るを淨命と爲す。

心淨く歡喜して賢聖に近づくことを(起す)とは、即ち人をして心淨く和悅ならしむ。愚に近づけば即ち憂苦を生ず。

悪人を憎まずして調伏の心を起すとは、若し能く自ら心を調伏すれば、即ち三毒起らず。故に悪人を憎まず。以て出家の法を以て深心を起すとは、出家は難事なり。薄心をもつて成ずるに非ず。故に深心を起す。

如説の行を以て多聞を起すとは、説の如く行ぜんと欲すと雖も、若し多聞ならざれば得るに由無きが故なり。無淨の法を以て空閑處を起すとは、空閑なれば能く諍ふこと無きが故なり。

佛慧に趣向して宴坐を起すとは、定心に非ざれば、佛慧に向ふに由無きが故なり。衆生の縛を解きて修行の地を起すとは、若し自行能はずんば安んぞ衆を濟ふことを得ん。

相好を具し及び佛土を淨むるを以て福德の業を起すとは、福德に非ざれば成ずるを得可きに非ざるが故なり。一切衆生の心念を知り應の如く説きて智業を起すとは、福德因中の智業を修せざれば、佛果を得るに由無し。此の句は有

に據りて明すことを爲す。一切法の不取捨なるを知りて一相門に入りて慧業を起すとは、空に據りて明すことを爲す。佛果を得んと欲して想を亡

じ眞解する者は、必ず須く因中に慧業を修して得べし。一切の煩惱と一切の障礙と一切の不善法とを斷じて一切の善業を起すとは、唯善のみ能く諸惡を遣る。

一切の智慧と一切の善法とを得るを以て一切の助佛道の法を起すとは、佛道の法とは大乘無漏の法なり。

經典（法施の中の外化の行を明す）

於テニ身・命・財ニ一起スニ堅ノ法ヲ一。

於テニ六念ノ中ニ一起スニ思念ノ法ヲ一。

於テニ六和敬ニ一起スニ質直ノ心ヲ一。

正シク行ジテニ善法ヲ一起スニ於淨命ヲ一。

心淨ク歡喜シテ起スレ近ツクコトヲニ賢聖ニ一。

不シテレ憎マニ惡人ヲ一起スニ調伏ノ心ヲ一。

以テニ出家ノ法ヲ一起スニ於深心ヲ一。

以テニ如説ノ行ヲ一起スニ於多聞ヲ一。

以テニ無淨ノ法ヲ一起スニ空閑處ヲ一。

趣ヲ向シテ佛慧ニ一起スニ於宴坐ヲ一。

解テニ衆生ノ縛ヲ一起スニ修行ノ地ヲ一。

以テ下具シニ相好ヲ一及ヒ淨ムルヲ佛土ヲ一起スニ福德ノ業ヲ一、

知リニ一切衆生ノ心念ヲ一。如クレ應ノ説キテレ法ヲ起スニ於智業ヲ一。

知テニ一切法ノ不取不捨ナルヲ一。

入テニ一相門ニ一起スニ於慧行ヲ一。

斷ジテニ一切ノ煩惱ト一切ノ障礙ト一切ノ不善法トヲ一。起スニ一切ノ善業ヲ一。

以テレ得ルヲニ一切ノ智慧ト一切ノ善法トヲ一。起スニ於一切ノ助佛道ノ法ヲ一。

經典訓讀文

身・命・財に於て三堅の法を起す。

六念の中に於て思念の法を起す。

六和敬に於て質直の心を起す。

正しく善法を行じて淨命を起す。

心淨く歡喜して賢聖に近づくことを起す。

惡人を憎まずして調伏の心を起す。

出家の法を以て深心を起す。

如説の行を以て多聞を起す。

無淨の法を以て空閑處を起す。

佛慧に趣向して宴坐を起す。

衆生の縛を解きて修行の地を起す。

相好を具し及び佛土を淨むるを以て福德の業を起す。

一切衆生の心念を知り、應の如く法を説きて智業を起す。

一切法の不取不捨なるを知りて、一相門に入りて慧行を起す。

一切の煩惱と一切の障礙と一切の不善法とを斷じて、一切の善業を起す。

一切の智慧と一切の善法とを得るを以て、一切の助佛道の法を起す。

經典現代語譯

「衆生に煩惱ある身體・生命・財物からの執著を離れるやう説き聞かせれば、衆生は三堅の法（法身・慧命・法財）を覺る心を起します。」

衆生に六念（戒・施・天・佛・法・僧を心靜かに念ずる）を説き聞かせれば、衆生は六念を起して忘れません。

衆生に六和敬（身・口・意・飲食・持戒及び煩惱を斷じ盡した智慧の六つを同じくして和合し、敬愛し合ふ）を説き聞かせれば、衆生は直心（純一、清らかですなほなる心）を起します。

衆生に善法を行ずることを説き聞かせれば、衆生は淨命（正しい生活）を起します。

衆生に心が淨く歡喜することを説き聞かせれば、衆生は尊い聖者に親しみ近づくことを起します。

衆生に惡人を憎まないことを説き聞かせれば、衆生は調伏（身心をととのへ靜めて惡を制す）の心を起します。

衆生に出家して佛道修行することを説き聞かせれば、衆生は深心（佛道を深く求める心）を起します。

衆生に佛陀の説法に従つて行ずることを説き聞かせれば、衆生は多聞（佛陀の説法を數多く聞く）の心を起します。

衆生に他人と争はないことを説き聞かせれば、衆生は靜寂な環境を選ぶ心を起します。

衆生に佛陀の智慧に向ひ近づくことを説き聞かせれば、衆生は心靜かに冥想する座禪の心を起します。

衆生に一切の束縛から解き放たれることを説き聞かせれば、衆生は修行するにふさはしい心境を起します。

衆生に人相も姿も美しくなり、及びこの世の中を淨めることを説き聞かせれば、衆生は善行を爲し功德を積む心を起します。

衆生に、一切の人々の心の思ひを知り、その思ひに相應じて佛法を説くといふことを以て教化すれば、衆生は差別を知る智慧をばたらかせる心を起します。衆生に、この世の一切の存在は人間の智慧で左右することはできないことを教へ、一切の存在は差別對立のない平等であることを説き聞かせれば、衆生は平等を知る智慧をばたらかせる心を起します。

衆生に、一切の煩惱と、善をさまたげる一切の障礙と、善ならざる一切の行ひとを斷ち切ることを説き聞かせれば、衆生は一切の善行を積む心を起します。衆生に一切の智慧と一切の善行とを得ることを説き聞かせれば、衆生は一切の助佛道の法（佛道修行を助成する）の心を起します。"」

○ 先師 黒上正一郎先生は、「若し自行能はずんば安んぞ衆を濟ふことを得ん」の太子の御言葉を引用されて、次のやうに論じてをられますので、参考として記します。

『太子は年少、用明天皇のみもとにましまして三寶歸信の薰化をうけさせ給ひ、又自ら國民生活を荷はせたまひし御心に大乘佛典を考究して國民と共に體現すべき永遠の大道を求めさせ給うたのである。

而も「若し自行能はずんば安んぞ衆を濟ふを得む」(維摩經義疏菩薩品)とは太子が常に宣ひしところである。國家を治め國民を養育することも、先づ自らのくもりなき「まこと」を體現して蒼生を教化するに非ざれば、眞に之を全うすること能はじと信知し給ひし御心は、今この御言葉の上にも直ちに仰ぎまつるところである。この切實の求道精神は「共にこれ凡夫」と告白して先づ自らの足らはぬ姿にめざめさせたまひ、懺悔反省の至誠を以て道を大聖の教言に求め給うたのである。されば大乘佛典を學ばせたまふと雖も、教學理論の外的研究に滯らせたまはずして、常に釋迦佛陀が現世の罪苦を解脱すると共に純淨の信を以て衆生を濟度せられたる體驗事實を念はせ給ひ、その精神を自らの内心にをさめたまうたのである。

凡そ人生を以て罪惡苦惱の世となすことは佛敎經典の到る處に説かれてをる。而もそれが單に教義的概念に止まるときは、つひに理論の形骸となるのである。太子が「共にこれ凡夫」と仰せられて、自ら缺陷罪惡ある現身の悲痛を告白したまひしことは、眞に生きたる事實として罪劫の生を痛感せられたることを示すものである。この痛切の内的自覺によつて始めて人生の苦惡を厭ひ永遠の信を求むる至誠は相續せらるるのである。されば太子の宗教教化は決して堂塔建立の外的設備に生命を托する形式的宗教のそれではない。また學問理論の外形に偏執して信念體驗の威力を有するなき學問宗教のそれでもない。「大士はその身の苦を忘れて苦を同じうして化す」(維摩經義疏文殊問疾品)と示されたる如き、眞實の信を以て蒼生と勞苦を共にし、同じく國家人民を守らんとする人生宗教の體現宣布である。凡そ人生の苦惡を厭ひ、永遠の解脱を希求する精神は人類普遍の内的要求である。わが内心に解脱の光明を求め、更に一切衆生の心靈を救濟せんとすることも、亦世界人道の平等理想である。この理想を體現せられた

る大聖釋尊の世界的宗教は、自ら解脱の精神を念じて、國民の勞苦を荷はせ給ひ、國家生活の教化經營につくしましし太子の御體驗に依つて眞に現實人生に生くべき生命を與へられたのである。』(前掲書九一頁〜九二頁)

〔顯德序 善得菩薩・法施を勸むるを結す〕(現代語譯)

法施を數多く具體的に列擧して説明する中の第二に、是の如し、善男子から以下は、法施を修めなさいと勸める、その結びの文であります。その中については、それ自體に二つの項目があります。第一は結びの文言であります。是を法施の會と名づくといふ經典がこれであります。第二は法施を修めなさいと勸めます。若し菩薩から以下の經典がこれであります。

法施を修めれば、自分自身は大いなる施主として稱贊され、外に對しては一切の世間の人々の福德を生み出すもとなり。それ故に、すべからず法施を修めなさいといふことを説明してゐます。

(訓讀文)

是の如し、善男子從り以下、廣く法施を明す中の第二に法施を勸むるを結するなり。中に就きて自ら二有り。第一に結す。是を法施の會と名づくといふ是なり。第二に若し菩薩從り以下、勸むるなり。内には大施主の稱を得、外には一切の爲に福田と作る。所以に法施宜しく修すべしと明すなり。

經典(法施を勸むるを結す)

如シレ是ノ。善男子。是ヲ爲スニ法施ノ之會ト一。

若シ菩薩。住スルニ是ノ法施ノ會ニ一。者ヲ爲スニ大施主ト一。亦爲スニ一切ノ世間ノ福田ト一。

經典訓讀文

是の如し。善男子。是を法施の會と爲す。

若し菩薩、是の法施の會に住する者を大施主と爲す。亦一切の世間の福田と爲す。

經典現代語譯

「善得菩薩さんよ、以上述べてきた通りです。これが法施を實踐する道場なのです。菩薩にしてこの法施の實踐を積み重ねる者は、大いなる施主と稱賛されます。その菩薩は亦この世の一切の人々の福德を生み出すものになるのです。」

〔顯徳序 善得菩薩・呵に因りて益を得の科段分け〕（現代語譯）

辭退する理由を釋き明す中の第三に、世尊、維摩詰から以下は、維摩居士の叱責の說法に因つて、その場に居合せた人々や善得菩薩が利益を得ることを述べます。その中について亦、二つの項目があります。

（訓讀文）

世尊。維摩詰從り以下、辭するを釋する中の第三に、呵に因りて益を得。中に就きて亦二有り。

〔顯徳序 善得菩薩・時の衆益を得〕（現代語譯）

維摩居士の叱責の說法に因つて利益を得ることを述べる中の第一に、その場に居合せた人々が利益を得ることを述べます。婆羅門衆の中の二百人、皆菩提心を發せりといふ經典がこれであります。

（訓讀文）

第一に時の衆益を得るを明す。婆羅門衆の中の二百人、皆菩提心を發せりといふ是なり。

經典（時の衆益を得）

世尊。維摩詰說クニ是ノ法ヲ一時。婆羅門衆ノ中ノ二百人。皆發セリニ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ。

經典訓讀文

世尊。維摩詰是の法を説く時、婆羅門衆の中の二百人、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。

經典現代語譯

「世尊よ。維摩居士が以上の佛法の教へを説いた時、その場に居合せた婆羅門衆（印度の僧侶階級の人たち）の中の二百人は阿耨多羅三藐三菩提心（無上絶対のさとりを求め、衆生を濟度しようと願ふ心）を發しました。」

〔顯徳序 善得菩薩益を得るを明すの科段分け〕（現代語譯）

維摩居士の叱責の説法に因つて利益を得ることを述べる中の第二に、我時に心清淨なることを得から以下は、善得菩薩自らが利益を得たことを説明します。その中について、亦、三つの項目があります。

（訓讀文）

第二に我時に心清淨なることを得従り以下、善得自らの益を得るを明す。
中に就きて亦三有り。

〔顯徳序 善得菩薩・自らの益を得ることを言ふ〕（現代語譯）

善得菩薩自らが利益を得たことを説明する中の第一に、直ちに自らが利益を得たことを述べます。我時に心得清淨なることを得といふ經典がこれでありませう。

（訓讀文）

第一に直ちに自らの益を得ることを言ふ。我時に心得清淨なることといふ是なり。

經典（自らの益を得ることを言ふ）

菩薩章
我時に心得テ「清淨ナルコトヲ」。

經典訓讀文

我時に心清淨なることを得。
われとき いしめせいでじよう

經典現代語譯

「私は維摩居士の説法を聞いた時、私の心は清淨になることができました。」

〔顯徳序 善得菩薩・三業を以て讚嘆す〕（現代語譯）

善得菩薩が自らが利益を得たことを説明する中の第二に、三業（身體・言語・心の三つの爲す業）を以て維摩居士を讚嘆します。未曾有なりと歎じてとは、言語を以て爲す讚嘆であります。足を禮すとは、身體を以て爲す讚嘆であります。若し善得菩薩が心の底から維摩居士を讚嘆してゐるのでないならば、身體と言語を以てする讚嘆は形ばかりであつて無意味であります。それ故に經典には記してをりませんが、心を以てする讚嘆も存在するのであります。

（訓讀文）

第二に三業を以て讚ず。未曾有なりと歎じてとは口業なり。足を禮すは身業なり。若し内に意あるに非ざれば身・口の二業發す可きに由無し。故に知る意業も亦拜するなり。（「拜」實治版本他は「并」）

經典（三業を以て讚嘆す）

歎ジテニ 未曾有ナリト。稽首シテ禮スニ 維摩詰ノ足ヲ一。

經典訓讀文

未曾有なりと歎じて、稽首して維摩詰の足を禮す。

經典現代語譯

菩薩章
「私は未だ聞いたことのない素晴らしい説法であると讚嘆し、維摩居士の足に頭面を接し、恭しく禮拜しました。」

〔顯徳序 善得菩薩・財施を以て恩を報ずの科段分け〕（現代語譯）

善得菩薩みづか自らが利益を得たことを説明する中の第三に、即ち瓔珞ようらくを解きてから以下は、維摩居士の説法の恩義に報いるために、善得菩薩は瓔珞ようらく（珠玉の首飾り）をさしあげて財施を行います。この中について亦、六つの項目があります。

（訓讀文）

第三に即ち瓔珞ようらくを解きて従り以下、財を以て恩を報ず。中に就きて亦六有り。

〔顯徳序 善得菩薩・瓔珞を解きて恩を報ず〕（現代語譯）

維摩居士の説法の恩義に報いるために、善得菩薩が財施を行ふ中の第一に、善得菩薩は自分の瓔珞はつを外して維摩居士にさしあげ、その恩義に報いることを説明します。

（訓讀文）

第一に即ち瓔珞ようらくを解きて恩を報ずるを明す。

經典（瓔珞を解きて恩を報ず）

即チ解キテニ 瓔珞ノ價直百千ナルヲ一以テ上ルレ之ヲ。

經典訓讀文

即ち瓔珞ようらくの價直げじきひやくせん百千なるを解きて以て之を上る。

經典現代語譯

「私は高價な瓔珞ようらく（珠玉の首飾り）を外して維摩居士にさしあげました。」

〔顯徳序 善得菩薩・淨名は瓔珞を受けず〕（現代語譯）

維摩居士の説法の恩義に報いるために、善得菩薩が財施を行ふ中の第二に、維摩居士は瓔珞を受けとらうとはしないことを説明します。財物を受け取らないことには、二つの意味合ひがあります。第一には、布施を行じようといふ施者の志を當然に有難く受けとめるべきで、財物の受領は二の次であります。第二には、財物を受けとるか否かは、受けとる人の意志に任せるべきである、といふことであります。

（訓讀文）

第二に淨名受けざることを明す。受けざるの意に二有り。一には須く施主の意を得べし。二には受者の懐に任ずべし。

經典（淨名は瓔珞を受けず）

不_ニ肯テ取ラ_一。

經典訓讀文

肯_{あへ}て取_とらず。

經典現代語譯

「維摩居士は首飾りを受けとらうとはしませんでした。」

〔顯徳序 善得菩薩受けよと請ふ〕（現代語譯）

維摩居士の説法の恩義に報いるために、善得菩薩が財施を行ふ中の第三に、善得菩薩は瓔珞を受けとつて下さいと、維摩居士にお願いします。布施を行ずる強い決意を示し、お受け取りになつた後は御意のままに他にお與へ下さいと、お任せします。我言はく。居士の經典以下がこれでありませぬ。

(訓讀文)

第三に善得受けよと請ふ。其の施の意を示し、受者の懐に任すなり。我言はく。居士従り以下是なり。

經典(善得菩薩受けよと請ふ)

我言ク。居士。願クハ必ず納受シタマヘ。随意ニ所アレトク與フル。

經典訓讀文

我言はく。居士、願はくは必ず納受して、隨意に與ふる所あれと。

經典現代語譯

「私は言ひました。維摩居士さん、願ひします。是非ともこの首飾りをお受けとり下さいませ。そして御意のままに他に分ち與へ下さいませ、と。

〔研究〕

○ 肯て取らずの御解釋について

維摩居士が瓔珞を受け取らない理由について、太子は次のやうに述べてをられます。

受けざるの意に二有り。一には須く施主の意を得べし。二には受者の懐に任すべし。

これについて大陸諸師の解説を擧げてみますと、肇法師は、羅什法師の説を引用して次のやうに述べてゐます。

不肯取ラ一 什曰ク。本來ノ意ハ爲ノ説カンガレ法ラ故ナリ。亦爲ノ譏ランガニ財施ラ一故ナリ。懷クニ此ノ二ノ心ラ一。所以ニ不ルレ受ケ者也。(大正新脩大藏經第三十八卷三七〇頁中段)

慧遠法師は次のやうに述べてゐます。

維摩不受以其偏敬局施維摩。情無廣兼違於等施。所以不受。(大正新脩大藏經第三十八卷四六八頁下段)

これを訓讀すれば次のやうになりませうか。

維摩ハ不レ受ケ。以テニ其ノ偏リ敬スルヲ一局シテ施スニ維摩ニ。情無ク廣キコト兼テ違フニ於等シキ施ニ。所以ニ不レ受ケ。

(「局」には、わけ、こわけ、ちぢまる、せぐくまる、曲る、ちひさい等の意があります。)

慧遠法師は「施主の心が廣くない」といふ抽象的な理由と、「併せて布施は平等に爲すべきに違背してゐる」といふ理由を擧げてをります。施を平等に行ずることができないことは、財施の本來有してゐる缺點の一つでありますから、これを「財物を受けとらない」理由に擧げるのは妥當でないと思ひます。

肇法師のそれは「法施を稱揚し、財施を譏らんが爲に」といふ、この箇所の經典の説くところの通りであり、それでは、「何故に維摩居士は善得菩薩の瓔珞を受けとらないか」の理由の解明になつてゐないやうに思ひます。

なほ、「財施を譏る」といふ表現は適切でないと思ひます。即ち太子は、「財施を絶ちて是れ爲す可からずといふには非ず、但己が財施を極と爲すが故に、淨名此の呵を致すことを明すなり。」とお述べになつてをられるからであります。布施は六度の初行でありますから、財施も大いに奨勵し實踐せしむべきものであります。慧遠法師の「財施は等しき施に違ふ」も法施を稱揚してゐる言葉と思はれますし、大陸諸師は「至極なるは法施」といふ理想を追求するあまり、財施を疎じてゐる傾向があるやに伺はれます。法施は、財施を修行しをはつた有徳の菩薩にして可能なことで、凡夫の爲し得る所ではありません。

維摩居士が瓔珞を受けとらないことについて、太子の擧げてをられる理由は、施主の志を有難く受けとめることが第一で、第二には財物を受けとるか否かは、受けとる者の意志に任せるべきである、といふのであります。現實具體的な人間の心の動きに立脚した御解釋と拜するのであります。

次に善得菩薩は瓔珞を受けとつて下さいとお願ひするのですが、太子はこの經典についても、右の二つの御見解を述べてをられます。即ち願必納受隨意所與の經典について太子は、「其の施の意を示し、受者の懷に任すなり。」と解説して

をられます。太子の御解説に従へば、後段の隨意所與は「受者の懷に任すなり。」の意にとるべきと思ひます。そこで經典の訓讀は花山信勝氏に従つて、隨意に與ふる所あれと致しました。

〔顯徳序 善得菩薩・淨名は瓔珞を受けて善く財施を爲す〕（現代語譯）

維摩居士の説法の恩義に報いるために、善得菩薩が財施を行ふ中の第四に、維摩居士は瓔珞（眞珠の首飾り）を受けてつて、最高至極の財施を行ふことを説明します。

上述に於て、財施は布施として法施の優れてゐることに及ばないことを明確に述べてゐます。而るに今、善得菩薩は瓔珞を維摩居士にさしあげて財施を行じ、維摩居士も亦その施しを受けて財施を成就せしめるのは、維摩居士をして最高至極の財施を行はずる意義を顯らかにならしめ、またその場に居合せた人々が、身分の上下などより平等でないで分別する誤つた心を取り除かうと考へるからであります。何故かと申しますと、如來は尊敬すべき最高至極の存在であることは既に明らかであり、乞人（乞食を行ずる貧しい人）は最も愛むべき存在であり、如來は身分が尊く、乞人は身分が卑しいといふ違ひがあります。兩者に財施を行じた場合、その生ずる福德は兩者ともに全く同じであつて異なりません。それ故に維摩居士は瓔珞を二つに分け、一つを如來に奉り、一つを乞人に施すのであります。生ずる福德が同じでありますから、尊い如來に多くの瓔珞を奉らねばならぬこともなく、卑しい乞人に少しの瓔珞を施すこともないのであります。また法施には及ばない財施ではありますが、このやうに身分の上下を差別することなく平等に施を行ずるならば、これは最高至極の財施と言ふことができます。そしてただ單に、最高至極の財施を顯らかにしてゐるだけではありません。それは即ち、維摩居士が神通力を以て淨土の佛身及び種々の寶で嚴かに飾られた様を現するのは、若しこのやうに平等なる財施を行ふことができるならば、最終的には必ずこのやうに優れた果報が得られることを表はさうと考へたからであります。

菩薩章

維摩居士の神通力によつて瓔珞が四柱の寶臺に變つてしまふのは、菩薩の修行が満了して佛陀となり、その四等（慈・悲・喜・捨の四無量心）を以て、生きとし生けるものを遍く覆ひ濟度することを表はしてゐます。同じく神變によつて現じた寶で飾られた四つ

の壁面は光り輝いてゐますが、その輝きが、お互に何らの妨げも爲さないことは、衆生を教化するに四辨（一）（四種の自由自在な理解表現能力）を以てして、何らの妨げもないことを表はしてゐます。

(1) 四辨 四無礙辨を言ふ。①法無礙、教へについて滞ることがない。②義無礙、教への表現は意義内容を知つてゐて滞ることがない。

い。③辭無礙、諸方の言語に通達してゐて自在である。④樂説無礙、以上の三種の智を以て衆生のために自在に説く。

(2)

(訓讀文)

第四に淨名瓔珞を受けて善く財施を爲すことを明す。

上に既に財施は法施に如かずと言へり。而るに今善德猶財を以て淨名に施し、淨名も亦受くることは、淨名をして復善く財施を爲すの義を顯はさしめ、時衆の不平等の心を亡ぜしめんと欲す。何となれば則ち如來は既に是れ敬す可きの最、乞人は是れ愛む可きの極、尊卑殊なりと雖も福を生ずること異ならず。故に分ちて二と爲し、一分を如來に奉り、一分を乞人に施す。若し爾れば如來には尊として多く奉つる可きこと無く、乞人には卑として少しく施すべきこと無し。復財施と雖も、若し能く是の如く上下平等ならば、善く財施を爲すと言ふ可し。但に施を顯すのみに非ず。即ち淨土の佛身及び種種莊嚴の事を現するは、若し能く平等に財施を作さば、終に必ず是の如きの報を得るを表はさんと欲す。瓔珞變じて四柱の寶臺と成ることは、行滿ちて成佛し、四等普く四生を覆ふことを表はす。四面障礙せざることは、四辨物を化するに妨礙無きことを表はすなり。

經典（淨名は瓔珞を受けて善く財施を爲す）

維摩詰。乃チ受ケテニ 瓔珞ヲ一分テ作シニ二分ト一。持シテニ一分ヲ一施シニ此ノ會中ノ最下ノ乞人ニ一。持シテニ一分ヲ一奉ルニ彼ノ難勝如來ニ一。

一切ノ衆會。皆見ルニ光明國土ノ難勝如來ヲ一。又見ルニ殊瓔在テニ彼ノ佛ノ上ニ一。變ジテ成リニ四柱ノ寶臺ト一。四面嚴飾シテ不ルヲ一。相ヒ障

菩薩章
蔽セ上。

經典訓讀文

維摩詰、乃ち瓔珞を受けて分ちて二分と作し、一分を持して此の會中の最下の乞人に施し、一分を持して彼の難勝如來に奉る。一切の衆會、皆光明國土の難勝如來を見る。又殊瓔珞の佛の上に在りて變じて四柱の寶臺と成り、四面嚴飾して相ひ障蔽せざるを見る。

經典現代語譯

「そこで維摩居士は瓔珞を受けとつて二つに分け、一つを此の會座の中で身分の最も卑しい乞人に施し、一つを彼の難勝如來に奉りました。この會座に集まつてゐた一切の人々は皆、光明に輝いた淨土にをられる難勝如來のお姿を見ることができました。又、奉つた瓔珞は維摩居士の神通力によつて、難勝如來の頭上に於て、四柱の寶臺に變じ、嚴かに寶で飾られた四つの壁面は光り輝いてゐますが、その輝きはお互ひに相ひ妨げることのないあり様を見ることができました。」

〔顯德序 善得菩薩・更に財施を擧げて法施を弘通す〕（現代語譯）

維摩居士の説法の恩義に報いるために、善得菩薩が財施を行ふ中の第五に、時に維摩詰から以下は、維摩居士は更に財施の行じ方を釋き明し、それは延いては法施を行ふことであると示して、法施を世に弘めます。この中には五句があります。

若し施主、等心に一りの最下の乞人に施すこと、如來福田の相の分別する所無きが如くとは、身分の卑しい人を先に擧げ、次に自分の尊い人を擧げ、どちらに財施を行しても差別する心が無ければ平等であることを説明してゐます。その意味するところは、卑しい乞人を深く愛む心は、佛陀を深く尊敬する心と何ら變ることなく同じである、といふのであります。大悲を等しくして果報を求めずとは、身分の尊い人を先に擧げ、次に自分の卑しい人を擧げ、どちらに財施を行しても差別やとらはれの心が無ければ平等であることを説明してゐます。その意味するところは、佛陀を深く尊敬する心は、卑しい乞人を深く愛む心と何ら變ることなく同じである、といふのであります。是れ則ち名づけて法施を具足すと曰ふとは結びの文言であります。

（訓讀文）

時に維摩詰従り以下、第五に更に財施を擧げて法施を弘通す。即ち五句有り。
 若し施主、等心に一りの最下の乞人に施すこと、如來福田の相の分別する所無きが如くとは、下を擧げて上に齊しからしめて平等を明す。言ふところは乞人を愛むは佛の上の敬心の重きに等し。
 大悲を等しくして果報を求めずとは、上を擧げて下に齊しからめて平等を明す。言ふところは佛を敬ふは乞人の上の悲心の重きに等しとなり。是れ則ち名づけて法施を具足すと曰ふとは、結なり。

經典（更に財施を擧げて法施を弘通す）

時ニ維摩詰現シニ 神變ヲ一已テ又作サテニ 是ノ言ヲ一。若シ施主。等心ニ施スコトニ 一リノ最下ノ乞人ニ一。猶下 如クニ 如來福田ノ之相ノ無キガロ
 所ニ分別スル一。等シクシテニ 千大悲ヲ一不ル也 求メニ 果報ヲ一。是レ則チ名ケテ曰フニ 具ニ足スト法施ヲ一。

經典訓讀文

とき・ゆい まきつじんべん げん をは またこ こん な も し せしゆ とうしん ひと さいげ ことん ほどこ
 時に維摩詰神變を現じ已りて又是の言を作さく。若し施主、等心に一りの最下の乞人に施すこと、猶如來福田の相の分別する所無
 きが如く、大悲を等しくして果報を求めざる、是れ則ち名づけて法施を具足すと曰ふ。

經典現代語譯

「その時維摩居士は神通力による諸々のあり様を現じをはつて、また申されました。〃若し施を行ずる人が、一人の身分の最も卑しい乞人に差別の心なく平等に施すこと、それは如來が衆生に福德を生ぜしめるに際して衆生を全く差別しないのと同様であるならば、若し施を行ずる人が、如來の大慈悲心と同じき心を以て施を行じ、しかも施の果報を一切求めないならば、これは法施が満ち足りてゐると言ふことができる。〃」

〔參考〕

○ 先師 黒上正一郎先生は、維摩居士が善得菩薩に如來と乞人とに平等の財施をすすめられた太子の御言葉を引用されて

次のやうに論じてをられますので、参考として記します。

『ここに柿本人麻呂が日竝皇子をいたみまつりて、

ひさかたの天見る如く仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも

とよみ、又同じきとき舍人らが、

高光るわが日の皇子の萬代に國知らさまし島の宮はも

天地と共に終へむと念ひつつ仕へまつりしころたがひぬ

とうたひたる如き、無限の天を仰ぎみるころをその仕へまつりし皇子の上に憶ひまつりて、ここに現實地上の生に無窮のいのちをめざめしめ、現世奉仕の悲喜の情意に天地宇宙の莊嚴にして親和なる姿を生きしめたる人のころに想ひ到るのである。この自然と人生とを渾融する精神が國家悠久の生命のうちに表現せられたるこれらの歌は、また太子の數々の御言葉をも偲ばしむるのである。ここに太子が維摩經義疏に於いて、經典菩薩品中、維摩が善得長者に如來と乞人とに平等の財施をすすめたる文の御釋に、

「何となれば則ち如來は既に是れ敬すべきの最、乞人は是れ愛すべきの極、尊卑異なりと雖も、福を生ずること異ならず。」

とのたまひ、又

「若施主、等心に一の最下乞人に施すこと、猶如來福田の相分別する所無きが如し。とは、下を擧げて上に等しからしめて平等を明かす。言ふころは、乞人を愛するは佛の上の敬心の重きことに等し。等干大悲不求果報。とは、上を擧げて下に齊しからしめて平等を明す。言ふころは佛を敬ふは乞人の上の悲心の重きに等しとなり。」と示させ給ひ、上を敬ふ心を下をいつくしむ心に徹したまひ、敬すべきの極たる佛を仰ぐことは、又愛すべきの最たる乞人をかなしむ心とひとし、とのたまひし御言葉を憶念するのである。これ佛の上の敬心の重きにその乞

人の上の悲心の重きを等しからしめ給ふのである。上を敬ふ心は同時に下を慈しむの心と一なることを示し給ふのである。「慈下敬上天之大義也。」（維摩經義疏菩薩行品）と宣ひし御言葉も此に對照せらるべきである。これまた「天覆ひ地載せ四時順行し萬氣通ふことを得。」と示されたる天地の和を「上和ぎ下睦びて、事を論らふに諧ひぬるときは、事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。」と宣ひし人生の和に渾融する上下融一の総合的人生觀を仰がしむるのである。上、天皇に仕へさせたまひて、下、國民の勞苦を荷はしましたし御心は、常に皇室無窮の憶念のうちに全國民の上に連らしめられ、苦惱悲痛の人生事實を洞察して生きとし生けるものの心ををさめたまうたのである。國家永久生命のため盡しましたし御心のうちに全國民の心は生きしめられ、この博大總合の御精神は、君と臣と、天と地と、如來と衆生と、親と子と、其の自然の秩序と對照の融合とを貫く無限生命を唯一の御身に體現せられたのである。

聖德太子はこの御心を以て大陸文化批判總合の大業のうちに、國民永遠の歸趨の大道を開闡し給うたのである。新しき國民生活はこの總合的人格に精神原理を求めてこそ、國民は永久生命の信を内に體し、國家生活は無窮の進展を成就すべしと信ずるのである。』（前掲書一三〇頁―一三二頁）

〔顯德序 善得菩薩・貧人は發心し益を得〕（現代語譯）

維摩居士の説法の恩義に報いるために、善得菩薩が財施を行ふ中の第六に、城中の貧人から以下は、貧しい人は、維摩居士の神通力によつて不可思議なあり様が現出されるを見、また維摩居士の説法を聞いて、その貧しい人は發心して利益を得ることを説明します。

（訓讀文）

城中の貧人從り以下、第六に貧類は淨名の神力所變と及び其の所説とを見聞して、發心し益を得るを明す。

經典（貧人は發心し益を得）

城中ノ一リノ最下ノ乞人。見ニ是ノ神力ヲ。聞テニ其ノ所説ヲ。皆發セリニ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ。

經典訓讀文

城中じやうちゆうの一ひとりの最下さいげの乞人こつじん、是この神力じんりきを見み、其その所説しよせつを聞ききて、皆みな阿耨多羅三藐三菩提心あのくたらさんみやくさんぼだいしんを發おこせり。

經典現代語譯

「城中の會座の中で身分の最も卑しい乞人は、維摩居士の神通力を見、その説法を聞いて、心から阿耨多羅三藐三菩提心（無上絶對のさとりを求め、衆生を濟度しようとする願ふ心）を發しました。」

〔顯徳序 善得菩薩・堪へざるを結す〕（現代語譯）

善得菩薩が維摩居士の病氣を見舞ふ力量がありませんと辭退する中の第三は、故に我彼に詣りて疾を問ふには任へずであり、これは見舞ふ任に堪へないことの結びの文言であります。

（訓讀文）

故に我彼われかしこに詣りて疾しつを問ふには任たへずとは、辭じの中なかの第三だいさんに堪たへざるを結けつす。

經典（堪へざるを結す）

故ニ我不レ任ヘニ詣テレ彼ニ問フニ疾ヲ。

經典訓讀文

故に我彼われかしこに詣りて疾しつを問ふに任たへず。

經典現代語譯

菩薩章
「以上の次第でありますから、善得は維摩居士のもとへ行つて病氣を見舞ふ、その任を果す力量はありません。」

〔顯徳序 菩薩章・總じて堪へざるを結す〕（現代語譯）

菩薩章の中の第二は、是の如く諸の菩薩から以下であり、八千人の菩薩たちを總まとめにして、全員が維摩居士の病氣を見舞ふ力量がなく、その任に堪へないことの結びの文言であります。

（訓讀文）

是の如く諸の菩薩従り以下、章の中の第二に總じて堪へざるを結するなり

經典（總じて堪へざるを結す）

如クレ是ノ諸ノ菩薩。各各向テ佛ニ説キ其ノ本縁ヲ。稱シ述シテ維摩詰ノ所ヲ言フ。皆曰ヘリレ不トレ任ヘニ詣テレ彼ニ問フニ疾ヲ。

經典訓讀文

是の如く諸の菩薩、各各佛に向ひて其の本縁を説き、維摩詰の言ふ所を稱述して、皆彼に詣りて疾を問ふに任へずと曰へり。

經典現代語譯

以上の如く八千人の諸々の菩薩は、その各々が佛陀釋尊に向つて維摩居士から叱責された由來を述べ、維摩居士の所説を稱讚し、全員が維摩居士のもとへ行つて病氣を見舞ふ、その力量はありませんと辭退した。

第五 文殊師利問疾章

〔文殊師利問疾章の名称の由来〕（現代語訳）

この經典の第五章は文殊師利問疾章であります。

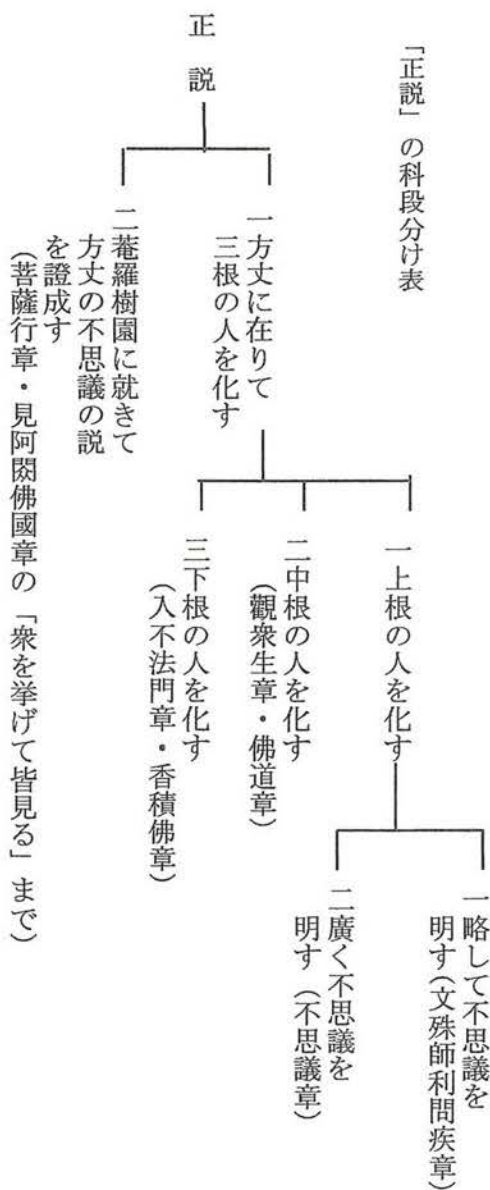
これまで述べてきたところでは、五百人の佛弟子たち、八千人の菩薩たちに對し、佛陀釋尊が維摩居士の病氣見舞ひに行くやうに命じましたが、その各々が昔日に維摩居士から彈呵されて恥かしい思ひをしたことを申し述べ、皆病氣見舞ひの任には堪へられませんが、誰一人として行かうと申し出る者はありませんでした。さうでありますから、病氣見舞ひに來た人と種々の問答を行つて深遠で不可思議な佛法の理を開示して人々を導かうと、維摩居士が意圖してゐることは成就いたしません。但し文殊師利菩薩が佛陀釋尊の仰せを承つて維摩居士の方丈（二丈四方の居室）に行き、佛陀釋尊の本意を述べることによつて、まさに病氣見舞ひの問答が成就いたします。それ故にこの章の名稱を文殊師利問疾章と名づけるのであります。

（訓讀文）

文殊師利問疾章第五なり。

上來は復五百の聲聞・八千の菩薩に命ずと雖も、各昔日に屈を受けしを陳べて、皆辭して堪へずと曰ひ、一りとしても往かんと欲するもの無し。故に問疾を成ぜず。但し此に文殊旨を奉け、即ち方丈に就き正しく佛意を陳ぶるに至りて、方に問疾を成ず。故に因りて章の目と爲すなり。

「正説」の科段分け表



〔正説の科目段分け〕 (現代語譯)

此の文殊師利問疾章から以下、第十二章の見阿閼佛國章の中の其の事訖已りて還本處に復す。衆を舉げて皆見るの箇所までは經典全體を「序説」、「正説」、「流通説」に分けましたが、その第二の「正説」(經典の本論)であります。「正説」の中を二つに分けます。

第二に、此の第五章の文殊師利問疾章から以下、第十章の香積佛章まで全部で六章あります。この六章は、維摩居士が自己の居室の方丈の中において、二乗の人々には思議することのできない權智(衆生教化のための手段をめぐらす智慧)と實智(相對世界を超えた絶対眞實の智慧)との二つの智慧の眞理を、自らが説き述べて、上根(根機のすぐれてゐる人)・中根(根機の中程度の人)・下根(根機の劣つてゐる人)の人々を教化濟度することを説明してゐます。

第二に、菩薩行章から以下、見阿閼佛國章の中の衆を舉げて皆見るの箇所までは、維摩居士は自己の居室の方丈を出て、佛陀釋

尊のをられる菴羅樹園におもむき、佛陀釋尊と共に種々の深遠微妙な眞理を説き明して、維摩居士の方丈に於ける二乗には思議することのできない説法について、その證しをなして成立せしめることを説明してゐます。

一説では次のやうに云ひます。―ただ初めの六章（文殊問疾章）香積佛章を「正説」とする。菩薩行章から以下は「流通説」と爲すのである、―と。しかしながら此の科段分けを採用しない理由は、見阿閼佛國章の衆を擧げて皆見るの箇所で釋き明します。

(訓讀文)

此の章從り以下、見阿閼佛國章に入り其の事訖已りて還本處に復す。衆を擧げて皆見るに訖る以來は、經の三段の中の第二の正説なり。中に就きて開きて二と爲す。

第一に此の章從り以下、香積章に訖るまで凡そ六章有り。淨名正しく方丈の内に在りて自ら不思議の權・實二智の理を宣べて、三根の人を化することを明かす。

第二に菩薩行章從り以下、見阿閼佛國章に入りて衆を擧げて皆見るに訖る以來は、方丈より菴羅に就き、佛と共に種種の妙法を明して、方丈の不思議の説を證成することを明すなり。

一に云はく。正説は唯初めの六章に在り。菩薩行章從り以下、流通説と爲すなりと。而れども處に至りて當に釋すべし。

〔三根の人を化すの科段分け〕（現代語譯）

「正説」の中の第一の、維摩居士が自己の居室の方丈の中にあつて、三根（上根・中根・下根）の人を教化濟度する中について、それ自體を三つの項目に分けます。

第一に、文殊師利問疾章と不思議章との二章は、上根（根機のすぐれてゐる人）の人を教化濟度します。

第二に、觀衆生章と佛道章との二章は、中根（根機の中程度の人）の人を教化濟度します。

第三に、入不二法門章と香積佛章との二章は、下根（根機の劣つてゐる人）の人を教化濟度します。

(訓讀文)

第一の淨名正しく方丈に在りて三根の人を化す中に就きて、自ら三有り。

第一に問疾と不思議との二章は、上根の人を化す。

第二に觀衆生と佛道との二章は、中根の人を化す。

第三に入不二法門と香積との二章は、下根の人を化す。

〔上根の人を化すの科段分け〕(現代語譯)

維摩居士が方丈の中にあつて三根(上根・中根・下根)の人を教化濟度する中の第一の、文殊師利問疾章と不思議章との二章によつて上根(根機のすぐれてゐる人)を教化濟度する中について、亦二つの項目があります。

第一に、文殊師利問疾章の中には、法を説き明す主體者は維摩居士ただ一人であります。また問答の對象となつてゐる事からは、維摩居士が現在疾んでゐるといふただ一つの事がらであります。それ故に、二乗には思議することのできない眞理を、要約して説き明すと名づけるのであります。

第二に、不思議章の中には、諸々の如來や菩薩が皆登場してまゐります。また問答の對象となる事からも、廣く諸々の不思議な事がらを説き明します。それ故に、二乗には思議することのできない眞理を、廣く説き明すと名づけるのであります。上根の人は眞理を要約して説き明す、廣く説き明す、此の二つの説法を聞いて、大乘の教へに信を生じてさとりを深め、凡夫の階位より聖人の階位に登るのであります。

一説では次のやうに云ひます。―「正説」の中の第一の、維摩居士が自己の方丈の内にあつて正しく不思議の理を説法する中について、ただ二つの項目に分ける。文殊問疾章の一章は要約して不思議の理を説き明し、不思議章以下の五章は廣く不思議の理を説き明すのである。不思議章以下の五章は、文殊菩薩が維摩居士の病氣を見舞ひ問答することに因つて成り立つてゐる。不思議の理を説く經文は別々であるので、各章ごとに不思議の理を釋き明すべきである。―と。しかし今は此の説は採用せず、前述の科段

分けに因つて釋き明します。

(訓讀文)

第一の二章を擧げて上根を化す中に就きて、亦二有り。

第一に問疾章の中には、人は則ち唯淨名一人なり。事は則ち唯現疾の一事なり。故に名づけて略して不思議を明

すと爲す。

第二に不思議章の中には、人は則ち諸佛・菩薩皆現す。事は則ち廣く種種の不思議の事を明す。故に名づけて廣く

不思議を明すと爲すなり。上根の人は此の廣・略の二説を聞き、信を生じて解を益し、凡を改めて聖と成る。

一に云はく。第一の正しく方丈に在りて不思議を宣ふる中に就きて、但開きて二と爲す。問疾の一章は略して不思議

を明し、不思議章以下の五章は廣く不思議を明すなり。五章は即ち上の事に因りて來る。故に文を分つも亦即ち

章に當りて釋すべきなりと。然るに今は前の釋に據りて述ぶるなり。

〔文殊師利問疾章の科段分け〕(現代語譯)

此の文殊師利問疾章の中を二つの項目に大別します。

第一に、初めから更に見る可らずとに訖るまでは、文殊菩薩が病氣を見舞ひ問答する由來であります。

第二に且く是の事を置くから以下は、文殊菩薩と維摩居士との問答を正しく説き明してゐます。

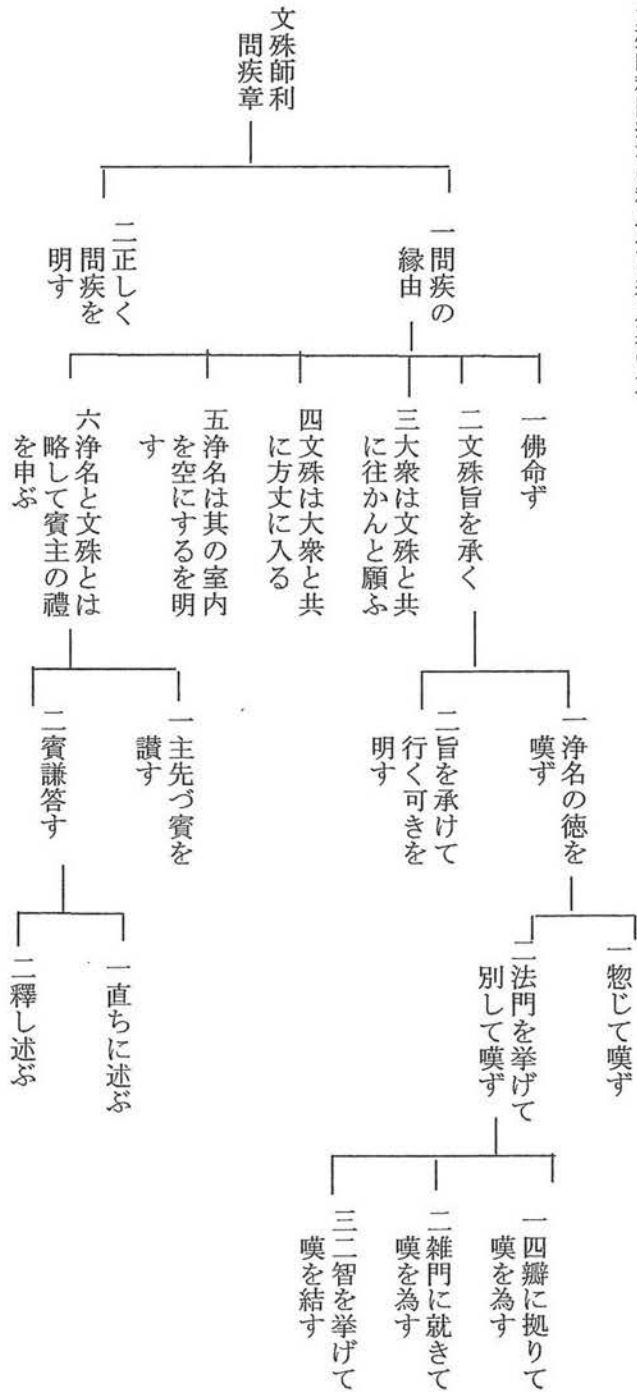
(訓讀文)

此の問疾章に就きて初めに開きて二と爲す。

第一に初め從り更に見る可らずとに訖るまで、問疾の緣由と名づく。

第二に且く是の事を置くから從り以下、正しく問疾を明す。

文殊師利問疾章の科段分け表（其の一）



〔問疾の緣由の科段分け〕 (現代語譯)

文殊師利問疾章の第一の、文殊菩薩が維摩居士の病氣を見舞ひ問答する由來について、亦六つの項目に分けます。

第一に、維摩居士の病氣を見舞ひに行くやう、佛陀釋尊が文殊菩薩に命じます。

第二に、文殊菩薩は、佛陀釋尊の仰せを謹んで承ります。

第三に、是に於て衆中のから以下は、諸々の菩薩をはじめ大勢の人たちは、文殊菩薩と一緒に維摩居士のもとへ行きたいと願ふことを説き明してゐます。

第四に、是に於て文殊から以下は、文殊菩薩は大勢の人たちと共に、維摩居士の方丈に入ります。

第五に、爾の時に長者から以下は、維摩居士は、文殊菩薩が大勢の人たちと一緒に来ることを知つて、自分の居室内を空にする
ことを説き明します。

第六に、維摩詰の言はくから以下は、維摩居士がお客を迎へる主人としての挨拶を、文殊菩薩がお客としての挨拶を、要約して
述べます。そして二人の間答によつて「来る」と「去る」とには定まつた相が無いことについて、衆生の疑ひをとり除くこと
を説き明します。

(訓讀文)

第一の間疾の縁由の中に就きて亦開きて六と爲す。

第一に佛命す。

第二に文殊旨を奉く。

第三に是に於て衆中の従り以下、大衆は文殊と共に往かんと願ふことを明す。

第四に是に於て文殊従り以下、文殊は大衆と共に方丈に入る。

第五に爾の時に長者従り以下、淨名は文殊大衆と共に來ると知りて、其の室内を空にするを明す。

第六に維摩詰の言はく従り以下、淨名と文殊とは略して賓主の禮を申べ、往復して疑ひを除くことを明す。

〔佛命す〕

(現代語譯)

文殊菩薩が維摩居士を見舞ひ問答する由來の中の第一の、佛陀釋尊が病氣見舞ひに行くやう命するところは經典を御覽なさい。

(訓讀文)

第一は見つ可し。

經典（佛命す）

爾ノ時ニ佛告クニ文殊師利ニ。

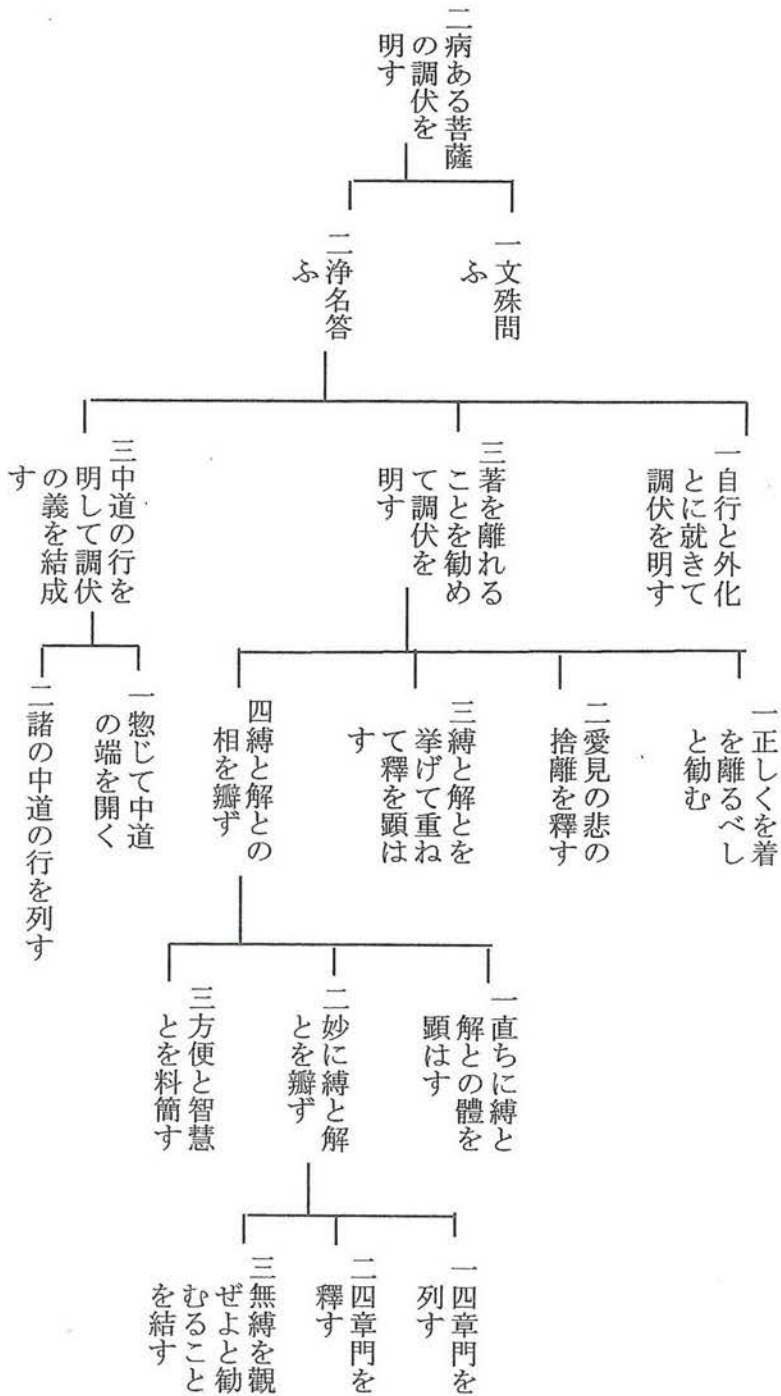
汝行ニ詣シテ維摩詰ニ一問ヘト疾ヲ。

經典訓讀文

爾そのときに佛ぶつ告こグニ文殊師利ぶんじゆしりニ。汝なんぢ維摩詰ゐまきつに行詣ぎやうけいして疾しつを問とヘト。

經典現代語譯

その時に佛陀釋尊は、文殊師利菩薩に申しつけられた。「汝は維摩居士のところへ行つて病氣を見舞ひなさい。」と。



〔文殊旨を承くの科段分け〕（現代語譯）

文殊菩薩が維摩居士の病氣を見舞ひ、問答する由來を述べる中の第二の、文殊菩薩が佛陀釋尊の仰せを謹んで承る中について、亦二つの項目があります。

第一に、維摩居士はすぐれた徳を身につけてゐるので、應對するのは極めて難しいことを先づ讃嘆します。

第二に、然りと雖もから以下は、文殊菩薩は佛陀釋尊の仰せを承り、病氣見舞ひに出かけることを正しく説き明します。

〔訓讀文〕

第二の旨を奉くる中に就きて亦二有り。

第一に先づ淨名の難酬の徳を嘆ず。

第二に然りと雖も従り以下、正しく旨を承けて行く可きを明す。

〔淨名の難酬の徳を嘆ずるの科段分け〕（現代語譯）

文殊菩薩が佛陀釋尊の仰せを謹んで承る中の第一の、維摩居士はすぐれた徳を身につけてゐるので應對することは極めて難しいことを讃嘆する中について、亦二つの項目があります。

第一に、維摩居士の徳行を總體的に讃嘆します。彼の上人は酬對（經典は酬對）を爲し難しといふ經典がこれでありま

第二に、深く實相に達しから以下は、さとりに到達してゐる維摩居士の徳行を別々に擧げて讃嘆します。

〔訓讀文〕

第一の難酬を嘆ずる中に就きて亦二有り。

第一に惣じて嘆ず。彼の上人は酬對（經典は酬對）を爲し難しとは是なり。

第二に深く實相に達し従り以下、法門を擧げて別して嘆ず。

〔惣じて嘆ず〕（現代語譯）

（この箇所について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。）

經典（惣じて嘆ず）

文殊師利曰シテ、佛ニ言ク。世尊。彼ノ上人ハ者難シ、爲シニ訓對ヲ。

經典訓讀文

文殊師利佛に曰して言はく。世尊、彼の上人は訓對を爲し難し。

經典現代語譯

文殊師匠利菩薩は佛陀釋尊に申しあげて言つた。「あの維摩居士さんはすぐれた徳があつて、應對するのは極めて難しい方です。」

〔法門を擧げて別して嘆ずの科段分け〕（現代語譯）

維摩居士はすぐれた徳を身につけてゐるので應對することは極めて難しいことを讃嘆する中の第二に、維摩居士の徳行を別々に擧げて讃嘆しますが、その中には九つの句があります。それを三つの項目に分けます。

第一に、初めの四つの句は、維摩居士の徳行を四無礙辨に據つて讃嘆をなします。

第二に、四つの句があります。維摩居士の種々とりどりの徳行（因地、果地の諸行・外化行・自行）について讃嘆をなします。

第三に、一つの句があります。實智と權智との二つの智を擧げて、讃嘆の結びの文言とします。

（訓讀文）

中に就きて九句有り。分ちて三重と爲す。

第一に初めの四句は四辨に據りて嘆を爲す。

第二に四句有り。雜門に就きて嘆を爲す。

第三に一句有り。二智を擧げて嘆を結す。

〔四辨に據りて嘆を爲す〕（現代語譯）

(維摩居士の徳行を別々に擧げて讃嘆する中の第一に、四無礙辨に據つて讃嘆します。)

深く實相に達しとは、義無礙辨(教法の意義内容に通達して滞ることがない)であります。眞理は虚妄なるものを一切絶ちきつてをり、現象世界のとははれを超越してゐます。それ故に實相(萬有の眞實ありのままのすがた)と言ひます。善く法要を説きとは、辭無礙辨(諸方の言語に通達自在である)であります。辨才滞り無くとは、樂説無礙辨(法無礙・義無礙・辭無礙を以て衆生のために自在に説く)であります。智慧無礙なりとは、法無礙辨(教法について滞ることがない)であります。

(訓讀文)

深く實相に達しとは、義辨なり。眞理は偽を絶ち有相を超えたり。故に實相と稱す。善く法要を説きとは、辭辨なり。辨才滞り無くとは、樂説辨なり。智慧無礙なりとは、法辨なり。

經典(四辨に據りて嘆を爲す)

深ク達シニ實相ニ。善ク説キニ法要ヲ。辨才無ク滞リ。智慧無礙ナリ。

經典訓讀文

深く實相に達し、善く法要を説き、辨才滞り無く、智慧無礙なり。

經典現代語譯

「維摩居士さんは、萬有の眞實ありのままのすがたに深く通達し、善く佛法のかなめを説き明し、巧みな辨才を以て自在に説き、眞理を見きはめる叡知を以て滞るところなく教へを説きます。」

〔雜門に就きて嘆を作す〕(現代語譯)

維摩居士の徳行を別々に擧げて讃嘆する中の第二に、一切の菩薩のから以下の四句は、種々とりどりの徳行について讃嘆をなします。

一切の菩薩の法式悉く知り（菩薩が實踐すべき一切の行法を悉く知つてをり）とは、菩薩の因地（成佛の因としての佛道修行の段階）に於ける一切の諸善行に善く通達してゐるのであります。諸佛の祕藏に入るを得ずといふこと無く（衆生には解し難い諸佛の深奥なる妙法に悉く通達してをり）とは、果地（佛道修行を因として得られた、果報としての佛陀の階位）に於て説く十二義（十二の眞理、内容は不明）に善く通達してゐることを説き明かすのであります。肇法師は次のやうに云つてゐます。—先づ初めに菩薩の實踐すべき行法を知り、そのはたらきが遠く佛果に到達し、諸佛の深奥なる妙法に通達するのである。「祕藏」とは、諸佛が身體・説法・意を以てする、衆生に解し難い妙法を藏しもつてゐることを謂ふのである、—と。以上の經典の二句は、因と果との諸行が相關連して、因と果との眞理に悉く通達してゐることを説き明してゐます。衆魔を降伏し（諸々の魔をくじき伏せしめ）とは、四魔（身心を惱ます貪りなどの煩惱魔・種々の苦しみを生ずる色受想行識の五陰魔・死魔・人の善行をさまたげる他化自在天の魔）をくじき伏せしめることを説き明してゐます。此の句は、魔を降すといふ剛いはたらきを讃嘆してゐます。亦次のやうに言ふのも良いでせう。外化の行（他者を教化濟度する行）を讃嘆してゐる。神通に遊戯す（不可思議、超人的な力を以て衆生を自由自在に教化する）とは、五通（天眼通・天耳通・宿命通・他心通・神足通の不可思議、超人的な五つの力）を以て衆生を教化濟度することを意のままに爲し得ます。即ちその實體は「遊戯」と同じであります。此の句は、衆生を教化するといふ柔和なはたらきを讃嘆してゐます。亦次のやうに言ふのも良いでせう。自行（自らの力を以て實踐する）を讃嘆してゐる。以上の二句は、剛いはたらきと柔和なはたらきとが相關連して、剛いはたらきと柔和なはたらきを用ひるについて、いかなる對應も爲し得ることを説き明してゐます。

（訓讀文）

一切の菩薩の從り以下の四句は、第二に雜門に就きて嘆を爲す。
 一切の菩薩の法式悉く知りとは、善く因地の一切の諸行に達す。諸佛の祕藏に入るを得ずといふこと無くとは、善く果地所説の十二義に達することを明すなり。肇法師の云はく、近く菩薩の儀式を知り、遠く諸佛の祕藏に入る。祕藏とは謂はく佛の身・口・意の祕密の藏なりと。此の二句は因果相對して因果の理達せざる所無きを明す。衆魔を降伏しとは、四魔を降すを明すなり。此の句は其の剛の用を嘆す。亦可なるべし。外化の行なり。神通に遊戯すとは、五通に乗じ

て物を化するに意に適ふ。即ち義遊戯に同じ。此の句は其の柔の用を嘆す。亦可なるべし。自行なり。此の二句は剛柔相對して剛柔の義能はざる所無きを明す。

經典（雜門に就きて嘆を作す）

一切ノ菩薩ノ法式悉ク知り。諸佛ノ祕藏ニ無クレ不ト云フコト得レ入ルヲ。降ニ伏シ衆魔ヲ一。遊ニ戲ス神通ニ一。

經典訓讀文

一切の菩薩の法式悉く知り、諸佛の秘藏に入るを得ずといふこと無く、衆魔を降伏し神通に遊戯す。

經典現代語譯

「維摩居士さんは、菩薩が實踐すべき一切の行法を悉く知つてをり、衆生には解し難い諸佛の深奥なる妙法に悉く通達してをり、諸々の魔をくじき伏せしめ、不可思議、超人的な力を以て衆生を自由自在に教化します。」

〔二智を擧げて嘆を結す〕（現代語譯）

維摩居士の徳行を別々に擧げて讚嘆する中の第三に、其の慧も方便も皆已に度を得たり（維摩居士は、相對の世界を超えた絶對眞實の智慧も衆生教化のための手段をめぐらす智慧も、皆已に身につけ極め盡してゐる）といふ實智と權智との二つの智慧を擧げて、讚嘆の結びの文言とします。

慧とは實智であります。方便とは權智であります。維摩居士はこの二つの智慧を身につけ極め盡してゐますので、上述した諸々の徳行も亦悉く純一無雜であることを説き明してゐます。

（訓讀文）

其の慧も方便も皆已に度を得たりとは、第三に二智を擧げて嘆を結す。

慧とは實智なり。方便とは權智なり。能く此の二智を具するが故に上に嘆する所の諸徳も亦悉く清しと明す。

經典 (二智を擧げて嘆を結す)

其ノ慧モ方便モ皆已ニ得タリ度ヲ。

經典訓讀文

其の慧も方便も皆已に度を得たり。

經典現代語譯

「維摩居士さんは、相對の世界を超えた絶対眞實の智慧も、衆生教化のための手段をめぐらす智慧も、皆己に身につけ極め盡してをります。」

〔旨を受けて行く可きを明す〕(現代語譯)

文殊菩薩が佛陀釋尊の仰せを謹んで承る中の第二に、然りと雖もから以下は、佛陀釋尊の仰せを謹んで承り、文殊菩薩が維摩居士の病氣見舞ひに出かけることを正しく説き明します。

(訓讀文)

然りと雖も從り以下、旨を奉くる中の第二に正しく旨を承けて往く可きを明す。

經典 (旨を承けて行くべきを明す)

雖モレ 然リト。 當ニ承ケテニ 佛ノ聖旨ヲ一 詣テ 問フ也 疾ヲ。

經典訓讀文

然りと雖も、當に佛の聖旨を承けて彼に詣りて疾を問ふべし。

經典現代語譯

「以上申し述べました通り維摩居士さんは諸々の徳行を身につけてゐて應待するのは難しいのでありますが、世尊の深いみ心を謹んで承り、私文殊が維摩居士さんのもとへ行つて病氣見舞ひをいたしませう。」

〔大衆は文殊と共に往かんと願ふ・文殊は大衆と共に方丈に入る〕（現代語譯）

文殊菩薩が維摩居士の病氣を見舞ひ問答する由來の中の第三は、諸々の菩薩をはじめ大勢の人たちが文殊菩薩と一緒に維摩居士のもとへ行きたいと欲するのであり、第四は、文殊菩薩は大勢の人たちと共に維摩居士の方丈のある毘耶離大城に入るのであります。この第三と第四は經典を御覽なさい。

（訓讀文）

第三と第四とは見つ可し。

經典（大衆は文殊と共に往かんと願ふ）

於テ^レ是^ニ衆中ノ諸ノ菩薩・大弟子・釋・梵・四天王。咸作サクニ是^ニ念ヲ一。今ニ一太士。文殊師利ト維摩詰ト共ニ談セバ。必ズ説カントニ妙法ヲ一。即時ニ八千ノ菩薩・五百ノ聲聞・百千ノ天人。皆欲スニ隨從セント一。

經典訓讀文

是^ニ於^テ衆中ノ諸ノ菩薩・大弟子・釋・梵・四天王、咸是^ノ念^ヲ作^ス。今ニ一太士、文殊師利と維摩詰と共に談ぜば必ず妙法を説かんと。即時に八千の菩薩・五百の聲聞・百の天人、皆隨從せんと欲す。

經典現代語譯

文殊菩薩が病氣見舞ひに行くことになつた時、その場に居合せた諸々の菩薩・佛弟子・帝釋天・梵天王・四天王たちは、文殊菩薩と維摩居士とが對談すれば必ず甚深微妙の佛法を説くにちがひあるまいと、皆思ひました。そこで直ちに、八千人の菩薩・五百人の佛弟子・數かぎりない天上界の人々は、文殊菩薩に隨つて維摩居士のもとへ行きたいと、皆欲しました。

經典（文殊は大衆と共に方丈に入る）

於テ、是ニ文殊師利。興ニ諸ノ菩薩・大弟子衆・及ビ諸ノ天人ノ一。恭敬圍遶セラレテ。入ルニ毘耶離大城ニ一。

經典訓讀文

是に於て文殊師利、諸の菩薩・大弟子衆・及び諸の天人の興に、恭敬圍遶せられて、毘耶離大城に入る。

經典現代語譯

そこで文殊菩薩は、諸々の菩薩たち、佛弟子たち及び諸々の天上界の人々に、恭しくとり圍まれて、維摩居士の方丈のある毘耶離大城に入りました。

〔淨名は其の室内を空にすることを明す〕（現代語譯）

文殊菩薩が維摩居士の病氣を見舞ひ問答する由來の中の第五は、維摩居士は、文殊菩薩が大勢の人たちと一緒に來ることを知つて、その居室内を空つぽにすることを説き明すのでありますが、その中についてそれ自體に二つの項目があります。

第一に維摩居士は居室内を空つぽにし、それを以つて佛法を論ずる端緒にすることを説き明します。

第二に既に其の舎に入りから以下は、文殊菩薩が空つぽの室内を見ることを説き明します。

（訓讀文）

但第五に淨名は文殊大衆と來ると知りて其の室内を空するを明す中に就きて自ら二有り。

第一に淨名其の室内を空じて以て論の端と爲すことを明す。

第二に既に其の舎に入り従り以下文殊室の空なるを見るを明す。

經典（淨名は其の室内を空にするを明す）

爾ノ時ニ。長者維摩詰。心ニ念ラク。今ヲ文殊師利興ニ大衆一俱ニ來ルト。即チ以テニ神力ヲ一空ジテニ其ノ室内ヲ一。除キ去シ所有及ビ諸ノ侍

者ヲ。唯置キニ一牀ノミヲ。以テ疾ヲ而臥ス。

文殊師利。既ニ入りニ其ノ舎ニ。見ル。其ノ室空ニシテ無クニ諸ノ所有ニ。獨リ寢タルヲ一牀ニ。

經文訓讀文

爾そのときに、ちやうじやゆいまきつ長者維摩詰、こころ心に念へらく。いまもんじゆしりだいしゆ今文殊師利大衆と俱ともに來ると。即すなはちじんりき神力を以て其その室内しつないを空くうして、しやうおよ所有及び諸もろもろの侍者じしやを除去じこし、唯一牀ただいっしやうのみを置き、疾しつを以て臥ふす。文殊師利、既すでに其その舎いへに入り、其その室空しつくうにして諸もろもろの所有しやうな無なく、獨ひとり一牀いっしやうに寢いねたるを見る。

經典現代語譯

そのときに、長者の維摩居士は、文殊菩薩が大勢の人たちと一緒にやつて來ることを、心の中で念ひました。そこで神變不可思議な力を以てその居室内を空からっぽにし、あらゆる物及び諸々のお付きの者たちを除去し、ただ一つの寢床だけを置いて、病氣の姿をして臥せつてをりました。

文殊菩薩がその家に入つて見ると、室内は空からっぽで、諸々の物は一切無く、維摩居士が獨り寢床に臥せつてゐるのでした。

「室を空からするに因りて五事を生じ、疾を現あらするに由りて六論を生ず」(現代語譯)

そもそも維摩居士が病氣の姿を現はす意圖を論ずるならば、新たに佛道を學ぶ菩薩がたとへ病びやうひを得て患わづひ多おほき身みになつた場合でも、大慈悲心だいじひしんを起し、心に安らぎを得て衆生を教化濟度すること、そのことに倦うみ怠たいりの無なからしめんと欲ほするからであります。維摩居士がその居室かむを空からっぽにするのは、衆生をして是とか非とかの一方いっぽうのみに執着する心を捨て去すらせんが爲ためであります。しかし個別に論ずるならば、居室かむを空からっぽにすることに因よつては五つの事ことがらが生じ、病氣の姿を現はすことに由よつては六つの問答もんたうが生じます。

居室かむを空からっぽにすることに由よつて生ずる五つの事ことがらとは、

第一に、文殊菩薩は居室かむが空からっぽにしてあるのを見て、維摩居士に質問しつもんしました。「維摩居士さん、如何なる理由りゆうで此の居室かむを空から

つばにしておられるのですか。」と。維摩居士は、「諸佛の國土も亦（究極の眞理に於ては一切平等であつて）空くうであります。空であるのは私の居室だけではありませんよ。」と答へました。

第二に、文殊菩薩は質問しました。「どうしてお付の從者たちは居ないのですか。」と。維摩居士は、「一切の衆魔及び諸々の外道げど（佛教以外の異教徒）は、（教化して佛道に従はしめますから）皆私の從者なのです。」と答へました。

第三に、舍利弗は居室が空つばにしてあるのを見て、心の中で思ひました。「此に集つてきた諸々の菩薩や世尊の大弟子たちは、何に座るのであらうか。」と。維摩居士はこの舍利弗の心の中の思ひを察知し、先ず座席を求めるべきではない、即ち一切の執着心を捨て去れといふ究極のことわりを擧げ、彈呵して言ひました。「おい舍利弗さんよ、佛法を求めるために此に來たのですか。座席を求めるために來たのですか。」と。そして須彌燈王如來から師子の座を借りて、それによつて八地以上の菩薩の種々の不可思議解脱の理を廣く説き明すのであります。

第四に、普現色身菩薩ふげんしきんぼさつ（あまねく種々の身を示現して衆生を濟度する菩薩）は居室が空つばにしてあるのを見て、維摩居士に質問しました。「維摩居士さん、あなたの父母や妻子及び善き朋友たちは、どなたなのでせうか。象や馬、乗りもの、下男下女の召使ひたちは、何處に居るのでせうか。」と。維摩居士は、「究極完全なる智慧が菩薩の母なのです。方便ほうべん（衆生を導く巧みなてだて）が菩薩の父なのです。」と答へました。そこで八地以上の菩薩の種々の德行を廣く顯示するのであります。

第五に、舍利弗は居室が空つばにしてあるのを見て、心の中で思ひました。「もはや食事の時刻になつた。此に集つて來てゐる諸々の菩薩さんたちは、何を食へさせて貰へるのだらうか。」と。舍利弗がさう思つたとき、維摩居士はその思ひを察知し、先づ八解脱はちげだつ（三界の煩惱を捨離しその繫縛から解脱する八種の禪定）を以て彈呵して言ひました。「佛陀釋尊は八解脱をお説きになつた。あなたは、その教へをうけて實踐しなさい。食欲の思ひをつのらせながら佛法を聞くことなど、あつてはなりませんよ。」と。そして香積佛かうしやくぶつに請うて香飯を求め、一鉢の香飯を以て一切の人々に與へて満ち足らしめ、それに因つて佛陀の衆生教化のありさまを種々に顯示するのであります。

維摩居士の居室を空つばにすることに因つて生ずる五つの事からは、要約しますと以上の通りであります。病氣の姿を現はすこ

ところで文殊菩薩と普現色身菩薩とは聲を發して質問を爲し、舍利弗はただ心の中で思ふのみである、その相違について釋き明しませう。この二人の菩薩は維摩居士と同じく八地以上の大乘の菩薩であつて、衆生を教化濟度することは自在であります。それ故に心に思ふことがあれば、それを聲を發して質問しても、自己の至らなさに恥らひをもつことなど無いのであります。但し舍利弗は、衆生教化には心の及ばない小乗の修行者で、到達してゐる境地も低い身ですから、諸々の八地以上の大乘の菩薩に對應することは思ふにまかせないのであります。それ故に聲を發して質問することはできず、ただ心の中で思ふのみなのであります。

(訓讀文)

夫れ疾を現するの情を論ぜば、新學の菩薩をして疾患に遇ふと雖も而も、大悲を起し、心を安んじて物を化し、憊廢有ること莫からしめんと欲す。其の室を空ずることは正しく、衆生の是非の惑ひを遣らんと欲するが爲なり。而れども別に就きて論を爲さば、室を空ずるに因りて五事を生じ、疾を現するに由りて六論を生ずるなり。室を空ずるに因りて五事を生ずとは、

第一に文殊室の空なるを見て淨名に問ふ。居士よ、此の室何を以て空なるやと。淨名答へて言く。諸佛の國土も亦復空なり。但我室のみに非ずと。

第二に文殊問ふ。何ぞ侍者無きやと。淨名答へて言はく。一切の衆魔及び諸の外道は皆吾が侍也と。

第三に身子室の空なるを見て念ひを作す。此の諸の菩薩・大弟子等當に何に於てか座すべきやと。淨名意を知り、先づ至理を擧げて座を求むべからずと呵して曰く。唯舍利弗、法の爲なるや、床座の爲なるやと。即ち座を燈王に借り、仍りて廣く菩薩の種種不思議の理を明すなり。

第四に普現色身菩薩の空なるを見て淨名に問ふ。居士よ、父母・妻子及び諸の知識悉く是れ誰と爲すや。象馬・車乘・奴婢・僕使皆何れの所に在るやと。淨名答へて言はく。智度は菩薩の母なり。方便を以て父と爲すと。即ち廣く大士の種種の行を顯はす。

第五に身子室の空なるを見て念ひを作す。日時已に至る。此の諸の菩薩當に何を食すべきやと。是に於て淨名意

を知り、先ず八解脱を以て呵を爲して曰はく。佛は八解脱を説く。仁者受行すべし。豈に欲食を雜へて法を聞かんやと。即ち飯を香土に請ひ、一食を以て一切に充滿し、因りて種種に佛事を爲すの義を顯はす。

室を空するに因りて五事を生ずること略して是の如し。

疾を現するに因りて六論を生ずとは、

第一に文殊問ひて言はく。居士よ、此の疾は何れの所因より起るやと。淨名答へて言はく。菩薩の病ひは大悲を以て起ると。

第二に文殊問ひて言はく。居士よ、此の疾は其れ生ずること久しきやと。淨名答へて言はく。癡に従りて愛有れば即ち我が病ひ生ずと。

第三に文殊問ひて言はく。居士よ、此の疾は當に云何して滅すべきやと。淨名答へて言はく。一切の衆生病むを以て是の故に我も病む。若し一切衆生の病ひ滅すれば。即ち我が病ひも滅す。

第四に文殊問ふ。居士よ、此の疾は何等の相と爲すやと。淨名答へて言はく。我が病ひは形無し。見る可からずと。第五に文殊問ふ。菩薩は云何有疾の菩薩を慰諭せんやと。淨名答へて言はく。身の無常なるを説きて身を厭離せよ

とは説かざれ等の義をもつて慰諭す可しと。

第六に文殊問ひて言はく。有疾の菩薩は云何其の心をか調伏すべきやと。淨名答へて言はく。有疾の菩薩は應に是の念を作すべし。今我が此の病は皆前世の妄想・顛倒、諸の煩惱従り生ず。實法有ること無し。誰か病ひを

受くる者あらん。先づ應に病ひの因を識り後に教へて觀を作さしむべしと。

疾に因りて六論を生ずること略して是の如きなり。

而るに文殊と普現とは口を發きて問ひを顯はし、舍利弗は但念ふのみなることは、二大士は淨名と同じく是れ大乘なり。所以に若し心に懷ふこと有れば即ち口を發きて相問するに懸る所無きなり。但し身子は既に小乘爲れば、諸の大士に於て即ち進退便し難し。所以に口を發く能はず。但念ふのみなり。

〔淨名と文殊とは略して賓主の禮を申ぶの科段分け〕

文殊菩薩が維摩居士の病氣を見舞ひ問答する由來の中の第六は、維摩居士はお客を迎へる主人としての挨拶を、文殊菩薩はお客としてそれに答へる挨拶を、簡略に申し述べます。その中に二つの項目があります。

第一に、主人の維摩居士は、先づお客の文殊菩薩を讃めたたへます。

第二に、お客の文殊菩薩は、それに對しついで答へます。

(訓讀文)

時に維摩詰從り以下、第六に略して賓主の禮を申ぶ。中に就きて亦二有り。

第一に主先づ賓を讃す。

第二に居士是の如し從り以下、賓謙答す。

〔主先づ寶を讀す〕(現代語譯)

維摩居士は主人として、文殊菩薩はお客として、夫々が簡略に挨拶を述べる中の第一は、主人の維摩居士がお客の文殊菩薩を讃めたたへます。その中には、それ自體に二つの意味合ひがあります。

第一に、善く來れり文殊師利とは、文殊菩薩の訪問を直ちに讃めてゐます。その訪問は衆生の機根に合致してゐて、衆生に大きな利益をもたらす、と讃めるのであります。「來る」と「去る」とは、「向ふ」と「背く」といふ言葉について言ふのであります。

ここでは方丈から菴羅樹園をのぞみ見て、方丈に向つてゐるのを「來る」とし、菴羅樹園から方丈を背にしてゐるのを「去る」とするのであります。不來の相にして而も來るとは、相對の世界を超えた眞如、實相の世界について論ずるならば、文殊菩薩は衆生の教化濟度のために何時でも何處へでも意のままに姿を現はすことのできる八地以上の菩薩でありますから、菴羅樹園からふみ出した文殊菩薩の一步はその瞬間に消えてしまひ、忽然と方丈に姿を現はすのであつて、眞如、實相の世界では文殊菩薩は一步一步

と歩んで方丈に到達することはありません。それ故に不來の相にしてと云ふのであります。しかしながら相對世界のこの現實の世の中に於ては、人々を伴つて方丈へ向ふのでありますから、菴羅樹園からふみ出した文殊菩薩の一步は、次の一步、更に次の一步と連續して消えることはなく、方丈に到達するのであります。それ故に而も來ると云ふのであります。

第二に、不見の相にして而も見るとは亦、相對の世界を超えた眞如、實相の世界について論ずるならば、文殊菩薩は衆生の教化濟度のために何時でも何處へでも自在に姿を現はすことのできる八地以上の菩薩でありますから、菴羅樹園からふみ出した文殊菩薩の一步は瞬時にして消えてしまひ、忽然と方丈に姿を現はすのであつて、眞如、實相の世界では文殊菩薩は歩を運んで方丈に到達することはなく、歩を運んで方丈のあり様を見ることは無いのであります。それ故に不見の相にしてと云ふのであります。しかしながら相對世界のこの現實の世の中に於ては、人々を伴つて方丈に向ふのでありますから、菴羅樹園からふみ出した文殊菩薩の一步は、次の一步次の一步と連續して消えることはなく、方丈に到達し、そして方丈のあり様を見ることができるのであります。それ故に而も見ると云ふのであります。

以上の此の二句は文殊菩薩が、維摩居士の方丈を來訪するについて、相對世界にとらはれない、相對世界を超えた眞實の相を身につけてゐることを讚嘆するのであります。

(訓讀文)

第一の主の賓を讚する中に就きて自ら二の意有り。

一に善く來れり文殊師利とは、直に來るを讚す。物の機に當りて必ず深き益有り。去ると來るとは、向ふと背くとに語を爲すなり。方丈従り菴羅を望みて來ると爲し、菴羅依り方丈を望みて去ると爲す。不來の相にして而も來るとは、實の中に論を爲さば、菴羅の一步は即ち謝し、方丈に至らず。故に不來の相にしてと云ふ。而れども假の中に論を作さば、菴羅の一步は相續して滅せず。方丈に來至す。故に而も來ると云ふ。

二に不見の相にして而も見るとは、亦實の中に論を作さば、菴羅の文殊は即ち謝し、方丈に至りて見る可きこと無し。故に不見の相にしてと云ふ。而れども假の中に論を作さば、菴羅の文殊は相續して滅せず。即ち方丈に至りて而も見

ることを得。故に云ふ而も見ると云ふなり。此の二句は來る相を存せざることを讚するなり。

經典（主先づ寶を讚す）

時ニ維摩詰ノ言ク。善ク來レリ文殊師利。不來ノ相ニシテ而モ來リ不見ノ相ニシテ而モ見ルト。

經典訓讀文

時ときに維摩詰ゆいまきつの言いはく。善よく來きたれり文殊師利もんじゆしり。不來ふらいの相さうにして而しかも來きたり、不見ふけんの相さうにして而しかも見みると。

經典現代語譯

その時維摩居士は言ひました。「善くお出でになられました文殊菩薩さん。『來る』といふ現象面の相を超えて、而もお出でになり、『見る』といふ現象面の相を超えて、而も方丈のあり様をご覽になつてゐますね。」と。

〔寶謙答すの科段分け〕（現代語譯）

維摩居士は主人として、文殊菩薩はお客として、夫々が簡略に挨拶を述べる中の第二に、文殊師利の言はくから以下は、お客の文殊菩薩がつつしんで答へます。その中には亦二つ項目があります。

第一に、文殊菩薩は直ちに應答いたします。

第二に、そのやうに應答した理由を釋き明します。

（訓讀文）

文殊師利の言はく從り以下、第二に寶謙答す。中に就きて亦二有り。

第一に直ちに述ぶ。

第二に釋し述ぶ。

〔直ちに述べ〕（現代語譯）

（お客の文殊菩薩がつつしんで答へる中の第一に、直ちに應答いたします。）

是の如しとは、維摩居士の言ふことは眞理に適つてゐて全く正しい、といふことを説き明してゐます。若し來り已らば更に來らずとは、相對世界のこの現實の世の中の於ては人々を伴つて方丈に向ふのでありますから、文殊菩薩は一步一步と歩んで方丈に到達しますが、文殊菩薩は何時でも何處へでも意のままに姿を現はすことのできる八地以上の菩薩でありますから、相對世界を超えた眞如、實相の世界に於ては文殊菩薩は忽然と姿を現はすのであつて、歩を運んで方丈に來ることはありません。若し去り已らば更に去らずとは、前述と同様に、眞如、實相の世界に於ては「一步一步と歩んで去る」といふことは無いのであります。次に若し見已らば更に見ずといふ經典があるべきであります、ただその文言を省略してゐるだけであります。

（訓讀文）

是の如しとは、居士の言ふ所理として是に非ざることを無きを明かす。

若し來り已らば更に來らずとは、若し假の中に来り竟る者も、實の中には更に來らざること有るなり。若し去り已らば更に去らずとは、亦同じ。次に應に若し去り已らば更に去らず有るべし。但文略せるのみ。

經典（直ちに述べ）

文殊師利ノ言ク。如シレ 是ノ居士。若シ來リ已ラバ更ニ不レ 來ラ。若シ去リ已ラバ更ニ不レ 去ラ。

經典訓讀文

文殊師利の言はく。是の如し居士。若し來り已らば更に來らず。若し去り已らば更に去らず。

現代語譯

文殊菩薩は答へて言ひました。「おつしやる通りです、維摩居士さん。若し「來ることがはつてしまつたならば」、更に「來る」といふことはありません。若し「去ることがはつてしまつたならば」、更に「去る」といふことはありません。」

〔釋し述ぶ〕（現代語譯）

お客の文殊菩薩がつつしんで答へる中の第二に、**所以は何んから以下は、**前述の通り文殊菩薩は直ちに應答いたしますが、そのやうに應答した理由を釋き明します。

疑問を提示して云ひます。「去る」といひ、「來る」といひ、文殊菩薩の答へはその内容が定まつてゐないやうに思ひますが、その理由は何故でありませうか。―その理由を釋き明して言ひます。來る者は從來する所無くとは、相對世界のこの現實の世の中の於ては、文殊菩薩は人々を伴つてをりますから、歩を運んで維摩居士の方丈に「來る」のですが、相對世界を超えた眞如、實相の世界について論ずるならば、文殊菩薩は衆生の教化濟度のために何時でも何處へでも意のままに姿を現はすことのできる八地以上の菩薩でありますから、菴羅樹園からふみ出した文殊菩薩の一步は瞬時にして菴羅樹園に於て消えてしまひ、文殊菩薩は忽然として方丈に姿を現はし方丈に歩を運ぶのであります。それ故に從來する所無く（何處から來たといふことも無く忽然として現はれると云ふのであります）。去る者は至る所無しとは、相對世界のこの現實の世の中に於ては文殊菩薩は人々を伴つて、歩を運んで菴羅樹園を「去り」方丈に到達するのですが、相對世界を超えた眞如、實相の世界について論ずるならば、文殊菩薩は何時でも何處へでも自在に姿を現はすことのできる八地以上の菩薩でありますから、菴羅樹園に於ける文殊菩薩は自らがその姿を消してしまひ、忽然として方丈に姿を現はすのであつて、歩を運んで菴羅樹園を「去り」方丈に到達するのではありません。それ故に至る所無し（歩を運んで方丈に到達するのでは無い）と言ふのであります。見る可き所とは、相對世界のこの現實の世の中に於ては、菴羅樹園と維摩居士の方丈とに夫々歩を運んで到り、そのあり様を見るのであります。しかしながら相對世界を超えた眞如、實相の世界について論ずるならば、文殊菩薩は何時でも何處へでも自在に姿を現はすことのできる八地以上の菩薩でありますから、菴羅樹園に於ける文殊菩薩の見るといふ動作は瞬時にして消えてしまひ、忽然として方丈に現はれ、方丈のあり様を見るのであつて、歩を運んで方丈に到達しそのあり様を見るのではありません。菴羅樹園、方丈の夫々に忽然として姿を現はし、忽然として姿を消すのであります。文殊菩薩には「見てやらう」といふとらはれの心は無く、維摩居士にも亦「見て貰ひたい」といふとらはれの心はありません。

ん。それ故に更に見る可からず（歩を運んで来て見るのでは無い）と云ふのであります。

（訓讀文）

所以は何ん従り以下、第二に釋す。

疑ひを標して云はく。去と來と定まり無き所以は何ぞと。來る者は從來する所無くとは、假の中に來る者も、實の中に論を爲さば、菴羅の涉は即ち菴羅に滅し、方丈の涉は只方丈に生ず。故に從來する所無くと云ふ。去る者は至る所無しとは、假の中に去る者も、實の中に論を爲さば、庵羅の文殊は自ら菴羅に滅し、去りて方丈に至らず。故に至る所無しと言ふ。見る可き所のとは、假名道の中には菴羅と方丈と相見の義有り。而れども實の中に論を爲さば、菴羅の見は即ち滅し、方丈に至らず。彼此各生じ各滅す。文殊に能見の義無く、淨名にも亦所見の功無し。故に更に見る可からずと云ふなり。

經典（釋し述ぶ）

所以へ者何ん。來ル者へ無ク。所ニ從來スル。去ル者へ無シ。所ノ至ル。所ノ可キ。見ル者へ更ニ不ク。可ラ。見ル。

經典訓讀文

所以は何ん。來る者は從來する所無く、去る者は至る所無し。見る可き所の者は更に見る可からずと。

經典現代語譯

「その理由は何故かと申しますと、現實には歩を運んで來る者も、實相に於ては何處から來たともなく忽然と現はれるのであり、同じく歩を運んで菴羅樹園を去る者も、歩を運んで方丈に到達するのではありません。現實には歩を運んで來て見る者も、實相に於ては歩を運んで來て見るではありません。」と。

〔正しく問疾を明すの科段分け〕（現代語譯）

此の文殊師利問疾品の中を二つの項目に大別した第二に、且く是の事を置くから以下は、文殊菩薩と維摩居士との問答を正しく説き明します。その中について亦、三つの項目に分けます。

第一に、先づ文殊菩薩は、佛陀釋尊が維摩居士の病氣を心配してをられる、そのねんごろな思ひを傳へます。

第二に、居士、是の疾何の所因より起るやから以下は、文殊菩薩は自己の考へに基いて質問します。

第三に、是の語を説く時から以下は、説法を聞いた大勢の人たちは、大きな利益を得るのであります。

(訓讀文)

且く是の事を置く以下、第二に正しく問疾を明す。中に就きて亦開きて三と爲す。

第一に先づ佛の問意を傳ふ。

第二に居士。居士、是の疾何の所因より起るや従り以下、其の私の懷ひを陳ぶ。

第三に是の語を説く時従り以下、時の衆は益を得るなり。

〔佛の問意を傳ふ〕(現代語譯)

(文殊菩薩と維摩居士との問答を正しく説き明す中の第一に、文殊菩薩は、佛陀釋尊が維摩居士の病氣を心配してをられる、そのねんごろな思ひを傳へます。)

且く是の事を置くとは、佛陀釋尊の病氣見舞ひの言葉を傳へようと欲するが故に、文殊菩薩は初めの挨拶に於て取り交わした問答は、暫く中止いたしましたせうと維摩居士に請ふのであります。居士から以下は、佛陀釋尊の病氣見舞ひの言葉を正しく傳へるのであります。三つの問ひかけがあります。第一には、居士、是の疾は寧ろ忍ぶ可きや不や(維摩居士さん、ご病氣は重くて忍び難いのでせうか、如何でせうか。)です。第二には、療治に損有りや(治療して少しは軽くなつてをられるのでせうか。)です。第三には、増すに至らざるや(病勢が重さを増してゐることはないでせうね。)です。世尊殷勤に問ひを致すこと無量なりとは、佛陀釋尊が維摩居士の病氣を案じてをられる、その深い深い思ひを傳へてをります。その意味は、釋迦如來の大慈悲心は極まりないのであつて、前述の三つの問ひ

かけただけではなく、維摩居士の病状の一切について廣く問ひかけてゐるのであります。

(訓讀文)

且く是の事を置くとは、將に佛の相問を傳へんと欲するが故に初めての論を止めんと請ふなり。居士從り以下、正しく佛の相問を傳ふに即ち三問有り。一には、居士、是の疾は寧ろ忍ぶ可きや不や。二には、療治に損有りや。三には、増すに至らざるや。世尊殷勤に問ひを致すこと無量なりとは、仍ち如來の深意を傳ふ。言ふところは但問ふこと此の三句のみに非ず、大悲極まり無く、廣く一切を問ふなり

經典 (佛の問意を傳ふ)

且ク置クニ是ノ事ヲ。居士。是ノ疾寧ロ可キヤ。忍ブ不ヤ。療治ニ有リヤ。損。不ルヤ。至ラ。増スニ乎。世尊ハ殷勤ニ致スコト。問ラ無量ナリ。

經典訓讀文

且く是の事を置く。居士、是の疾寧ろ忍ぶ可きや不や。療治に損有りや。増すに至らざるや。世尊は殷勤に問ひを致すこと無量なり。

經典現代語譯

「挨拶の問答は暫く中止いたしませう。維摩居士さん、ご病氣は重くて忍び難いのでせうか、如何でせうか。治療して少しは軽くなつてをられるのでせうか。病勢が重きを増してゐることはないでせうね。世尊は、一切の病状をねんごろに問ふて來るやうにと、私を遣はされたのです。」

〔文殊、私の懐ひを陳ぶの科段分け〕 (現代語釋)

文殊菩薩と維摩居士との問答を正しく解き明す中の第二に、居士、是の疾から以下は、文殊菩薩が自己の考へに基いて質問し、維摩居士がそれに答へます。その中について亦、二つの項目に分けます。

第一に、ただ維摩居士の方丈内の出来事（維摩居士の病、室内が空であること、病ひの相）について問答を爲します。
第二に、爾の時に文殊師利、維摩詰に問ひて言はく。菩薩は云何が有疾の菩薩を慰諭すべきやから以下は、外部の新たに佛道を學ぶ諸々の菩薩たちの爲に問答を爲します。

(訓讀文)

居士。是の疾従り以下、第二に其の私の懐心を陳ぶ。中に就きて亦開きて二と爲す。

第一に只方丈の内事に就きて論を作す。

第二に爾の時に文殊師利、維摩詰に問ひて言はく。菩薩は云何が有疾の菩薩を慰諭すべきや従り以下、汎く外の諸の新學の菩薩の爲に論を作すなり。

〔方丈の内事に就きて論を作すの科段分け〕(現代語譯)

文殊菩薩自らが質問し、維摩居士がそれに答へる中の第一の、ただ維摩居士の方丈内の出来事について問答を爲す中について亦、三つの項目に分けます。

第一に、維摩居士の病ひ(所因は、何時から病むのか、如何にして滅するの)に基づいて問答を爲します。

第二に、文殊師利の言はく。居士、此の室何を以てか空にしてから以下は、方丈の室内に物も置かず侍者も置かず、何故空っぽにしてゐるのかに基いて問答を爲します。

第三に、居士の疾む所何等の相と爲すやから以下は、寒けがする熱があるなど、病ひの状態に基づいて問答を爲します。

(訓讀文)

第一の只方丈の内事に就きて論を作す中に、亦開きて三と爲す。

第一に病に因りて論を作す。

第二に文殊師利の言はく。居士、此の室何を以てか空にして従り以下、室の空なるに因りて論を作す。

第三に居士の疾む所何等の相と爲すや従り以下、疾の寒熱の相に因りて論を作す。

〔病ひに因りて論を作すの科段分け〕（現代語譯）

維摩居士の方丈内の出來事について問答を爲す中の第一の、維摩居士の病ひに基づいて問答を爲す中について亦、二つの項目があります。

第一に、文殊菩薩は病ひに關する三つの事項について質問します。

第二に、維摩居士はその三つの質問に答へます。

（訓讀文）

第一の疾だいちに因しつりて論ろんを作なす中なかに就つき亦に二に有あり。

第一に文殊三事もんじゆさんじを以もつて淨名じやうみやうに問とふ。

第二に淨名じやうみやう其の三問さんもんに答こたふ。

〔文殊三事を以て淨名に問ふ〕（現代語譯）

（維摩居士の病ひに基づいて問答を爲す中の第一に、文殊菩薩は病ひに關する三つの事項について維摩居士に質問します。）その三つの質問とは、

第一に質問します。居士、是の疾何の所因より起るや。此の句は維摩居士の病ひは何が原因で起つたのかを問うてゐます。これは病氣の姿を現はすことに因つて生ずる六つの問答の中の第一であります。

第二に質問します。其の生ずること久しきや。此の句は維摩居士の病ひはいつごろから起つたのか、その日數の多い少いを問うてゐます。これは病氣の姿を現はすことに因つて生ずる六の問答の中の第二であります。

第三に質問します。當に云何がして滅すべきや。此の句は維摩居士の病ひ癒る時期は遅いのか速いのかを問うてゐます。これ

は病氣の姿を現はすことに因つて生ずる六つの問答の中の第三であります。

(訓讀文)

三問とは、

一に問ふ。居士。居士、是の疾何の所因より起るや。此の句は其の疾を起すの因を問ふ。此は是れ疾に因りて六論を生ずる中の第一の論なり。

二に問ふ。其の生ずること久しきや。此の句は病を起し得てより日数の久近を問ふ。此は是れ疾に因りて六論を生ずる中の第二の論なり。

三に問ふ。當に云何がして滅すべきや。此の句は疾の差さるる遲速の期を問ふ。此は是れ疾に因りて六論を生ずる中の第三の論なり。

經典 (文殊三事を以て淨名に問ふ)

居士。是ノ疾何ノ所因ヨリ起ルヤ。其ノ生ズルコト久シキヤ如。當ニ云何がシテ滅ス。

經典訓讀文

居士、是の疾何の所因より起るや。

其の生ずること久しきや。

當に云何がして滅すべきや。

經典現代語譯

「維摩居士さん、あなたの病ひは何が原因で起つたのですか。」

「病はいつごろから起つたのですか。」

「病ひは如何にすれば癒るのでせうか。」

〔淨名其の三問に答ふの科段分け〕（現代語譯）

維摩居士の病ひに基づいて問答を爲す中の第二に、文殊菩薩の三つの質問に對して維摩居士が答へますが、其の中について亦二つの項目があります。

第一に、文殊菩薩の第二の問ひ、第三の問ひに先づ答へます。

第二に、又言ふ。是の疾はから以下は、文殊菩薩の第一の問ひに、さかのぼつて答へます。

（訓讀文）

第二の淨名三問に答ふる中に就きて、亦二有り。

第一に先づ後の二問に答ふ。

第二に又言ふ。是の疾は従り以下、追て其の第一の問に答ふ。

〔先ず後の二問に答ふの科段分け〕（現代語譯）

文殊菩薩の三つの質問に對し維摩居士が答へる中の第一に、文殊菩薩の第二の問ひ、第三の問ひに先づ答へますが、その中に於いて亦三つの項目があります。

第一に、文殊菩薩の第二の問ひ、第三の問ひに正しく答へます。

第二に、所以は何んから以下は、第二、第三の問ひに正しく答へた、その理由をならべて釋き明します。

第三に、譬へば長者の…如しから以下は、譬へを擧げることによつて、第二、第三の問ひに答へた、その意味合ひを重ねて明らかにします。

（訓讀文）

第一の先づ後の二問に答ふるに就きて、亦三有り。

第一に正しく後の二問に答ふ。

第二に所以は何ん従り以下、雙べて釋す。

第三に譬へば長者の…如し従り以下、譬へに寄せて重ねて答への意を顯はす。

〔正しく後の二問に答ふ〕（現代語譯）

（文殊菩薩の第二の問ひ、第三の問ひに先づ維摩居士は答へますが、その中の第一に正しく答へます。）

前述の文殊菩薩の第二の問ひに、其の生ずること久しきや（あなたの病はいつごろから起つたのですか）と云ひました。それに答へて維摩居士は今、癡に從りて愛有れば則ち我が病ひ生ず（衆生が愚かな迷ひの心から愛欲に執着して病んでゐるので、私の病ひは起つてゐるのです）と言ふのです。その意味は、衆生はその愚かな迷ひの心から愛欲に執着して眞實に病む身となり、そこで菩薩に救ひを求めます、それ故に、菩薩は衆生の機根に感應して自らも假に病む姿を現はす、と言ふのであります。

前述の文殊菩薩の第三の問ひに、當に云何がして滅すべきや（あなたの病ひは如何にすれば癒るのでせうか）と云ひました。それに答へて維摩居士は今、一切衆生病むを以て、是の故に我も病む。若し一切衆生の病滅すれば則ち我が病滅せん（一切衆生が病んでゐるので、私も病んでゐるのです。若し一切衆生の病ひが滅することがあるならば、私の病ひも癒りませう）と言ふのです。これは衆生はその愚かな迷ひの心から愛欲に執着して眞實に病む身となり、菩薩に救ひを求めるわけですが、その衆生の眞實の病ひが滅すれば、菩薩が衆生に機根に感應して自らも假りに病ひの姿を現はしてゐる、その私の假りの病ひも亦滅ませう、といふことを説き明してゐます。

（訓讀文）

上の第二の問ひに其の生ずること久しきやと云へり。今答へて癡に從りて愛有れば則ち我が病ひ生ずと言ふは、言ふところは衆生癡・愛の實の病ひ有るに由りて用て菩薩を感ず。故に菩薩にも亦應の病ひ有り。上の第三の問ひに當に云何がして滅すべきやと云へり。今答へて一切衆生病むを以て、是の故に我も病む。若し一切衆生の病滅すれば則ち我が病滅せんと言ふは、若し衆生用て菩薩を感ずる癡・愛の實の病ひ滅すれば、則ち菩薩の應の病ひも亦隨つて滅するを明か

すなり。

經典（正しく後の二問に答ふ）

維摩詰ノ言ク。從リテ、癡ニ有レバ、愛則チ我ガ病イ生ズ。以テニ一切衆生病ムラ。是ノ故ニ我モ病ム。若シ一切衆生得ベ、不ルヲ、病マ者。則チ我ガ病モ滅セン。

經典訓讀文

維摩詰の言はく。癡に從りて愛有れば、則ち我が病ひ生ず。一切衆生病むを以て、是の故に我も病む。若し一切衆生病まざるを得ば、則ち我が病ひも滅せん。

經典現代語譯

維摩居士は答へて言ひました。「衆生が愚かな迷ひの心から愛欲に執着し、眞實に病んでるので、私の病ひは起つてゐるのです。（私の病ひには始まりはありません。）」

「一切の衆生が病んでゐる故に、私も假に病ひの姿を現はしてゐます。若し一切衆生の眞實の病が滅することがあるならば、私の病ひも癒りませう。（私の病ひには終りはありません。）」

〔雙べて釋す〕（現代語譯）

文殊菩薩の第二の問ひ、第三の問ひに先づ維摩居士は答へますが、その中に第二に、所以は何んから以下は、第二、第三の問ひに正しく答へた、その理由をならべて釋き明します。

疑問を提示して云ひます。衆生が愚かな迷ひの心から愛欲に執着して病んでゐるので、私の病ひは起つてゐる。若し衆生の病ひが滅することがあるならば、私の病ひも癒りませう。この二つは如何なる理由に基づいて云ふのでありませうか、と。衆生はその愚かな心の迷ひから愛欲に執着して眞實に病んでゐるのですが、それを救ふためには菩薩は、生死の迷ひのあるこの世の中に姿を

現はさねばなりません。この世の中に姿を現はせば、菩薩も亦衆生の救ひを求め、機根に感應して假りに病ひの姿を現はすのです。それ故に經典で、癡に從りて愛有れば則ち我が病ひ生ずと云つてゐるのであります。また衆生が愚かな心の迷ひから愛欲に執着して眞實に病んでゐる、その病ひが滅することがあるならば、菩薩にも亦よけいな病ひなど起る筈がありません。それ故に經典で、衆生の病ひ滅すれば則ち我が病ひも滅せんと云つてゐるのであります。

(訓讀文)

所以は何ん從り以下、第二に雙べて釋す。

疑ひを標して云はく。癡に從りて愛有れば則ち我が病ひ生ず。衆生の病ひ滅すれば則ち我が病ひも滅する所以は何ぞと。菩薩は衆生の癡・愛の實の病ひの爲の故に生死に入る。生死有れば則ち菩薩にも亦應の病ひ有り。故に癡に從りて愛有れば則ち我が病ひ生ずと云ふ。且衆生の癡・愛の實の病ひ滅すれば、則ち菩薩も亦餘の病ひ無し。故に衆生の病ひ滅すれば則ち我が病ひも滅せんと云ふなり。

經典(雙べて釋す)

所以へ者何ん。菩薩へ爲ノニ衆生ノ一故ニ入ルニ生死ニ一。有レバニ生死一則チ有リ病。衆生得バニ離ルルヲ病ヲ者則チ菩薩モ無ケンニ復病フコト。

經典訓讀文

所以は何ん。菩薩は衆生の爲の故に生死に入る。生死有れば則ち病ひ有り。若し衆生病ひを離るるを得ば則ち菩薩も復病ふこと無けん。

經典現代語譯

「その理由は何故かを申しませう。菩薩は衆生を救はんがための故に、生死の迷ひあるこの世の中に姿を現はします。この世に在れば、衆生の機根に感應して菩薩も假に病むのです。若し衆生が病ひから離れることができるならば、菩薩も病むことはありません。

せん。」

〔譬へに寄せて重ねて答への意を顯す〕（現代語譯）

文殊菩薩の第二、第三の問ひに先づ維摩居士は答へますが、その中の第三に、譬へば長者に…如しから以下は、譬へを擧げることによつて維摩居士の答への意味を重ねて顯らかにします。その中には開譬（譬へを開示する）と合譬（譬へを法説に合致させる）との二つがあります。

譬へば長者に唯一子有りて、其の子病ひを得れば父母も亦病む如しとは、上述の衆生が愚かな迷ひの心から愛欲に執着して病んでゐるので、私の病ひは起つてゐる、といふ維摩居士の答への意味を顯らかにしてゐます。若し子病ひ癒ゆれば父母も亦癒ゆとは、上述の若し一切衆生の病ひが減ることがあるならば、私の病ひも癒りませう、といふ維摩居士の答への意味を顯らかにしてゐます。

第二の合譬は經典を御覽なさい。

（訓讀文）

譬へば長者に…如し従り以下、第三に譬へに寄せて重ねて答への意を顯はす。即ち開と合と二有り。譬へば長者に唯一子有りて、其の子病ひを得れば父母も亦病む如しとは、上の癡に從りて愛有れば即ち我が病ひ生ずることを顯はす。若し子病ひ癒ゆれば父母も亦癒ゆとは、上の若し一切衆生の病ひ滅すれば則ち我が病ひ滅することを顯はす。第二の合は見つ可し。

經典（譬へに寄せて重ねて答への意を顯はす）

譬へば如し長者ニ唯有りテ一子一。其ノ子得レバ病ヲ父母モ亦病ム。若シ子病癒ユレバ。父母モ亦癒ユルガ上。

菩薩モ如シ是ノ。於テニ諸ノ衆生ニ一愛スルコト。之ヲ若シ子ノ。衆生病シムコト則チ菩薩モ病ム。衆生病癒ユレバ。菩薩モ亦癒ユ。

經典訓讀文

譬へば長者に唯一子有りて、其の子病ひを得れば父母も亦病む。若し子病ひ癒れば父母も亦癒ゆるが如し。菩薩も是の如し。諸の衆生に於て之を愛しむこと子の如し。衆生病むときは則ち菩薩も病む。衆生病ひ癒れば、菩薩も亦癒ゆ。

經典現代語譯

「譬へば、長者にただ一人の子が居て、その子に病ひが起れば、心配のあまり父母も病みます。若しその子の病ひが癒れば、父母の病ひも癒ります。これと同じです。」

「菩薩の慈悲心もこれと同じです。菩薩が諸々の衆生を愛しむことは、親が子を愛むのと同じです。衆生が病むときは菩薩も病みます。衆生の病ひが癒れば菩薩も癒ります。」

「追て其の第一の問ひに答ふ」(現代語譯)

文殊菩薩の三つの質問に對して維摩居士が答へますが、其の中の第二に、又言はくから以下は、「あなたの病ひは何が原因で起つたのですか。」といふ文殊菩薩の第一の問ひに、さかのぼつて答へます。

又言はく。是の疾は何の所因より起るやとは、上述の文殊菩薩の第一の質問を重複して述べてゐるのであります。菩薩の疾は大慈を以て起るとは、文殊菩薩の第一の問ひに正しく答へてゐます。八地以上の菩薩の究極絶對の眞實身に具はる大慈悲心を以てするのでなければ、衆生が救ひを求めその機根に感應して菩薩も亦假に病ひの姿を現することは、そのいはれが無く、八地以上の大慈悲心でなければ爲し得ないことを説き明してゐます。それ故に、大悲を以て起ると云つてゐるのであります。

(訓讀文)

又言はく從り以下、三問に答ふる中の第二に、追て第一の因りて起るやの問ひに答ふ。

又言はく。是の疾は何の所因より起るやとは、上の語を牒す。菩薩の疾は大慈を以て起るとは、正しく其の問ひに答ふ。

若し妙本の大悲に非ずんば、則ち應の病ひも起すに由無しと明す。故に大悲を以て起ると云ふなり。

經典（追て其の第一の問ひに答ふ）

又言ク。是ノ疾ハ何ノ所因ヨリ起ト。

菩薩ノ疾ハ者以テニ大悲ヲ一起ルト。

經典訓讀文

又言はく。是の疾は何の所因より起るやと。

菩薩の疾は大悲を以て起ると。

經典現代語譯

文殊菩薩は再び問ひました。「あなたの病ひは何が原因で起つたのですか。」と。

維摩居士は「八地以上の菩薩が假に病ひの姿を現するのは、衆生を濟度せんとの大慈悲心あるが故にです。」と答へました。

〔文殊三事を以て問ひ、淨名答ふ。これについての太子御解説〕（現代語譯）

上述の通り維摩居士の病ひについて文殊菩薩は三つの事がらを問ひ、維摩居士はそれに答へるのでありますが、これに關して要約して五つの問答を設定して、考察検討いたしませう。

第一の問ひです。文殊菩薩が維摩居士の病ひについて問ひかけるのは、もともと佛陀釋尊から病氣見舞ひを命じられたからであります。初めに「御病氣は重くて忍び難いのでせうか。」などの佛陀釋尊自身の問ひかけの言葉を傳へたのに、維摩居士は今それには答へず、文殊菩薩の自己の考へに基づく三つの問ひにのみ答へるのは何故でありませうか。維摩居士が佛陀釋尊御自身の問ひかけに答へないのは、要約すると三つの意味合ひを擧げることができます。

一つには維摩居士と文殊菩薩とはこの方丈に於ける問答が終つたならば、必ず釋迦如來のもとに一緒に參上し、直接お目にか

かつて謹んでお答へすべきでありますので、維摩居士は此では答へないのであります。

二つには、文殊菩薩は初めに佛陀釋尊の命じられたお言葉を傳へ、ひき續いて文殊菩薩の自己の考へに基づく三つの問ひを述べました。佛陀釋尊のお言葉にお答へする時間的餘裕が無かつたので、維摩居士は答へないのであります。

三つには、相對世界を超えた眞如、實相の世界について論ずるならば、文殊菩薩は佛陀のさとりにほぼ近い八地以上の菩薩でありますから、今自己の考へに基づく問ひかけとは言ふものの、それは佛陀釋尊の問ひかけに他なりません。何故ならば、上述の經典で、**世尊は殷勤に問ひを致すこと無量なり**（世尊は、一切の病状をねんごろに問うて來るやうにと、私を遣はされたのです。）と云つてをります。この佛陀釋尊のお心を體して文殊菩薩は問ひかけます。ですから此の中の文殊菩薩の問ひは、佛陀釋尊のお心に違つてゐるものは一つもありません。それ故に維摩居士は、佛陀のお言葉に特に答へないのであります。

第二の問ひです。上述の文殊菩薩の三つの問ひの中の第一は、「維摩居士さんの病ひは何が原因で起つたのでせうか。」であります。維摩居士は先づ後の二つの問ひ（病ひはいづころから起つたのですか。病ひは如何にすれば癒るのでせうか。）に答へるのは何故でありませうか。その理由を釋き明して言ひます。八地以上の菩薩は衆生の救ひを求め、機根に感應して唯假に病ひの姿を現はすのみであつて、眞實に病むことはないのですが、このことを此に集つてゐる大勢の人々は明らかに知つてをりません。若し第一の問ひの「病ひは何が原因で起つたのでせうか。」に先に答へて、「菩薩の病ひは大慈悲心がある故に起るのです。」と言ふならば、人々は「大慈悲心があるが故に菩薩も眞實に病むことがあるのだ」と誤つた思ひをもちませう。そこで先づ後の二問に答へ、「菩薩が眞實に病むことは本來無いのである。唯衆生を教化濟度するためにその機根に感應して假に病ひの姿を現はすのみである。」と言へば、衆生は此の答へを聞いて「さうであるなら、菩薩は衆生の機根に感應して假に病ひの姿を現はすが、菩薩が眞實に病むことは無いのだ」と悟りませう。その次に「菩薩の病ひは大慈悲心があるが故に起るのです。」と、衆生の機根に感應するのは菩薩の大慈悲であることを説き明かせば、衆生は愚かな迷ひの心から愛欲に執着して眞實に病み、救ひを求めると、菩薩は大慈悲心があるが故にそれに感應して假に病ひの姿を現はすのだ」と悟りませう。以上の次第ですから維摩居士は、先づ後の二つの問ひに答へ、而る後に第一の病ひの起る原因の問ひに答へるのであります。

第三の問ひです。第二の問答の通り維摩居士は先づ後の二間に答へる必要があるのならば、文殊菩薩は後の二間即ち、第二の問ひの其の生ずること久しきや（病ひはいつころから起つたのですか）と第三の問ひの當に云何がして滅すべきや（病ひは云何にすれば癒るのでせうか）とを先に問へばよいではありませんか。而るに文殊菩薩は、維摩居士が後の二間に先づ答へることを豫め知らないうで、なほ病ひの起つた原因を第一に問ふのでせうか。しかし維摩居士と文殊菩薩とは同じく已に正しい覺りに登りつめた大聖人だと既に述べてゐます。兩者の問答に優劣があると考へられませんが。その理由を釋き明して言ひます。文殊菩薩は、維摩居士が後の二間に先づ答へることを知らない筈がありません。しかし文殊菩薩が病ひの起つた原因を第一に問ふのは、その原因である八地以上の菩薩の大慈悲心は、菩薩が一切衆生を教化濟度するはたらきの根元であることを顯らかにしようと思つたからであります。維摩居士が後の二間に先づ答へるのは、八地以上の菩薩は衆生の機根に感應して假に病ひの姿を現はすのであつて、菩薩は眞實に病むことは無いといふことを顯らかにしようと思つたからであります。若し文殊菩薩が病ひの起つた原因を第一に問はなかつたならば、病ひの原因である八地以上の菩薩の大慈悲心が衆生を教化濟度するはたらきの根元である、その由來を顯らかにすることができません。若し維摩居士がまづ後の二間に答へなかつたならば、これも亦八地以上の菩薩は機根に感應して假に病ひの姿を現はすのであつて、菩薩は眞實に病むことは無い、その由來を顯らかにすることができません。これを考へてみますに文殊・維摩の二人の大聖人は、その問ひ、その答へを豫め知り盡してをり、時宜になつたこの時にあたり、文殊菩薩は第一を先づ問ひ、維摩居士は先づ後の二間に答へるのであります。

第四の問ひです。若し八地以上の菩薩は眞實に病むことは無く、唯衆生を教化濟度せんが爲に假に病ひの姿を現はすと言ふのであれば、衆生が愚かな迷ひの心から愛欲に執着して眞實に病むことが菩薩の病ひの原因でありますから、第一の問ひの何の所因より起るや（病ひは何が原因で起つたのでせうか）には、そのやうに答へるべきではありませんか。「衆生が愚かな迷ひの心から愛欲に執着して眞實に病むことを原因として菩薩は病む。」と何故言はないのでせうか。その理由を釋き明して言ひます。衆生は愚かな迷ひの心から愛欲に執着して眞實に病み、そこで菩薩に救ひを求めます。菩薩には大慈悲心がありますから、救ひを求めると衆生の機根に感應して假に病ひの姿を現はします。衆生の救ひの求めに感應するのは菩薩の大慈悲心でありますから、衆生に感應して假に病

んでゐる菩薩について考へてみますと、衆生の愚かな迷ひの心や愛欲に執着するといふことは菩薩が病ひを起す遠い縁なのであります。菩薩の大慈悲心は菩薩の病ひの直接の原因であります。それ故に今、菩薩の病ひの直接の原因である大慈悲心を以て、病ひは何が原因で起つたのかの第一の問ひに答へるのであります。

第五の問ひです。八地以上の菩薩は大慈悲心があるが故に、衆生の機根に感應して假に病ひの姿を現はすと言ふのであれば、菩薩が衆生に感應して假に病ひの姿を現はすのは大慈悲心がある故で、この「大慈悲心を有するやうになつた時から菩薩の病ひは起る。」と、第二の問ひの其の生ずること久しきや（病ひはいつごろから起つたのでせうか）に答へるべきではありませんか。何故そのやうに答へないのですか。その理由を釋き明して言ひます。そのやうに答へることはできません。何故ならば、八地以上の菩薩は眞實に病むことは無く、唯衆生を教化濟度する爲に衆生の機根に感應して假に病ひの姿を現はすのみだと、既に述べた通りです。それ故に「病ひはいつごろから起つたのでせうか」の問ひに、「衆生が愚かな迷ひの心から愛欲に執着して眞實に病んでゐるので、それに感應して私の病ひも起つてゐるのです」と答へてゐるのです。衆生の機根に感應するのですから病ひが癒ゆるについても、必ず衆生の愚かな迷ひの心から愛欲に執着して眞實に病んでゐる、その衆生の病ひが癒ゆれば菩薩の病ひも癒ゆる、と言ふのであります。若し第二の問ひの其の生ずること久しきやに、「大慈悲心を有するやうになつた時から菩薩の病ひは起る」と答へるならば、大慈悲心は菩薩自身に具つてゐるのですから、病ひも菩薩自身から起ることになり、衆生が救ひを求めるとに感應するが故に菩薩の病ひは起る、といふことになりません。さういふことでと、ただ衆生を教化濟度せんが爲に菩薩は病むといふ、肝心の事からが不明になつてしまひます。また大慈悲心は一刻たりとも衆生濟度のはたらきを止めることはありませんから、大慈悲心を有するが故に病むのであれば、菩薩は常時病ひの床に臥してゐなければなりません。大慈悲心は常に衆生濟度のはたらきを爲してゐますが、そのはたらきは假に病ひの姿を現はすといふことのみではありません故、菩薩が常時病ひの床の臥してゐることはないのです。以上の次第でありますから、「大慈悲心を有するやうになつた時から菩薩の病ひは起る」と答へることはできないのであります。

或る經典研究家は次のやうに解釋して言ひます。—文殊菩薩の三つの問ひに對して維摩居士が先づ後の二つの問ひに答へるのは、

八地以上の菩薩が假に病ひの姿を現はすのは、本來衆生を教化濟度せんが爲である。それで先づ衆生濟度のために菩薩は病むといふ意義を顯らかにしようと欲するのである。それ故に「衆生が救ひを求めらるるに感應して菩薩は病む」、「衆生の病ひが滅することがあるならば、菩薩の病ひも癒りませう」と、先づ答へるのである、——と。維摩居士が先づ後の二問に答へるについて、次のやうに解釋するのによいであらう。——この世に現はれた垂迹身すいじやくしん（佛・菩薩が衆生を救ふために假の姿をとつてこの世に現はれる。維摩居士は垂迹身である。）が存在すれば、必ず本源の眞實身ほんげんしん（本義疏の冒頭に、維摩詰とは及ち是れ已登正覺の大聖なり。本を論ずれば既に眞如と冥一なり。とある。）は必ず存在する。本源の眞實身が存在するからといつても、衆生濟度のため全て垂迹してこの世に姿を現はすとは、必ずしもさうは言へない。それ故に先づ衆生を救ふ垂迹身のはたらきを答へるのである、——と。

第二の問ひの其の生ずること久しきやに答へて、癡に從りて愛有れば則ち我が病ひ生ずと言ふのは、衆生は愚かな迷ひの心や愛欲の執着する煩惱があつて生き死に迷ひ、病む身となつて菩薩に救ひを求め、八地以上の菩薩は大慈悲心があるので衆生が救ひを求めらるるに感應し、同じく病む身になつて救ひとらうと、假に病ひの姿を現はすことを説き明してゐます。衆生の愚かな迷ひの心や愛欲に執着する煩惱はいつ生じたのか、その始まりといふものはありませんから、大慈悲心に因つて起る菩薩の假の病ひも、いつ起つたのか、その始まりといふものは無いといふことを説き明してゐるのであります。第三の問ひの當に云何がして滅すべきやに答へて、若し一切衆生の病ひ滅すれば則ち我が病ひ滅せんと言ふのは、一切衆生の病ひが絶滅することは決してありませんから、維摩居士の病ひも何時癒るか、癒るときはあるまいと説き明してゐます。これは病ひには終りが無いといふことを説き明してゐるのであります。以上は舊い解釋の説であります。この解釋を推しはかりますに、衆生の愚かな迷ひの心や愛欲に執着して起る眞實の病ひには、始めも終りも無いので、その衆生の病ひを救はうと大慈悲心が感應することに因つて起る菩薩の假の病ひも亦、始めも終りも無いと、そのことをもつぱら言つてゐるのであります。（以下は難解の箇所、充分に理解し得てゐない。）

しかしながら、この舊い解釋の説に對して新しい解釋の説では次のやうに言ひます。——そもそも衆生は病氣にかかつて眞實に病むのでありますが、衆生にはすべて二種類の病ひがあります。それ故に、菩薩が大慈悲心を以て救ひを求めらるる衆生の機根に感應して假に病ひの姿を現するについても亦、二種類の病ひがあります。それ故に、菩薩が大慈悲心を以て救ひを求めらるる衆生の機根に感

應して假に病ひの姿を現するについても亦、二種類の病ひがあります。第一には、この現實の世の中における衆生の生死輪廻の苦しみ、除滅することのできない病ひであります。このために菩薩も亦、衆生濟度の大慈悲心を以てこの現實の世の中に姿を現はし、除滅することのできない病ひの姿を假に現するのであります。第二には、床に伏し治療することによつて徐滅し得る病ひ、衆生の愚かな迷ひの心から愛欲に執着して眞實に病む特別な病ひであります。このために菩薩も亦、床に伏し治療することによつて徐滅し得る病ひの姿を假に現するのであります。若しこの現實の世の中における生死輪廻の苦しみ、徐滅することのできない病ひを主體として論ずるならば、以上の二種類の病ひに分つのは尤もなことでありませう。しかしながら今問答してゐるのは、ただ衆生の病ひを徐滅すべく病ひの姿を假に現する、衆生の愚かな迷ひの心から愛欲に執着して病む特別な病ひであります。衆生の生死輪廻の苦しみを救はんがために、菩薩がこの世に姿を現はし徐滅することのできない病ひの姿を假に現する、その病ひについて問答してゐるではありません。何故かと申しますと、衆生の生死輪廻の苦しみを救はんが爲に菩薩がこの世に姿を現はし除滅することの出来ない病ひの姿を假に現する、その病ひについて問答してゐるのではありません。何故かと申しますと、衆生の生死輪廻の苦しみを救はんがために、菩薩がこの世に姿を現はし除滅することのできない假の病ひの故に、床に伏す姿を現するのであれば、諸々の佛・菩薩は皆まさに床に伏してゐなければなりません。維摩居士ひとりのみが、どうして床に伏す姿を現するのでありませうか。また若し衆生の生死輪廻の苦しみを救はんがために、菩薩が大慈悲心を以てこの世に姿を現はし徐滅することのできない假の病ひであるならば維摩居士も亦四六時中床に伏してゐなければなりません。ところが維摩居士はある時は床に伏してゐないこともありえます。また徐滅することのできない病ひであつて、その病ひは必ず始まりも無く終りも無いと言ふのであれば、經典の結びの文で譬へを擧げて答へるのに、「その子の病ひが癒れば、父母の病ひも亦癒ゆ。」と、どうして言ふことができませうか。この世の中の子供の病ひは必ず癒ゆる時があります。——と。

しかしながら私は、舊い解釋の説よりも更に窮まれる解釋は未だ聞いたことがありません。ただ私は次のやうに懷ひます。——菩薩が假に病ひの床に伏すことについてはまた、次のやうに解することもできます。或る人たちは四六時中常に病ひの床に伏してゐる菩薩の姿を見る、或る人たちは病ひの床に伏してゐる菩薩の姿を見ることは絶対にない、と。また次のやうに解することもでき

ます。或る人たちは諸々の佛・菩薩が病ひの床に伏してゐる姿を見、或る人たちはただ獨り維摩居士のみは床に伏してゐないと見ると。何故かと申しますと、菩薩が病ひの床に伏す、或いは伏すことは無いといふのは、佛・菩薩自ら爲す姿ではありません。これは、佛・菩薩の衆生濟度の大慈悲心を、衆生が感じとる或いは感じとらないことによつて、感じとれば佛・菩薩が病ひの床に伏す姿を必ず見るのであり、感じとらなければ見ないのであります。若し或る人たちは、維摩居士の病ひが癒え立ち上つて行動するのを見るのも、さうではなく或る人たちは、維摩居士は猶病ひの床に伏してゐる姿を見るのも、これは菩薩が四六時中病ひの床に伏してゐる姿を見る人たち、病ひの床に伏してゐる菩薩の姿を見ることは絶対にない人たち、と考へられるのであります。また若し機縁があるならば諸々の佛・菩薩は皆病ひの床に伏する姿を現はし、若し機縁が無ければ維摩居士も亦病ひの床に伏す姿を現はすことはありません。衆生も亦、或る人たちは諸々の佛・菩薩が皆病ひの床に伏してゐる姿を見、或る人たちはただ維摩居士のみが病ひの床に伏してゐる姿を見、或る人たちは諸々の佛・菩薩が病ひの床に伏してゐる姿を見ることは絶対にないのであります。菩薩が病ひの姿を現するか現じないかは、素性が菩薩の大慈悲心を感じるどうか否かにかかはることであつて、定まつた姿ではないのであります。以上のことから推論しますに、衆生は愚かな迷ひの心から愛欲に執着して眞實に病みますが、その病ひには始まりも無く、終りも無いが故に、菩薩が大慈悲心を以て衆生濟度のために假に病ひの姿を現はすにも亦、始まりも無く終りも無いといふ舊い解釋の說に贊意を表するのであります、——と。

(訓讀文)

中に就きて略して五番の問答を擧げて料簡を作す。

第一の問ひは、文殊の疾を問ふは本佛の命するに在り。而るに今淨名は何が故に佛の問ひに答へずして、唯文殊の私の問ひに答ふるや、佛の問ひに答へざるには略して二の意有り。

一には、必ず方丈の事畢らば、淨名と文殊と共に如來に就いて當に面あたり敬答すべきが故に、此には答へざるなり。

二には、文殊は佛の命ずるところを傳へ、次に即ち私の問ひを陳ぶ。佛の問ひに答ふる間無きが故に、亦即ち

答へざるなり。

三には、實にして論を爲さば、今文殊の私の問ひなりと雖も即ち是れ佛の問ひなり。何となれば則ち上に既に世尊は殷勤に問ひを致すこと無量なりと云ふ。文殊は此の意を領して問ふ。則ち此の中の文殊の問ふ所は佛意に非ざることを無し。所以に淨名も亦別に答へざるなり。

第二の問ひは、上の三問の中には先づ病ひの起るの因を問へるに、何ぞ今の答への中には先づ後の二問に答ふるや。釋して曰はく。大衆未だ菩薩の病ひは但應にして實に非ずといふことを明らかにせず。若し即ち先に第一の因りて起るやの問ひに答へて、菩薩の病ひは大悲を以て起ると曰はば、則ち菩薩には猶實の病の大悲を以て起る者ありと謂はん。是を以て先づ後の二問に答へて、菩薩には本實の病ひ無し、唯物を化する應の病ひのみ有りといはば、衆生は此に因りて方に若し爾らば菩薩の病ひは、但應にして非ずと悟らん。

即ち次に菩薩の病ひは大悲を以て起ると明さば、便ち衆生の實の病ひは癡に因りて愛有れば生じ、菩薩の應の病ひは大悲を以て起ると悟らん。所以に先づ後の二問に答へ、後に第一の問ひに答ふるなり。

第三の問ひは、然れば則ち文殊は應に先づ第二の其の生ずること久しきやと第三の當に云何がして滅すべきやとを問ふべし。而るに文殊は未だ此の義に達せざるが故に、猶先づ因りて起るやを問ふや。而るに既に維摩と文殊とは同じく是れ已登正覺の大聖なりと云ふ。豈復方に勝負の異有らんや。釋して曰はく。何ぞ其れ達せざらん。而るに文殊の先づ因りて起るやを問ふは、大悲は是れ菩薩萬化の元なるを顯はさんと欲す。淨名の先づ後の二問に答ふるは、大士の病ひは唯應にして實に非ずといふことを顯はさんと欲す。若し文殊先づ因りて起るやを問はざれば、則ち大悲は是れ菩薩萬化の元なるを顯はすに由無し。淨名若し先づ後の二問に答へざれば、亦菩薩の病ひは但應にして實に非ずといふことを顯はすに由無し。是れ蓋し二聖同じく達し、時の宜しきに當りて、互に之を相ひ出すのみ。

第四の問ひは、如し大士は本實の病ひ無し但物の爲に病むと言はば、亦癡・愛に因りて起るといひ、用て第一の何の所因

より起るやの問ひに答ふ可し。何ぞ猶癡・愛に因りて起ると言はざるや。釋して曰はく。衆生には癡・愛の實の病ひ有り、以て菩薩を感じ。菩薩には大悲の心有り、故に亦應の病ひ有り。然れば則ち應の病ひに立ちて衆生の癡・愛を望めば既に遠縁爲り。但菩薩の大悲は既に親し。所以に今親き作因を取り、以て第一の因りて起るやの問ひに答ふるなり。

第五の問ひは、菩薩は大悲の心有るが故に亦應の病ひ有るといはば、則ち應に菩薩の應の病ひは大悲有るに従りて生ずといひ、以て第二の其の生ずること久しきやの問ひに答ふべし。何故に然らざるや。

釋して曰はく。得ず。何となれば則ち既に大士は本實の病ひ無し、唯物を化するの應の病ひのみ有りと云ふ。所以に答へて衆生の癡・愛の實の病ひ有るに従りて則ち我が病生ずと云ふなり。所以に亦差ゆるも必ず衆生の癡・愛の實の病ひ滅するを須つなり。若し大悲従り生ずと言ひて、以て第二の問ひに答へなば、大悲は則ち菩薩の自らの事なるが故に、病ひも自ら生じて物の感ずるに由るに非ず。若し爾らば則ち但物の爲に病むの旨は所在を知らざるなり。且大悲は無き時無きが故に、則ち應に恒日床に寝ぬべし。而るに大悲は常なりと雖も恆には寝ねず。所以に大悲有るに従りて生ずと言ふことを得ざるなり。

或るは解して言はく。三問の中に先づ後の二問に答ふるは、病ひは本物の爲なり。所以に先づ物の爲との意を顯はさんと欲す。故に先づ答ふるなりと。亦可なるべし。迹有れば必ず本有り。本有るも未だ必ずしも迹有らず。所以に先づ迹を答ふるなりと。

第二の問ひの其の生ずること久しきや答へ癡に從りて愛有れば則ち我が病ひ生ずと曰ふは、衆生は癡・愛の煩惱有りて生死の病ひを得るに由りて菩薩を感じ、菩薩は大悲有るを以ての故に其の病ひに應同することを明す。衆生の癡・愛は始め無きが故に、菩薩の大悲の病ひも亦始め無きを明すなり。

第三の問ひの當に云何がして滅すべきに答へて若し一切衆生の病ひ滅すれば則ち我が病ひ滅せんと曰ふは、衆生既に無盡なれば我が病ひも亦何れの時にか滅せんと明す。此は病ひの終り無きを明すなり。此は是舊義の須ふる所なり。

此の釋を推尋するに直に衆生の癡・愛の實の病ひは始めも終りも無きが故に、菩薩大悲の應の病ひも亦始めも終りも無しと言ふなり。

而るに新義は又釋して曰はく。夫れ衆生の實の病ひには凡そ二種有り。是の故に菩薩の應の病ひにも亦従つて二有り。一には生死煩惱の常病なり。此が爲に菩薩も亦生死に入る大悲の常病有り。

二には寢を現するを須ひて疾を除滅するを得る所の癡・愛の別病なり。此が爲に菩薩も亦寢を現するの別病有り。若し生死に通入する常病を以て論を爲さば、亦復然る可し。而るに今問ふ所は、但是れ疾を現じ滅す可き癡・愛

の別病なり。生死に通入する大悲の常病を問ふに非ざるなり。何となれば則ち若し是れ生死に入る大悲の常病の故に、床に寢ぬるを現するを須ひるとならば、則ち諸聖は皆應に床に寢ぬべし。豈に獨り淨名のみなら

んや。且若し是れ大悲の常病ならば、只是れ淨名も亦應に恒日臥すべし。而るに或は寢ぬざること有り。且必ず是れ常に病みて始めも終りも無くんば、譬へに寄せて結び答へるに、豈其の子の病ひ癒れば父母も亦癒ゆと言ふ可

んや。世の子の病ひは必ず癒ゆる時有りし。而るに未だ舊義より窮まれる釋を聞かず。但私の懷ふには、亦かなるべし。恒日常に寢ね、絶えて寢ねずと。亦かなるべし。諸聖は皆寢ね。只一り淨名は猶寢ねずと。何となれば則ち寢ぬ

と寢ぬざるとは、豈是れ聖人に自らなる有らんや。是れ必ず衆生の感機の同じからざるが故に然るなり。若し淨名の病ひ癒えて起行するを見るも、而も或は猶床に寢ぬるを見るも、是れ則ち所謂恆に寢ね。亦絶えて寢ぬざ

るなり。且若し縁有らば則ち諸聖は皆寢ぬるを現じ、縁無くば只淨名も亦寢ねず。衆生も亦諸聖は皆寢ぬるを見或は唯淨名のみ寢ね、絶えて寢ねずと見るもの有り。豈定まり有らんや。此を以て推を爲すに衆生の癡・愛の實の

病ひに始めも終りも無きが故に、菩薩大悲の應の病ひにも亦始めも終りも無しとは、慊ふ可き無きなりと。

〔室の空なるに因りて論を作すの科分け〕（現代語譯）

維摩居士の方丈内の出來事について問答する中の第二に、文殊師利の言はくから以下は、方丈の室内に物も置かず、侍者も置かず、何故空つぽにしてゐるのかに基いて問答を爲します。その中に就いて、それ自體に二つの項目があります。

第一に、文殊菩薩が維摩居士に質問することを説き明かします。

第二に、維摩居士が文殊菩薩の質問に答へます。

(訓讀文)

文殊師利の言はく従り以下、方丈の内事を論ずる中の第二に、空の室に因りて論を作す。中に就きて自ら二有り。

第一に文殊、淨名に問ふことを明す。

第二に淨名、文殊の問ひに答ふ。

〔文殊、淨名に問ふ〕(現代語譯)

維摩居士の方丈には物も置かず侍者も置かず、何故空つぽにしてゐるかに基いて問答する中の第一は、文殊菩薩が維摩居士に質問するのでありますが、その中に就いて、それ自體に二つの質問があります。第一には、此の居室を空つぽにしてゐるのは如何なる理由なのかを質問します。此の質問をする意味は、維摩居士は世俗の人であるから仕事や生活のため必需品がある筈であります。且つ疾ひの身でありますから藥その他療養のための品も用ひなければなりません。而るに今、室内には物品は一切置いてないのであります。それ故に此の質問を爲すのであります。これは、維摩居士が居室を空つぽにすることに因つて生ずる五つの事から(この箇所の義疏は「六論」としてゐるが、「五事」が正しい)の中の、第二であります。第二には、何故お付きの従者が居ないのかを質問します。此の質問をする意味は、また同じく疾ひにかかつてゐる時には、必ず看護人を置いて種々の世話をさせなければなりません。而るに今、お付きの従者は一人も居ないのであります。それ故に此の質問を爲すのであります。これは、維摩居士が居室を空つぽにすることに因つて生ずる五つの事から(前述に同じ)の中の、第二であります。

(訓讀文)

第一の文殊の問ひの中に就きて自ら二の問ひ有り。

一に此の室何を以て空なるやを問ふ。問ひの意は、既に白衣爲れば應に事業有るべし。且つ身は疾ひに居れば應に供養の具を須ふべし。而るに今室内には悉く所有無し。故に問ひを致すなり。此は是れ室の空なるに因りて六論を生ずる中の第一の論なり。

二に何ぞ侍者無きやを問ふ。問ひの意は、亦疾ひに居るの時には必ず須く看養すべし。而るに今都て侍者無し。故に問ふなり。此は是れ空室に因りて六論を生ずる中の第二の論なり。

經典（文殊、淨名に問を）

文殊師利ノ言ク。居士。此ノ室何ヲ以テカ空ニシテ無キヤトニ侍者一。

經典訓讀文

文殊師利の言はく。居士。此の室何を以てか空にして侍者無きやと。

經典現代語譯

文殊菩薩は質問して言ひました。「維摩居士さん、何故此の居室を空つぽにしてをられるのですか。何故お付きの従者たちは居ないのですか。」と。

〔淨名、文殊の問ひに答ふの科段分け〕（現代語譯）

維摩居士の方丈の室内には物も置かず侍者も置かず、何故空つぽにしてゐるかに基いて問答する中の第二は、文殊菩薩の質問に維摩居士が答へるのでありますが、その中にはまた二つの項目があります。

第一に、何故其の居室を空つぽにしてゐるのかの質問に答へます。

第二に、何故お付きの従者たちを置いてゐないかの質問に答へます。

(訓讀文)

第二の淨名の答への中に亦二有り。

第一に其の室空なるやの問ひに答ふ。

第二に其れ何ぞ侍者無きやの問ひに答ふ。

〔其の室空なるやの問ひに答ふの科段分け〕(現代語譯)

文殊菩薩の質問に維摩居士が答へる中の第一は、何故其の居室を空つぼにしてゐるのかの問ひに答へるのでありますが、其中に就いてまた二つの項目があります。

第一に、究極の眞理(妄想分別の心を捨離して一切平等を觀する)における空を擧げて正しく答へます。

第二に、又問ふ。何を以てか空と爲すやから以下は、六つの問答を擧げて問ひと答へとをやりとりし、空についての疑問を取り除くのであります。

(訓讀文)

第一の室空なるやの問ひに答ふる中に就きて亦二有り。

第一に理の空を擧げて正しく答ふ。

第二に又問ふ。何を以てか空と爲すや従り以下、六番の問答を擧げて、往復して疑ひを徐くなり。

〔理の空を擧げて正しく答ふ〕(現代語譯)

何故其の居室を空つぼにしてゐるのかの問ひに答へる中の第一に、維摩居士は究極の心理における空を擧げて正しく答へます。維摩詰の言はく、諸佛の國土も亦復皆空なりとは、諸佛の國土は本來、現象世界を超えた究極の眞理においては絶對平等の空であります。此の居室の空つぼなることを何故質問なさるのでせうか、といふことを説き明してゐます。文殊菩薩は事物の空なること

を問ひ、維摩居士は究極の眞理における空を以て答へます。

(訓讀文)

第一に正しく答ふ。維摩詰の言はく。諸佛の國土も亦復皆空なりとは、諸佛の國土は本來即ち空なり。寧ぞ復此の室の空なることを問ふやと明す。問ひは事の空を以てし、答へは理の空を以てするなり。

經典 (理の空を擧げて正しく答ふ)

維摩詰ノ言ク。諸佛ノ國土。亦復皆空ナリト。

經典訓讀文

維摩詰の言はく。諸佛の國土も亦復皆空なりと。

經典現代語譯

維摩居士は答へて言ひました。「諸佛の國土も亦本來 (究極の眞理においては一切が平等であつて) 空なのです。」

〔六番問答を擧げて疑ひを除くの科段分け〕 (現代語譯)

何故その居室を空つぽにしてゐるのかの問ひに答へる中の第二に、六つの問答を擧げて問ひと答へとをやりとりし、空についての疑問を取り除くのでありますが、その中に就いて亦二つの項目があります。

第一に、初めの三つの問答は境 (認識する對象。ここでは方丈の居室及び眞諦) の空を説き明してゐます。
第二に、後の三つの問答は、眞理を觀する智慧の空を説き明してゐます。

(訓讀文)

第二に六番の問答を擧げて往復して疑ひを除く中に就きて、亦二有り。
第一に初めの三番は境の空を明す。

後の二番は智の空を明すなり。

〔境の空を明す〕（現代語譯）

（六つの間答を擧げて空についての疑問を取り除く中の第一は、初めの三つの間答であつて、境——認識する對象、即ち方丈の居室及び眞諦——の空を説き明します。）

第一の間答の何を以てか空と爲すやとは、維摩居士の方丈の居室には物品を一切置いてありませんから、確かに空つぽであります。今諸佛の國土には現に諸々の物品が存在してゐます。いかなる理由で諸佛の國土も本來は皆空であると説くのかと、問ふのであります。それに對して答へて曰く、空を以て空なりとは、現象世界を超えた眞理においては絶對平等であつて、何らの區別も差別も無い空でありますので、それ故に空であるといふことを説き明してゐます。又問ふ。空何ぞ空を用てするやとは、若し諸佛の國土に物品が存在してゐても、究極の眞理においては本來何の區別もない空であると言ふならば、維摩居士の居室も自らが空つぽにする必要はないではありませんか。如何なる理由で居室を空つぽにすることによつて、空を説き明すのでせうかと、問ふのであります。それに對して答へて曰はく、眞諦は無分別を以ての故に空なりと維摩居士は答へます。究極の眞理においては一切の分別（はからひや區別）が全く無いことを顯らかにしようとして考へて、維摩居士は自分の居室を空つぽにしたのであります。若し究極の眞理における空を顯らかにしようとして考へたが故に、居室を空つぽにしたのであれば、究極の眞理における空と、居室に一切の物品が無いといふ空との、二つの空が存在することになります。それ故に、又問ふ。空は分別す可きやと、文殊菩薩は問ふのであります。究極の眞理における空は、相對世界を超えてゐますから分別するといふことも超絶してをります。それ故に、答へて言はく、分別も亦空なりと、維摩居士は答へるのであります。

しかしながら舊い解釋では少しく異なつてをります。何を以て空と爲すやとは、諸佛の國土が皆空であるといふのは、現象世界を超えた究極の眞理における空を説いてゐるのでせうか、居室に一切の物品が無いといふ事物の空を以て説いてゐるのでせうかと問ふのであります。答へて曰はく、空を以て空なりとは、究極の眞理における空を説いてゐるので、空智（一切の現象は空であると

観ずる智を以て観ずる空であることを説き明してゐます。上の「空を以て」の「空」は、認識する対象即ち居室の空であります。下の「空なり」の「空」は、空智を以て観ずる空であります。又空何ぞ空を用つてするやとは、究極の眞理は何らの區別差別も無い絶對平等でありますから、それ自體が空であります。どうして空智のはたらきを借りる必要があらうか、といふことを説き明してゐます。答へて曰はく。無分別空を以ての故に空なりとは、究極の眞理自體は空智のはたらきを借りる必要はありません。しかしながら空智のはたらきが無ければ空を観ずることはできません。それ故に一切の分別を超越した空智を以てすれば、究極の眞理における絶對平等の空を観ずることができるとを説き明してゐます。空智ははたらきがあります。空自體にははたらきはありません。そこで空智と空との二つについて分別すべきでありませう。それ故に空は分別す可きやと問ふのであります。相對世界を超えた究極の眞理の中においては全てが絶對平等であつて、二つの相として分別の對象になるものはありません。それ故に分別も亦空なりと答へるのであります。

(訓讀文)

第一の問ひに何を以てか空と爲すやは、室は物無きを以ての故に空なり。今諸佛の國土には現に諸の物を見る。何の義を以て説きて空と爲すやと。答へて曰く。空を以て空なりとは、眞諦は空なるを以ての故に説きて空と爲すを明すなり。又問ふ。空何ぞ空を用てするやとは、若し諸佛の國土は本來即ち空ならば直ちに自ら空するは置くべし。何ぞ室を空するを用て方に空を明すや。答へて曰はく。眞諦は無分別を以ての故に空なりと。無分別の空を顯はさんと欲するが故に、室を空するを須ふるなり。若し眞諦の空を顯はさんと欲するが故に、室の空を須ひなば、則ち眞諦の空と室の空との二の空有り。又問ふ。空は分別す可きやと。眞諦の理は分別を絶するが故に、答へて言はく。分別も亦空なりと。然るに但舊解は小しく異なり。何を以て空と爲すやは、是れ理の空なりと爲んや、室空の事の空に因るや。答へて曰はく。空を以て空なりとは、是れ理の空の故に空智を以て來る空なることを明す。上の空は是れ境の空なり。下の空は是れ智の空なり。又空何ぞ空を用てするやとは、理は自らは是れ空なり。何ぞ空の智を假りんやと明す。答へて曰はく。無分別空を以ての故に空なりとは、理は智を假るに非ず。然れども智に非ざれば見る可きに由無し。故に無分別空智を

以て來れば及ち此の空を得ることを明すなり。智は是れ有の法なり。空は是れ無の法なり。便ち二相の分別す可き有り。故に空は分別す可きやと問ふ。空の中には都て二相として分別す可きもの無し。故に分別も亦空なりと云ふ。

經典（境の空を明す）

又問フ。以テカレ何ヲ爲スヤ。空ト。答テ曰ク。以テ空ヲ空ナリト。又問フ。空何ゾ用テスルヤ。空ヲ。答テ曰ク。以テノ無分別空ヲ一故ニ空ナリト。
又問フ。空ハ可キヤトニ分別ス一耶。答テ曰ク。分別亦空ナリト。

經典訓讀文

又問ふ。何を以てか空と爲すやと。答へて曰はく。空を以て空なりと。又問ふ。空何ぞ空を用てするやと。答へて曰はく。無分別空を以ての故に空なりと。又問ふ。空は分別す可きやと。答へて曰はく。分別も亦空なりと。

經典現代語譯

又文殊菩薩は問ひます。「諸佛の國土は何故空なのでありませうか。」と。維摩居士は答へて言ひます。「究極の眞理は絶対平等であつて、一切が空でありますから、諸佛の國土も空なのであります。」と。又問ひます。「空を説くのに、何故居室を空つぽになさるのですか。」と。答へて言ひます。「究極の眞理においては、一切の分別は無いので居室も空つぽにしてあります。」と。又問ひます。「(眞理と居室との)空は分別すべきでありませうか。」と。答へて言ひます。「究極の眞理においては相對を超絶してゐますから、分別も亦空なのであります。」と。

「智の空を明す」(現代語譯)

六つの問答を擧げて空についての疑問を取り除く中の第二は、後の三つの問答であつて、又問ふから以下眞理を觀ずる智慧の空を説き明します。

又問ふ。空は當に何に於てか求むべきやとは、惑ひある人々は、維摩居士と文殊菩薩との二人が空についての眞理を良く談する

のを見て、空の眞理は正道に存在するのであつて邪道には存在しないのであるから、空智（一切の現象は空であると観ずる智）を得るには此の二人の菩薩について學べばよいと恐らく思ふであります。それ故に、此の空智を得るには何について學ぶべきかを問ふのであります。それに答へて、六十二見（外道―佛教以外の教へを信奉する者―が有する六十二の誤つた見解）は全てが空である、即ち現象世界を超えた究極の眞理においては全てが絶対平等で何らの區別差別も無い空であるので、六十二見について學べば空智が得られる、と言ふのであります。六十二見はすべて空である、その空なる六十二見について學べば空智が得られると云つてをります。空なるものについて學んでも無に等しく、空智が得られないことは明らかであります。しかしながら惑ひある人々は、維摩居士の答への言葉通りにうけとつて、外道の六十二見について學べば空智が得られると誤り思ふであります。其れ故に、六十二見は當に何に於てか求むべきやと、又問ふのであります。それに答へて、諸佛が解脱を得てゐる空智は、外道の六十二見の空智と何ら異なることはありませんから、諸佛の解脱について學べば空智が得られる、と言ふのであります。しかしながら惑ひのある人々は、しばらくは諸佛の解脱について學べば空智が得られると誤り考へるのであります。其れ故に、諸佛の解脱は何に於てか求むべきやと、又問ふのであります。それに答へて、衆生の心のはたらきによつて得られる空智も亦、諸佛の解脱の空智と何ら異なることはあります。ませんから、結局のところ、私たちの心のはたらきによつて空智を學びとれ、と言ふのであります。

上なる諸佛の解脱、下なる外道の六十二見、及びその中間である衆生の心のはたらきについて、相對世界を超えた究極の眞理を觀ずれば、それらは絶対平等であつて差別の相を離れてをり、異なつた特質は全くありません。若し正しい空智を得ようと考へるならば、此の絶対平等で何らの區別差別も無い空について學ぶべきであります。

ある經典研究家は、空智の存在しない對象に空智を求めんことはできないといふ解釋をしてゐます。外道の六十二見を學んでも正しい空智を得ることはできない。それは譬へば、すがた形なく差別の相を離れてゐる無相の中に、はたらきのある智を求めようとしても得ることができないのと同様である、と説き明してゐます。私（太子）が考へますには、外道の六十二見、諸佛の解脱、衆生の心のはたらきの三つの對象のすべては、相對世界を超えた究極の眞理においては絶対平等で何らの區別差別も無い空であると觀ずる、そのやうに觀ずること自體が空智を得ることだと思ひます。

(訓讀文)

又問ふ從り以下、第二に三番の間答を擧げて智の空を明す。

又問ふ。空は當に何に於てか求むべきやとは、恐らく惑者は二大士の善く空の義を談ずるを見て、便ち義は正に在り邪

に在らざれば、則ち此の空智は只應に二大士に就きて求む可しと謂はん。故に又問ふなり。此の空智は當に何に於てか

求むべきやと。答へて曰く。六十二見は擧體即ち空なれば中に於て求む可しと。既に空の中に求む可しと云ふ。則ち求

む可きこと無しといふこと明らかなり。而るに物は然れば則ち只應に外道に就きて求む可しと謂はん。故に又問ふなり。

六十二見は當に何に於てか求むべきやと。答へて曰はく。諸佛の解脱の空は六十二見の空に異ならざれば、中に於て求む

可しと。而るに物は又計すらく。然れば則ち只應に諸佛に就きて求む可しと。故に又問ふなり。

諸佛の解脱は何に於てか求むべきやと。答へて曰はく。衆生の心行の空も亦諸佛の解脱の空に異なること無ければ、中

に於て求む可しと。上を窮め下及び中間を極むるに無相平等にして都て異の相無し。若し正智を求めんと欲せば、只

應に此の平等の空の中に就きて求む可きなり。一家は互無を以て解釋す。六十二見の中に正智を求むることは不可な

り。喩へば無相の中には智として得可きこと無きが如しと明すなり。私の懷ふには、空智は只此の三境の擧體即ち空

に就きて得可きなり。

經典(智の空を明す)

又問フ。空ハ當ニ於テカレ何ニ求ム。答テ曰ク。當ニ於テ六十二見ノ中ニ求ム。又問フ。六十二見ハ當ニ於テカレ何ニ求ム。答テ曰ク。

當ニ於テ諸佛ノ解脱ノ中ニ求ム。又問フ。諸佛ノ解脱ハ當ニ於テカレ何ニ求ム。答テ曰ク。當ニ於テ一切衆生ノ心行ノ中ニ求ム。

經典訓讀文

又問ふ。空は當に何に於てか求むべきやと。答へて曰はく。當に六十二見の中に於て求むべしと。又問ふ。六十二見は當に何に於て

か求むべきやと。答へて曰はく。當に諸佛の解脱の中に於て求むべしと。又問ふ。諸佛の解脱は當に何に於てか求むべきやと。答へ

て曰はく。當に一切衆生の心行の中に於て求むべしと。

經典現代語譯

又文殊菩薩は問ひます。「空智（一切の現象は固定的實體の無い空だと觀する智）を得るには何について學ぶべきでせうか。」と。維摩居士は答へて言ひます。「六十二見（外道の六十二の誤つた見解）を學べば空智が得られます。」と。又問ひます。「六十二見を得るには何について學ぶべきでせうか。」と。答へて言ひます。「諸佛の解脱を學べば得られます。」と。又問ひます。「諸佛の解脱を得るには何について學ぶべきでせうか。」と。答へて言ひます。「一切衆生の心のはたらきを觀察することによつて得られます。」と。

〔何ぞ侍者無きやの問ひに答ふの科段分け〕（現代語譯）

文殊菩薩の質問に維摩居士が答へる中の第二は、何ぞ侍者無きやの問ひに答へるのであり、又仁の問ふ所から以下がこれであり、ます。この中についても亦二つの項目があります。

第一に、正しく答へます。

第二に、そのやうに答へた理由を釋き明します。

（訓讀文）

又仁の問ふ所従り以下、第二の何ぞ侍者無きやの問ひに答ふ。中に就きて亦二有り。

第一に正しく答ふ。

第二に釋す。

〔正しく答ふ〕（現代語譯）

（何故お付きの從者たちを置いてゐないのかの質問に答へる第一は、維摩居士が正しく答へます。）

又仁の問ふ所、何ぞ侍者無きやとは、上述の文殊菩薩の問ひを再び擧げたのであります。一切の衆魔及び諸の外道は皆吾が侍な

りとは、從者の本質は主人の命を奉じ從ふところにあります。衆魔と外道とは皆維摩居士の教化に從つて正道に入らしめられるので、皆吾が侍なりと云ふのであります。

〔訓讀文〕

又仁の問ふ所、何ぞ侍者無きやとは、上の問ひを牒す。一切の衆魔及び諸の外道は皆吾が侍なりとは、侍は伏従を以て義と爲す。衆魔と外道とは皆我が化に從ふが故に、皆吾が侍なりと云ふ。

經典（正しく答ふ）

又仁ノ所問フ。何ソ無キヤトニ侍者一。一切ノ衆魔及ビ諸ノ外道ハ皆吾ガ侍也。

經典訓讀文

又仁の問ふ所、何ぞ侍者無きやと。一切の衆魔及び諸の外道は皆吾が侍なり。

經典現代語譯

文殊菩薩は問ひました。「何故從者を置いてゐないのですか。」と。維摩居士は答へて言ひます。「一切の衆魔及び諸々の外道は（我が教化に從ひますから）皆我が從者なのです。」と。

〔釋す〕（現代語譯）

何故お付きの從者たちを置いてゐないかの質問に答へる第二は、そのやうに答へた理由を釋き明します。

諸々の魔や外道を「我が從者である」と、維摩居士が答へるのは如何なる理由に基くのでありませうか。諸々の魔は迷ひの現實社會に於て欲望をほしいままにして楽しんでゐます。八地以上の菩薩である維摩居士は、迷ひの此の世の中に姿を現はし、衆生の教化濟度に力を盡します。諸々の魔を教化して正道に入らしめるのであります。諸々の外道は、諸々の邪見を楽しんでゐます。維摩居士はその諸々の邪見に心を動揺させることはありません。諸々の外道を教化して、維摩居士の教へに從はしむるのであります。

それ故に、諸々の魔や外道は「皆我が従者である」と、維摩居士は云ふのであります。

(訓讀文)

第二に釋す。

皆吾が侍なる所以は何ん。衆魔は生死を樂ふ。菩薩は生死に於て而も捨てず。教へて道に入らしむ。外道は諸見を樂ふ。菩薩は諸見に於て動ぜず。化して己に従はしむ。故に皆吾が侍と云ふなり。

經典(釋す)

所以へ者何。衆魔へ者樂フニ生死ヲ一。菩薩ハ於テニ生死ニ一而モ不レ捨テ。外道へ者樂フニ諸見ヲ一。菩薩ハ於テニ諸見ニ一而モ不レ動ゼ。

經典訓讀文

所以は何ん。衆魔は生死を樂ふ。菩薩は生死に於て而も捨てず。外道は諸見を樂ふ。菩薩は諸見に於て而も動ぜず。

經典現代語譯

維摩居士は云ひます。「衆魔や外道は皆我が従者である理由を申し述べませう。衆魔は迷ひの此の世の中で欲望をほしいままにしてゐます。八地以上の菩薩は、此の迷ひの世の中に姿を現はし、彼等を教化して正道に入らしめます。外道は諸々の邪見を樂しんでゐます。八地以上の菩薩は、邪見に心を動搖させることなく、彼等を教化して教へに従はしめます。」と。

〔疾の相に因りて論を作すの科段分け〕(現代語譯)

維摩居士の方丈内の出來事についてのみ問答を爲す中の第三は、文殊師利の言はくから以下であり、寒けがする熱があるなど、病ひの状態に基いて問答を爲します。此は維摩居士が病氣の姿を現はすことに由つて六つの問答が生じますが、その中の第四番目の問答であります。その中に就いて、文殊菩薩の間ひと維摩居士の答へとの二つの項目があります。

(訓讀文)

文殊師利もんじゆしりの言いはく従より以下いげ、只方丈ただほうじやうの内事ないじに就つきて論ろんを作なす中なか、第三だいさんに疾しつの相さうに因よりて論ろんを作なす。此これは是これ疾しつに因よりて六論ろくろんを生しやうずる中なかの第四だいしの論ろんなり。中なかに就つきて即すなはち問とひと答こたへとを二にと爲なす。

〔文殊問ふ〕（現代語譯）

（維摩居士の病ひの状態に基いて問答を爲す中の第一に、）文殊菩薩は質問して言ひます。

居士こじの疾やむ所ところ、何等なんらの相さうと爲なすやとは、寒さむけがする、熱あつがある、やせる、疲つかれるなどが病びひの状態じたいなので、如何いかなる状態じたいで維摩ゐま素その中なかの何なにが病びんである状態じたいなのかを問とふのである、一いちと。

（訓讀文）

問とひて言いはく。

居士こじの疾やむ所ところ、何等なんらの相さうと爲なすやとは、寒かん・熱ねつ・羸るい・疲ひを病びひの相さうと爲なすが故ゆゑに、何なにを以もつて相さうと爲なるやと問とふなり。一いちに云いはく。四大しだいの中なかの何なんら等の相さうと爲なすやとなり。

經典（文殊問ふ）

文殊師利ノ言ク。居士ノ所レ疾ム。爲スヤトニ何等ノ相ト一。

經典訓讀文言はく。居士の疾む所、何等の相と爲すやと。

經典現代語譯

文殊菩薩は質問して言ひました。「維摩居士さん、寒け熱など、どんな状態で病んでをられるのですか。」と。

〔淨名答ふの科段分け〕（現代語譯）

維摩居士の病ひの状態に基いて問答を爲す中の第二に、維摩居士が答へるのですが、それ自體に三つの項目があります。第一に、維摩居士は、我が病ひには形は無く、病ひの状態を見ることは出来ないと言ひます。

第二に、又問ふ。此の病ひ身と合するやから以下、二つの問答があり、問ひと答へとをやりとりして、衆生の疑ひを取り除きます。第三に、而ども衆生の病ひはから以下、維摩居士には病状といふ形の無いことの結びの文言であります。

(訓讀文)

第二に淨名の答へに自ら三有り。

第一に直ちに病相として見る可き無しと言ふ。

第二に又問ふ。此の病ひ身と合するや従り以下、一番の問答有り。往復して疑ひを除く。

第三に而ども衆生の病ひは従り以下、病相無きことを結す。

〔病相無しと言ふ〕(現代語譯)

(維摩居士が答へる中の第一は、我が病ひには形は無く、病ひの状態を見ることは出来ないと言ひます。)

我が病ひ形無し。見る可からずとは、維摩居士の病ひの實體は、衆生の病ひを救はんが爲に假に病んでゐる空の病ひであつて、維摩居士は眞實に病んでゐるのではなく、それ故に病ひが如何なる状態にあるのかを見ることは出来ないであります。一説では次のやうに言ひます。―法身の實體は眞實に病むことはないので、病ひの状態を見ることは出来ないのである、―と。

(訓讀文)

我が病ひ形無し。見る可からずとは、病體は即ち空にして病ひ無し。故に形状の見る可き無きなり。一に云はく。法身の地は本來病相として見る可き無きなりと。

經典(病相無しと言ふ)

維摩詰ノ言ク。我ガ病無シ形。不トレ可ラ見ル。

經典訓讀文

維摩詰の言はく。我が病ひ形無し。見る可からずと。

經典現代語譯

維摩居士は答へて言ひました。「我が病ひには形はありません。病ひの状態を見ることは出来ないのです。」と。

〔疑ひを除く〕(現代語譯)

維摩居士が答へる中の第二は、文殊菩薩と問答をやりとりして、衆生の疑問を取り除きます。

又問ふ。此の病ひ身と合するや、心と合するやとは、「我が病ひには形が無いので、病ひの状態をみることは出来ません。」といふ維摩居士の答へを聞いて、或る人たちは、形が無くてその状態を見ることの出来ない特別な一つの病ひがあるのだと思ふのでありませう。それ故に、「此の病ひは身體が傷ついて生じてゐるのでせうか、心が傷ついて生じてゐるのでせうか。」と問ふのであります。答へて曰く。身と合するにも非ず。身相離るるが故にとは、八地以上の菩薩の身體は相對世界を超えてゐるので空(無い)の状態であります。亦心と合するにも非ず。心は如幻なるが故にとは、心も亦同様に空(無い)であります。身體も心も共に空(無い)でありますから、身體が傷つき、心が傷ついて生じてゐる病ひではない、とうふことを説き明してゐます。一説では次のやうに云ひます。—衆生は「病ひの状態は身體と心とが極めて微かに傷ついてゐるので、その病状を見る事ができない。」と疑問を抱くであらう。それ故に、「病ひは身體が傷ついて生じてゐるのか、心が傷ついて生じてゐるのか。」と問ふのである。答へて曰はく。身と合するにも非ず。身相離るるが故にとは、八地以上の菩薩の法身は既に、身體の姿かたちを超離してゐることを説き明してゐる。亦心と合するにも非ず。心は如幻なるが故にとは、八地以上の菩薩のさとり智慧は差別對立の相を超えてゐることを説き明してゐる、—と。肇法師は次のやうに云ひます。—衆生は「我が病ひは形は無いので、病状を見ることは出来ない。」といふ維摩居士の答へを聞いて、「心の病ひは形が無いので見ることが出来ない。身體の病ひは極めて微かであるので見ることが出来ない。」と思ふ

であらう。それ故に「身體の病ひなのか、心の病ひなのか。」といふ問ひが生ずるのである。——と。維摩居士の答へについての肇法師の解釋は、前述の身心共に空（無い）、と同様であります。

問答のやりとりの第二には、四大（身體を構成してゐる地・水・火・風。筆者・注に於ける病ひを問ひます。四大の中に於て何れの大の病ひぞと文殊菩薩は問ひます。衆生は、身體を構成してゐる四大の病ひであつて、而もその病状を見ることが出来ないとは如何なる病ひであらうかと疑問を抱くであります。それ故に、四大の中に於て何が傷つき病んでゐるのかと問ふのであります。答へて曰はく。地大に非ずとは、八地以上の菩薩は相對世界を超えてをりますから、身體構成要素の地大（堅さを本質とし、ものを保持する作用がある）は空（無い）の状態で、地大が傷つき病むことは無いのであります。地大を離れずとは、地大は空（無い）の状態ですが、地大そのものが消えて無くなつてしまふことはありませんから、八地以上の菩薩の身體が地大から離れることも亦無いことを説き明してゐます。餘の水大（濕を性とし、ものををさめ集める作用がある）、火大（熱さを本質とし、ものを成熟させる作用がある）、風大（動を性とし、ものを生長させる作用がある）の三つも皆同様であります。一説では次のやうに云ひます。——四大は疾病の根源であるので、更に四大について文殊菩薩は特別に問ふのである。答へて曰はく。地大に非ずとは、八地以上の菩薩の法身は相對世界を超えてゐて、地大は身體の構成要素でないことを説き明してゐる。亦地大を離れずとは、八地以上の菩薩は衆生の教化濟度のためにその機縁に應じて假に病ひの姿を現はすのであるが、假の病ひの身體は地大を構成要素としてゐて離れることはないのである。——と。

（訓讀文）

第二に往復して疑ひを除く。

又問ふ。此の病ひ身と合するや、心と合するやとは、或ひと我が病は形無ければ見る可らざるといふを聞き、便ち別に一の病ひの形無くして見る可からざる者有りと謂はん。故に此の病ひは身と合するや、心と合するや、と問ふなり。答へて曰く。身と合するにも非ず。身相離るるが故にとは、身は即ち空なり。亦心と合するにもあらず。心は如幻なるが故にとは、心も亦空なり。身心既に空なれば病の合す可きこと無しと明すなり。一に云はく。物疑ふらく。病相微細にして身心と合するが故に見る可らずと。故に身と合するや、心と合するや、と問ふ。答へて曰はく。身と合するにも非

ず。身相離るるが故にとは、法身は已に身相を離るることを明すなり。亦心と合するにもあらず。心は如幻なるが故にとは、智の無相を明すなりと。肇法師は直に云はく。物我が病ひは形無くして見る可からずと聞きて、便ち心の病ひは形無きが故に見る可からず、身の病ひは微細なるが故に見る可からず、と謂はん。故に之が爲に問ひを生ずるなりと。答への意は前に同じ。

第二に問ふ。四大の中にて何れの大の病ひぞとは、物疑ふらく。猶是れ四大の病ひにして見る可からずと。故に四大の中にて何れの病ひぞと問ふなり。答へて曰はく。地大に非ずとは、地の體は即ち空なればなり。地大を離れずとは、地の外も亦空なりと明すなり。餘の三大は此に類するに皆爾なり。一に云はく。四大は是れ疾病の本なるが故に更に別に問ふ。故に答へて曰はく。地大に非ずとは、法身は地大に非ざることを明すなり。亦地大を離れずとは、應の病ひは地大を離れざるなりと。

經典 (疑ひを除く)

又問フ。此ノ病身ト合スルヤ耶。心ト合スルヤ耶。答テ曰ク。非ズニ身ト合スルニ。身相離ルルガ故ニ。亦非ズニ心ト合スルニモ。心ハ如幻ナルガ故ニ。
 又問フ。地大ト水大ト火大ト風大トノ於ニ此ノ四大ニ。何レノ大ノ之病ゾ。答テ曰ク。是ノ病ハ非ズニ地大ニ。亦不レ離レニ大ヲ。水大・火大・風大モ亦復如シレ是ノ。

經典訓讀文

又問ふ。此の病ひ身と合するや、心と合するや。答へて曰はく。身と合するにも非ず。身相離るるが故に。亦心と合するにも非ず。心は如幻なるが故に。
 又問ふ。地大と水大と火大と風大との此の四大に於て、何れの大の病ひぞ。答へて曰はく。是の病ひは地大に非ず。亦地大を離れず。水大・火大・風大も亦復是の如し。

經典現代語譯

文殊菩薩は又問ひます。「此の病ひは身體が傷ついて生じてゐるのでせうか、心が傷ついて生じてゐるのでせうか。」維摩居士は答へて言ひます。「身體が傷ついてゐるのではありません。八地以上の菩薩は相對世界を超えてゐて、身體の姿かたちを超越してゐます故に。また心が傷ついてゐるのでもありません。心はまぼろしの如く、同様に差別對立の相を超えてゐます故に。」

文殊菩薩は又問ひます。「身體を構成してゐる地大と水大と火大と風大との四大に於て、どの構成要素が病んでゐるのでせうか。」維摩居士は答へて言ひます。「八地以上の菩薩は相對世界を超えてゐて地大は空(無い)の状態で、病むことはありません。また衆生濟度のための假の病ひの身體は、地大を構成要素としてゐて離れることはありません。水大・火大・風大も亦同様であります。」

〔病相の無きことを結す〕(現代語譯)

維摩居士が答へる中の第三は、而れども衆生の病ひはから以下で、八地以上の菩薩である維摩居士には病状といふ形の無いことの結びの文言であります。亦次のやうに言ふのもよいでせう。——八地以上の菩薩の法身は眞實に病むことはないので病ひの状態を見ることは出来ない、そのことの結びの文言である、——と。

(訓讀文)

而れども衆生の病ひは從り以下、第三に病ひ無しと結す。亦可なり。法身には實の病相の見る可き無しと結するなりと。

經典 (病相の無きことを結す)

而ドモ衆生ノ病ハ從リニ四大一起ル。以テニ其ノ有ルヲ病。是ノ故ニ我ハ病ム。

經典訓讀文

而れども衆生の病ひは四大從り起る。其の病ひ有るを以て、是の故に我は病む。

維摩居士は結びとして答へます。「然しながら衆生の病ひは身體の構成要素の四大から起ります。衆生の病ひを救はんがために、私は假に病ひの姿を現はすのです。」

〔諸の新學の菩薩の爲に論を作すの科段分け並びに慰諭の三つの別〕（現代語譯）

文殊菩薩が自己の考へに基いて質問し、維摩居士が答へる中の第二は、**文殊師利、維摩詰に問ひて言はくから以下で、外部の新たに佛道を學ぶ諸々の菩薩たちの爲に、廣範に亘つて問答を爲します。**その中に就いて亦二つの項目に分けます。

第一に、病ひある菩薩を如何に慰諭（安んじ慰め、教へ導く）すべきかを説き明します。

第二に、病ひある菩薩の心を如何に調伏（心を正しくとのへ、悪心を抑へ除く）すべきかを説き明します。

ところで、慰諭は他者を教化濟度する行であり、調伏は自らがさとりを求めて励む行であります。何故ならば、慰諭については經典に**有疾の菩薩は如何が其の心を調伏せんやと、病ひある菩薩自身の心のととのへ方を問うてゐるからであります。**慰は安んじ慰めるといふ意味であり、諭は教へ導くといふ意味であります。慰諭について申し述べますと、菩薩の修行の階位に應じて、要約して三つの區別があります。第一に、初地以上（菩薩五十二の階位の中の最高の十地の初めが初地、即ち初地〜十地・等覺・妙覺の十二階位の菩薩）はその修行の深淺には優劣がありますが、皆同じく眞理を觀じてをり、明らかな解脱に達してをります。それ故に唯よく他者を慰諭し、自分自身が他者から慰諭されることはありません。第二に、六信以下（菩薩五十二の階位の中の最下位が十信、其の中の初信〜六信の六段位の菩薩）はただ自分自身が他者から慰諭されるのみで、他者を慰諭する能力はありません。第三に、七信以上（菩薩五十二の階位の中の七信〜十信と十住・十行・十廻向との合計三十四階位の菩薩）は、決定して惡に墮することは無いのでありますが、未だ眞の解脱には達してをりません。病んでゐる場合には悠然として衆生を教化濟度することは出来ません。それ故に、病んでゐる時は必ず他者から慰諭されますし、病んでゐない場合には他者を慰諭することが出来ます。一説では次のやうに云ひます。——七地以下（初地〜七地まで

の七階位の菩薩は眞理を觀することは成就してゐるが、常に明らかな解脱の境地にあるとは言へない。それ故に時としては、他者から慰諭されることもある、——と。

病ひある菩薩を如何に慰諭すべきかは、維摩居士が病氣の姿を現はすことに由つて六つの問答が生じますが、その中の第五番目の問答であります。

(訓讀文)

文殊師利、維摩詰に問ひて言はく従り以下、文殊は其の私の問ひを陳ぶる中の第二に、汎く外の諸の新學の菩薩の爲に論を作す。中に就きて亦開きて二と爲す。

第一に慰諭を明す。

第二に調伏を明す。

然るに慰諭は是れ外化の行、調伏は是れ自行なり。何となれば則ち文に菩薩は如何が有疾の菩薩を慰諭すべしやと云ひ、調伏は則ち文に有疾の菩薩は如何が其の心を調伏せんやと云ふ。慰は是れ安慰の義、諭は是れ開諭の義なり。若し慰諭を論ぜば略して三の別有り。一には初地以上は復優劣の異ありと雖も、同じく是れ眞觀にして明解現す。故に唯能く侘を慰し自ら慰するを須ひず。二には六心以下は但自ら慰するを須ひ他を慰すること能はず。三には但七心以上は定位に入ると雖も、未だ眞解有らず。病ひに在りて優然として物を化すること能はず。故に必ず他の慰を須ひ亦能く侘を慰す。一に云はく。七地以下は是れ眞觀なりと雖も、未だ常に現すること能はず。故に猶慰を須ひるなり。慰諭は此は是れ疾に因りて六論を生ずる中の第五の論なり。

〔慰諭を明すの科段分け〕(現代語譯)

(新たに佛道を學ぶ諸々の菩薩たちの爲に問答を爲す中の第一は、病ひある菩薩を如何に慰諭すべきかを説き明しますが、)その中に就いて、文殊菩薩が問ひ、維摩居士が答へる、即ち二つの項目があります。

(訓讀文)

中に就きて即ち問ひと答とを二と爲す。

〔文殊問ふ〕(現代語譯)

(病ひある菩薩を如何に慰諭すべきかを説き明す中の第一は、文殊菩薩が維摩居士に質問します。)

文殊、維摩詰に問ひて言はく。無疾の菩薩は云何が有疾の菩薩を慰諭すべきやとは、病ひにかかれば身體も心も痛みますから、弱い身體は疲れはてて、諸々の苦しみが身に逼ります。正しい心がまへは迷ひ亂れ、心の痛みはひつきりなしに續きます。佛道を求め勵む餘裕など生ずる筈がありません。そこで、他者から善く慰諭(安し慰め、教へ導く)して貰へば、必ず心が安まり、眞理を求め勵むことが出來ませう。それ故に、「病ひの無い菩薩は、病ひある菩薩を如何に慰諭すべきでありませうか。」と文殊菩薩は問ふのであります。若し同じ階位の菩薩であつても、お互ひに慰諭しあふことが出來ます。

而るにただ疑問に思ふことがあります。此の病ひある菩薩を慰諭するのは病ひの無い菩薩であります。今佛陀釋尊の仰せを承つて病氣見舞ひに來た文殊菩薩は病が無いのですから、その文殊菩薩は如何に慰諭すべきかを問ふのが當然でありませう。然るに何の目的があつて、反對に病ひの身である維摩居士に問ふのでありませうか。その理由を解き明しますと、要約して三つの意味合ひがあります。第一には、維摩居士が病んでゐるといふことで大勢の人々が集つてきます。維摩居士を慕つて集つた人たちですから、維摩居士の慰諭にはよく従ひ、大勢の人々が必ず慰諭によつて心を安んずるからであります。第二には、病ひある人は、必ず慰諭すべき対象は何かを自らがよく知つてをります。病んでない第三者にはそれは不明です。維摩居士は病んでゐて、慰諭すべき対象をよく知つてゐるからであります。第三には、上述の通り、維摩居士は本來眞實に病むことはない、ただ衆生を教化濟度するため、に假に病ひの姿を現はしてゐるのだと言つてゐます。維摩居士は眞實に病んでゐるのではなく、巧みに慰諭することが出来るからであります。以上の三つの意味合ひがありますので、文殊菩薩は反對に、病ひある菩薩を如何に慰諭すべきかと維摩居士に問ふのであります。然しながら以上の三つの意味合ひで、慰諭の在り方を維摩居士に問ふのは納得いたしかねます。その理由を申し述べ

ます。そもそも慰諭は、心が道理に迷ひ惑つてゐるのを止め、正しい心がけを得さしめることを言ふのであります。若し病ひある身であつても、その慰諭すべき対象を自らが知つてゐるといふのであれば、それは心が迷ひ惑つてゐるとは申せません。そのやうな人は慰諭する必要はないのであります。また、維摩居士のやうな高德の菩薩であつても、自らが病ひの身である時に、「如何にして汝の病ひを慰諭しようか。」と、病氣見舞ひに行くことが出来ませうか、出来ないと思ひます。又、上述では維摩居士が慰諭が巧みであるとの理由を擧げてゐますが、どうして維摩居士獨りのみがたくみであると言へませうか。文殊菩薩も亦八地以上であつて、維摩居士と同等に巧みであります。慰諭が同じく巧みである二大菩薩の場合、現に病氣見舞ひに来てゐる文殊菩薩こそが、必ず如何に慰諭すべきかを説法すべきであります。この件について以上のやうな難點がありますので、私（太子）の解釋は少しく異なりまゝす。病んでゐる菩薩を如何に慰諭すべきかを文殊菩薩は反對に、維摩居士に問うた理由を推しはかつてみます。慰諭と調伏とは、教への通りに受持し行ずるについて、それを爲し遂げることは極めて至難な業でありませう。若し病んでゐない文殊菩薩が慰諭と調伏との説法の主體者になれば、その場に居合せた衆生は、高德で病ひの無い文殊菩薩には可能な行であらうが、凡夫の私たちに不可能な行ではないかと、説法を素直に信じないかも知れません。それ故に、病ひの身を現はしてゐる維摩居士自らに説法させ、至難の行であつても凡夫の私たちと同様に病んでゐる維摩居士の説法だから信ずることが出来るとし、以て新たに佛道を學ぶ菩薩たちを勧め導くのであります。

(訓讀文)

文殊、維摩詰に問ひて言はく、無疾の菩薩は云何が有疾の菩薩を慰諭すべきやとは、病ひ來りて身と意とに在れば、怯身羸羸として諸苦逼を爲す。正志迷亂し思痛無聞なり。何の暇あつてか道を慕はん。是を以て必ず須ひて他人の善き慰を須ひて方に心を安んじ理に趣くことを得ん。故に問うて無病の菩薩云何が有疾の菩薩を慰諭すべきやと言ふなり。若し是れ同位なるも亦相ひ慰することを得るなり。

而るに但疑ふらくは、今文殊は旨を奉じて來れば、則ち此の慰諭は應に是れ問疾の文殊にあるべし。然るに何の意ありてか反りて有疾の淨名に問ふや。釋して曰はく、略して三の意有り。一には、病ひに在りて多くのひと集れば、

すなは 則ち智人は慰諭するに必ず善く慰諭せん。二には、病ひの爲に安ずる所は必ず疾に居るものは自ら知れり。傍者は達せず。三には、淨名は上に既に本自ら病むこと無し、但物の爲に病むと言へり。亦應に慰諭するに巧みなるべし。此の三の意有るが故に反りて淨名に問ふなり。然れども三は猶去はれず。何となれば則ち夫れ慰諭とは、必ず是れ其の迷惑を止め正志を得せしむるの謂なり。若し疾に居るに従りて安ずる所あれば、則ち何ぞ之を慰すること有らん。且是れ智人と雖も疾有るの時に、豈云何が汝を慰諭すべきと問ふ可けんや。又上の所説の理は、豈淨名のみ巧みとする所ならんや。文殊も亦能く同じく達す。同じく能くするの間には必ず問疾の者宜しく慰すべきなり。此の難有るが故に、私の釋は少しく異なり。夫れ文殊反りて淨名に問ふことを尋ぬれば、慰諭と調伏とは教への如く受行せんに必ず是れ行を爲すこと難かる可し。若し無疾の文殊を法王と爲さば、則ち時の衆は必ず清くは信ぜざらん。所以に更に疾に居る淨名をして自ら説かしめ、以て新學を勸むるなり。

經典 (文殊問ふ)

爾ノ時ニ文殊師利。問テニ維摩詰ニ一言ク。菩薩ハ應ニ云何ガ慰諭ス有疾ノ菩薩ヲ上。

經典訓讀文

爾の時に文殊師利、維摩詰に問ひて言はく。菩薩は應に云何が有疾の菩薩を慰諭すべきや。

經典現代語譯

そしてまた文殊菩薩は、維摩居士に問うて言ひました。「病ひ無き菩薩は、病ひある菩薩を如何に慰諭(安んじ慰め、教へ導く)すべきでせうか。」

〔淨名答ふの科段分け〕(現代語譯)

病ひある菩薩を如何に慰諭すべきかを説き明す中の第二は、維摩居士が文殊菩薩の問ひに答へるのでありますが、その中に就い

ても亦二つの項目があります。

第一に、維摩居士は正しく答へます。

第二に、答への結びの文言であります。

(訓讀文)

第二の淨名の答への中に就きて亦二有り。

第一に正しく答ふ。

第二に答へを結す。

〔正しく答ふの科段分け〕(現代語譯)

病ひある菩薩を如何に慰諭すべきかといふ文殊菩薩の問ひに答へる中の第一は、維摩居士は正しく答へるのでありますが、その中についても亦二つの項目があります。

第一に、身の無常・苦・無我・空寂などを別々に舉げて、慰諭の説法のあり方を説き明します。

第二に、先罪や己の疾など種々いり雜つてゐる事柄を舉げて、慰諭の説法のあり方を説き明します。

(訓讀文)

第一の正しく答ふる中に就きて亦二有り。

第一に別門に就きて慰諭を明す。

第二に雜門に就きて慰諭を明す。

〔別門に就きて慰諭を明す〕(現代語譯)

(病ひある菩薩を如何に慰諭すべきかについて、維摩居士が正しく答へる中の第一に、身の無常・苦・無我・空寂などを別々に舉

げて慰諭の説法のあり方を説き明します。)

身の無常なるを説きてとは、病ひある菩薩のために此の身が無常(變化し續けて、むなくはかないこと)であることを説き聞かせて、此の身に對する執着を捨て去らしめるのであります。身を厭離せよと説かざれとは、此の身の無常を觀すると雖も、なほ此の迷ひある現實の世の中に留まつて、廣く衆生を教化濟度しなさい、と説法するのであります。また、凡夫は此の身は無常ではないと誤り考へ、その欲望を満たしたいと願ひ、此の迷ひの世の中を厭ひ離れ去らうとは考へません。二乗の人は此の身の無常を觀するが故に、此の迷ひの世の中を厭うて離れ去らうと考へ、ただ自分のさとりだけを求めてゐるので衆生の教化濟度には考へが及びません。凡夫も二乗の人も皆、佛陀釋尊のお心に違つてゐて、中道(偏りのない中正な道)からはずれてゐます。菩薩は此の身の無常を觀するが故に、此の身に對する執着を捨て去つてゐます。衆生教化を第一としてゐますので此の迷ひの世の中を離れ去ることはなく、此の世に留まつて廣く衆生の教化濟度に盡くします。菩薩は、凡夫や二乗がその偏つた考へにとらはれてゐると違つてゐて、みごとに中道を歩んでゐます。此のやうに説法する、これを病ひある菩薩を慰諭する説法だと名づけることを説き明してゐます。これ以下の三句についても同様に解釋します。身の苦有るを説きて、涅槃を樂へと説かざれとは、此の身の諸々の苦を觀すると謂も、二乗の人のやうにただ自分だけのさとりを求めて衆生の教化濟度を捨て去つてはならないのであります。身の無我なるを説きて、而も衆生を教導すべしとは、此の身の無我(人身は五蘊の假和合であつて、永遠不滅の本體は無いことを云ふ)を觀すると雖も、假我(實體としての我といふものが存在するのではないが、五蘊の假和合である此の身に、假に我といふ名稱を付したことを云ふ)、即ち現に生存してこの身體を用ひて衆生の教化濟度に努めるべきであります。二乗の人のやうに無我を觀することによつて衆生の教化濟度を捨て去つてはならないのであります。身の空寂なるを説きて畢竟寂滅なりと説かざれとは、此の身の空寂(實體性がなく空無である)を觀すると雖も、二乗の人のやうに畢竟寂滅(煩惱を滅し盡した究極のさとり)のみを唯求めて、衆生の教化濟度を捨て去つてはならないのであります。

(訓讀文)

身の無常なるを説きてとは、應に病者の爲に此の身の無常なるを説きて其の此の身に貧著するを遺るべし。身を厭離

せよと説かざれとは、亦應に爲に無常を觀ずと雖も猶生死に留りて廣く衆生を化すべしと説くべし。亦凡夫は常なりと計するが故に世を樂うて厭離せず。二乗は無常を觀するが故に世を厭うて物を化せず。皆佛意に違ひ俱に中道を失ふ。菩薩は無常を觀するが故に能く著を存せず。厭離せざるが故に能く生死に留まり廣く衆生を化す。二乗・凡夫の偏なるに同じからず妙に中道を得たり。此の如く爲に説く。是れ有疾の菩薩を慰諭すと名づくるの謂と明かすなり。下の三句も亦同じ。涅槃を樂へと説かざれとは、身の苦を觀すと雖も二乗に同じく唯自度を存し外化を絶つこと莫れとなり。身の無我なるを説きて、而も衆生を教導すべしとは、無我を觀すと雖も而も瑕を以て衆生を教化すべし。二乗に同じく但無我を觀じて外化を絶つこと莫れとなり。身の空寂なるを説きて、畢竟寂滅なりと説かざれとは、空寂を觀すと雖も二乗に同じく唯畢竟寂滅のみを取りて外化を絶つこと莫れとなり。

經典 (別門に就きて慰諭を明かす)

維摩詰ノ言ク。説テニ身ノ無常ナルコトヲ一。不レレ説カニ厭ニ離セヨト於身ヲ一。説テニ身ノ有ルヲ苦。不レレ説カニ樂ヘトニ於涅槃ヲ一。説テニ身ノ無我ナルヲ一。而モ説ケニ教ニ導スベキヲ衆生ヲ一。説テニ身ノ空寂ナルヲ一。不レレ説カニ畢竟寂滅ナリト一。

大藏經 肇曰。當尋宿世受苦無量。今苦須臾。何足致憂。但當力勵救彼苦耳。(太子引用と内容は概ね同じ。語句異。)

經典訓讀文

維摩詰の言はく。身の無常なるを説きて、身を厭離せよと説かざれ。身の苦有るを説きて、涅槃を樂へと説かざれ。身の無我なることを説きて、而も衆生を教導すべきを説け。身の空寂なることを説きて、畢竟寂滅なりと説かざれ。

經典現代語譯

維摩居士は答へて言ひました。「此の身の無常(變化し續けて、むなしくはかないこと)であることを説き、この迷ひの世を厭うて離れ去れ(衆生教化ができない)と説いてはなりません。此の身は苦であることを説き、涅槃を求めよ(自分だけのさとりを求めて衆生教化をしない)と説いてはなりません。此の身は無我(五蘊の假和合であつて、常なる主體者は無い)であることを説き、而も衆生を教導すべ

きであると説きなさい。此の身は空寂（實體性がなく空無である）であることを説き、畢竟寂滅（煩惱を滅し盡した究極のさとり）を求めよ（自分だけのさとりを求めて衆生教化をしない）と説いてはなりません。」

〔雜門に就きて慰諭を明す〕（現代語譯）

病ひある菩薩を如何に慰諭すべきかについて、維摩居士が正しく答へる中の第二に、先罪や己の疾など種々いり雜つてゐる事からを擧げ、慰諭の説法のあり方を説き明します。先罪を悔いよと説きてから以下が、これでありませう。一説では次のやうに云ひます。——四精懃（①既に生じた悪を除くやう勤める②悪を生じないやう勤める③善を生ずるやう勤める④既に生じた善を増長せしめるやう勤める）に就いて慰諭の説法のあり方を説き明してゐる、——と。

先罪を悔いよと説きて、而も過去に入るを説かざれとは、此の病ひは皆、自分が過去の世に於て犯した惡業に基いて生じてゐるのであり、眞心こめて過去の罪を悔い改めなさいと説法すべきであります。罪には消ゆることなく過去から續き來つてゐる不滅の性はありますから、「罪は消ゆることなく過去から續き來つてゐる」と説いてはならないのであります。若し罪に不滅なる性があつて過去から續き來つてゐるのであれば、罪を滅することは不可能となります。一説では次のやうに云ひます。——過去の世に犯した惡業を悔い改めても、肉體は過去から連續して現在に至つてゐることを否定することはできない。それ故に罪には不滅の性がない、罪は過去から連續ではないと説くのである、——と。己の疾を以て彼の疾を慰む（義疏は己の病とは、自分自身の苦しみをもとにして他者の苦しみを思ひやり比較しなさい。今自分の軽い苦しみでさへこのやうに耐へ難い。況して三途（地獄・餓鬼・畜生）の三惡道に墮ちた重い苦しみは如何ばかりであらうか、といふのであります。ですから、ねんごろに教化を施しなさいと説法してゐるのであります。外の論（論語雍也第六）では次のやうに云つてゐます。——高遠な理想論ではなく、身近な例をもとにして實踐をはじめ、それが仁の道を修得する方法だと言ふことができる、——と。當に宿世無數劫の苦を識るべし。當に一切衆生を饒益せんと念ふべしとは、過去の世に惡業を積み重ねたが故に今病ひの苦しみを受けてゐることを知り、現在に於て惡業を犯さなければ未來に於て苦しみを受けることはないと推しはかり、ねんごろに一切衆生を教化しなさいと、病ひある菩薩の爲に説法してゐるので

あります。摩訶法師は次のやうに云つてゐます。――過去世に苦しみを受けることは無量であり、今受ける苦しみはたちまちの間に消え去るもので、憂ひ悩む必要はないことを知り、他者の苦しみを救ふべく力を盡しなさいといふのである、――と。所修の福を憶ひ、淨命を念じて憂惱を生ずること勿れ（義疏は當に所修の福を憶ひ）とは、自己が實踐し修めた福德を尊い寶として心に憶うて忘れることなく、ただ正しい行ひを歩み修め、清淨な生活を念じ、身の病ひを救はんとして邪命（よこしまな生活）に墮してはならないことを説き明してゐます。邪命とは、他者にこび諂ひ、うはべを飾り、自己の利のみを追求し、此の迷ひの世の中に執着してゐる等々の生活であります。常に精進を起して當に醫王と作りて衆病を療治すべし（義疏は衆疾）とは、自己の福德を他者に及ぼして、ねんごろに衆生を教化しなさいと言ふのであります。

（訓讀文）

先罪を悔いよと説きて従り以下、第二に雜門に就きて癒喻を明す。一に云はく。四精勤に就きて癒喻を明すと。先罪を悔いよと説きて、而も過去に入るを説かざれとは、爲に此の病ひは皆我が宿の罪業に由る、至心に悔過せよと説くと雖も、爲に定んで罪性の過去に入ること有りと言ふと説く莫かれとなり。若し罪性の過去に入らざれば、罪は滅することを得ず。一に云はく。先罪を悔ゆと雖も、身の過去に入れるを滅することを得ざるなりと。己の疾を以て彼の疾を慰む（義疏は己之病）とは、應に爲に己を以て人に方べよ。今我が輕苦すら尚爾なり。況んや三塗の重苦をやと。則ち勲に化を施せと説くべしとなり。外の論に云はく。能く近く譬へを取るは仁の方なりと謂ひつ可しと。當に宿世無數劫の苦を識るべし。當に一切衆生を饒益せんと念ふべしとは、當に爲に説くべし。當に宿世に惡業を造作するが故に今病苦を受くと識り、現に惡を造らざれば必ず未來に苦無しと推知し、慇懃に物を化すべしとなり。摩訶法師の云はく。當に宿世の苦無量なり、今の苦何ぞ憂苦を致すに足らんと識りて、彼の苦を救ふべきなりと。淨命を念じて憂惱を生ずること勿れ（義疏は當に所修の福を憶ひ）とは、當に己が所福を憶ひ以て尊寶と爲し、但正行を修し淨命を念じ爲に身の疾を救はんとするに邪命を起すこと勿れと明す。邪命とは、諂ひ、飾り、利を要め生を存す。常に精進を起して當に醫王と作りて衆病を療治すべし（義疏は衆疾）は、勲に福をもつて物を化せよ言ふなり。

經典（雜門に就きて慰喻を明かす）

説テ^レ悔イヨトニ先罪ヲ一。而モ不^レ説カ^レ入ルヲニ於過去ニ一。以テニ己ノ疾ヲ一慍ムニ於彼ノ疾ヲ一。當ニ識ルニ宿世無數劫ノ苦ヲ一。當ニ念フニ饒コ益セント一切衆生ヲ一。憶ヒニ所修ノ福ヲ一。念ジテニ於淨命ヲ一。勿^レ生ズルコトニ憂惱ヲ一。常ニ起シテニ精進ヲ一。當ニ作テニ醫王ト一療治ス衆病ヲ上。

經典訓讀文

先罪を悔いよと説きて、而も過去に入るを説かざれ。己の疾を以て彼の疾を慍む。當に宿世無數劫の苦を識るべし。當に一切衆生を饒益せんと念ふべし。所修の福を憶ひ、淨命を念じて、憂惱を生ずること勿れ。常に精進を起して當に醫王と作りて衆病を療治すべし。

經典現代語譯

維摩居士は言ひました。「過去の罪を悔い改めなさいと説法し、而も罪は消ゆることなく過去から續き來つてゐると説法してはなりません。己の病ひの苦しみをもとにして他者の病ひの苦しみを思ひやりなさい。過去世の苦は無限とも言へる長年月の無量の苦だと知るべきであります。一切衆生を教化し利益を與へることを念ふべきであります。己が修めた福德を寶として忘れることなく、清淨な生活を念じて、よこしまな生活に墮してはなりません。常に怠ることなく精進し、優れた醫師となつて一切衆生の病を治療すべきであります。」

【参考】

○ 先師 黒上正一郎先生は、經典「己の疾を以て彼の疾を慍む」の太子『義疏』について次のやうに論じてをられますので、参考として記します。

『太子の信仰思想は三經義疏また拾七條憲法に仰ぎ得るけれども、直接やまと言葉の親しさを以て大御心を偲はしむるのは、

日本書紀（推古天皇紀）に傳へられたる片岡山の御歌である。書紀には、二十一年冬十二月庚午かのえうま ついたちの朔ついでちの日、皇太子、片岡山に遊行いでましき。時に飢多ひとたる者道の垂ぼりに臥こせり。仍よりて姓名なを問ひたまへど言まさず。皇太子、視て飲食せじものを與へたまひ、すなはち衣裳みけしを脱ぎて飢多ひとたる者に覆のひて言のりたまひしく、『安らかに臥こせ』と宣のりて、歌よみしたまひしく、』として、

しなてる 片岡山に 飯いに飢まて こやせる その旅人 あはれ 親なしに なれなりけめや さすたけの 君はや無き
飯に飢て こやせる その旅人 あはれ

と一首の御歌をあぐるのである。太子の御歌は法王帝説に太子薨去の御時近く、先立ちて神あがりましし愛妃をいたませ給ひて詠みましし御歌と僅か二首を留むるのみである。けれども何れも現世の悲哀をよませたまひし抒情詩であることに三經義疏・拾七條憲法と脈絡する大御心のうつき表現を見まつるのである。推古天皇二十一年冬十二月太子は片岡山にいでまし、道の邊に飢多ひとたる者の臥すのをみそなはしてあはれみましたのである。その御歌の形式は素朴であると共に御言葉の高きしらべは痛切の大御心の直ちに我等の胸に迫るをおぼゆるのである。「しなてる 片岡山に 飯に飢て こやせる その旅人 あはれ」とみそなはしまししままの痛感を直敘せさせ給ひ「親なしに なれなりけめや」と飢人の運命と心理を洞察して再び「その旅人 あはれ」とくりかえし給ふ前後の同じ御言葉の大いなる繰返しは、内にこもります大御心の切實なるがために息をもつがせ給はずして、一首を限りなき節奏の波動に渾融せしめ給ふのである。あはれみます大御心に飢人のかなしき運命は生きしめられ、御歌は個人的特異性を止めぬほどに全人格的痛感が悲痛の洞察をつくして、ここに我は他に没し、他はまた我に生きて人生の大海に無限安癒の光明をめぐませ給ふのである。「群生とその苦樂を同じうす」（維摩經義疏文殊問疾品）とのたまひし大御心のうつきあらはれを仰ぎまつるのである。

無常なるが故に解脱を求むべしといふ宗教教義の理知的形骸はここに止めぬのである。はかなき無常の人生にこの痛切のいくつしみこそ悠久無限のいのちをわれらが胸にそそがせ給ふのである。この形は單純にして、ふかきみ心のこもりたる御言葉の姿は、憲法又三經義疏の御言葉の内容と直ちに連るのである。けれどもこれらに就いては改めて次の機會に述ぶることにして、今はこの御歌に現れし如き人生觀を又三經義疏の上に仰ぎて、再び日本精神の光輝を外來文化の上にあらはしたまひし

御精神を顯彰せんとするのである。はじめに維摩經文殊問疾品の「以己之疾、愍於彼疾」とある言葉の注釋に於いて太子の人生觀を仰がんとするのである。但吉藏菩薩の釋は羅汁・道生・肇三師と多くその異同を見ざるが故に、吉藏師の解を次に擧げて太子のそれと對照しまつらうとするのである。「次に以己之疾愍於彼疾。(中略) 其れ己を推して物を悲せしむるなり。我いま微かに病む。苦痛なほ爾なり。況んや惡趣の群生の無量の苦を受くるをや。又我に智慧あるに、なほ疾苦あり、況んや達らざる者をや、己を推して彼を愍むこと、是れ大士兼濟の懷ひなり。」(維摩經義疏卷四) (大正大藏經經疏部六一九五八頁上段) 太子はこれを次の如く示したまふのである。

「應に爲に己を以て人にたくらべよ。今我が輕苦すら尚ほ爾なり。況んや三途の重苦をやと。則ち懇に化を施せと説くべしとなり。外論に云く、能く近く譬を取るは仁の方なりと謂ひつべしと。」

太子がここに特に論語(雍也第六)の言葉を引用したまひ、能く近く譬を取るは仁の方なりの語に自らの御思想を示させたまふのは、ふかきみ心のこもらせ給ふところと仰ぎまつるのである。大陸諸師が「推シテ己ヲ愍ムコト彼ヲ。是レ大士兼濟之懷ノ故ナリ。」と唯、一般教學的解釋に止まれるのに比ぶれば、太子がこの注釋に於いても單に教義的解明に終らせ給はずして更にこの經語に基いて人生普遍の心理法則を徹鑿したまひ、ここにわが直接體驗の事實に照して人の上を念ふべきを宣ふのは其の形式は僅かの相異の如くなれども、之が内容に於いては著しき對照を見しむるのである。わが心を人の心にそそぎ、人の心をわが心に見る、これ人生いくつシミの基づくところなるを示し増しますのである。片岡山飢人をみそなはして「親なしに汝なりけめや」とうたはせたまひし人間苦惱の運命に對する洞察の依つて來るべき人生觀内容は此に顯示せられるのである。國民の上を念はせ給ふ大御心は、常に大乘佛典を人間内心の洞察に生命化したまひ、平等大悲の教化理想に具體的内容をあたへさせ給ふのである。無常動亂の人生を共に戦ひ生くべき生命は、この大御心によつてこそ開發せしめらるるのである。』(前掲書一五七頁
一六一頁)

病ひある菩薩を如何に慰諭すべきかといふ文殊菩薩の問ひに維摩居士が答へる、その中の第二は、答への結びの文言であります。

菩薩は應に是の如く有疾の菩薩を慰諭して其をして歡喜せしむべしとは、病ひの無い菩薩は、上述に於て説明した通りに病ひある

菩薩を慰諭(安んじ慰め、教へ導く)し、自行(自らの修行のための實踐)と外化(他者を教化濟度するための實踐)とを心に念じて忘れないやうに勧め、彼らをして佛道を喜び求める心を生ぜしめなさいと、説き明してゐるのであります。一説では次のやうに云ひます。一

慰諭を説法して經典の諸句は、その中の上の半分は實智(眞諦と俗諦との二つながらを照し見る智慧)を説き明し、下の半分は權智(この世に姿を現はして衆生を教化濟度する智慧)を説き明してゐる、一と。この説も亦良いと思ひます。良いと思へばこの説を採用しなさい。

(訓讀文)

菩薩は應に是の如く有疾の菩薩を慰諭して其をして歡喜せしむべし(義疏は應洩れ)とは、第二に答へを結す。

無疾の菩薩は、即ち當に上に明す所の如く有疾の菩薩を慰諭して、勸めて自行と外化とを憶ひ、其をして道を樂ふの心を生ぜしむべしと明すなり。一に云はく。此の中の諸句は、上半は實智を明し、下半は權智を明すと。亦好し、欲するに隨つて見つ可きなり。

經典(答へを結す)

菩薩ハ應ニ如ク是ノ慰諭シテ有疾ノ菩薩ヲ一令ム中其ヲシテ歡喜セ上。

經典訓讀文

菩薩は應に是の如く有疾の菩薩を慰諭して其をして歡喜せしむべし。

經典現代語譯

維摩居士は言ひました。「病ひの無い菩薩は、以上述べたやうに病ひある菩薩を慰諭し、彼等をして佛道を喜び求める心を生ぜしめなさい。」

〔調伏の三つの別並びに病ひある菩薩の調伏を明すの科段分け〕（現代語譯）

新たに佛道を學ぶ諸々の菩薩たちの爲に廣汎に亙つて問答を爲す中の第二は、病ひある菩薩の心を如何に調伏（心を正しくととのへ、悪心を抑へ除く）するかを説き明します。文殊師利の言はく、居士、有疾の菩薩は云何が其の心を調伏せんやから以下がこれでありませぬ。

ところで調伏には、菩薩の修行の階位に應じて三つの區別があります。第一に六信以下（菩薩五十二の階位の中の最下位が十信、その中の初信と六信の六階位の菩薩）は、調伏によつて心をととのへねばならぬといふ道理はわかつてゐるのですが、如何にして心をととのへるかには理解し得てをりませぬ。この階位の菩薩は修行の階位から墮して再び惡を犯すこともありますので、調伏によつて心をととのへ惡を抑へることが可能か否かは明らかでないであります。第二に、初地以上（菩薩五十二の階位の中の最高が十地、即ち初地と十地・等覺・妙覺の十二階位の菩薩）は、その修行の深淺には優劣がありますが、皆同じく眞理を觀じてをりますので調伏によつて心をととのへる必要はないのであります。第三に七信以上から三十信まで（菩薩五十二の階位の中の七信と十信と十住・十廻向との合計三十四階位の菩薩）は、決定して惡に墮することは無いのであります。未だ眞の解脱には達してをりませぬ。それ故に調伏によつて心をととのへる必要がありません。一説では次のやうに云ひます。——七信以上から七地までの菩薩（合計四十一階位）は皆調伏によつて心をととのへる必要がある。その理由は、住前（七信と十信・十住・十行・十廻向の三十四階位の菩薩）は眞の解脱に達してゐないから、調伏を要することは當然である。ただ初地と七地の菩薩は眞理を觀ずることは爲し得てゐるが、眞諦と俗諦や空と有などの二者を共に照らし觀ずることは爲し得てゐない。その點、八地以上の菩薩とは修行の深淺に優劣の差があるので、調伏によつて心をととのへる必要がある、——と。

この病ひある菩薩の心を如何に調伏するかを説き明す中に就いて、文殊菩薩が問ふ、維摩居士が答へる、二つの項目に分けます。

（訓讀文）

文殊師利の言はく、居士、有疾の菩薩は云何が其の心を調伏せんや（義疏は居士洩れ）從り以下、第二に調伏を明す。然るに調伏に亦三の別有り。

一に六心以下は、調伏の義ありと雖も理解未だ有らず。猶是れ位退なるが故に、調伏は没して明らかならず。
 二に初地以上は、復優劣の異ありと雖も、同じく是れ眞觀の故に調伏を須ひず。
 三に但七心以上乃至三十心は、定位に入ると雖も、未だ眞解有らず。故に調伏を須ひるなり。
 一に云はく、七心以上七地以還は、皆調伏を須ふ。何となれば則ち住前は知る可し。但初地以上七地以還は、是れ眞觀なりと雖も未だ並べ照すこと能はず。猶優劣の異有るが故に、亦調伏を須ひるなり。
 中に就きて問ひと答へとを二と爲す。

〔文殊問心〕（現代語譯）

（病ひある菩薩の心を如何にするかを説き明す中の第一は、調伏について文殊菩薩が問ひます。）

文殊菩薩が問ふのは、病ひがある時はその苦しみが迫つてくるので、正しい心がまへは迷ひ亂れ、佛道を學ぼうと念う心が生じません。病ひある菩薩の心を如何に調伏すれば、佛道を慕ひ求める心を起さしめることができるのでせうか、と問ふのであります。

（訓讀文）

問ひの言は、有疾の時は以て疾の逼を爲すを以て正志迷亂して道を念ふ能はず。云何が其の心を調伏して道を慕ふことを得んやとなり。

經典（文殊問ふ）

文殊師利ノ言ク。居士。有疾ノ菩薩ハ云何が調伏セシヤ其ノ心ヲ。

經典訓讀文

文殊師利の言はく。居士、有疾の菩薩は云何が其の心を調伏せんや。

經典現代語譯

文殊菩薩は問うて言ひました。「維摩居士さん、病ひある菩薩は自分の心を如何に調伏すれば、心を正しくととのへることができるのでせうか。」

〔淨名答ふの科段分け〕（現代語譯）

病ひある菩薩の心を如何に調伏すべきかを説き明す中の第二は、維摩居士が答へるのでありますが、その中に就いて亦三つの項目に分けます。

第一に、この項の初めから兼ねて老病死を除く者、菩薩の謂なりの經典までは、自行（自らの修行のための實踐）と外化（他者を教化濟度するための實踐）とについて調伏（心を正しくととのへ、悪心を抑へ除く）を説き明します。

第二に、彼の有疾の菩薩は應に復是の念を作すべしから以下、而も永く滅せざる。是を方便と名づくの經典までは、愛着より生ずる慈悲心をはじめとしてあらゆる事象に對する執着心を捨て去ることを勧め、それによつて調伏を説き明します。

第三に、文殊師利、有疾の菩薩は應に是の如く其の心を調伏して…すべしから以下、この項の終りまでは、病ひある菩薩が實踐すべき是と非とのいづれにも偏らない種々の行を、廣汎に説き明し、調伏の道理を明らかにして結びの文言といたします。

（訓讀文）

淨名じやうみやうの答こたへの中に就なきて亦また開ひらきて三さんと爲なす。

第一だいいちに初はじめ從より兼かねて老病らうびやう死しを除のぞく者、菩薩ぼさつの謂いひなりに訖おはるまで、自行じぎやうと外化げけとの二行にぎやうに就つきて調伏ぢやうふくを明あかす。

第二だいにに彼かの有疾うしつの菩薩ぼさつは應まさに復是またこの念ねんを作なすべし從より以下いげ而も永ながく滅めつせざる。是これを方便ほうべんと名なづくに訖おはるまで、著ちやくを離はなることを勸すすめて以もつて調伏ぢやうふくを明あかす。

第三だいきんに文殊師利もんじゆしり、有疾うしつの菩薩ぼさつは應まさに是かくの如ごとく其その心こころを調伏ぢやうふくして…すべし從より以下いげ、章しやうを訖おはるまで廣ひろく菩薩ぼさつの種種しゆじゆの中道ちゆうどうの行ぎやうを明あかし、調伏ぢやうふくの義ぎを結け成じやうす。

〔自行と外化とに就きて調伏を明すの科段分け〕（現代語譯）

病ひある菩薩の心を如何に調伏するかを維摩居士が答へる中の第一は、自行と外化とについて調伏を説き明しますが、その中に就いて亦三つの項目に分けます。

第一に、自行に心を集中して念ひ、心を調伏することを説き明します。

第二に、是の有疾の菩薩は無所受を以て而も諸の受を受くから以下は、外化に心を集中して念ひ、心を調伏することを説き明します。

第三に、文殊師利、是を有疾の菩薩：すと爲しから以下は、上述の自行と外化との二項目に共通する結びの文言であります。

（訓讀文）

第一の二行の調伏を明す中に就きて亦開きて三と爲す。

第一に自行を憶ひて心を調伏することを明す。

第二に是の有疾の菩薩は無所受を以て而も諸の受を受く従り以下、外化を憶ひて心を調伏することを明す。

第三に文殊師利。是を有疾の菩薩：すと爲し従り以下、雙べて上の二重を結す。

〔自行を憶ひて調伏を明すの科段分け〕（現代語譯）

自行と外化とについて調伏を釋き明す中の第一は、自行に心を集中して念ふことを勧めるのでありますが、その中に就いても亦二つの項目があります。

第一に、假名（諸々の現象を存在してゐるものとして假に名称を付されてゐるもの、例へば身體や病ひなどは假名である。）は固定的實體の無い空であるとして、心を調伏することを説き明します。

第二に、彼の有疾の菩薩、法想を滅せんと爲すから以下は、實法の空（現象を存在せしめてゐる理法。例へば身體を構成するとされる四大や五陰などの理法）は固定的實體の無い空であるとして、心を調伏することを説き明します。

(訓讀文)

第一の自行を憶ふことを勸むる中に就きて、亦二有り。

第一に假名の空を觀じて心を調伏することを明す。

第二に彼の有疾の菩薩、法想を滅せん(義疏は相 従り以下、實法の空を觀じて以て心を調伏することを明す。

〔假名の空を觀じて調伏を明すの科段分け〕(現代語譯)

自行に心を集中して念ひ、心を調伏することを説き明す中の第一は、假名の空を觀じて心を調伏することを説き明しますが、その中に就いて、それ自體に三つの項目があります。

第一に、直ちに假名の空を觀じて心を調伏することを説き明します。

第二に、又此の病ひ起るはから以下は、病ひの根源を觀じて明らかに知り、心を調伏することを説き明します。

第三に、當に法想を起すべしから以下は、實法の空が假名の空を超越してゐることを擧げて、心を調伏することを説き明します。

(訓讀文)

第一の假名を觀ずる中に就きて自ら三有り。

第一に直ちに假を觀じて心を調伏することを明す。

第二に又此の病起るは従り以下、病ひの本を觀知して心を調伏す。

第三に當に法想を起すべし(義疏は相 従り以下、實法の假名に過ぎたるを擧げて心を調伏することを明す。

〔直ちに假名を觀じて調伏を明すの科段分け〕(現代語譯)

假名の空を觀じて心を調伏することを説き明す中の第一は、直ちに假名の空を觀じて心を調伏することを説き明しますが、その中に就いても亦二つの項目があります。

第一に、新たに佛道を學ぶ菩薩の病ひは假名（存在するものとして假に名づけられたもの）であつて、實法（眞實に存在するもの）ではないと直ちに觀じて心を調伏します。

第二に、病ひの苦しみを受けることはないといふ理由を釋き明します。

（訓讀文）

第一の直ちに假名を觀じて心を調伏することを明す中に就きて、亦二有り。

第一に直ちに是れ假にして實無しと觀じて心を調伏す。

第二に釋す。

〔直ちに實なしと觀じて調伏を明す〕（現代語譯）

（直ちに假名の空を觀じて心を調伏することを説き明す中の第一に、新たに佛道を學ぶ菩薩の病ひは假名であつて實法ではないと、直ちに觀じて心を調伏します。）

今我が此の病ひは皆前世の妄想・顛倒・諸の煩惱従り生ずとは、あらゆる事象を眞に實在すると誤り考へることを妄想と言ひます。四句（存在に關する四種の考察。有り・無し・有りかつ無し・有に非ず無に非ず。）をよこしまに誤り考へることを顛倒と言ひます。此の妄想・顛倒・諸々の煩惱を因として此の身體に病ひが生ずるといふのは、病ひの因を説き明してゐます。實法有ること無し。誰か病ひを受くる者ぞとは、身體の病ひは存在するものとして唯假に名づけられたものであつて、眞に實在するものではないことを正しく説き明してゐます。その意味は、身體の病ひはただ假に存在するものであつて眞に實在するものではない故に、佛道の修行者は病ひに苦しむことは無いといふのであります。一説では次のやうに云ひます。——上の句は、病ひの因である妄想・顛倒・煩惱などは虚假である故に、それらは眞に實在するものではないことを説き明してゐる。誰か病ひを受くる者ぞとは、果である病ひが虚偽であることを説き明してゐる。實法有ること無し（眞に實在するものではない）とは、上の句と下の句とに共通し用ひられてゐるのである、——と。

(訓讀文)

今我が此の病ひは皆前世の妄想・顛倒・諸の煩惱従り生ずとは、萬法を實と計するを妄想と爲す。横しまに四句を計するを顛倒と爲す。此の妄想・顛倒・諸の煩惱を以て因と爲して此の身を生ずとは、此の句は病ひの因を明す。實法有ること無し。誰か病ひを受くる者ぞとは、正しく唯是れ假にして實無きことを明すなり。言ふところは但是れ假にして實無きが故に、亦病ひを受くる行者も無きなり。一に云はく。上の句は因虚なれば實法有ること無しと明す。誰か病ひを受くる者ぞとは、果の偽なるを明す。實法有ること無しとは、上下に通じて用うるなりと。

經典

維摩詰ノ言ク。有疾ノ菩薩ハ應ニ作スニ是ノ念ヲ一。今我ガ此ノ病ハ皆從リニ前世ノ妄想・顛倒・諸ノ煩惱一 生ズ。無シレ有ルコトニ實法一。誰カ受ルレ病ヲ者ソ。

經典訓讀文

維摩詰の言はく。有疾の菩薩は應に是の念を作すべし。今我が此の病ひは皆前世の妄想・顛倒・諸の煩惱従り生ず。實法有ること無し。誰か病ひを受くる者ぞ。

經典現代語譯

維摩居士は答へて言ひました。「病ひある菩薩は以下のやうに心の念ひを正しなさい。今自分は病んでゐるが、それは皆前世の妄想・顛倒(さかさまなる誤つた考へ)・煩惱から生じてゐます。病ひは眞に實在してゐるものではありません。そのやうに心の念ひを正せば、病ひの苦しみを受けることはありません。」

〔釋す〕(現代語譯)

直ちに假名の空を觀じて心を調伏することを釋き明す中の第二に、病ひの苦しみを受けることはないといふ理由を釋き明します。

疑問を提示して云ひます。病ひの苦しみを受けることはないのは、如何なる理由によるのでせうかと。四大しだい（身體を構成してゐる地・水・火・風の四つの要素。解説二三三頁）が假に合して身體を構成してゐるわけで、それを身體と名づけてゐるに過ぎません。四大には行為主體としてのほたらきはありません。身體も亦、常一なる我われといふ體相も無く、主宰するはたらきもありません。それ故に病ひの苦しみを受ける者は無い、といふことを説き明してゐるのであります。

（訓讀文）

第二に釋す。

疑うたがひを標ひょうして云いはく。受うくる者もの無なき所以ゆゑんは何いかん。四大合しだいがつするが故ゆゑに假かりに名なづけて身みと爲なす。四大は主しゆ無なし。身みも亦また我が無なし。故ゆゑに苦くを受うくる者もの無なしと云いふことを明あかすなり。

經典

所以ゆゑんへ者いか何なん。四大合しだいがつスルガ故ゆゑニ假かりニ名なヲテ爲なス。身みト。四大無しだいシ。主しゆ。身みモ亦また無なシ。我が。

經典訓讀文

所以ゆゑんは何いかん。四大合しだいがつするが故ゆゑに假かりに名なづけて身みと爲なす。四大主しだいしゆ無なし。身みも亦また我が無なし。

經典現代語譯

「病ひの苦しみを受けることがないのは、如何なる理由によるのでせうか。」と疑問を提示しました。維摩居士は答へて言ひました。「四大が假に合して構成してゐるのを身體と名づけてゐるに過ぎません。四大には行為主體のはたらきはありません。身體も亦、常一なる我われといふ體相も無く、主宰するはたらきもありません。」

〔病ひの本を觀知して調伏を明す〕（現代語譯）

假名けなまの空くう（存在してゐるとして假に名づけられてゐるものは固定的實體は無い）を觀じて心を調伏することを説き明す中の第二は、病の

根源を觀じて明かに知り、心を調伏することを説き明します。又此の病ひの起るはから以下がこれであります。

又此の病ひの起るは皆我に著するに由るとは、我といふものが實在すると執着するのが正しく病ひの根源であること提示してゐます。是の故に我に於て著を生ず應からずとは、身體ありと執着してはならないと、説き明してゐます。既に病ひの本を知れば即ち我及び衆生想を除くとは、我といふものが、實在するといふ妄想から離れなさいといふことを説き明してゐます。無我（人身は四大の假和合であつて、永遠不滅の本體は無いことを云ふ）を觀じて、「我といふものが實在してゐる」といふ執着を除きなさいと言ふのであります。

我といふ存在に執着する患ひを捨て去れば、十六知見（一）十六種類の自我の妄計）は皆消えてしまひます。それ故に及び衆生想と云ふのは、省略して十六知見の中の一つの「衆生想」だけを擧げたのであります。

- (1) 十六知見 正道を得てゐない人の自我の存在についての妄計が十六種あるとされる。①我 實の我ありと妄計する。②衆生 實の衆生ありと妄計する。③壽者 我といふ存在があり、命に長短ありと妄計する。④命者 我の命根ありて連續して絶えずと妄計する。⑤生者 我は人中に來りて生ずと妄計する。⑥養育 我は他者を養育し、また父母に養育せらるると妄計する。⑦衆數 我の存在は五陰・十二入・十八界等によると妄計する。⑧人 我は修行の人にて不能の人に異なると妄計する。⑨作者 我に身力手足ありて能く事に任ずと妄計する。⑩使作者 我は能く他者を使役すると妄計する。⑪起者 我は能く後世の罪福の業を起すと妄計する。⑫使起者 我は能く他者をして後世の罪福の業を起さしめると妄計する。⑬受者 我の後身は罪福の果報を受すと妄計する。⑭使受者 我は能く他者をして後世の罪福の果報を受けしめると妄計する。⑮知者 我に五根ありて能く五塵を知ると妄計する。⑯見者 我に眼根ありて能く一切の色相を見ると妄計する。

(訓讀文)

又此の病ひの起るは從り以下、第二に病ひの本を出す。

又此の病ひの起るは皆我に著するに由るとは、正しく病の本を出す。是の故に我に於て著を生ず應からずとは、著す應からずといふことを明すなり。既に病ひの本を知れば即ち我及び衆生想を除くとは、離る應きことを明すなり。

當に無我を觀じて以て我を除くべしとなり。我の患ひ既に去れば十六知見は俱に亡ず。故に及び衆生想（義疏は相）と云ふは略して一を擧ぐるなり。

經典（病ひの本を觀知して調伏を明す）

又此ノ病ノ起ルハ皆由ル著スルニ我ニ。是ノ故ニ於テ我ニ不レ應ラレ生ズレ著ラ。既ニ知レバニ病ノ本ヲ一即チ除クニ我及ビ衆生想ヲ。

經典訓讀文

又此の病ひの起るは皆我に著するに由る。是の故に我に於て著を生ず應からず。既に病の本を知れば即ち我及び衆生想を除く。

經典現代語譯

（維摩居士は病ひの本について言ひました。）「此の病ひは皆我といふものが實在すると執着することから起るのです。これが病ひの根源ですから、我といふものが實在するといふことに執着してはなりません。病ひの起る根源を覺知すれば、我といふものが實在するといふ妄想及び衆生といふ者が實在するといふ妄想から離れることができます。」

【實法の假名に過ぎたるを擧げて調伏を明す】（現代語譯）

假名の空（存在してゐるとして假に名づけられてゐるもの、例へば身體や病ひには固定的實體は無い）を觀じて心を調伏することを説き明す中の第三は、實法の空（眞に實在するといふもの、例へば四大や五陰には固定的實體は無い）が假名の空を超越してゐることを擧げて、心を調伏することを説き明します。當に法想を起すべし以下がこれであります。

當に法想を起すべし（この身體は四大や五陰が假に和合して構成されてゐるにすぎないといふ想ひを起すべきである）とは、ただ五陰（色・受・想・行・識）が假に和合して此の身體を構成してゐるのであります。従つて身體を有する衆生なるものは眞實には存在しない、そのことを知るべきだと説き明してゐます。起るは唯法のみ起るなり。滅するは唯法のみ滅するなりとは、此の身體が生ずるのも滅す

るのも、ただ五陰が和合し五陰の和合が消滅するのであつて、純粹なたましひを有する衆生が存在してゐて、その衆生が生じ滅するのでは無いことを説き明してゐます。

又此の法は各相ひ知らず。起る時我起ると言はず。滅する時我滅すと言はずとは、五陰なる存在は、縁あれば合し、縁盡きれば滅するのであつて、互ひに何らの關聯も無いことを説き明してゐます。よくよく検討、考察し、經典で上述してゐる通り心の念ひを正し、以て心を調伏しなさいと説き明してゐます。

(訓讀文)

當に法想を起すべし従り以下、第三に實法の假名に過ぐるを以て心を調伏す。

當に法想を起すべしとは、應に但五陰のみ有り和會して此の身を成ず。實の衆生は無しと知るべしと明すなり。

起るは唯法のみ起るなり。滅するは唯法のみ滅するなりとは、起るも滅するも唯是れ五陰にして、定んで別に神我の衆生

有りて起滅すること無しと明すなり。又此の法は各相ひ知らず。起る時我起ると言はず。滅する時我滅すと言はずとは、

五陰の法は相ひ知らずと明すなり。上來所説の如く推思して以て其の心を調伏すべしと明すなり。

經典(實法の假名に過ぎたるを擧げて調伏を明す)

當ニ起スニ法想ヲ。應ニ作スニ是ノ念ヲ。但以テ衆ノ法ヲ合ニ成ス此ノ身ヲ。起ルハ唯法ノミ起ルナリ。滅スルハ唯法ノミ滅スルナリ。又此ノ法ハ者。各不ニ相ヒ知ラ。起ル時不レ言ハニ我起ルト。滅スル時不レ言ハニ我滅スト。

經典訓讀文

當に法想を起すべし。應に是の念を作すべし。但衆の法を以て此の身を合成す。起るは唯法のみ起るなり。滅するは唯法のみ滅するなり。又此の法は、各相ひ知らず。起る時我起ると言はず。滅する時我滅すと言はず。

經典現代語譯

(維摩居士は言ひました。)

「法想（この身體は四大や五陰が假に和合して構成されてゐるにすぎないといふ想ひ）を起すべきであります。このやうに心の念ひを正しなさい。此の身體は諸々の法（四大や五陰）が假に和合して構成されてゐるのです。身體が生ずるのは諸々の法が假に和合するだけです。身體が減するのは、諸々の法の和合が消滅するだけです。此の諸々の法は縁あれば合し、縁盡きれば和合は消滅し、互ひに關連はありません。諸々の法は、和合が生ずる時、生ぜしめようと互ひに計らふことはありません。和合が消滅する時、消滅せしめようと互ひに計らふことはありません。

〔實法の空を觀じて調伏を明すの科段分け〕（現代語譯）

自行（自らの修行のための實踐）に心を集中して念ひ、それによつて心を調伏することを説き明す中の第二に、實法の空（實際に存在するとされるもの、例へば四大や五陰の本質は、固定的實體は無い）を觀じて心を調伏することを説き明します。彼の有疾の菩薩から以下がこれであります。その中に就いて三つの項目に分けます。

第一に、四大や五陰は實在してゐると誤り考へてゐる、その想ひを捨て去りなさいと説き明します。

第二に、云何が離ると爲すやから以下は、その誤つた念ひを捨てなさいといふ、諸々の對象を列擧します。

第三に、是の平等なるを得ばから以下は、究極絶対の空を擧げて結びの文言といたします。

（訓讀文）

彼の有疾の菩薩誰か病ひを受くる者ぞ従り以下、自行を憶ひて以て心を調伏することを明す中の第二に、實法の空を觀じて以て心を調伏することを明す。中に就きて亦三有り。

第一に實法を計するの心を離るべしと明す。

第二に云何が離ると爲すや従り以下、其の離るる所の法を出す。

第三に是の平等なるを得ば従り以下、畢竟空を擧げて結を爲す。

〔實法を計するの心を離るべしと明す〕（現代語譯）

（實在するとされるもの、例へば四大や五陰の本質は固定的實體の無い空だと観じて心を調伏する中の第一に、四大や五陰は實在してゐると誤り考へてゐる、その想ひを捨て去りなさいと説き明します。）

彼の有疾の菩薩、法想を滅せんと爲ぼとは、四大や五陰は實在すると誤り考へてゐる執着を捨て去る爲には、と言ふのであります。當に是の念を作すべし。此の法想は亦是れ顛倒なりとは、五陰（色・受・想・行・識）は實在すると誤り考へてゐる想ひも亦顛倒（さかさまなる誤つた考へ）であると説き明してゐます。顛倒は即ち是れ大いなる患ひなり。我應に之を離るべしとは、此の誤つた考へに因つて必ず未來に於て苦しみや患ひを受けるであらうが故に、有疾の菩薩は佛道を修業し、この誤つた考へを捨て去るべきであると説き明してゐます。これは佛道の修行といふ因の中で、未來の患ひといふ果を説いてゐるのですが、その果が過ちであり、患ひであるといふのであります。

（訓讀文）

彼の有疾の菩薩、法想を滅せんと爲ぼとは、實法を存する想ひを滅せんと爲すにと言ふなり。當に是の念を作すべし。此の法想は亦是れ顛倒なりとは、五陰は實有と計する心も亦是れ顛倒なりと明すなり。顛倒は即ち是れ大いなる患ひなり。我應に之を離るべしとは、此の顛倒に因りて必ず未來の苦患を召くが故に、我は應に道を修め之を離るべしと明すなり。此は因の中に果を説くも亦是れ過患なる可しとなり。

經典（實法を計するの心を離るべしと明す）

彼ノ有疾ノ菩薩。爲べレ滅セントニ法想ヲ一。當ニ作スニ是ノ念ヲ一。此ノ法想ハ者亦是レ顛倒ナリ。顛倒ハ者即チ是レ大ナル患ナリ。我應ニ離レ之ヲ。

經典訓讀文

彼の有疾の菩薩、法想を滅せんと爲ば、當に是の念を作すべし。此の法想は亦是れ顛倒なり。顛倒は即ち是れ大いなる患ひなり。

我應に之を離るべし。

經典現代語譯

(維摩居士は言ひました。)

「病ひある菩薩は、法想(四大や五陰は実在すると誤り考へてゐる)の執着をも捨て去る爲には、次のやうに心の念ひを正しなさい。此の法想も亦誤つた想ひであります。誤つた想ひは大いなる患ひをもたらします。病ひある菩薩はその執着を捨て去るべきであります。

「離るる所の法を出す」(現代語譯)

實在するとされるもの、例へば四大や五陰の本質は固定的實體の無い空だと觀じて心を調伏する中の第二に諸々の現象は實在すると誤り考へてゐる、その想ひを捨て去りなさいといふ、諸々の對象を列舉します。云何が離ると爲すやから以下がこれであり

ます。

云何が離ると爲すや我と我所とを離るるなりとは、凡夫は身體を構成してゐる五陰を以て我所(我が所有、自己以外の萬物)としてゐます。聖人は涅槃(迷ひの火を吹き消した状態)を以て我所としてゐます。今ここでは、凡夫と聖人の二者の我所を區別しないで擧げてゐます。云何が我と我所とを離るるや。謂はく二法を離るるなりとは、執着を捨て去るべき二者を列舉します。二者とは、一つには凡夫の我所であり、二つには聖人の我所であります。云何が二法を離るるや。謂はく内と外との諸法を念はず、平等を行ずとは、執着を捨て去るべき本體を擧げてゐます。内とは自己の我所であります。また凡夫及び聖人の心の内に想ふ我所だと考へることもできます。外とは、他者の我所であります。また凡夫及び聖人の外部に存在する諸現象、それは存在するものとして假に名稱を付せられてゐるので、その諸現象だと考へることもできます。云何が平等なるや。謂はく我も等しく、涅槃も等しとは、執着を捨て去るべき對象の名稱を擧げてゐます。優れてゐる涅槃を擧げ、それが劣つてゐる我といふ存在と等しいのだと示して、諸々の存在は皆悉く固定的

實體の無い空であり、平等であることを説き明してゐます。所以は何ん。我及び涅槃、此の二は皆空なりとは、諸々の存在は悉く平等であるといふ上述の説について、その理由を釋き明してゐます。何を以てか空と爲すや。但名字なるを以ての故に空なりとは、我といふ存在と涅槃とは皆固定的實體の無い空であることについて、重ねてその理由を釋き明してゐます。我と涅槃とはただ假に名稱を付してゐるにすぎず、實體はありませんから空なのです。無理やり空だと述べてゐるのではないことを説き明してゐます。此の如きの二法は決定の性無しとは、五陰と涅槃との二者は固定的實體の無い空であつて、定まつた不變の本質は無い、といふ結びの文言であります。内と外について亦次のやうな説があります。一内とは身體を構成してゐる五陰（色・受・想・行・識）であり、外とは山・河・大地など一切の客觀現象である、一と。一説では次のやうに云ひます。一云何が二法を離るるや。謂はく。内と外との諸法を念はず、平等を行すより以上は、ただ凡夫の我所を説き明してゐる。二法とは、依報（身心の依り所となる國土世間）と正報（我々の身心）との二報である。云何が平等なるやから以下は、この世の一切の存在は皆固定的實體の無い空であつて一切が平等であることは定まつてゐる。此の如きの二法は決定の性無しと言ふのは、二法とは我といふ存在と涅槃との二者である、一と。上述の謂はく二法を離るるなりの二法について又次のやうな説があります。一二法とは、當然のことであるが、我といふ存在と我が所有とするものとの二者である、一と。

(訓讀文)

云何が離ると爲すや從り以下、第二に離るる所の法を出す。

云何が離ると爲すや我と我所とを離るるなりとは、凡夫は五陰を以て我所と爲す。聖人は涅槃を以て我所と爲す。今は通じて凡と聖との二の我所を擧ぐるなり。云何が我と我所とを離るるや。謂はく二法を離るるなりとは、離るる所の體を列す。二法とは、一は凡の我所の法、二は聖の我所の法なり。云何が二法を離るるや。謂はく内と外との諸法を念はず、平等を行すとは、離るる所の體を出す。内とは自の我所なり。亦凡聖の内の我所に通ず可し。外とは、他の我所なり。亦凡聖の假名の我に通ず。云何が平等なるや。謂はく我も等しく、涅槃も等しとは、離るる所の名を出す。上を擧げ下に齊しくして皆悉く平等の空なるを明すなり。所以は何ん。我及び涅槃、此の二は皆空なりとは、上の平等

を釋するなり。何を以てか空と爲すや。但名字なるを以ての故に空なりとは、重ねて二は皆空なるを釋するなり。但名字にして實無きを以ての故に空なり。是れ強ひて空とするに非ずと明すなり。此の如きの二法は決定の性無しとは、五陰と涅槃との二法は皆空にして定まれる性無しと結するなり。亦云はく。内とは五陰なり。外とは山河等なりと。一に云はく。云何が二法を離るるや。謂はく。内と外との諸法を念はず、平等を行すより以上は、只凡夫の我所を明す。二法とは、依と正との二報なり。云何が平等なるや従り以下、萬法皆空にして平等に類するなり。此に此の如きの二法は決定の性無しと言ふは、我と涅槃とに就きて二と爲すと。又云はく。上の二法とは我と我所とを自ら二と爲すなりと。

經典

云何が爲スヤ。離ルト。離ルルナリニ我我所トヲ。云何が離ルルヤニ我我所トヲ。謂ク離ルルナリニ二法ヲ。云何が離ルルヤニ二法ヲ。謂ク不念ハニ内ト外トノ諸法ヲ。行ズニ於平等ヲ。云何が平等ナルヤ。謂ク我モ等シク。涅槃モ等シ。所以ハ者何シ。我及び涅槃。此ノ二ハ皆空ナリ。以テカレ何ヲ爲スヤ。空ト。但以テノニ名字ナルヲ一故ニ空ナリ。如キノレ此ノ二法ハ無シニ決定ノ性一。

經典訓讀文

云何が離ると爲すや。我と我所とを離るるなり。云何が我と我所とを離るるや。謂はく二法を離るるなり。云何が二法を離るるや。謂はく内と外との諸法を念はず。平等を行す。云何が平等なるや。謂はく我も等しく、涅槃も等し。所以は何ん。我及び涅槃、此の二は皆空なり。何を以てか空と爲すや。但名字なるを以ての故に空なり。此の如きの二法は決定の性無し。

經典現代語譯

〔文殊菩薩問ふ〕「法想に對する執著を捨て去るには如何にすべきでせうか。」

〔維摩居士答ふ〕「我といふ存在あり、我が所有（自己以外の萬物）するものあり、といふ執著を捨て去るのです。」

〔文殊〕「我と我が所有、この執著を捨て去るには如何にすべきでせうか。」

(維摩) 「凡夫と聖人との二者の差別を捨て去るのです。」

(文殊) 「二者の差別を捨て去るには如何にすべきでせうか。」

(維摩) 「自己と他者との所有、即ち萬物について差別せず、一切の存在を平等に觀するのです。」

(文殊) 「平等に觀するには如何にすべきでせうか。」

(維摩) 「我といふ存在と涅槃とは等しいと觀するのです。」

(文殊) 「何故等しいのでせうか。」

(維摩) 「我といふ存在と涅槃との二者は、固定的實體の無い空なるが故にです。」

(文殊) 「何故空なのでせうか。」

(維摩) 「二者を區別するため假に名稱を付してゐるにすぎず、實體が無い故に空なのです。我といふ存在と涅槃との二者には、定まつた不變の本質は無いのです。」

〔畢竟空を擧げて結を爲す〕(現代語譯)

實在するとされるもの、例へば四大や五陰の本質は固定的實體の無い空だと觀じて心を調伏する中の第三に、究極絶對の空を擧げて結びの文言といたします。亦次のやうに言ふのもよいでせう。——究極絶對の空を以て空についての執著を取り除き、結びの文言とする、——と。

是の平等なるを得ば、餘の病ひ有ること無しとは、諸々の存在は眞に實在してゐると誤り考へてゐる病ひは、永久に盡き果てると言ふのであります。唯空の病ひのみ有りとは、ただ空に執著した病ひのみが存在するのであります。空の病ひも亦空なりとは、空だと執著してゐる空なるものも亦、究極絶對の空を以て觀すれば實體の無い空だと言ふのであります。およそ衆生の心は執著心が生じやすいので、上述に於て諸々の存在は四大や五陰の假和合であることを以て、我といふ存在があるとする執著心を取り除き、次には諸々の存在は固定的實體の無い空であることを以て、四大や五陰が實在するといふ執著心を取り除きました。此に於ては究

極絶對の空を以て觀ずれば、空なりと執著してゐるのも亦實體の無い空であるとしてゐます。これが患ひの全く無い極致であります。

(訓讀文)

是の平等なるを得ば從り以下、第三に畢竟空を擧げて結を爲す。亦可なるべし。空を以て空を遣り結を爲すなりと。是の平等なるを得ば、餘の病ひ有ること無し(義疏には有洩れ)とは、實有を存するの病ひ永く盡くるなり。唯空の病ひのみ有りとは、唯偏空の病ひのみ有るなり。空の病ひも亦空なりとは、計する所の空も亦空なりと言ふなり。凡そ物の情は染り易きが故に、上に法を以て我を除き、次に空を以て法を除く。此に畢竟空を以て空を空することは、乃ち患ひ無きの極みなり。

經典 (畢竟空を擧げ結を爲す)

得べニ是ノ平等ナルヲ。無し。有ルコトニ餘ノ病ニ。唯有りニ空ノ病ノミ。空ノ病モ亦空ナリ。

經典訓讀文

是の平等なるを得ば、餘の病有ること無し。唯空の病のみ有り。空の病も亦空なり。

經典現代語譯

(維摩居士は言ひました。)「諸々の存在は一切平等であると觀することができれば、病ひは無くなります。ただ空なりと執著した病ひのみがあります。この空の病ひも亦、究極絶對の空を以て觀ずれば、實體の無い空なのです。」

〔外化を憶ひて調伏を明す〕(現代語譯)

自行(自らの修行のための實踐)と外化(他者を教化濟度するための實踐)とについて調伏を説き明す中の第二に、外化に心を集中して念ひ、よつて心を調伏することを説き明します。是の有疾の菩薩は、無所受を以てから以下がこれであり、この箇所について經典註釋家の多くは科段分けして解釋してゐます。しかし今は科段分けせず、經文に隨つてそのまま解釋いたします。語句が缺けて

ゐる意味不明の箇所があると一般に言はれてゐます。

是の有疾の菩薩は。無所受を以て而も諸の受を受く。(病ひある菩薩は次のやうに心の念ひを正しなさい。菩薩は再び六道に生れ變る身ではないけれども、衆生と同じに善惡の果報を受ける世にあつて、衆生を教化濟度する)とは、菩薩は本來、六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天)に生れ變る身ではありません。ただ衆生を教化濟度しようとするが故に、六道に姿を現はすことを説き明してゐます。未だ佛法を具せず。亦受を滅して而も證りを取らざるなり(衆生は未だ佛陀の教へを身につけてゐない。菩薩は善惡の果報を受けないといふ證りを得てゐても、その證りの境地を離れ、衆生と共にあつて教化濟度する)とは、菩薩に導かれる衆生は未だ佛陀の教へを身につけてをりません。菩薩は修行の結果自己獨りは善惡の果報を受けないといふ證りを得ますが、その證りの境地に留まることなく衆生と共にあつて、教化濟度に務めると言ふのであります。此の二句は、菩薩の衆生を慈しむ心は、衆生に樂を與へることを説き明してゐます。設ひ身に苦有りとも、惡趣の衆生を念じて大悲心を起す(菩薩はたとひその身に苦があらうとも、地獄・餓鬼・畜生の惡道におちて苦しむ衆生の上を思ひ、大悲心を起す)とは、菩薩はその身の苦を忘れて、衆生の苦しみを共にして教化濟度に盡すことを説き明してゐます。此の句は、菩薩の大悲心が衆生の苦しみを除き去ることを説き明してゐます。我既に調伏す。當に一切衆生を調伏すべし(菩薩は既にその心を調伏することができた。まさに一切衆生の心を調伏すべきである)とは、菩薩はこのやうに衆生とその苦樂を共にして教化濟度に盡すべきであると、説き明してゐます。但其の病ひを除きて而も法を除かず(菩薩はただ衆生の妄想の病ひを取り除き、この世の諸々の存在を否認することはない)とは、上述ではただ衆生の心を調伏するだけ言つて、その調伏の具體的あり様は明らかにしてゐません。それ故にこの箇所から以下で調伏のあり様を説き明します。前提となるこの世の諸々の存在は、本來固定的實體の無い空無なのですが、妄想を以て見るために實在すると誤り考へます。それ故に妄想を以て實在すると誤り考へる衆生の病ひを取り除くのですが、妄想の對象であるこの世の諸々の存在を否認することはないと云ふのであります。一説では次のやうに云ひます。―ただ衆生の妄想の病ひを取り除き、衆生を教化する菩薩の存在は否認しないのである、―と。他の一説では次のやうに云ひます。―菩薩は衆生を教へ導くのに此の世の迷ひの因を斷ち切ることを以てするが、なほ此の迷ひの世に留つて、慈・悲・喜・捨の四無量心を以て衆生に利益を與へる。而も法を除かずとは、二乗の人は衆生を教へ導くのに灰身滅地(身心共に全くの無に歸し、煩惱を滅した境地)を以てし此

是の有疾の菩薩は、無所受を以て而も諸の受を受く。未だ佛法を具せず。亦受を滅して而も證りを取らざるなり。設ひ身に苦有りと、惡趣の衆生を念じて、大悲心を起す。我既に調伏す。亦當に一切衆生を調伏すべし。但其の病ひを除きて、而も法を除かず。

經典現代語譯

(維摩居士は外化について言ひました。)

「病ひある菩薩は次のやうに心の念ひを正しなさい。菩薩は再び六道に生れ變る身ではないけれども、衆生と共に善惡の果報を受ける此の世にあつて、衆生を教化濟度するのです。衆生は未だ佛陀の教へを身につけてゐません。菩薩は善惡の果報を受けないといふ證りを得てゐても、その證りの境地を離れ、衆生と共にあつて教化濟度するのです。菩薩はたとひその身に苦があらうとも、地獄・餓鬼・畜生の惡道におちて苦しむ衆生の上を思ひ、大悲心を起すのです。菩薩は既にその心を調伏することができました。まさに一切衆生の心を調伏しなければなりません。菩薩はただ衆生の妄想の病ひを取り除き、この世の諸々の存在を否認してはなりません。」

〔參考〕

○先師 黒上正一郎先生は、經典「設ひ身に苦有りと、…」の太子『義疏』について次のやうに論じてをられますので、參考として記します。

『此に維摩經義疏に經典文殊問疾章の『設身に苦有りと惡趣の衆生を念じて大悲心を起す』とあるについて、既に羅什法師（註維摩卷五）及び此の釋を繼承せる古藏菩薩が、

『我功德智慧の身あるも、既に尚苦痛是の如し。況や惡趣の衆生の苦を受くる、無量なるをや。故に悲を起す。』（維摩經義疏卷四）（大正大藏經經疏部六一九五九頁上段）

と云ふ如き平面的解釋を施すに對して、太子が之を

『大士は其の身の苦を忘れて苦を同じくして化することを明すなり。此の句は悲能く苦を抜くことを明す。』

と切實の體験的解釋を下したまひし御精神を偲びまつるのである。大陸諸師の釋は功德智慧の身ある菩薩が迷へる世の衆生に慈悲を起すことをいひ、菩薩一個の向下的教化を説くに止まるのである。けれども太子は『其の身の勞苦を忘れて苦を同じうして化す』と仰せられ、この僅かの註にも個我を全體に没し、蒼生と勞苦を共にする平等の『いつくしみ』を反映せしめ給ふのは一切衆生の同じく歸趨すべき大道のうつき具現を仰ぎまつるのである。全國民の情意を統べをさめ給ふ御心は、大陸諸師の如き個人中心の救済思想に凝滯せさせ給ふべくもあらぬのである。太子はこの御精神を以て統治の大業を荷はせ給ひ、國家の組織と國政の運用とに國民全體の同胞感を表現して、ここに氏族制度の積弊に基づく當代政治の紛糾に對し、之が改革指導に盡させ給うたのである。

現實國民生活は其の組織を完成し、秩序を支持せんが爲には、能力・職業等の相違に依つて外に上下貴賤の階次を分つことも、之を否定すべきではない。けれどもこの外的形式に執して差別の世界を内心に融合すべき平等の同胞感を缺くときは、一切の文化的施設もつひに分散と解體との外なきに至るのである。

即ち國民一致の協力精神に基かざる政治的施設は、すべて生命なき形式に終るのである。眞の國民文化建設は、一切の外的差別を全體協力を融合すべき教育教化を實現し、この道德的基礎に立つて外的文化を統一するとき、初めて成就せらるべきである。太子がここに『共に是れ凡夫』と告白して『苦を同じうして』衆生を教化せんことを示し給ひ、内的平等の自覺に立つて同胞協力の生を開導し給ひし御心は、眞に一國文化の内的根底を養育し給うたのである。』(前掲書六〇頁く六二頁)

「病ひを除く方法を明す」(現代語譯)

(この箇所について太子は、その所屬する科段は示されてをらず、獨立の項目になつてをります。太子『義疏』の中では異例であります。)

病ひの本を斷ぜんが爲に、之を教導すについて申しますと、上述ではただ病ひを當然取り除くであらうとだけ言つて、而も病ひを取り除く方法は明らかにしませんでした。従つて此の箇所から以下、病ひを取り除く方法を説き明します。この中について二つ

の項目があります。第一に、先づ病ひの根源と病ひを取り除く方法との二つの項目を示します。第二に、何をか…謂ふやから以下は、二つの項目について釋き明します。

病ひの本を斷ぜんが爲にとは、病ひの根源の項目を示してゐます。而も之を教導すとは、病ひを取り除く方法の項目を示してゐます。病ひある菩薩の病ひの根源を斷ち切らうと欲するために、病ひを斷ち切る方法をもつて菩薩を教へ導くことを説き明してゐます。

何をか病ひの本と謂ふや。謂はく攀縁有り。攀縁有るに從り病ひの本と爲すとは、外界の諸々の事象に心がかきまはされ、固定的實體の無い事象を實在すると誤り考へます。ものごとを逆に考へる顛倒の心は諸々の惡業を造り出し、病ひの根源となることを説き明してゐます。此の句は病ひの根源は攀縁（外界の諸事象に心がかきまはされる）であることを正しく釋き明してゐます。何をか攀縁する所ぞ。謂はく之れ三界なりとは、攀縁の對象世界は三界（欲界・色界・無色界のこの世）であることを示してゐます。

云何が攀縁を斷ずるやから以下は、病ひを取り除く方法の項目について、如何にすべきかを釋き明します。

云何が攀縁を斷ずるや。無所得を以てす。若し無所得なれば則ち攀縁無しとは、若し外界の諸事象は固定的實體の無い空であつて、諸事象に執着することは誤りであるとさされば、攀縁は自らにして消え失せると言ふのであります。何をか無所得と謂ふや。謂はく二見を離るるなり。何をか二見と謂ふや。謂はく内見と外見となり。是れ無所得なりとは、無所得（心の中で執着分別をしない。主觀と客觀との區別がないこと）の境地を示してゐます。内見とは、自己の五陰（色・受・想・行・識）を以て我は存在すると誤つた見解であり、外見とは、他の諸々の存在の五陰を以てする誤つた見解であります。亦次のやうに解するのによいでせう。―自己の五陰を以てする主觀以外の、即ち外界の客觀的諸現象が實在すると誤り考へるのが外見である、―と。この二つの誤つた見解は固定的實體の無い空だとすれば、病ひの根源は自らにして消え失せることを説き明してゐます。

（訓讀文）

病ひの本を斷ぜんが爲に、之を教導すとは、上には直に病ひは是れ除くべしと言ひて、而も未だ除くことを爲すの方法を明さず。是を以て此從り以下、其の之を除く方法を明すなり。中に就きて即ち二有り。第一に先づ兩章門を立つ。

第二に何をか：謂ふや従り以下、兩章門を釋す。

病ひの本を斷ぜんが爲にとは病ひの本の章門を立つ。而も之を教導すとは、物の病ひの本を斷ぜんと欲するが爲に、斷を爲すの法を用て、之を教導するを明すなり。

何をか病ひの本と謂ふや。謂はく攀縁有り。攀縁有るに従り病ひの本と爲す（義疏は爲を有としてゐる）とは、諸境に攀縁して無なるを而も有と計す。顛倒の心は能く諸の業を造り、則ち病ひの本と爲るを明す。此の句は正しく病ひの本を釋するなり。何をか攀縁する所ぞ。謂はく之れ三界なりとは、其の所縁の境を出す。

云何が攀縁を斷するやより以下、除く方法の章門を釋す。

云何が攀縁を斷するや。無所得を以てす。若し無所得なれば則ち攀縁無しとは、若し能く諸境は即ち空にして無所得なりと解せば、則ち攀縁は自から亡ずと言ふなり。何をか無所得と謂ふや。謂はく二見を離るるなり。何をか二見と謂ふや。謂はく内見と外見となり。是れ無所得なり（義疏は離洩れ）とは、無所得の境を出す。自の五陰を内見と爲し。他の五陰を外見と爲す。亦可なるべし。五陰の外の諸境は皆是れ外見なりと。善く二見は即ち空なりと達せば、病の本は則ち自から亡ずといふことを明すなり。

經典（病ひを除く方法を明す）

爲ニ斷ゼンガニ病ノ本ヲ一而教ヲ導ス之ヲ一。何ヲカ謂フヤニ病ノ本ト一。謂クニ有リニ攀縁一。従リ有ルニ攀縁一則チ爲スニ病ノ本ト一。何ヲカ所ソニ攀縁スル一。謂ク之レ三界ナリ。云何が斷スルヤニ攀縁ヲ一。以テスニ無所得ヲ一。若シ無所得ナレバ則チ無シニ攀縁一。何ヲカ謂フヤニ無所得ト一。謂ク離ルルナリニ一見ヲ一。何ヲカ謂フヤニ二見ト一。謂ク内見ト外見トナリ。是レ無所得ナリ。

經典訓讀文

病ひの本を斷ぜんが爲に之を教導す。何をか病ひの本と謂ふや。謂はく攀縁有り。攀縁有るに従り則ち病ひの本と爲す。何をか攀縁する所ぞ。謂はく之れ三界なり。云何が攀縁を斷するや。無所得を以てす。若し無所得なれば則ち攀縁無し。何をか無所得と謂

ふや。謂はく二見を離るるなり。何をか二見と謂ふや。謂はく内見と外見となり。是れ無所得なり。

經典現代語譯

(維摩居士は言ひました。)

「病ひの根源を斷ち切るために、病ひある菩薩を教へ導きます。」

(文殊菩薩問ふ)「何が病ひの根源なのでせうか。」

(維摩)「攀縁はんえん(外界の諸事象に心がかきまはされる)があり、これが病ひの根源になります。」

(文殊)「何處で攀縁は生ずるのでせうか。」

(維摩)「三界のこの世に於てです。」

(文殊)「攀縁を斷ち切るには如何にすべきでせうか。」

(維摩)「無所得むしよとく(心の中で執著、分別をしない)になれば攀縁は無くなります。」

(文殊)「如何にすれば無所得になれるのでせうか。」

(維摩)「二つの誤つた見解から離れるのです。」

(文殊)「二つの誤つた見解とは何でせうか。」

(維摩)「内見ないけん(我は存在するといふ見解)と外見げけん(外界の諸事象は存在するといふ見解)とです。この誤つた見解を捨て去れば無所得です。」

〔雙べて上の二重を結すの科段分け〕

自行と外化とを憶うて調伏を説き明す中の第三に、自行と外化とに共通した結びの文言を示します。文殊師利以下がこれであり
ます。その中について、それ自體二つの項目があります。第一に佛法の理を擧げて結びの文言とします。

第二に、譬へを擧げて結びの文言とします。

(訓讀文)

文殊師利從り以下、二行に就きて調伏を明す中の第三に、雙べて自他の二行を結す。中に就きて自ら二有り。

第一に法説を擧げて結を爲す。

第二に譬を擧げて結を爲す。

〔法説を擧げて結を爲す〕（現代語譯）

（自行と外化とに共通する結びの文言を示す中の第一に、佛法の理を擧げて結びの文言とします。）

是を有疾の菩薩其の心を調伏すと爲しとは、上述の所説の通り、存在するとして假に名稱を付せられてゐるものも（例へば身體や病ひ）、實在するとされてゐるものも（例へば四大や五陰、固定的實體の無い空である）と明らかに通達し、諸事象の存在にとらはれること無く、また自行と外化行との二つながらに共に心を集中して念ふ者、これを病ひある菩薩がその心を調伏する方法であると説き明してゐます。老病死の苦を斷すと爲す。是れ菩薩の菩提なりとは、上述の如く修行して、自己と他者との老・病・死の苦しみを共に斷ち切ることができるのは、これを菩薩のさとり境地と名づける、といふことを説き明してゐます。若し是の如くならずば己の修治する所慧と利と無しと爲すとは、自己と他者との苦しみを共に斷ち切ることのできない者は、修行は積んだのでありませうが、自己内心に未だ眞實の智慧が具はつてゐないのであります。他者に對して未だ眞實の利益を與へる力がないのであります。

（訓讀文）

是を有疾の菩薩其の心を調伏すと爲しとは、上來の所説の如く。假も實も即ち空なりと明達して、著を存する所無く、復能く竝べて自他の二行を憶ふ者、是を有疾の菩薩其の心を調伏するの法と爲すことを明すなり。老病死の苦を斷すと爲す。是れ菩薩の菩提なりとは、上の如く修行して竝べて自他の老病死の苦を斷するは、乃ち菩薩の菩提と名づくるを明すなり。若し是の如くならずば己の修治する所慧と利と無しと爲すとは、若し竝べて自他の苦を斷ずること能はざる者は、修行すること有りと雖も、内は未だ慧有りと爲すに足らず。外は未だ利有りと爲すに足らざ

るを明すなり。

經典

文殊師利。是ヲ爲シニ有疾ノ菩薩調ニ伏スト其ノ心ヲ一。爲スレ斷ストニ老病死ノ苦ヲ一。是レ菩薩ノ菩提ナリ。若シ不レバ、如クナラ、是ノ己ノ所ニ修治スル一爲スレ無シトニ慧ト利ト一。

經典訓讀文

文殊師利。是を有疾の菩薩其の心を調伏すと爲し、老病死の苦を斷ずと爲す。是れ菩薩の菩提なり。若し是の如くならずんば己の修治する所慧と利と無しと爲す。

經典現代語譯

(維摩居士は言ひました。)

「文殊菩薩さんよ。以上説いたやうに實踐するならば、病ひある菩薩はその心を調伏できますし、自他共に老病死の苦を斷ち切ることが出来ます。これが菩薩のさとり境地です。若しこのやうにできなければ、修行を積んでも自己に智慧が具はらず、他者に利益を與へることもできません。」

「譬を擧げて結を爲す」(現代語譯)

(自行と外化とに共通する結びの文言を示す中の第二に、譬へを擧げて結びの文言とします。)

譬へば怨みに勝つを乃ち勇と爲す可きが如しとは、自己の怨みの心を自らが抑制して消し去り、他者から怨まれてもよく耐へてこれをうち破る者、これを勇者と名づけることを説き明してゐます。是の如く兼て老病死を除く者、菩薩の謂なりとは、佛法の理を擧げて譬へを結合したのであります。經典を御覽なさい。

(訓讀文)

第二に譬を擧げて結を爲す。
譬へば怨みに勝つを乃ち勇と爲す可きが如しとは、自ら己が怨みに勝ち、復能く他の怨みを害する者、乃ち名づけて勇と爲すことを明す。是の如く兼て老病死を除く者、菩薩の謂なり（義疏は也洩れ）とは、合なり。見つ可し。

經典

譬バ如シニ勝ツヲ、怨ニ乃チ可キガロ爲スレ、勇ト。如クレ、是ノ兼テ除クニ老病死ヲ一者。菩薩ノ之謂也。

經典訓讀文

譬へば怨みに勝つを勇と爲す可きが如し。是の如く兼ねて老病死を除く者、菩薩の謂なり。

經典現代語譯

（維摩居士は言ひました。）

「譬へば自他の怨みにうち勝つことのできる人を勇者と稱するが如くです。このやうに自他の老病死の苦を共に除き去る者、これを菩薩と尊稱するのです。」

〔著を離るることを勧めて調伏を明すの科段分け〕（現代語譯）

病ひある菩薩の心を如何に調伏すからについて維摩居士が答へる中の第二に、愛着より生ずる慈悲心をはじめ一切の事象に對する執著心を捨て去ることを勧め、それによつて調伏を説き明します。彼の有疾の菩薩は應に復是の念を作すべしから以下がこれです。この箇所は、自行と外化とに心を集中して念ひ、それによつて菩薩の心を調伏するといつても、若し自己と他者といふ二つの存在に心がとらはれたまま修行するならば、即ち自他融合の念に缺けてゐるならば、修行によつて成就されるものは廣大無邊ではなく、衆生とその苦樂を共に同じくすることはできません。それ故に自己と他者といふ存在に對する執著心を捨て去りなさい、と説き明してゐます。この中について亦四つの項目があります。

第一に、正しく一切の事象に對する執著心を捨て去ることを勧めます。
 第二に、執著心を捨て去らねばならない理由を説き明します。

第三に、所生は縛無くから以下は、執著心の束縛と執著心から解き放たれることを擧げて、重ねて上述の理由を明らかにします。
 第四に、何をか縛と謂ひ、何をか解と謂ふやから以下は、執著心の束縛と解き放たれることを區別してその相を述べます。

(訓讀文)

彼の有疾の菩薩は應に復是の念を作すべし(義疏は應洩れ従り以下、調伏を明す中の第二に、著を離れよと勧めて以て調伏を明す。自行外化を憶して以て心を調伏すと雖も、若し自他の二境を存して修行せば、則ち修する所廣からずして、物と其の苦樂を同じくすること能はず。所以に勧めて應に著を離るべしと明す。中に就きて亦四重有り。

第一に正しく著を離るべしと勧む。

第二に釋す。

第三に所生は縛無くから従り以下、縛と解とを擧げて重て上の釋を顯はす。

第四に何をか縛と謂ひ、何をか解と謂ふや従り以下、仍ち縛と解とを辯ずるなり

〔正しく著を離るべしと勧む〕(現代語譯)

(一切の事象に對する執著心を捨て去ることを勧め、それによつて調伏を説き明す中の第一に、正しく執著心を捨て去ることを勧めます。)

我が此の病ひは眞に非ず有に非ざるが如くとは、病ひは現象として假に現れてゐるものであつて、眞實に病んでゐるのではなく。また病ひは固定的實體の無い空であつて實在するものではありません。此の句は病んでゐる菩薩自身の執著心を捨て去りなさいと勧めるのであります。衆生の病ひも亦眞に非ず有に非ずとは、上述と同じであります。此の句は他者に對してその執著心を捨て去りなさいと勧めるのであります。以上の二句は實體の無いもの、むなししいものについて執著心を捨て去ることを勧めてゐる。

ます。とは、此の愛見の悲（衆生に愛著心をもつて起す慈悲心）は善行なのでありますが、なほ衆生に對して愛著心を起す、起さないといふ差別の相がありますから、自己と他者といふ二つの存在を平等に觀することはできず、廣く一切の衆生を教化濟度できないことを説き明してゐます。それ故に愛見の非を捨て去りなさいと云ふのであります。

（訓讀文）

我が此の病ひは眞に非ず有に非ざるが如く（義疏は是病）とは、假の故に眞に非ず。即ち空の故に有に非ず。此の句は自の上に於て著すべからずと勸む。衆生の病ひも亦眞に非ずとは、此の句は他の上に於て著すべからずと勸む。此の二句は虚假を勸むるなり。是の觀を作す時、諸の衆生に於て若し愛見の大悲を起さば即ち應に舍離すべしとは、此の愛見の悲は善なりと雖も猶是れ相を存し、自他の二境を平等にして廣く衆生を化すること能はざるを明す。故に之を捨つべしと云ふなり。

經典（正しく著を離るべしと勸む）

彼ノ有疾ノ菩薩ハ應ニ復作スニ是ノ念ヲ一。如クニ我ガ此ノ病ハ非ズレ眞ニ非ルガ有ニ。

衆生ノ病モ亦非ズレ眞ニ非ズレ有ニ。作スニ是ノ觀ヲ一時。於テ諸ノ衆生ニ一若シ起サバニ愛見ノ大悲ヲ一即チ應ニ捨離ス一。

經典訓讀文

彼の有疾の菩薩は應に復是の念を作すべし。我が此の病ひは眞に非ず有に非ざるが如く、衆生の病も亦眞に非ず有に非ず。是の觀を作す時、諸の衆生に於て若し愛見の大悲を起さば即ち應に捨離すべし。

經典現代語譯

（維摩居士は言ひました。）

「病ひある菩薩は、次のやうに心の念ひを正しなさい。菩薩の病ひは假の現はれであつて眞實病んでゐるのではなく、病ひは實體の無い空であつて實在してもゐません。それと同じく衆生も亦眞實病んでゐるのではなく、病ひは實在してもゐません。このやう

に觀する時、若し諸々の衆生に對して愛著心を以て慈悲心を起すならば、それは廣く一切衆生を教化濟度できませんから、その慈悲心は捨て去るべきであります。」

〔愛見の悲の捨離を釋す〕（現代語譯）

一切の事象に對する執著心を捨て去ることを勧め、それによつて調伏を説き明す中の第二に、愛見の悲（衆生に愛著心をもつて起す慈悲心）を捨て去るべきについて、その理由を釋き明します。所以は何んから以下がこれでありませうか。

疑問を提示して云ひます。愛見の悲は捨て去るべき、それは如何なる理由によるのでせうか。菩薩は客塵煩惱を斷除して大悲を起すとは、八地以上の菩薩は自己及び衆生の客塵煩惱（外部から附着する煩惱。分別心によつて生ずる）を斷ち切りたいと欲するが故に、無相の大悲（一切の差別對立を超えてゐる大悲）を起すことを説き明してゐます。此の句は、愛見の悲を正しくないと排斥しようとするが故に、先づ無相の大悲を擧げ、これが正しいのだと是認するのであります。客塵の意義の解釋には種々あつて同じではありません。或る經典研究家は、根本煩惱を以て主人とし、それから派生する枝葉の煩惱を客人とすると云ひます。他の或る研究家は、煩惱は心に固有なものでなく、眞理に迷ふと外部から附着して心をけがすので、外来の「客」と云ふのであると。今ここで採用する解釋は、一切の善ならざるものは恆久的に存在するものではなく、終には必ず拂ひ除かれる存在でありますから、主ならざる「客」とするのであります。愛見の悲は則ち生死に於いて疲厭の心有りとは、此の句は、愛見の悲は過ちであるから捨て去るべきである、と説き明してゐます。若し能く此を離るれば疲厭有ること無し。在在の所生は愛見の覆ふ所と爲らざるなりとは、此の句は正しく、愛見の悲を捨て去ることを勧める意を顯はしてゐます。

（訓讀文）

所以は何ん從り以下、第二に釋す。

疑ひを標して云はく。應に愛見の悲を離るべき所以は何ん。菩薩は客塵煩惱を斷除して大悲を起すとは、菩薩は自他の客塵煩惱を斷ぜんが爲の故に、而も無相の大悲を起すことを明すなり。此の句は將に愛見の悲を非とせんと欲するが

故に、先づ無相の大悲を擧げて是と爲す。客の義を釋すること同じからず。或は根本を以て主と爲し。枝條を客と爲す。或は云はく。理の外に居住するを客と爲すと。今須ひる所は、一切の不善は理として恆に在るに非ず。終には必ず遺除の義有るが故に、客と爲すなり。愛見の悲は則ち生死に於いて疲厭の心有りは、此の句は愛見の悲は是れ過ちなる故に離るべしと明すなり。若し能く此を離るれば疲厭有ること無し。在在の所生は愛見の覆ふ所と爲らざるなりは、此の句は正しく離るるを勸むるの意を顯はすなり。

經典

所以へ者何シ。菩薩ハ斷ヲ除シテ客塵煩惱ヲ一而モ起スニ大悲ヲ一。愛見ノ悲ハ者則チ於テニ生死ニ一有リニ疲厭ノ心一。若シ能ク離ルレバ一此ヲ無シレ有ルコトニ疲厭一。在在ノ所生ハ不ル下爲ラニ愛見ノ一之所トシ覆フ也。

經典訓讀文

所以は何ん。菩薩は客塵煩惱を斷除して大悲を起す。愛見の悲は則ち生死に於いて疲厭の心有り。若し能く此を離るれば疲厭有ること無し。在在の所生は愛見の覆ふ所と爲らざるなり。

經典現代語譯

(文殊菩薩は問ひます。)

「愛見の悲(衆生に愛著心をもつて起す慈悲心)は捨て去るべき、それは如何なる理由によるのでせうか。」

(維摩居士は答へて言ひます。)

「八地以上の菩薩は外部から附着し心を汚す煩惱を斷ち切り除き、一切の差別を超えてゐる大慈悲心を起して衆生を教化します。

愛見の悲は愛著にとらはれてゐますから此の世に於ける衆生教化に疲れ厭ふ心が起ります。若し此の愛見の悲を捨て去ることができれば、衆生教化を厭ひ疲れることはありません。八地以上の菩薩に導かれ精進した修行者はいたる所に所在しますが、それらの人々は愛見の悲のとらはれから離れてゐます。」

【参考】

○ 先師 黒上正一郎先生は、經典「菩薩は客塵煩惱を斷除して大悲を起す。…」について太子『義疏』の「自行外化を憶して以て心を調伏すと雖も…」及び「此の愛見の悲は善なりと雖も猶是れ相を存し…」を引用されて次のやうに論じてをられますので、参考として記します。

『我等はここに憲法第一條に『和を以て貴しとなす』の教示が、同じく論語に和の貴ふべきを説いて

『有子曰、禮の用は和を貴しと爲す。先王の道斯れを美と爲すも、小大之に由れば、行はれざる所あり。和を知つて和せども、禮を以て之を節せざれば亦行はるべからず。』（學而第二）とあるに對し

『人皆黨あり、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ。然れども、上和ぎ下睦びて、事を論ふに諧ひぬるときは、事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。』と仰せられし内用の相違に想到するのである。

即ち論語に於いて和の貴しとするのは、禮、換言すれば道德秩序を維持するが爲に内心の和を必要となすのであつて、而も和そのものは禮を以て節せざれば其の意義を全うせずと教ふるのは、ここに和の思想は道義生活實現の手段と見らるるのである。其の禮と和と相互補足の關連を説くのであるけれども、而もこの二概念を統一する根據としての體驗内容は之を十分に説示せられぬのである。それ故に其の思想は何處かに形式的硬化を示すのである。而るに太子の憲法に於いては、和の貴むべきを示させ給ひて、直ちに人皆黨あつて達者少なき人生事實を洞察せさせ給ひ、それ故に自ら凡夫たるを省みて個我執著の弊を打破し、全體協力生活の精神にめざむることに依つて上下和諧して、君父隣里に忠順なるべき生を實現すべしと示し給ふのである。この上下和睦の内的根柢に立つとき、一切の事業は自然に眞實の道理と合一し、國家生活は總ての波瀾と障礙とを打破して開發進展せしめらるべきことを宜ふのである。『上和ぎ下睦びて、事を論ふに諧ひぬるときは、事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。』とは實にこの確信を顯彰せさせ給ふ御言葉である。論語に説くところの和は何處かに禮なる概念と對立せるに對し、太子の和が人間心理の洞察に基づく團體協力の根本精神に生きしめられてあることは、そこに著し

き對照を示すのである。佛儒の學問思想は一たび御心を通ずるとき、ここに實生活の痛切體驗に融合くわつごうされて生命化せられるのである。全體協力の生を御心に具現したまひ、國民相和すれば何事か成らざらむと宣ふ、この國民的確信を體現せさせ給ひたればこそ、國家生活の内憂外患ないゆうがいかんの間に處してわが王政統一と對外的地位の確立は成就せられたとこそ仰ぎまつるのである。

この内的平等の自覺に徹し、全體協力の信を具現し給ひし御心は、また大乘佛教の教化思想に生命をあたへさせたまうたのである。今この御精神を維摩經文殊問疾品に維摩居士こじが有疾の菩薩、即ち未だ煩惱結惑ぼんのうを離脱し盡さざる大乘修行者に對して、『菩薩は客塵煩惱を斷除して大悲を起す。愛見の悲は則ち生死に於て疲厭ひえんの心有り。若し能く此を離るれば、疲厭有ること無し。』と説きたる内容に就いて其の意義を示し給ひし御釋を中心に仰ぎまつらうとするのである。

今此の大意は即ち菩薩に愛見の慈悲を離れよと教ふるのであるが、此の愛見の悲とは個我執著の現世的愛情を指し、之に止まるときは教化すべき衆生を善惡好惡に依つて差別して、つひに生死波瀾の人生に在つて平等救濟の理想を實現すること能はざるべきを説くものである。

凡そ釋迦佛陀が無上大覺を成就せられしに拘らず、更に現實五濁ごじよくの國土に隨順ずいじゆんして、衆生救度のために其の生涯を捧げられたる精神は、大乘教徒に『衆生のために道を求む』る菩薩願行の思想を開展せしめ、小乘教徒の隱遁超脱いんとんちやうだつの人生觀を排して、『佛道を得いじどと雖も、涅槃ねはんに入らず、大悲代つて苦を受く』といふ沒我的慈悲の教化精神を宣説せしむるに至つたのである。今維摩經に愛見の慈悲を斷除して一切を教化すべしといふのも亦この思想を背景とするのである。けれども斯の如き教化思想は太子に依つて如何なる具體的表現を以て示されしか、之を當代諸師のそれと比較するとき、其の概念的形式に於いては同一の如く見らるべき思想にも、これが内容は重大の相違を示し、此に國家生活の運命を荷ひて同胞教化に御身を捧げ盡させ給ひし内信の證跡は、尚あきらかに窺うかがひ得るのである。

今太子の御釋を引用する前に大陸諸師の釋文を引用して、之を太子のそれと對照しようとするのである。即ち肇法師じやうの曰く、『心外縁に遇へば煩惱ぼんご横へいに起る、故に客塵と名づく。菩薩びくざうの法は要ひかず客塵を除きて大悲を起す。若し愛見あいけんいまだ斷せ

ざれば則ち煩惱いよいよ彌いよいよ滋し。故にまさに之を捨つべし。』(註維摩詰卷五)

また慧遠えおん法師は之を釋して愛見の悲を斷除して靜淨の法愛を起すに二種の益ありとなし、一には「常化を厭はざるの益」、二には、「離縛解他の益」といひ、其の第一を説明するに左の如く論じてゐる。

『愛見の悲は即ち生死に於て疲厭ひえんの心有りと言ふは、損を擧げて益を顯はす。愛見有るを以て能く諸苦を生ずれば、厭うて滅を求む。故に生死に於て疲厭の心有り。又愛見を以て怨親おんしんを分別すれば、廣く化すること能はず。故に疲厭の心有り。若し能く此を離るれば、疲厭の心有ること無し。益の損に異なるを彰はす。』(維摩義記卷三)(大正大藏經經疏部六―四七五頁上段 更に古藏菩薩まじせうの釋は次の如くである。

『愛見の悲は則ち生死に於て疲厭の心有り。若し能く此を離るれば、疲厭有ること無し。在々の所生、愛見の覆ふ所と爲らず。夫れ所見あれば必ず滯る所有り。所愛有れば必ず憎む所有り。此れ有極これうごくの道。いづくぞ能く無極むじくの用を致さん。』

(維摩義疏卷四)(同經疏部六、九五七頁下段)

以上大陸諸師の解釋内容を論ずれば、肇法師は菩薩の法は煩惱を斷じて慈悲を起すに在りとなし、個人中心の現世的愛情は煩惱を増大するが故に捨離しやりすべしと説くに止まり、經典の一般的説明の外に何ものもない。慧遠の釋は肇法師のそれと比ぶれば之を教化的見地に解する點に於いて徹底せる内容を示してをる。即ち愛見の慈悲は煩惱の因となつて諸々の苦惱を生じ、ために生死動亂の人生に疲厭ひえんせしめ、又怨親おんしん愛憎の差別に迷惑せしむるを以て、ひろく衆生教化の妙用を起すに障礙あることをいふのである。吉藏師の所説も亦その主意に於いて之と大差ない。これまことに大乘佛教の通説であつて、龍樹菩薩が智度論に菩薩は「悲空二法」を成就すべきことを論じて、

『菩薩亦是の如し。二道あり。一は悲、二は空。悲心に衆生を憐愍れんみんし、誓願して度せんと欲す。空心にして來れば則ち憐愍の心を滅す。若しただ憐愍の心のみ有りて智慧(空心)無くば則ち心衆生無くして衆生有る顛倒中に没在す。若しただ空心のみ有りて、憐愍して衆生を度せんの心を捨てば則ち斷滅中に墮つ。是の故に、佛二事を説いて兼ね用ふ。一切空を觀ずといへどもしかも衆生を捨てず。衆生を憐愍すといへども一切空を捨てず。』

といひ、群生を化益する慈悲心が、一切人世の事象に執著することなき空心と一致するとき、初めて私なき淨心を以て衆生濟度を成就し得べきを説ける如きも、亦以上と同じ思想内容を示すものである。

然るに太子は此の愛見の慈悲を否定する經典の説示に對し、唯かくの如き菩薩の個人人格と一切衆生との外的關係のみを以て釋したまふのではない。更に之を同信協力生活の情意に徹到せしめて次の如く釋させ給ふのである。

(但し、維摩經文殊問疾品に愛見の慈を捨離すべきことを明かすのは、有疾の菩薩に對して其の心を調伏する方法を説く文中、自他の上に執著すべからざるを勸めて、そこに之を説くのである。次に引用する太子の御文は、執著を離るべきことを勸むる所以に就いて其の大意を釋し給ふところである。ここに愛見の慈を離るべき理由に對する太子の御見地は綜合されてあると共に又大陸諸師の何れに於いても、かくの如き微妙の御釋は見出すこと能はざるを以て、特にこれを引用する次第である。)

『自行外化を憶して以て心を調伏すと雖も、若し自他の二境を存して修行せば、則ち修する所廣からずして、物とその苦樂を同じくすること能はず。所以に勸めて應に著を離るべしと明すなり。』

此の御言葉は又愛見の慈を論じて『此の愛見の悲は善なりと雖も、猶是れ相を存し、自他の二境を平等にして廣く衆生を化すること能はず』(維摩經義疏文殊問疾品(本書七九三頁)とのたまひし御言葉と照應せらるべきである。今太子の御釋はその概念形式に於いては必ずしも大陸諸師のそれと徑庭なきが如くである。而も御表現の微妙の内容は又自ら概念的理解の領域を超出して、切實の信念體驗を暗示せさせ給ふのである。)

太子は同じく個我執著の弊を示し給ふのであるけれども、その御表現は決して大陸諸師のその如き單なる救濟意志を内容とするものではない。自行化他の理想に進むといへども、そこに個人中心の觀念を存し、自他融合の情意を缺くとき、個我を全體生活に捧ぐる眞實の實行は生れざるべきことを宣ふのである。

太子は『自他の二境を平等にして』と融合親和の生を念じ給ひ、『修する所廣かる』べきをのたまひて、わが生に同信協力の信を具現すべきことを教へ給ふのである。ここに群生とその苦樂を同じうせむと蒼生の痛苦を自らのそれとなし、永久苦闘に隨順し給ひし御體驗を示す御言葉は、衆生生活の核心に徹する廣大のいつくしみを表現せさせ給ふのである。それは高

きに立つ聖者の向下慈悲ではない。『共に是れ凡夫』とのたまひし懺悔求道の至誠を偲ばしむる内的平等の同胞感である。大陸諸師は同じく個我執著の現世的愛情を超越し、眞實の法愛に基く平等教化を説くけれども、そこに反映されたるものは上求佛道の向上的志願に進むと共に、下化蒼生の大悲救済に向下する大乘菩薩の個人人格である。迷へる衆生と教化する聖者との懸隔對照けんかくたいしょうがそこに現るのである。即ち大覺に到らんとする個人人格が同時に下つて一切衆生に向はんとするのである。そこに豫想さるるものは、個人中心の教化思想であり、また向下的啓蒙的教化活動である。太子の示しましし如き、同じく人たるにめざめて苦樂を分つところの團體的信念に基く教育精神の表現はそこに見出すことは出來ぬのである。勿論大陸諸師に於いても一切衆生と對立懸隔なき平等教化の思想は之を力説しないのではない。而も彼等は之を説くに自己を全體生活に没入して盡すところの體驗を以てするのではなく、菩薩個人に於ける執著なき慈悲と教化活動との理論的關係を論ずるに止まるのである。

故に蒼生そうせいとその勞苦を共にする如き一切群生の情意に徹する融合の信念は披瀝ひれきせられぬのである。太子の御心に湛たへられしものは常に現實具體的の團體國民生活であつた。教育教化は個人、又其の協力に依つて行はるべきものであるけれども、その個人は常に全體生活の歸趨すべき眞實の道に徹入し、身を融合協力の至誠に没して、現實國民生活を内に支ふる指導者であらねばならぬのである。大陸諸師の菩薩教化の思想は一切衆生のためを意圖しながらも、なほ高きに立つ指導的人格を豫想して、個人的であり、同時にまた抽象的である。具體的國民性活の協力精神を養育する如き生命は遂に示されてはをらぬのである。故に大乘教化思想といへども尚理想的世界の追求に止まつて、特殊教團生活の冥想めいそう觀念裡に構成せられたる概念理論たるを免れざるに至るのである。太子の精神は大乘佛敎の理想に生命をあたへさせ給うたのである。』(前掲書六二頁、七〇頁)

〔縛と解とを擧げて重ねて釋を顯はす〕(現代語譯)

一切の事象に對する執著心を捨て去ることを勧め、それによつて調伏を説き明す中の第三に、執着心即ち束縛と束縛から解き放

たれることを擧げて、上述の執著心を捨て去るべき理由を重ねて釋き明します。所生は縛無くから以下がこれであり、その意味するところは、衆生を教化濟度するいはれば、病ひある菩薩は、ただ先づ自らの惡心邪心を捨て去るやう努めるべきだと言ふであります。

所生は縛無く、能く衆生の爲に法を説きて縛を解くと、八地以上の菩薩に導かれた修行者は、自らの修行のための實踐に努め勵むならば、衆生が種々束縛されてゐるのを解き放つことができますから、自分自身が愛見の悲にとらはれてならない、といふことを説き明してゐます。此の句は正しく上述の執著心を捨て去るべき理由を釋き明してゐます。次に佛陀釋尊の眞實の言葉を擧げて束縛から解き放たれることの證しとします。佛の所説の如し。若し自らに縛有りて能く彼の縛を解くは是の處有ること無し。若し自らに縛無くして能く彼の縛を解くは斯れ是の處有りとは、善行や惡行が生ずるのは、必ず自分自身が先に爲すことであつて、他者に及ぼすのはその後であることを説き明してゐます。是の故に菩薩は應に縛を起すべからずとは、一切の現象に對して執著心を起してはならないといふ結びの文言であります。

疑問がありますので質問して言ひます。一凡夫の或る者は散亂した心のままで禪の修業のあり方を巧みに説き、佛道修行中の或る者はその説法を探求し、身につくまで修行して深く靜かな安らぎを獲得します。また凡夫の或る者は煩惱に感つた心のままで聖者の初歩の解脱について巧みに説き、佛道修行中の或る者はその説法を探求し、身につくまで修行して初地の菩薩（聖者の階級の初段階）の解脱を得ます。この事から推量しますと凡夫は煩惱に束縛されたままですから、佛陀の「自分自身が煩惱の束縛から解き放たれてゐないならば、他者の煩惱の束縛を解き放つことはできない。」といふ所説は、或いは悉くは當てはまらないのではありませんか。また釋迦如來は煩惱の束縛の無いことを窮め盡した方であります。而るにその弟子の善星（惡友に親しみ、佛陀に惡心をして生きながら地獄に墮つといふ）は邪見を起してをります。また舍利弗も煩惱の束縛は無い方ですが、その弟子の中の二人は、惑ひと顛倒した見解は益々昂じてをります。さういふことであれば、佛陀の「自分自身が煩惱の束縛から解き放たれてゐれば、他者の煩惱の束縛を解き放つことができる。」といふ所説も、悉くは當てはまらないのではありませんか、——と。

その疑問を解き明して言ひます。一他者の導きに從つて利益を得るについては要約して二種類があります。第一には、或る者は

其の修行に従つて導かれ、第二には、或る者は其の説法に従つて導かれるのであります。今ここで釋き明すのは、ただその修行の周邊、即ち説法について述べ論議してゐるのであります。今凡夫が散亂した心のままで禪について説法し、それに従つて利益を得るものがあることについて非難してゐますが、これは凡夫の述べる説法に従ふのみであつて、凡夫の修行に従つてゐるのではありませんから利益を得るのであります。何故ならば、若し凡夫の修行に従ふならば、凡夫の修行には執著心の束縛がありますからその束縛は増すにちがひありません。而るに利益を得るといふのは、何ら束縛の無い説法を述べるが故であります。善星は生きながら地獄に墮ちるといふ現世における善い報いのもととは斷ち切られましたが、未來における善い報いのもとまで斷ち切られたものではありません。若し釋迦如來でなければ、未來における善い報いのもとまで斷ち切つたではありません。やはり釋迦如來は善星のために利益を與へたといふべきであります。また舍利弗の二人の弟子の惑ひと顛倒した見解が益々昂じたのは、舍利弗のかたよつた教へを習ひ従つたが故であります。舍利弗の修行は既に學ぶべきものを残してゐない最高の境地にありますから、若し舍利弗の修行に従へば、いづれはその最高の境地を得るであります。——と。しかしながら以上の説明では疑問はつきり氷解いたしません。と申しますのは、修行と説法と言つても凡夫の修行と説法であります。また舍利弗の修行と舍利弗のかたよつた教へであります。同じ凡夫でありながらその修行には束縛があり、その説法には束縛が無いと、どうして言へるのでせうか。また舍利弗の修行は最高の境地に達してゐるのに、その教へはかたよつてゐると、どうして言ふことができるのでせうか。但し私は次のやうに懷ひます。他者を導くありさまについてこと細かに論ずるならば、凡夫の説法に正しく導かれることも、舍利弗の教へによつて誤つた道に入ることもあります。しかしながら今ここでは、ただ現實世間の道理に基いて論じてゐるので、自らに束縛があれば他者を導くことはできないと言つてゐるのであります。何故ならば、若し現實世間の道理について論ずるならば、悪行から離れしめ善行を實踐せしめるのは、必ず自らがそれを修得した上ではじめて他者に勧めることができますのであります。若し自らが悪行から離れ得ずして、どうして他者に善行を實踐するやう勧めることができませうか。また善行を實踐することと悪行を犯すことについて普遍的に論ずるならば、凡夫も聖者も皆悪行を犯すことがあります。凡夫の悪行は數多く、聖者には比すべくもないのであります。凡夫も聖者も同じく善行を實踐しますが、聖者の善行が極めて優れてゐることに、凡夫はとても及ばないのであります。道理は以上の

通りでありますから、自らに束縛があれば他者の束縛を解くことはできず、自らに束縛が無ければ他者の束縛を解くことができる、
といふ意味は明らかであります。

(訓讀文)

所生は縛無く従り以下、縛と解とを擧げて重ねて上の釋を顯はす。言ふところは物を化する所以は、只先づ自らの惡邪を離れんと欲せよとなり。

所生は縛無く、能く衆生の爲に法を説きて縛を解くとは、自行既に精なれば即ち所生も能く他の縛を解くが故に、愛見を以て己を覆ふことを爲す莫れと云ふことを明すなり。此の句は正しく上の釋を顯はす。次に佛の誠言を取りて證しと爲す。佛の所説の如し。若し自らに縛有りて能く彼の縛を解くは是の處有ること無し。若し自らに縛無くして能く彼の縛を解くは斯れ是の處有りとは、善惡の生ずるは必ず己より始り他に由るに非すと明すなり。是の故に菩薩は應に縛を起すべからずとは、著すべからずと結す。

問うて曰はく。凡夫は或は散心を以て好く禪の方を説き、學ぶ者は説を尋ねて修習して深靜を獲得す。且凡夫は惑心をもつて爲に十地の淺解を説き、亦學ぶ者は説を尋ねて修行して或は階級の解を得。此を以て推を爲すに、則ち言ふ所の自らに縛有れば他の縛を解く能はずとは、或いは悉くは然らず。且如來は既に是れ無縛の極みなり。而るに善星猶邪見を生ず。又舍利弗も亦是れ無縛なれども、而も其の二りの弟子の惑倒は彌興ず。然れば則ち若し自らに縛無ければ能く他の縛を解くといふも亦悉くは然るに非ざるなりと。

釋して曰はく。他に從つて益を得るに略して二種有り。一には或は其の行に從ひ、二には或は其の説に從ふ。今此に明すは、只其の行の邊を述べて論を爲すなり。今難する所の凡夫の散心の説を受けて而も益を得といふは、或は是れ但其の説を述ぶるのみ、其の行に從はざるが故に然なり。何となれば則ち若し其の行に從はば、其の行は即ち是れ縛なるが故に亦縛を増す可し。而るに善を増すとは、但其の縛無きの説を述ぶるが故なり。善星現の善根を斷すと云ふは、若し如來に非ざれば、未來の因をも斷す可し。豈に佛善星の爲に益無しと言はんや。且舍利弗の二りの弟子の惑倒

彌興するは、其の僻教を習ふが故に然なり。若し其の行に從はば、其の行は既に是れ無學なるが故に、亦無學を得可きなり、と。然るに猶清く去らず。復行と説と雖も便ち是れ凡夫の行と説となり。亦是れ身子の行と僻教となり。豈行のみ唯是れ凡にして説は凡の説に非ざるを得んや。亦唯行は舍利弗に屬して僻教は舍利弗に非ざる可けんや。但し私の懷ふには、細しく事相を論ぜば何ぞ此の如きこと無からん。而るに今此には只天下の道理に就きて論を爲すが故に其れ然るなり。何となれば則ち若し天下の道理を論ぜば、惡を遣り善を取るは必ず己より始まり方に能く人を勸む。若し自ら能くせずんば安んぞ人を進むるを得ん。且偏に益善と生惡を談せば、生惡は復凡聖皆有りと雖も。凡に因るの多きには如かず。其れ益善は復通して凡と聖とに在りと雖も、聖に因るの美なるには及ばず。理は既に是の如し。則ち縛と解との致明らかなり。

經典（縛と解とを擧げて重ねて釋を顯はす）

所生ハ無ク縛。能ク爲ニ衆生ノ一説ク法ヲ解ク縛ヲ。如シニ佛ノ所説ノ一。若シ自ラニ有リテ縛能ク解クハニ彼ノ縛ヲ一。無シレ或ルコトニ是ノ處一。若シ自ラニ無クシテ縛能ク解クハニ彼ノ縛ヲ一。斯レ有リトニ是ノ處一。是ノ故ニ菩薩ハ不レ應ニ起スレ縛ヲ。

經典訓讀文

所生は縛無く、能く衆生の爲に法を説きて縛を解く。佛の所説の如し。若し自らに縛有りて能く彼の縛を解くは、是の處或ること無し。若し自らに縛無くして能く彼の縛を解くは、斯れ是の處有り。是の故に菩薩は應に縛を起すべからず。

經典現代語譯

（維摩居士は更に言ひます。）

「八地以上の菩薩に導かれ精進した修行者は執著心の束縛から脱してをり、衆生の爲に説法してその束縛を解き放つことができます。佛陀の所説の通りです。若し自らが束縛から脱してゐないで、他者の束縛を解き放つことができるといふ道理は無い。若し自らが束縛から脱してゐれば、他者の束縛を解き放つことができる、といふのが道理である」と。この故に病ひある菩薩は一切の

現象に對して執著心を起してはならぬのです。」

【參考】

○先師 黒上正一郎先生は、經典「若し自らに縛有りて能く彼の縛を解くは、……」について太子『義疏』の「何となれば則ち若し天下の道理を論ぜば……」を引用されて次のやうに論じてをられますので、參考として記します。

『聖徳太子は固有民族文化と大陸文化との交流接觸の時代に出現せさせ給ひ、當代大陸の思想學術を博綜し給うたのである。けれども太子に於いてはこれらの思想學術はすべて切實の求道體驗に融化して開展せしめられたのである。國家重大の轉機に國民生活の運命を荷はせ給ひし御心は、時代の痛苦濁亂を啗に客觀視し給はずして、先づ自らを省みさせ給ひ、全體生活の開導教化を念じて求道精進し給うたのである。維摩經義疏に、經典に

『若し自らに縛有りて、能く彼の縛を解かんは、是の處有ること無し。若し自らに縛無くして、能く彼の縛を解かんは、斯れ是の處有り。』（文殊問疾品）

とある佛語に對し、深く思想と實行との關連を論じ給ひ、その最後に次の如く示し給ふ御言葉は、正しく此の御精神を顯すのである。

『何となれば若し天下の道理を論ぜば、惡を遣り善を取るは必ず己に始まりて方に能く人を勸む。若し自ら能くせずんば安んぞ人を進むるを得む。』

太子は攝政の大任をうけさせ給ひてより、當代の氏族制度の積弊に基く内政の分亂に對し、これが不斷改革のため苦闘し給うたのである。けれども實際政治の革新は太子に於いてはつねに國民精神生活の内的改革に基かねばならぬことを信知し給うたのである。一代の内治外交が三寶興隆の教化事業と表裏せしめられ、憲法第二條に『篤く三寶を敬へ』と仰せられ、これを『人尤だ惡しきもの鮮し。能く教ふれば之に従ふ。其れ三寶に歸せずんば、何を以てか枉れるを直さむ』と結び給ひたるは、實にわが國民の靈性を信ぜさせ給ひ、教育教化に依つて國家生活の内的根柢を確立せんとし給ひし御心を顯すの

である。けれどもこの内的改革は太子に於いては先づ之を自らの御心に實現せられねばならぬものであつた。太子がここに『天下の道理を論ぜば』と宣ふのは、その求道精神が當自らの解脱のためにあらずして、國民の共に歸趨すべき大道の實現にあつたことを示すのである。而も『惡を遣り善を取るは必ず己に始まりて方に能く人を勸む。若し自ら能くせずんば安んぞ人を進むるを得む』との強き御言葉は、實にこの内的改革を先づ自らの御心に具現するに非ざれば、眞に國民同胞を救済すること能はじと信知せさせたまひたる、内心の生の戰の深刻なりし事實を偲はしむるのである。』（前掲書五二―五三頁）

〔縛と解との相を辨ずの科段分け〕（現代語譯）

一切の事象に對する執著心を捨て去ることを勸め、それによつて調伏を説き明す中の第四に、執著心即ち束縛と束縛から解き放たれることとの具體的なありやうを區別して述べます。何をか縛と謂ひ、何をか解と謂ふや以下がこれであります。上述では、束縛と束縛から解き放たれるとだけ言つて、その具體的なありやうは示しませんでした。それ故ここで具體的なありやうを區別して述べるのであります。この中について三つの項目に分けます。

第一に、ひとまづ禪定（冥想による心靜かな安らぎ）と方便（衆生教化の巧みな手だて）とによつて、束縛と束縛から解き放たれてゐることの本質的な相を示します。

第二に、又方便無きの意は縛なりから以下は、方便と智慧とを擧げて、束縛と束縛から解き放たれることについて精妙な區別を述べます。

第三に、又復身は…と觀ずから以下は、方便と智慧との具體的なありやうを考察します。

（訓讀文）

何をか縛と謂ひ、何をか解と謂ふや従り以下、第四に仍ち縛と解との相を辯ず。上には直ちに縛と解と言ひて而も其の相を顯はさず。故に辯ずるを須ふるなり。中に就きて開きて三と爲す。

第一に一往禪定と方便とに據りて、直ちに縛と解との體を顯はす。

第二に又方便無きの慧は縛なり従り以下、方便と智慧とを擧げて妙に縛と解とを辨す。
第三に又復身は…と觀ず従り以下、仍ち方便と智慧とを簡ぶなり。

〔直ちに縛と解との體を顯はす〕（現代語譯）

（束縛と束縛から解き放たれることとの具體的なありやうを述べる中の第一に、禪定と方便とによつてその本質的な相を示します。）

何をか縛と謂ひ、何をか解と謂ふや。禪味に貪著する、是れ菩薩の縛なりとは、若し瞑想による心靜かな安らぎに執著するならば、前世の善惡の所業に隨つてこの世に生を受け、前世の所業の束縛を斷ち切ることはできません。これを菩薩の束縛とすること
を説き明してゐます。方便を以て生ずる、是れ菩薩の解なりとは、ただ衆生の教化濟度のために衆生の機縁に應じてこの世に出現するならば、前世の所業に隨つてこの世に生を受けることはなく、前世の所業の束縛から解き放たれてゐます。これを菩薩が束縛から解き放たれてゐるといふことを説き明してゐます。

（訓讀文）

何をか縛と謂ひ、何をか解と謂ふや。禪味に貪著する、是れ菩薩の縛なりとは、若し禪味に著せば、業に隨つて生を受けて而も自在ならず。是を菩薩の縛と爲すことを明すなり。方便を以て生ずる、是れ菩薩の解なりとは、業を以て生ぜず、但化物の爲に應生し能く自在を得るは、是れ菩薩の解なりと明すなり。

經典（直ちに縛と解との體を顯はす）

何ヲカ謂ヒレ 縛ト。何ヲカ謂フヤレ 解ト。

貪ニ著スル禪味ニ。是レ菩薩ノ縛ナリ。以テニ方便ヲ一生ズル。是レ菩薩ノ解ナリ。

經典訓讀文

何を縛と謂ひ、何を解と謂ふや。

禪味に貪著する、是れ菩薩の縛なり。方便を以て生ずる、是れ菩薩の解なり。

經典現代語譯

(文殊菩薩は問ひます。)

「如何なることが束縛で、如何なることを解き放たれてゐるとするものでせうか。」

(維摩居士は答へて言ひます。)

「瞑想による自己の心静かな安らぎに執著すれば、前世の所業の束縛から離れることはできません。これが菩薩の束縛です。衆生を教化するためにこの世に生を受けるならば、前世の所業の束縛から解き放たれます。これを菩薩が束縛から解き放たれてゐるとするのです。」

「妙に縛と解とを辨ずの科段分け」(現代語譯)

束縛と束縛から解き放たれることとの具體的なありやうを述べる中の第二に、方便と智慧とを擧げて束縛と解き放たれることとの精妙な區別を述べますが、この中について三つの項目があります。

第一に、束縛と解き放たれてゐることについて、四つの具體的なありやうを列挙します。

第二に、何をか方便無きの慧は縛なりと謂ふやから以下は、右の四つを列挙した順番に随つて、何故束縛なのか、何故解き放たれてゐるのかの理由を釋き明します。

第三に、文殊師利から以下は、病ひある菩薩はこのやうに束縛から解き放たれることを觀じなさいと勸める、その結びの文言であります。

そして方便(衆生を教化濟度する巧みな手だて)は迷ひある現實世界の至る所に於て、衆生に善根を積み重ねさせることを意としてゐます。また方便は、あらゆる存在は因縁によつて生ずるのであつてその本質は實體の無い空なのでありますが、衆生がその空の理

に通達することを助ける力があります。智慧はもの事の眞實を照らし見るさとりであります。また智慧は、迷ひある現實世界の衆生を導く力があります。此の方便と智慧との二つは必ず相伴つてはたらきを爲すのであります。

(訓讀文)

第二に方便と智慧とを擧げて、妙に縛と解とを辨する中に就きて、亦三有り。

第一に先づ四章門を列す。

第二に何をか方便無きの慧は縛なり従り以下、次第を次いで四章門を釋す。

第三に文殊師利従り以下、無縛を觀ぜよと勸むるを結するなり。

然して夫れ方便は是れ有に涉り徳を積むの心なり。亦能く空解を資くるの功有り。智慧は是れ能照の解なり。亦能く有を導くの力有り。此の二は必要す相帶して用を爲すなり。

〔四章門を列す〕(現代語譯)

(方便と智慧とを擧げて束縛と束縛から解き放たれることとの精妙な區別を述べる中の第一に、束縛と解き放たれてゐることとについて、四つの具體的なありやうを列舉します。)

方便無きの慧は縛なりとは、若し空(一切の存在は因縁所生であつて實體は無い)の理を證る智慧があつても方便(衆生を教化する巧みな手だて)が伴はないならば、それは衆生を教化濟度する心が無いわけですから、この智慧はただ空の理を證つたといふ境地に止まつてしまひ、迷ひある現實世界の衆生を導き教化濟度することはできません。それ故にこの空を證つた智慧は、空の理に束縛されてゐるのであります。方便有るの慧は解なりとは、若し空の理を證つた智慧に方便が相伴ふときは、それは衆生を教化濟度しようとする心がはたりますから、この智慧はあまねく空の理を證つても、その境地に止まることはありません。また迷ひある現實世界の衆生を導き教化濟度することができます。それ故に此の空を證つた智慧は、空の理の束縛から解き放たれ自在であると説き明してゐます。

一 慧無きの方便は縛なりとは、若し方便のみがあつて、それを空を證つた智慧を以て導くことをしないならば、空の智慧が無ければ迷ひある現實世界を超越することも煩惱を斷ち切ることもできませんから、此の方便は迷ひある現實世界の現象に常にとらはれてをり、衆生の煩惱も斷ち切ることはできません。それ故に此の方便は迷ひある現實世界に束縛されてゐるのであります。慧有るの方便は解なりとは、空を證つた智慧を以て方便を導くならば、空の智慧は迷ひの現實世界から超越できますし、煩惱も斷ち切ることができまから、此の方便は煩惱に束縛されることはありません。それ故に此の方便は、現實世界や煩惱の束縛から解き放たれてゐると説き明してゐます。

(訓讀文)

方便無きの慧は縛なりとは言ふところは若し方便をもつて資くることを爲すこと無ければ、則ち此の空の解は能く唯空を證つて住まり、有を導て物を化するること能はず。故に此の空の解は空の爲に縛せらるるなり。方便有るの慧は解なりとは、方便を以て資くることを爲すときは、則ち此の空の解は偏に空を證つて而も住まらず。亦能く有を導きて物を化する。故に此の解は解を得ることを明すなり。慧無きの方便は縛なりとは、若し空の慧をもつて導くことを爲す無き方便は、則ち此の方便は終日有に住まりて結を斷ずる能はず。故に此の方便は有の爲に縛せらるるなり。慧有るの方便は解なりとは、空の慧を以て導くことを爲せば、則ち此の方便は煩惱の爲に縛せられず。故に此の方便は解を得と明すなり。

經典

又無キノニ方便一慧ハ縛ナリ。有ルノニ方便一慧ハ解ナリ。無キノニ慧方便ハ縛ナリ。有ルノニ慧方便ハ解ナリ。

經典訓讀文

又方便無きの慧は縛なり。方便有るの慧は解なり。慧無きの方便は縛なり。慧有るの方便は解なり。

經典現代語譯

(維摩居士はまた言ひます。)

「方便を伴つてゐない空の智慧は束縛です。方便を伴つてゐる空の智慧は束縛から解き放たれてゐます。空の智慧を伴つてゐない方便は束縛です。空の智慧を伴つてゐる方便は束縛から解き放たれてゐます。」

〔四章門を釋す〕(現代語譯)

方便と智慧とを擧げて束縛と束縛から解き放たれることとの精妙な區別を述べる中の第二に、四つの具體的なありやうを列擧した順番に隨つて、何故束縛なのか、何故解き放たれてゐるのかの理由を釋き明します。

經典を御覽なさい。

(訓讀文)

第二に四章門を釋するは即ち次第に釋す。見つ可し。

經典(四章門を釋す)

何ヲカ謂フヤ 無キノニ方便一慧ハ縛ナリト上。

謂ク。菩薩以テニ愛見ノ心ヲ一莊ニ嚴シ佛土ヲ一成ニ就ス。衆生ヲ一。於テニ空・無相・無作ノ法ノ中ニ一而モ自ラ調伏ス。是ヲ名ツクニ方便一慧ハ縛ナリト上。

何ヲカ謂フヤ 有ルノニ方便一慧ハ解ナリト上。

謂ハク。不_下以テセニ愛見ノ心ヲ一莊ニ嚴シ佛土ヲ一成ニ就ス衆生ヲ上。於テニ空・無相・無作ノ法ノ中ニ一以テ自ラ調伏シテ而モ不_レ疲厭セ_一。是ヲ名ツクニ有ルノニ方便一慧ハ解ナリト上。

何ヲカ謂フヤ 無キノニ慧方便ハ縛ナリト一。

謂ク菩薩住リテニ貪欲・瞋恚・邪見等ノ諸ノ煩惱ニ一。而モ植ウニ衆ニ徳本ヲ一。是ヲ名ツクニ無キノニ慧方便ハ縛ナリト一。

何ヲカ謂フヤニ有ルノ慧方便ハ解ナリト一。

謂ク。離レテニ諸ノ貪欲・瞋恚・邪見等ノ諸ノ煩惱ヲ一。而モ植テニ衆ノ徳本ヲ一廻ニ向スル阿耨多羅三藐三菩提ニ一。是ヲ名ツクニ有ルノ慧方便ハ解ナリト一。

經典訓讀文

何をか方便無きの慧は縛なりと謂ふや。

謂はく。菩薩愛見の心を以て佛土を莊嚴し衆生を成就す。空・無相・無作の法の中に於て而も自ら調伏す。是を方便無きの慧は縛なりと名づく。

何をか方便有るの慧は解なりと謂ふや。

謂はく。愛見の心を以てせず、佛土を莊嚴し衆生を成就す。空・無相・無作の法の中に於て以て自ら調伏して而も疲厭せざる。是を方便有るの慧は解なりと名づく。

何をか慧無きの方便は縛なりと謂ふや。

謂はく。菩薩貪欲・瞋恚・邪見等の諸の煩惱に住りて、而も衆の徳本を植う。是を慧無きの方便は縛なりと名づく。

何をか慧有るの方便は解なりと謂ふや。

謂はく。諸の貪欲・瞋恚・邪見等の諸の煩惱を離れて、而も衆の徳本を植ゑて阿耨多羅三藐三菩提に廻向する。是を名慧有るの方便は解なりと名づく

經典現代語譯

(文殊菩薩は問ひます。)

「方便を伴つてゐない空の智慧は束縛であるとは、如何なる理由なのでせうか。」

維摩居士は答へて言ひます。

「菩薩が愛情にとらはれ、見る対象にとらはれた惑ひの心を以て、この現實世界を靜淨に衆生の願ひを得さしめようとして。そ

して空・無相（差別の相を超越してゐる）・無作（一切の作爲が無い）といふ眞理に基いて自ら調伏（心を正しくととのへ悪心を抑へ除く）するとします。これは愛と見との煩惱に束縛されてゐますので疲れ厭ふ心が起ります。これを「方便を伴はない智慧は束縛である」と言ふのです。」

（文殊菩薩は問ひます。）

「方便を伴つてゐる空の智慧は束縛から解き放たれてゐるとは、如何なる理由なのでせうか。」
維摩居士は答へて言ひます。

「菩薩が愛情にも見る対象にも執著することなく、この現實世界を清淨に、衆生の願ひを得さしめようとします。そして空・無相・無作の眞理に基いて自ら調伏するとします。これは愛と見との煩惱の束縛から解き放たれてゐますから、疲れ厭ふ心は起りません。これを「方便を伴つてゐる智慧は束縛から解き放たれてゐる」と言ふのです。」

（文殊菩薩は問ひます。）

「空の智慧を伴つてゐない方便は束縛であるとは、如何なる理由なのでせうか。」
維摩居士は答へて言ひます。

「菩薩が貪欲・瞋恚・邪見などの諸々の煩惱に束縛されたままで、衆生にさとりの果をもたらす善根を植ゑつけようとします。これは空の智慧が無いために煩惱の束縛から離れることができないのであつて、これを「智慧を伴つてゐない方便は束縛である」と言ふのです。」

（文殊菩薩は問ひます。）

「空の智慧を伴つてゐる方便は束縛から解き放たれてゐるとは、如何なる理由なのでせうか。」
維摩居士は答へて言ひます。

「菩薩が貪欲・瞋恚・邪見などの諸々の煩惱の束縛から離れて、衆生にさとりの果をもたらす善根を植ゑつけ無上絶對のさとりに向はしめるとします。これは空の智慧によつて煩惱の束縛から解き放たれてゐますから、これを「智慧を伴つてゐる方便は束縛か

ら解き放たれてゐる」と言ふのです。」

〔無縛を觀ぜよと勸むることを結す〕（現代語譯）

方便と智慧とを擧げて束縛と束縛から解き放たれることとの精妙な區別を述べる中の第三に、束縛から解き放たれることを觀じなさいと勸める、その結びの文言であります。

文殊師利。彼の有疾の菩薩は應に是の如く諸法を觀すべしとは、束縛から解き放たれることを觀じなさいと勸めるのであります。

（訓讀文）

文殊師利。彼の有疾の菩薩は應に是の如く諸法を觀すべしとは、第三に無縛を觀するを勸むるなり。

經典（無縛を觀ぜよと勸むることを結す。）

文殊師利。彼ノ有疾ノ菩薩ハ應ニ如ク是ノ觀ズニ諸法ヲ

經典訓讀文

文殊師利。彼の有疾の菩薩は應に是の如く諸法を觀すべし。

經典現代語譯

（維摩居士はさらに言ひます。）

「文殊菩薩さんよ。病ひある菩薩は、以上述べた通り一切の事象について束縛から解き放たれることを觀じなければなりません。」

〔方便と智慧とを料簡す〕（現代語譯）

執著心即ち束縛と、束縛から解き放たれることとの具體的なありやうを區別して述べる中の第三に、方便と智慧との具體的なありやうを考察します。又復身は…と觀すから以下がこれでありす。上述ではただ方便（衆生を教化濟度する巧みな手だて）と智慧（も

の事の眞實を照らし見るさとり」とだけ言つて、その具體的なありやうは示しませんでした。それ故に此の箇所での其の具體的なありやうを示し述べるのであります。

また經典を御覽なさい。經典に「是の病ひと是の身とは新にも非ず故にも非ず」とありますが、その新とは先に生じたことを言ひ、故とは後に生じたことを言つてゐます。

(訓讀文)

又復身は……と觀ず、從り以下、縛と解とを辨する中の第三に方便と智慧とを料簡す。上には直ちに方便と智慧とを言ひて、而も未だ其の相を顯はさず。故に此にも亦因りて之を顯はし簡ぶ。亦見つ可し。前に在るを新と爲し、後に在るを故と爲す。

經典 (方便と智慧とを料簡す)

又復タ觀ズニ 身ハ無常ナリ・苦ナリ・空ナリ・非我ナリト。是ヲ名ケテ爲スレ 慧ト。雖モニ 身ニ有リト 疾。常ニ在テニ 生死ニ。饒ニ益シテ一切ヲ。而モ不ニ 厭疲セ。是ヲ名ツクニ 方便ト。又復觀ジテ 身ヲ。身ハ不ニ 離レ 病ヲ。病ハ不ニ 離レ 身ヲ。是ノ病ト是ノ身トハ非ズレ 新ニモ非ズトスレ 故ニモ。是ヲ名ケテ爲スレ 慧ト。設ヒ 身ニ有ルモ 疾而不ルニ 永ク滅セ。是ヲ名ツクニ 方便ト。

經典訓讀文

又復身は無常なり・苦なり・空なり・非我なりと觀ず。是を名づけて慧と爲す。身に疾有り、雖も、常に生死に在りて、一切を饒益して、而も厭疲せず、是を方便と名づく。又復身を觀じて、身は病ひを離れず、病ひは身を離れず、是の病ひと是の身とは新にも非ず故にも非ずとす、是を名づけて慧と爲す。設ひ身に疾有るも而も永く滅せざる、是を方便と名づく。

經典現代語譯

(維摩居士はまた言ひます。)

「此の身は無常であり、苦であり、空であり、無我であると觀する、これを空の理を證つた智慧と言ひます。此の身が病んでゐて

も常に迷ひある現實世界を離れず、一切衆生に利益を興へ、而も厭ひ疲れることがない、これを方便と言ひます。また此の身を觀じて、此の身は病ひから離れることも無い、病ひは此の身から離れることもない、此の病ひと身とはどちらが先に生じたのでもなく、どちらが後に生じたのでもないとする、始めも終りも無いと感ずる、これを空の理を證つた智慧と言ひます。たとへ此の身が病んでゐても、病ひを治癒する相はとらず衆生と共に病んでこれを教化濟度する、これを方便と言ひます。」

〔中道の行を明して調伏の義を結成すの科段分け〕

病ひある菩薩の心を如何に調伏すべきかを文殊菩薩が問ひ、維摩居士が答へて調伏は如何になすべきかを説き明す中の第三に、病ひある菩薩が實踐すべき是と非とのいづれにも偏らない種々の中道の行を、廣汎に説き明し、調伏の道理を明らかにして結びの文言とします。文殊師利。有疾の菩薩は應に是の如く其の心を調伏して…べしから以下がこれでありす。この中に二つの項目があります。

第一に、調伏のあり方を總體的に説き、是にも非にも偏らない中道の行のいとぐちを示します。

第二に、生死に在れどもから以下は、諸々の中道の行を列舉します。

(訓讀文)

文殊師利。有疾の菩薩は應に是の如く其の心を調伏して…べし従り以下、淨名、文殊の問ひに答へて以て調伏を明す中の第三に、廣く菩薩の種種の行を明して調伏の義を結成す。中に就きて二有り。

第一に惣じて中道の端を開く。

第二に生死に在れども従り以下、諸の中道の行を列す。

〔惣じて中道の端を開く〕(現代語譯)

(病ひある菩薩が實踐すべき種々の中道の行を廣汎に説き明し、調伏の道理を明らかにして結びの文言とする中の第一は、調伏の

あり方を總體に説き、是にも非にも偏らない中道の行のいとぐちを示します。(

この第一の中道の行のいとぐちを示す中についても亦、三つの項目があります。第一に、直ちに中道の行のいとぐちを示します。

第二に、所以は何んから以下、それが中道の行であることの理由を釋き明します。第三に、是の故にから以下、中道の行を實踐しなさいと勸めて結びの文言とします。

有疾の菩薩は應に是の如く其の心を調伏して……とは、中道の行のいとぐちを示してゐます。其の中に住らずとは、二乗の人たちが自己のさとりに執著して偏つてゐるのと同じやうに、自己の調伏（心を正しくとのへ、悪を抑へ除く）に安住してはならないと言ふのであります。亦復不調伏の心に住らずとは、凡夫の人たちが現世の欲望に愛著して偏つてゐるのと同じやうに、自己の調伏を怠ることに安住してはならないと言ふのであります。

第二に、右が中道の行であることの理由を釋き明します。若し不調伏の心に住れば是れ愚人の法なりとは、上述の亦復不調伏の心に住らずが中道の行であることの理由を釋き明してゐます。若し調伏の心に住れば是れ聲聞の法なりとは、上述の其の中に住らずが中道の行であることの理由を釋き明してゐます。

第三に、是の故にから以下、中道の行を實踐しなさいと勸めて結びの文言とします。經典を御覽なさい。

一説では次のやうに云ひます。一其の中に住らずとは、病ひある菩薩の調伏について、維摩居士がここまで説法してきたこと、それに執著してはならないと言ふのである、一と。

(訓讀文)

第一の端を開く中に就きて亦三有り。第一に直ちに端を開く。第二に所以は何ん従り以下、釋す。第三に是の故に従り以下、中道を結勸す。

有疾の菩薩は應に是の如く其の心を調伏して……とは、端を開く。其の中に住らずとは、二乗の偏なるに同じて自調の中に住ること莫れとなり。亦復不調伏の心に住らずとは、凡夫の偏なるに同じて不調伏の中に住ること莫れとなり。

第二に釋す。若し不調伏の心に住れば是れ愚人の法なりとは、上の亦復不調伏の心に住らず釋す。若し調伏の心に住れば是れ聲聞の法なりとは其の中に住らずを釋す。
是の故に従り以下、第三に中道を結勸す。見つ可し。
一に云はく。其の中に住らずとは、即ち上來所說の中に著する莫れと言ふなりと。

經典(惣じて中道の端を開く)

文殊師利。有疾ノ菩薩ハ應ニ_下如ク_レ是ノ調_レ伏シテ其ノ心ヲ_一。不_レ住ラニ其ノ中ニモ_一。
亦復不_レ住ラニ不調伏ノ心ニモ_一。

所以ハ者何。若シ住レバニ不調伏ノ心ニ_一是レ愚人ノ法ナリ。若シ住レバニ調伏ノ心ニ_一是レ聲聞ノ法ナリ。
是ノ故ニ菩薩ハ不_レ當ニ_レ住ルニ於調伏ト不調伏トノ心ニ_一。離ルルニ此ノ二法ヲ_一。是レ菩薩ノ行ナリ。

經典訓讀文

文殊師利。有疾の菩薩は應に是の如く其の心を調伏して、其の中にも住らず、亦復不調伏の心にも住らざるべし。
所以は何ん。若し不調伏の心に住れば是れ愚人の法なり。若し調伏の心に住れば是れ聲聞の法なり。
是の故に菩薩は當に於調伏と不調伏との心に住るべからず。此の二法を離るる、是れ菩薩の行なり。

經典現代語譯

(第一に、維摩居士は中道の行のいとぐちを開示します。)

「文殊菩薩さんよ。病ひある菩薩は以上述べてきたやうに其の心を調伏(心を正しくととのへ、悪を抑へ除く)し、その調伏を成就したことに安住してはなりませんし、亦調伏を怠ることに安住してもいけません。」

(第二に、維摩居士は右が中道の行であることの理由を釋き明します。)

「如何なる理由かを申します。若し調伏を怠ることに安住すれば、これは愚かな人が歩んでゐる道です。若し調伏を成就したこと

に安住すれば、これは自己のさとりのみを追求してゐる聲聞の歩んでゐる道です。」

(第三に、維摩居士は中道の行を實踐しなさいと勧め、結びの文言とします。)

「それ故に菩薩は、調伏を成就したこと、調伏を怠ること、そのいづれにもこれで良いのだと安住してはなりません。調伏・不調伏のいづれにもとらはれないで偏りの無い道を目指す、これが實踐すべき中道の行なのです。」

〔諸の中道の行を列す〕(現代語譯)

病ひある菩薩が實踐すべき是と非とのいづれにも偏らない中道の行を廣汎に説き明す中の第二に、諸々の中道の行を列挙します。
生死しじうじに在あれどもから以下がこれでありませす。

生死しじうじに在あれども汚行おごぎやうを爲なさず。涅槃ねはんに住とどまれども永く滅度めつどせず。凡夫ぼんぷの行ぎやうに非あらず。賢聖けんじやうの行ぎやうに非あらず。垢行くごやうに非あらず。淨行じやうぎやうに

非あらず。以上の六句は、是非のいづれの境地にも偏つて安住してはならないことを説き明してゐます。魔行まぎやうを過ぐと雖も而も降魔かうまを現あすとは、衆生しゆじやうのために此の世に姿を現はして諸々の魔を降伏せしめることを説き明してゐます。一切智いっさいちを求めて非時の求め無し

とは、二乗の人が得てゐる中間の證りの境地を非時ひじと言ひます。亦或る研究家は次のやうに云ひます。——衆生の教化濟度を爲し盡してゐないのに、自ら完全な證りの境地に到達したとするのを非時の求めと名づけるのである、——と。

諸法しゆぽうの不生ふしやうを觀かんすと雖も而も正位しやうゐに入いらず。十二緣起じふにゑんぎを觀かんすと雖も而も諸の邪見じやくけんに入いる。此の句は、世の中の一切の現象は

生ずるでもなく滅するでもなく、即ち固定的實體の無い空であることを證つてゐても、それに執著することなく、そのさとり境地にとどまることなく、亦現實の此の世の中に姿を現はして衆生を教化濟度することを説き明してゐます。一切衆生いっさいしゆじやうを攝しやくすと雖

も而も愛著あいぢやくせず。とは、凡夫は愛著心を以てとらはれますが、その凡夫とは、同じでないことを説き明してゐます。遠離おんりを樂ねがふと

雖も而も身心しんじんの盡つくるに依よらず。とは、二乗は身體・心のはたらきを滅し盡して煩惱の惑まごひから超離しやうりしようとしませす、その二乗

とは同じでないことを説き明してゐます。離りを樂ねがふとは、煩惱の惑まごひから超離しやうりすることを言ふのであります。三界さんがいを行ぎやうずと雖も而

も法性ほつじやうを壞えせず。とは、一切の現象は空であるといふ眞理を捨て去ることはない、そのことを説き明してゐます。空くうを行ぎやうずと雖

も法性ほつじやうを壞えせず。とは、一切の現象は空であるといふ眞理を捨て去ることはない、そのことを説き明してゐます。空くうを行ぎやうずと雖

も法性ほつじやうを壞えせず。とは、一切の現象は空であるといふ眞理を捨て去ることはない、そのことを説き明してゐます。空くうを行ぎやうずと雖

も而も衆の徳本を植ゆ。無相を行ずと雖も而も衆生を度す。無作を行ずと雖も而も受身を現す。無起を行ずと雖も一切の善行を起す。此の四句は、衆生を教化済度することに於て同じ意味であります。經典を御覽なさい。亦二乗と凡夫が是非のいづれかに執著して偏つてゐるのと同じでないことを説き明してゐます。六波羅蜜を行ずと雖も而も衆生の心・心數の法を知る。とは、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六度の行は、差別の相を超越した行であります。而も種々の差別ある衆生の心のはたらきを悉く知つて衆生を教化済度します。二乗は六度の行の中のさとり智慧を修得しますが、現實の此の迷ひの世の中を觀知して衆生を教化済度することはできません。六通を行ずと雖も而も漏を盡さず。是れ菩薩の行なり。四無量心を行ずと雖も而も梵世に生ずることを貪著せず。禪定・解脱・三昧を行ずと雖も而も禪に隨ひて生ぜず。此の三句は凡夫の到底及びつかない行であることを説き明してゐます。四念處を行ずと雖も而も永く身・受・心・法を離れず。四正勤を行ずと雖も而も身心の精進を捨てず。此の二句は、二乗が四念處(一) (四種の觀想法)・四正勤(二) (四種の正しい努力)を行じて身體と心のはたらきを滅し盡すことを求める、その二乗の修行とは同じでないことを説き明してゐます。四如意足を行ずと雖も而も自在神通を得る。とは、四如意足(三) (自在力を得るための四種の修行法)を行ずることは二乗と同じでありますが、菩薩は衆生教化を先とする大乘の自在力、神通力を得ることを説き明してゐます。五根を行ずと雖も而も衆生の諸根の利鈍を分別す。とは、菩薩は五根(信根・精進根・念根・定根・慧根)を行じて五根は空であることを悟つてゐても、而も衆生の五根の利鈍を分別して衆生教化を爲すことを説き明してゐます。二乗は自らは五根を行ずることはできませんが、他者の五根の利鈍を分別することはできません。五力を行ずと雖も而も佛の十力を求むるを樂ふ。とは、二乗は五力(信力・精進力・念力・定力・慧力・解説四六四頁)を行じて見諦(四諦の理をささぐる)の境地に満足しとどまるのでありますが、菩薩は究極の佛の十力を求めて修行するのであつて、二乗と同じではないことを説き明してゐます。

七覺分を行ずと雖も而も佛の智慧を分別す。とは、二乗は七覺分(四) (さとりを得るための七種の修行)を行じて阿羅漢果(一切の煩惱を斷じ盡くした境地。二乗の最高の階位)を求めそれにとどまつてしまふのですが、菩薩は究極の佛陀の智慧を求めて修行するのであつて、二乗と同じでないことを説き明してゐます。八正道を行ずと雖も而も無量の佛道を行ずるを樂ふ。とは、二乗は八正道

(5) (さとりに達するための八種の道) を行じて八邪(八正道の對。邪見・邪思惟・邪語・邪業・邪命・邪精進・邪念・邪定) を斷ち切るのみですが、菩薩は佛の説かれた無量なる道を実踐すべく修行するのであつて、二乗と同じでないことを説き明してゐます。止觀助道の法を行はずと雖も而も畢竟じて寂滅に墮せず。の中の止とは「定」(心を統一して對象に集中する)であり、觀とは「慧」(正しい智慧を以て觀察する)であります。此の二つはさとりを得るための助けとなる勝れた修行法であります。止觀を行じ成就し得ても、衆生教化を先としますので、涅槃の境地に安住はしないことを説き明してゐます。諸法の不生不滅を行はずと雖も而も相好を以て其の身を莊嚴す。とは、二乗は一切の存在は實體の無い空であるとして觀じ、それらを捨離すべく修行するので現實の此の世に於て衆生を教化することができませんが、菩薩は空を觀じて衆生教化を先とするので現實の世の中を捨て去ることはない、即ち二乗とは同じでないことを説き明してゐます。聲聞・辟支佛の威儀を現すと雖も而も佛法を捨てず。(菩薩は、二乗の聲聞や緣覺と同じやうな立居ふるまひを現するけれども、而も衆生教化を先とする大乘の佛法を捨てることはない。)

諸法の究竟淨相に隨ふと雖も而も所應に隨ひて爲に其の身を現す。(菩薩は、一切の存在は究極に於ては淨らかな相であり、その究極に隨順するが故に姿かたちは無いのであるが、救ひを求める衆生のそれぞれに應じて教化のために此の世に姿を現はす。諸佛の國土の永寂・如空なるを觀すと雖も而も種種の清淨の佛土を現す。(菩薩は、諸佛の國土は絶対の寂滅であり空無であつて、そのありさまは表現できないことを觀じてゐても衆生教化のために此の世に種々の清淨な佛國土を現はし出す。)以上の此の三句は同じ内容を説いてゐます。經典を御覽なさい。佛道を得て法輪を轉じ涅槃に入ると雖も而も菩薩の道を捨てず。とは、菩薩は佛道を行じ成就し得ても、而も衆生教化のために此の世に於ける菩薩としての修行を捨てることはない、と言ふのであります。究極の佛陀のさとりに到達しても、而も此の世に於ける菩薩としての修行を捨てることはなく、と言ふのであります。究極の佛陀のさとりに到達しても、而も此の世に於ける菩薩の衆生教化を捨てないことを説き明してゐます。即ち最高至上の中道の行であることは明らかであります。

- (1) 四念處 三十七道品の中の修行法①身體は不淨である。②感受は苦である。③心は無常である。④すべての事物は無我である。以上四つを心に思ひ浮べる修行。

- (2) 四正勤 三十七道品の中の修行法①既に生じた惡を除くべく勤める。②惡を生じないやうに勤める。③善を生ずるべく勤める。④

既に生じた善を増すやう勤める。

- (3) 四如意足 三十七道品の中の修行法の四神足に同じ。神は神通のことで妙用のはかり難いことをいふ。足とは因(よりどころ)で、禪定をさす。神通を起す因であるから神足といふ。①すぐれた瞑想を得ようと願ふ欲神足。②すぐれた瞑想を得ようと努力する勤神足。③心を修めてすぐれた瞑想を得ようとする心神足。④智慧をもつて思惟觀察してすぐれた瞑想を得ようとする觀神足。

- (4) 七覺分 三十七道品の中の修行法。さとりを得るための七種の修行。①教への中から眞實のものを選びとる擇法覺分。②一心に努力する精進覺分。③眞實の教へを實行する喜びに住する喜覺分。④身心をかるやかに快適にする輕安覺分。⑤對象へのとらはれを捨てる捨覺分。⑥心を集中して亂さない定覺分。⑦おもひを平らかにする念覺分。

- (5) 八正道 三十七道品の中の修行法。さとりに達するための八種の道。①四諦の道理を正しく見る正見。②四諦の道理を正しく思惟する正思惟。③正しい言葉を用ひる正語。④正しい行爲を爲す正業。⑤身口意の三業を清淨にして正しい理法に従つて生活する正命。⑥正道に努め勵む正精進。⑦正道を憶念し邪念を捨てる正念。⑧迷ひのないさとりの境地に入る正定。

(訓讀文)

生死しちうじに在あれども從より以下、第二だいにに諸ちゆうじゆうの中道ちゆうどうの行ぎやうを列れつす。

生死しちうじに在あれども汚おご行ぎやうを爲なさず。涅槃ねはんに住すまれども永ながく滅めつ度どせず。凡夫ぼんぶの行ぎやうに非あらず。賢聖けんじやうの行ぎやうに非あらず。垢行くぎやうに非あらず。

淨行じやうぎやうに非あらず。此この上かみの六句ろくくは皆偏みなへんじゆう住すませざることを明あかすなり。魔行まぎやうを過すぐと雖いへども而しかも降魔かうまを現げんす(經典きんげんは降伏衆衆かうふくしゆうしゆうヲ

現げん入にとは、現げんに生死しちうじを受けて魔まを降くだすことを明あかすなり。一切智いっさいちを求めて非時ひじの求め無なしとは、二乘にじやうの中ちゆう間の證果しやうくわを

非時ひじと爲なす。亦また云いはく。化物けもつ未まだ竟をばらざるに自みづから圓果えんかを證しやうするを非時ひじの求めと名なづくるなりと。諸法しよほうの不生ふしやうを觀かんすと

雖いへども而しかも正位しやういに入いらず。十二緣起じふにえんきを觀かんすと雖いへども而しかも諸ちゆうの邪見じやけんに入いる。此この句くは諸法しよほう即しやうち空くうなりと觀かんすと雖いへども、偏ひと

へに空くうを證しやうして而しかも住すまらず、亦また能よく有なくの中に物ものを化けするを明あかすなり。一切衆生いっさいしゆうじやうを攝しやくすと雖いへども而しかも愛著あいぢやくせず。とは、凡夫ぼんぶに同おなじからざるを明あかすなり。遠離おんりを樂ねがふと雖いへども而しかも身心しんじんの盡つくるに依よらず。とは、二乘にじやうに同おなじからざるを明あかすな

離を樂ふとは、煩惱を離るるを謂ふなり。三界を行ずと雖も而も法性を壞せず。とは、空を棄てざるを明すなり。空を行ずと雖も而も衆の徳本を植ゆ。無相を行ずと雖も而も衆生を度す。無作を行ずと雖も而も受身を現す。無起を行ずと雖も一切の善行を起す。(經典は一切ノ善行)。此の四句は皆同一の意なり。見つ可し。亦二乗と凡夫との偏なるに同じからざるを明すなり。六波羅蜜を行ずと雖も而も衆生の心・心數の法を知る。とは、六度は是れ無相の行なり。而も遍く衆生の心數の法を知るなり。二乗は第六の波若度を得と雖も、而も有を觀じて物を化する能はざるなり。六通を行ずと雖も而も漏を盡さず。是れ菩薩の行なり。四無量心を行ずと雖も而も梵世に生ずること貪著せず。禪定・解脱・三昧を行ずと雖も而も禪に隨ひて生ぜず。六通を行ずと雖も而も漏を盡さず。是れ菩薩の行なり。四無量心を行ずと雖も而も梵世に生ずることを貪著せず。禪定・解脱・三昧を行ずと雖も而も禪に隨ひて生ぜず。此の三句は凡夫に超えたることを明すなり。四念處を行ずと雖も而も永く身・受・心・法を離れず。四正勤を行ずと雖も而も身心の精進を捨てず。此の二句は二乗の四念・精勤を行じて唯身・心を滅するを求むるに同じからざるを明すなり。四如意足を行ずと雖も而も自在神通を得る。とは、二乗の四如意足を行ずるに同じと雖も、而も大乘の自在神通を得るを明すなり。五根を行ずと雖も而も衆生の諸根の利鈍を分別す。とは、五根は即ち空なるを能くすと雖も、亦能く諸根の利鈍を分別するを明すなり。二乗は己を知ると雖も而も他の根を知る能はざるなり。五力を行ずと雖も而も佛の十力を求むるを樂ふ。は、二乗の五力を行じて見諦に入るを求むるに同じからざるを明すなり。七覺分を行ずと雖も而も佛の智慧を分別す。(經典は七覺分)とは、二乗の七覺分を行じて唯阿羅漢果を求むるに同じからざるを明すなり。八正道を行ずと雖も而も無量の佛道を行ずるを樂ふ。とは、二乗の八正道を行じて八邪を止むるに同じからざるを明すなり。止觀助道の法を行ずと雖も而も畢竟して寂滅に墮せず。とは、止とは定なり。觀とは慧なり。此の二は助道の勝法なり。行ずと雖も而も涅槃に墮入せざるを明すなり。諸法の不生不滅を行ずと雖も而も相好を以て其の身を莊嚴す。とは、二乗の空を觀じて即ち有に在りて修行する

能はざるに同じからざるを明すなり。聲聞・辟支佛の威儀を現すと雖も而も佛法を捨てず。(菩薩は、二乗の聲聞や緣覺

と同じやうな立居るまひを現するけれども、而も衆生教化を先とする大乘の佛法を捨てることはない。)

諸法の究竟淨相に隨ふと雖も而も所應に隨ひて爲に其の身を現す。諸佛の國土の永寂・如空なるを觀すと雖も而も種種の清淨の佛土を現す。此の三句は即ち同じなり。見つ可し。佛道を得て法輪を轉じ涅槃に入ると雖も而も菩薩の道を捨てず。とは、菩薩は現に佛道を得ると雖も而も菩薩の行を捨てずと言ふなり。佛を得るも而も菩薩の行を捨てずと明す。即ち至中なること明らかし。

經典

在レドモニ於生死ニ一不レ爲サニ汚行ヲ一。住レドモニ於涅槃ニ一不レ永ク滅度セ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

非ズニ凡夫ノ行ニ一。非ズニ賢聖ノ行ニ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

非ズニ垢行ニ一。非ズニ淨行ニ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ過トニ魔行ヲ一而モ現ズニ降ト伏スコトヲ衆魔ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。求メテニ一切智ヲ一無シニ非時ノ求メ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ觀ストニ諸法ノ不生ヲ一而モ不レ入ラニ正位ニ一。是レ菩薩ノ行ナリ。雖モレ觀ストニ十二緣起ヲ一而モ入ルニ諸ノ邪見ニ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ攝ストニ一切ノ衆生ヲ一而モ不ニ愛著セ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ樂フトニ遠離ヲ一而モ不レ依ラニ身心ノ盡クルニ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ二界ヲ一而モ不レ壞セニ法性ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ於空ヲ一而モ植ユニ衆ノ徳本ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ無相ヲ一而モ度スニ衆生ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ無作ヲ一而モ現ズニ受身ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ無起ヲ一而モ起スニ一切ノ善行ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ六波羅蜜ヲ一而モ偏ク知ルニ衆生ノ心・心數ノ法ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ六通ヲ一而モ不レ盡サレ漏ヲ。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ四無量心ヲ一而モ不レ貪ヲ著セ生ズルコトヲ一於梵世ニ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ禪定・解脫・三昧ヲ一而モ不レ隨テ禪ニ生ゼ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ四念處ヲ一不レ畢竟シテ永ク離レニ身・受・心・法ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ四正勤ヲ一而モ不レ捨テニ身心ノ精進ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ四如意足ヲ一而モ得ルニ自在神通ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ五根ヲ一而モ分ケ別ス衆生ノ諸根ノ利鈍ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ五力ヲ一而モ樂フレ求ムルヲニ佛ノ十力ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ七覺分ヲ一而モ分ケ別ス佛ノ智慧ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ八正道ヲ一而モ樂フレ行ズルヲニ無量ノ佛道ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ止觀助道之法ヲ一。而モ不レ畢竟シテ墮セニ於寂滅ニ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ行ストニ諸法ノ不生不滅ヲ一而モ以テニ相好ヲ一莊ヲ嚴ス其ノ身ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ現ストニ聲聞、辟支佛ノ威儀ヲ一而モ不レ捨テニ佛法ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ隨フトニ諸法ノ究竟淨相ニ一而モ隨テニ所應ニ一爲ニ現ズニ其ノ身ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ觀ストニ諸佛ノ國土ノ永寂・如レ空ヲ而モ現ズニ種種ノ清淨ノ佛土ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

雖モレ得テニ佛道ヲ一轉ジニ干法輪ヲ一入ルト於涅槃ニ一而モ不レ捨テニ於菩薩之道ヲ一。是レ菩薩ノ行ナリ。

經典訓讀文

生死しやうじに在あれども汚おご行ぎやうを爲なさず、涅槃ねはんに住とどまれども永ながく滅めつ度どせず。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。
 凡夫ぼんぷの行ぎやうに非あらず、賢聖けんじやうの行ぎやうに非あらず。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

垢行くぎやうに非あらず、淨行じやうぎやうに非あらず。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

魔行まぎやうを過すぐと雖いへども而しかも衆魔しゆまを降伏かうふくすることを現げんず。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

一切智いっさいちを求もとめて非時ひじの求もとめ無なし。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

諸法しよほうの不生ふしやうを觀かんずと雖いへども而しかも正位しやうゐに入いらず。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

十二緣起じふにゑんぎを觀かんずと雖いへども而しかも諸もろもろの邪見じやけんに入いる。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

一切いっさいの衆生しゆじやうを攝しやうすと雖いへども而しかも愛著あいぢやくせず。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

遠離おんりを樂ねがふと雖いへども而しかも身心しんじんの盡つくるに依よらず。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

三界さんがいを行ぎやうずと雖いへども而しかも法性ほつしやうを壞えせず。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

空くうを行ぎやうずと雖いへども而しかも衆しゆの徳本とくほんを植うゆ。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

無相むさうを行ぎやうずと雖いへども而しかも衆生しゆじやうを度どす。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

無作むさを行ぎやうずと雖いへども而しかも受身じゆしんを現げんず。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

無起むきを行ぎやうずと雖いへども而しかも一切いっさいの善行ぜんぎやうを起おこす。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

六波羅蜜ろくはらみつを行ぎやうずと雖いへども而しかも偏あまねく衆生しゆじやうの心しん・心數しんじゆの法ほうを知しる。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

六通ろくつうを行ぎやうずと雖いへども而しかも漏あつを盡つくさず。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

四無量心しむりやうしんを行ぎやうずと雖いへども而しかも梵世ぼんせに生しやうずることを貪著とんじやくせず。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

禪定ぜんぢやう・解脫げだつ・三昧さんまいを行ぎやうずと雖いへども而しかも禪ぜんに隨したがひて生しやうぜず。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

四念處しねんじよを行ぎやうずと雖いへども畢竟ひつぎやうじて永ながく身しん・受じゆ・心しん・法ほうを離はなれず。是これ菩薩ぼさつの行ぎやうなり。

四正勤を行はずと雖も而も身心の精進を捨てず。是れ菩薩の行なり。

四如意足を行はずと雖も而も自在神通を得る。是れ菩薩の行なり。

五根を行はずと雖も而も衆生の諸根の利鈍を分別す。是れ菩薩の行なり。

五力を行はずと雖も而も佛の十力を求むるを樂ふ。是れ菩薩の行なり。

七覺分を行はずと雖も而も佛の智慧を分別す。是れ菩薩の行なり。

八正道を行はずと雖も而も無量の佛道を行ずるを樂ふ。是れ菩薩の行なり。

止觀助道の法を行はずと雖も而も畢竟して寂滅に墮せず。是れ菩薩の行なり。

諸法の不生不滅を行はずと雖も而も相好を以て其の身を莊嚴す。是れ菩薩の行なり。

聲聞、辟支佛の威儀を現すと雖も而も佛法を捨てず。是れ菩薩の行なり。

諸法の究竟淨相に隨ふと雖も而も所應に隨つて爲に其の身を現す。是れ菩薩の行なり。

諸佛の國土の永寂・如空なるを觀ずと雖も而も種種の清淨の佛土を現す。是れ菩薩の行なり。

佛道を得て法輪を轉じ涅槃に入ると雖も而も菩薩の道を捨てず。是れ菩薩の行なり。

經典現代語譯

(維摩居士は中道の行を列舉します。)

「迷ひある此の世に所在してゐても汚れた行ひを爲すことはないし、無常絶對のさとり境地にあつても、衆生教化のため、そのさとり境地に安住することもない。これが菩薩の實踐すべき中道の行です。」

「欲望のままの凡夫の行ひに愛著することもないし、さりとして賢聖の行ひに執著することもない。これが菩薩の行です。」

「不淨な行ひに愛著することもないし、さりとして淨らかな行ひに執著することもない。これが菩薩の行です。」

「諸々の悪魔が爲す善行の妨げを既に超克してゐるけれども、而も衆生濟度のために此の世に姿を現はして諸々の悪魔を降伏せしめる。これが菩薩の行です。」

「すべてを知り盡してゐる如来の智慧を求めて修行し、二乗の人が得てゐる中間の證りの境地に満足することはない。これが菩薩の行です。」

「一切の現象は生ずることも無く滅することも無い、即ち空であることを證つてゐても、而もさとの境地にとどまることなく此の世に姿を現はして衆生を教化濟度する。これが菩薩の行です。」

「十二縁起（十二因縁に同じ。人生を無明から老死まで十二分類して説く。）を證つてゐても、而も諸々の邪見をもつ衆生の中に姿を現はして教化濟度する。これが菩薩の行です。」

「四攝法（布施・愛語・利行・同事）を以て一切衆生を救ひとるが、さりとて衆生に對して愛著心を以てとらはれることも無い。これが菩薩の行です。」

「煩惱の惑ひから超離することを願ひ修行するけれども、而も身體と心のはたらきを滅し盡すことに依つてそれに到達しようとはしない。これが菩薩の行です。」

「迷ひある此の三界の世に姿を現はして衆生教化を行ずるけれども、而も一切の現象は空であるといふ眞理を把持してゐてこれを捨てることはない。これが菩薩の行です。」

「一切の現象は固定的實體の無い空であるといふ眞理を證り行ずるけれども、而も衆生にさとの果をもたらず空なる善根を植ゑつけ教化する。これが菩薩の行です。」

「無相（差別の相を超離する）を證り行ずるけれども、而も差別の相ある衆生を教化濟度する。これが菩薩の行です。」

「無作（一切の作爲、はからひが無い）を證り行ずるけれども、而も衆生教化のために此の迷ひの世界に姿を現はすといふ作爲を爲す。これが菩薩の行です。」

「無起（もの事の本質は空であり、生起することは無い）を證り行ずるけれども、而も衆生教化のために一切の善行を生起する。これが菩薩の行です。」

「差別の相を超離した六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六度の行）を證り行ずるけれども、而も差別の相ある衆生の心及

び心のはたらきを知って教化する。これが菩薩の行です。」

「六通（六種の神通力。解説二四二頁）を證り行ずる、即ち煩惱を断じ盡してゐるけれども而も衆生と煩惱を同じくしてこれを教化する。これが菩薩の行です。」

「慈・悲・喜・捨の四無量心を證り行ずるけれども、而も衆生教化を先とするので、欲望を捨離した梵天の世界に安住することに執著は無い。これが菩薩の行です。」

「瞑想して身心を統一する禪定・八種の解脱の修行・三昧（空・無相・無作）を證り行ずるけれども、而も衆生教化を先とするので、修行の結果得た法悦の境地にとどまることはない。これが菩薩の行です。」

「四念處（身體は不淨、感受は苦、心は無常、萬物は無我、の觀想法）を行じ成就し得ても、而も究極に於ては身體・感受作用・心のはたらき・萬物を不淨、無常などとして捨て去ることはしない。これが菩薩の行です。」

「四正勤（惡を除くべく、惡を生じないやう、善を生ずるべく、善を増すべく勤める）を行じ成就し得ても、而も身心の精進を怠ることはない。これが菩薩の行です。」

「四如意足（自在力を得るための四種の修行法）を行じ成就し得ても、而も衆生教化を先とする大乘の自在力、神通力を得る。これが菩薩の行です。」

「五根（信・精進・念・定・慧の五根）を行じて五根は空であることを悟つてゐても、而も衆生の五根の利鈍を分別して衆生教化を爲す。これが菩薩の行です。」

「五力（信・精進・念・定・慧の五力）を行じ成就し得ても、而も佛陀のさとりである究極の十種の力を得んことを求め願つて修行する。これが菩薩の行です。」

「七覺分（さとりを得るための七種の修行）を行じ成就し得ても、而も佛陀の説かれた無量なる道を実践すべく修行する。これが菩薩の行です。」

「八正道（さとりに達するため八種の道の修行）を行じ成就し得ても、而も佛陀の説かれた無量なる道を実践すべく修行する。これが

菩薩の行です。」

「さとりを得るための助けとなる止観（心を統一して対象に集中し、正しい智慧を以て觀察する）を行じ成就し得ても、而も究極に於ては衆生教化を先とするので、涅槃の境地に安住することはない。これが菩薩の行です。」

「此の世の一切の存在は不生不滅であつて人間の認識を超えてゐる、即ち空であることを證り行ずるけれども、而も衆生教化のために身に具つてゐるすぐれた相好を以てその身を美しく飾る。これが菩薩の行です。」

「菩薩は、二乗の聲聞や辟支佛と同じやうな立居ふるまひを現するけれども、而も衆生教化を先とする大乘の佛法を捨て去ることはない。これが菩薩の行です。」

「一切の存在は究極に於ては淨らかな相であり、菩薩はその究極に隨順するが故に姿かたちは無いのであるが、救ひを求める衆生のそれぞれに應じて此の世に姿を現はし教化濟度する。これが菩薩の行です。」

「諸佛の國土は絶対の寂滅であり空無であつて、菩薩はその國土のありさまは表現し得ないことを觀じてゐるけれども、而も此の世に種々の清淨な佛國土を現出して衆生を教化する。これが菩薩の行です。」

「佛道を修行して成就し得、佛陀の教へを世に傳へ廣め、涅槃の境地に到達しても、而も衆生教化のために此の世に於ける菩薩としての修行を怠ることはない。これが菩薩が實踐すべき中道の行です。」

〔時の衆は益を得る〕（現代語譯）

文殊菩薩と維摩居士との問答を正しく説き明す中の第三に、説法を聞いた大勢の人たちは大きな利益を得ることを説き明してゐます。是の語を説く時から以下がこれでありませう。

（訓讀文）

是の法を説く時（經典は是ノ語）従り以下、正しく問疾を明す中の第三に、時の衆は益を得るを明すなり。

經典（時の衆は益を得る）

説クニ是ノ語ヲ一。時。文殊師利ノ所ノ將キル大衆。其ノ中ノ八千ノ天子。皆發シキニ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ一。

經典訓讀文

是の語を説く時、文殊師利の將ある所の大衆、其の中の八千の天子、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。

經典現代語譯

この説法を聞いた時、文殊菩薩が引きつれて來た大勢の人々、その中の八千人の天子は皆、阿耨多羅三藐三菩提心（無常絶對のさとりを求め、衆生を濟度しようとする願ふ心）を發した。

第六 不思議章

〔不思議章の名稱の由來〕（現代語譯）

此の經典の第六章は不思議章であります。

此の章は、菩薩が種々の不思議な事がらを説き明しますので、此の章の名稱を「不思議章」と名づけるのであります。此の章は上根（根機のすぐれてゐる人）を教化濟度する中の第二であつて、二乗には思議することのできない眞理を廣く説き明します。「廣く」とは、諸々の如來や菩薩が登場し、對象も種々の事がらを説き明します。即ち前章の文殊問疾章を釋き明した通りであります。

（訓讀文）

不思議章第六なり。

此の章は菩薩種種不思議の事を明すが故に、因りて章の目と爲す。此は是れ上根を化する中の第二に、廣く不思議を明すなり。廣くの義は即ち上に釋するが如し。

〔不思議章の科段分け〕（現代語譯）

此の不思議章について全體を大きく六つの項目に分けます。

第一に、初めから當に何を於てか坐すべきやに訖るまでは、佛弟子舍利弗が維摩居士の方丈が空つぽであるのを見て、我々は何に坐ればいいのだらうかと疑念を抱くことを説き明してゐます。

第二に、其の意を知りてから以下、五百の天子、法眼淨を得たりに訖るまでは、佛弟子舍利弗が「法を求めるために参りました」と答へたことについて、求めるといふことは即ち執著してゐるのだと彈呵し、「一切について求めてはならない、即ち

執 著心を捨てなさい」といふことを説き明してゐます。

第三に、文殊、仁者から以下、便ち獅子座に坐する得たりに訖るまでは、須彌燈王如來から獅子座を借りてきて、それによつて參會者の求めに應じたことを説き明してゐます。

第四に、舍利弗の言はく。居士、未曾有なりから以下、劫を窮むとも盡きざらんに訖るまでは、小室の方丈に三萬二千の獅子座を容れたことを佛弟子舍利弗が讚嘆することに因つて、維摩居士は説き聞かせます。諸佛菩薩は不思議な權實二智（權智は教化のための手段をめぐらす智慧、實智は眞理に通じた智慧）があつて、此の世に種々の不可思議なありさまを現出して衆生教化をなすことを説き明してゐます。

第五に、是の時に、大迦葉から以下、三萬二千の天子、菩提心を發しきに訖るまでは、維摩居士の説法を讚嘆して迦葉尊者は、自分のさとの境地をはるかに超えてゐると己の至らざることを憂へなげき、新たに、佛道を學ぶ菩薩たちに菩提心（さとりを求めて修行し、衆生を教化濟度する）を發すやう勸めることを説き明してゐます。

第六に、維摩詰、大迦葉に語りから以下、此の章の訖りまでは、上述の迦葉尊者の讚嘆について、維摩居士は更に説法してその讚嘆は眞實であることを成立せしめます。

此の六項目は皆、維摩居士が方丈の居室を空つぽにすることに因つて五つの事がらと説法とが生じます、その中の第三であります。

(訓讀文)

此の章に就きて大いに開きて六と爲す。

第一に初めから當に何を於てか坐すべきやに訖るまでは、身子の坐を念ふことを明す。

第二に其の意を知りて従り以下、五百の天子、法眼淨を得たりに訖るまでは、身子の求め有るを譏りて仍りて求め無きを明すなり。

第三に文殊、仁者従り以下、便ち獅子座に坐する得たりに訖るまでは、座を燈王に借りて、以て求むる所に應ずる

を明あかすなり。

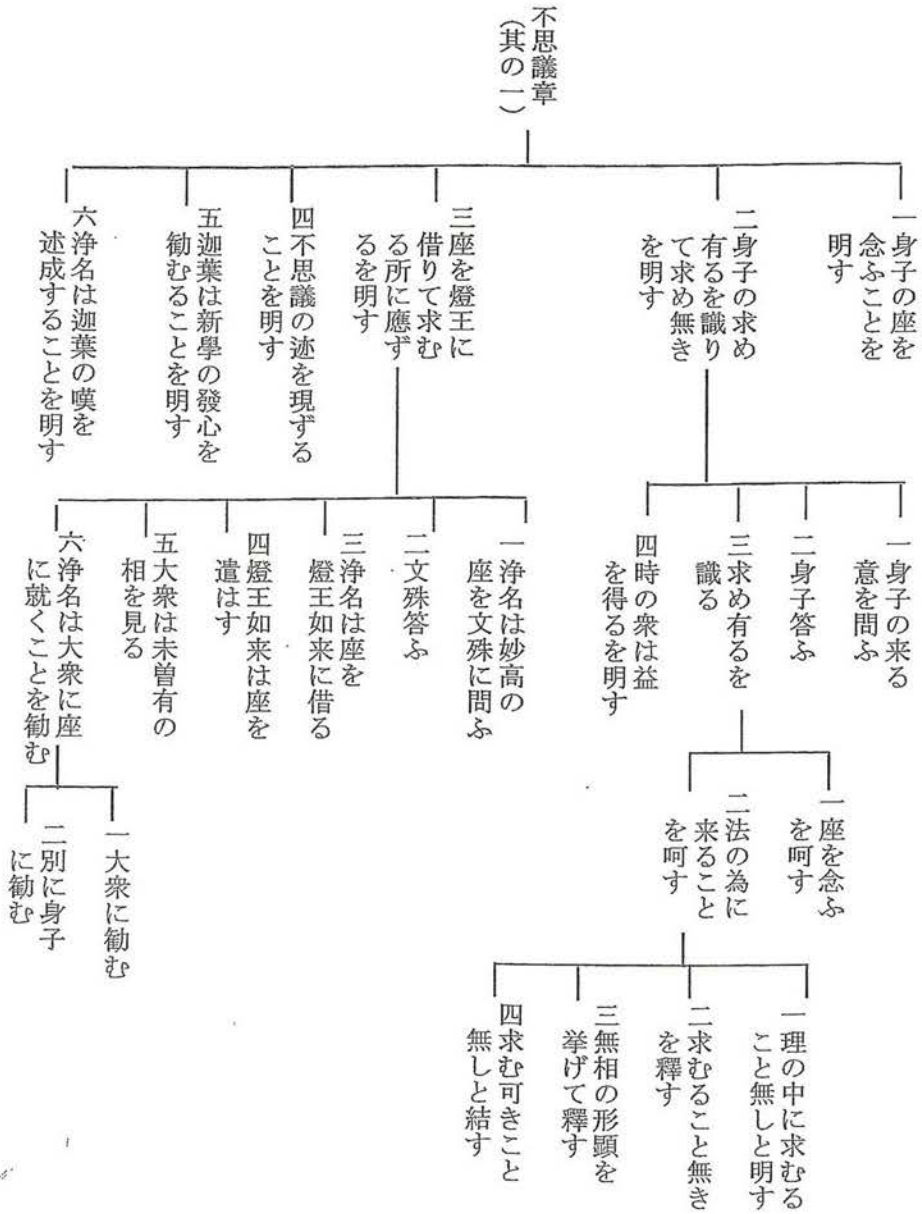
第四だいしに、舍利弗しやりぼつの言いはく。居士こじ、未會みぞう有あり従より以下いげ、劫こうを窮きはむとも盡つきざらんをに訖をるまでは、身子しんしの嘆たんに因よりて、廣ひろ

く諸佛しよぶつ菩薩ぼさつに不思議ふしぎの權實こんじつ二智にち有ありて、能よく不思議ふしぎの迹しやくを現げんずるを明あかすことを明あかす

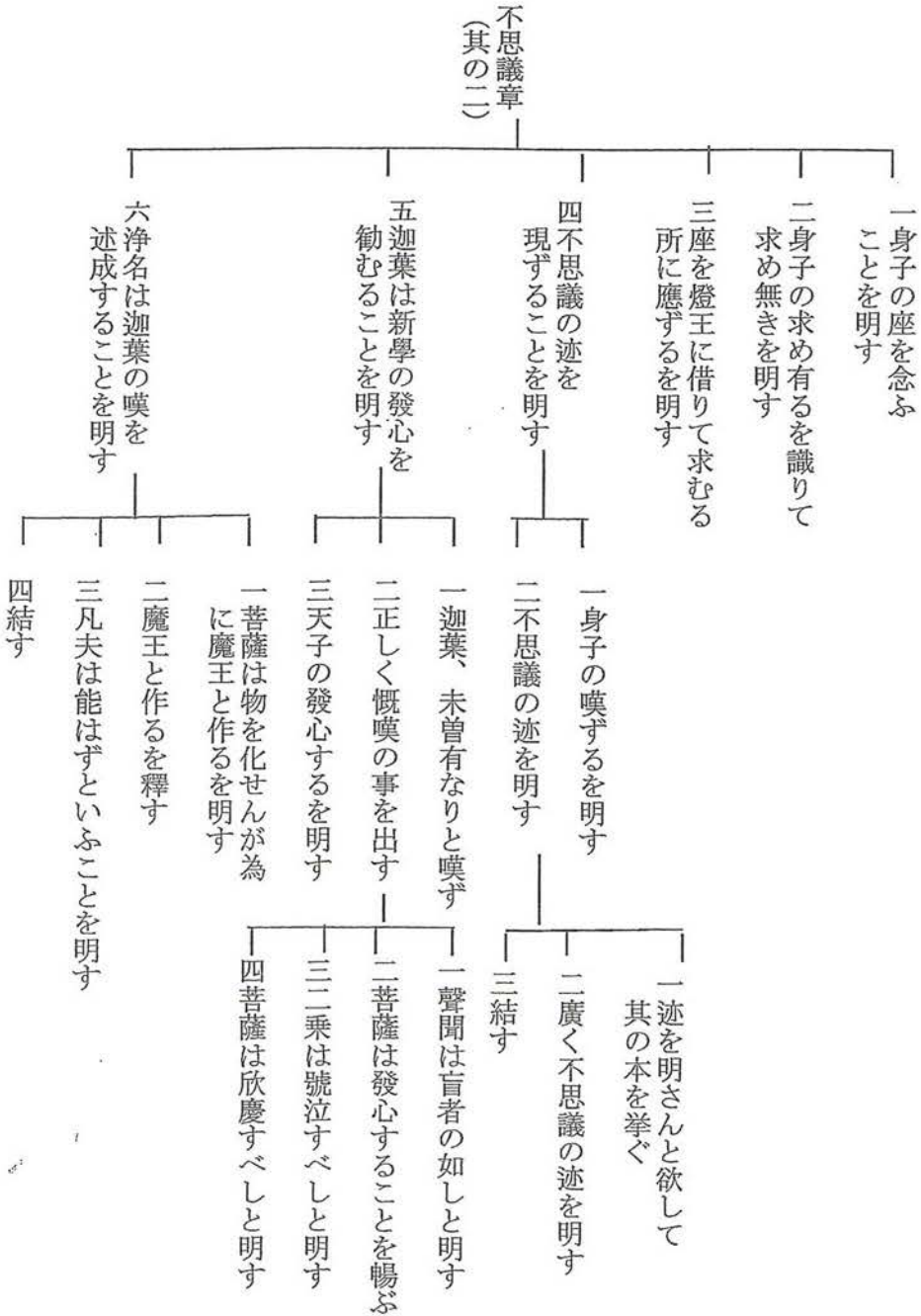
第五だいいに是この時ときに、大迦葉だいかしやうから以下いげ、三萬二千さんまんにせんの天子てんし、菩提心ぼだいしんを發おこしき訖をるまでは、迦葉かしよう自らみづか分ぶんを絶ぜつすと慨嘆がいたんして新しん

學がくの發心ほつしんを勸すすむるを明あかす。
第六だいろくに維摩詰ゆいまきつ、大迦葉だいかしやうに語かたらく従より以下いげ、章しやうを訖をるまでは、淨名じやうみやうは迦葉かしやうの上かみの嘆たんを述じゆつ成じやうす。

此この六重ろくじゆうは皆みな是これ空室くうしつに因よりて五論ごろんを生しやうずる中なかの第二だいさんの論ろんなり。



〔身子の座を念ふことを明す〕（現代語譯）



不思議章の第一は、佛弟子舍利弗が維摩居士の方丈が空つぽであるのを見て、我々は何に坐ればいいのだらうかと疑念を抱くのでありますが、これは經典を御覽なさい。

(訓讀文)

第一の坐を念ふは見つ可し。

經典 (身子の坐を念ふことを明す)

彌ノ時。舍利弗。見テニ此ノ室ノ中ニ無キヲ有ルコトニ牀座ニ。作サクニ是ノ念ヲ一。斯ノ諸ノ菩薩・大弟子衆ハ當ニ於テカレ何ニ坐ス一。

經典訓讀文

彌の時に、舍利弗、此の室の中に牀座有ること無きを見て。是の念ひを作さく。斯の諸の菩薩・大弟子衆は當に何に於てか坐すべきやと。

經典現代語譯

維摩居士の方丈に入つた時舍利弗は、此の室の中に座席が無いのを見て疑念を抱いた。「ここに集つてきた諸々の菩薩や世尊の大弟子たちは何に坐ればよいのであらうか。」と。

〔身子の求め有るを譏りて求め無きを明すの科段分け〕 (現代語譯)

不思議章の第二は維摩居士が舍利弗に對し、佛法を求めるといふことは即ち執著してゐるのだと彈呵し、「一切について求めてはならない、即ち執著心を捨てなさい。」と説き明すのですが、此の中自體を四つの項目に分けます。

第一に、維摩居士は如何なる意あつて此に來たのかを舍利弗に問ひます。「舍利弗さんよ、佛法を求めするために此に來たのですか。座席を求めるために來たのですか。」といふことを説き明してゐます。

第二に、舍利弗が答へます。「私は佛法を求めするために參りました。座席を求めるためではありません。」と。

第三に、維摩詰の言はくから以下は、座席を求める、佛法を求める、といふことは執著心ある故にと正しく彈呵します。
第四に、是の語を説く時から以下は、その説法を聞いた人々は利益を得たことを説き明してゐます。

(訓讀文)

第二の求め有るを譏る中に就きて自ら四有り。

第一に先づ身子が來る意を問ふ。云何が仁者、法の爲に來るや、牀座を求めんが爲なるやを明す。

第二に身子答ふ。我は法の爲に來る。牀座の爲には非ざるなりと。

第三に維摩詰の言く従り以下、正しく求め有るを誇る。

第四に此の法を説く時(經典は是の語)従り以下、益を得るを明す。

〔身子の來る意を問ふ・身子答ふ〕(現代語譯)

維摩居士が舍利弗に對し、求めるといふことは即ち執著してゐるのだと彈呵し、「一切について求めてはならない、即ち執著心を捨てなさい。」と説き明す中の第一は、維摩居士が如何なる意あつて此に來たのかを舍利弗に問ひ、第二は舍利弗が答へます。以上の二項目は經典を御覽なさい。

(訓讀文)

前の二は見つ可し。

經典(身子の來る意を問ふ)

長者維摩詰。知テニ其ノ意ヲ一語テニ舍利弗ニ一言ク。云何が仁者。爲ニ法ノ來ルヤ那。求ムルヤトニ牀座ヲ一那。

經典訓讀文

長者維摩詰、其の意を知りて舍利弗に語りて言はく。云何が仁者、法の爲に來るや。牀座を求むるやと。

經典現代語譯

維摩居士は、舍利弗が何に坐ればよいのかと心の中で思つたことを察知して舍利弗に問ひかけた。「舍利弗さんよ、佛法を求めるために此に來たのですか。座席を求めるために來たのですか。」と。

經典(身子答ふ)

舍利弗ノ言ク。我爲ニレ法ノ來ル。非ストレ爲ニハニ牀座ノ一。

經典訓讀文

舍利弗の言はく。我法の爲に來る。牀座の爲には非ずと。

經典現代語譯

舍利弗は答へて言ひました。「私は佛法を求めるために此に參りました。座席を求めるためではありません。」と。

〔求め有るを譏るの科段分け〕(現代語譯)

維摩居士が舍利弗に對し、求めるといふことは即ち執著してゐるのだと彈呵し、「一切について求めてはならない、即ち執著心を捨てなさい。」と説き明す中の第三は、舍利弗が座席を求める、佛法を求める、といふことは執著心ある故にと正しく彈呵しますが、この中についても亦二つの項目があります。

第一に、舍利弗が座席が欲しいと心の中で念つたことを彈呵します。

第二に、唯舍利弗、夫れ法を求むる者は、佛に著して求めずから以下は、舍利弗が佛法を求めるために來たことを彈呵します。

(訓讀文)

第三の正しく譏る中に就きて亦二有り。

第一に其の座を念ふを呵す。

第二に唯舍利弗。夫れ法を求むる者は、佛に著して求めず従り以下、己れ法の爲に來ることを呵す。

〔坐を念ふを呵す〕（現代語譯）

（舍利弗が座席を求める、佛法を求める、といふことは執著心ある故にと彈呵しますが、その中の第一は、舍利弗が座席を欲し
いと心の中で念つたことを彈呵します。）

唯舍利弗、夫れ法を求むる者は、軀命を貪らず。何に況んや牀座をやとは、そもそも佛法を求める者は、身命を投げ捨てる覺悟を決定し、而して佛法を求むべきであります。舍利弗は既に「佛法を求める爲に參りました」と言つてゐるのでありますから、それは身命を捨てる覺悟を決めてゐるのであつて、座席を求める念ひを起すなど以ての外、といふことを説き明してゐます。且舍利弗の身體を構成してゐる五陰（①色、身體といふ物質②受、感受作用③想、表象作用④行、意志や衝動的欲求の心作用⑤識、認識作用）。十二入（六根と六境。①眼と色や形②耳と音聲③鼻と香りと嗅覺④舌と味⑤皮膚と觸れられるもの⑥心と考へられるもの）。十八界（六根と六境と六識。①眼と色や形と視覺②耳と音聲と聽覺③鼻と香りと嗅覺④舌と味と味覺⑤皮膚と觸れられるものと觸覺⑥心と考へられるものと心の識別作用）及び三界（欲界・色界・無色界）とは全て固定的實體の無い空であります。その空なる身體の何を安らかにしようとして座席を求めるのか、と彈呵するのであります。

（訓讀文）

唯舍利弗、夫れ法を求むる者は、軀命を貪らず。何に況んや牀座をやとは、夫れ法を求むる者は身命を致して而して求むべし。汝は既に法の爲に來ると言へば、豈坐を求むべけんやと明すなり。且つ汝が五陰・十二入・十八界及び三界は皆空なり。將に何れの身を安んぜんとして此の坐を求むるや。

經典（坐を念ふを呵す）

不思議章 維摩詰ノ言ク。唯舍利弗。夫レ求ムルレ法ヲ者ハ。不レ貪ニ軀命ヲ。何ニ況ヤ牀座ヲヤ。夫レ求ムルレ法ヲ者ハ。非ズレ有ルニ色・受・想・行・

識之求メ。非ズレ有ルニ界・入之求メ。非ズレ有ルニ欲・色・無色ノ之求メ。

經典訓讀文

維摩詰の言はく。唯舍利弗、夫れ法を求むる者は、軀命を貪らず。何に況んや牀座をや。夫れ法を求むる者は、色・受・想・行・識の求め有るに非ず。界・入の求め有るに非ず。欲・色・無色の求め有るに非ず。

經典現代語譯

維摩居士は言ひました。「おい舍利弗さんよ、そもそも佛法を求める者は身命を投げ捨てることを厭はないのです。ですから座席を求める念ひを起すなど以ての外のことです。そもそも佛法を求める者は、身體といふ物質・感受作用・表象作用・意志や衝動的欲求の心作用・認識作用の五陰の煩ひを断ち切ることを求めてはなりません。十八界（眼・耳・鼻・舌・身・意の六根と六境）・十二入（六根と六境）の煩ひを断ち切ることを求めてはなりません。欲界・色界・無色界の三界の惑ひを断ち切ることを求めてはなりません。」

〔法の爲に来ることを呵すの科段分け〕（現代語譯）

舍利弗が座席を求める、佛法を求める、といふことは執著心ある故にと彈呵しますが、その中の第二は、舍利弗が佛法を求めるために来たことを彈呵します。その中に就いてそれ自體に四つの項目があります。

第一に、究極の道理に於ては執著心を捨てなければ、佛法を求めることはできないことを説き明します。

第二に、所以は何んから以下は、執著心を捨てなければ佛法を求めることができない理由を釋き明します。

第三に、法をば寂滅と名づくから以下は、佛法には差別の相が無いことについて種々の形を顯らかに示して、執著心を捨てなければ佛法を求めることができない理由を釋き明します。

第四に、是の故にから以下は、佛法は執著心を以ては求める可きではないといふ結びの文言であります。

（訓讀文）

第二の己法の爲に來るを呵する中に就きて、自ら四有り。

第一に正しく理の中には求むること無しと明す。

第二に所以は何ん従り以下、求むること無きを釋す。

第三に法をば寂滅と名づく従り以下、無相の形顯を擧げて釋す。

第四に是の故に従り以下、求む可きこと無しと結す。

〔理の中には求むること無しと明す〕（現代語譯）

（舍利弗が佛法を求めするために來たことを彈呵する中の第一は、究極の道理に於ては執著心を捨てなければ、佛法を求めることができないことを説き明します。）

そもそも佛法の究極の眞理を求めめる者は三寶（佛・法・僧）に執著することなく、亦四諦（①苦諦。この世は苦であるといふ眞理②集諦。苦の原因は煩惱・妄執であるといふ眞理③滅諦。無常のこの世を超え、執着を斷つことが苦を滅したさどりの境地であるといふ眞理④道諦。さどりの境地に至るためには正しい修行實踐するといふ眞理）の理を究め盡すことなく、と經典で述べてゐるのは、究極の道理に於ては一切が絶對平等であつて何らの區別もありませんから、三寶を依りどころとする必要もなく、亦四諦の理を觀察する必要も無い、といふことを説き明してゐます。

（訓讀文）

夫れ法を求むる者は三寶に著せず、亦四諦に就かずとは、理の中には三寶として依る可き無く、四諦として觀ず可き無しと明すなり。

不思議章 經典（理の中には求むること無しと明す）

唯舍利弗。夫レ求ムルレ法ヲ者ハ。不ニ著シテレ佛ニ求メ。不ニ著シテレ法ニ求メ。不ニ著シテレ衆ニ求メ。夫レ求ムルレ法ヲ者ハ。無クニ見ル

ノ、苦ヲ求メ。無クニ斷ズルノ、集ヲ求メ。無シテ造スコトニ盡ラレ證シ修スルノ、道ヲ之求メラ。

經典訓讀文

唯舍利弗、夫れ法を求むる者は、佛に著して求めず。法に著して求めず、衆に著して求めず。夫れ法を求むる者は、苦を見るの求め無く、集を斷ずるの求め無く、盡を證し道を修するの求めを造すこと無し。

經典現代語譯

維摩居士は言ひました。「おい舍利弗さんよ、究極の道理に於ては一切が絶対平等で何らの區別もありませんから、佛法の究極の眞理を求める者は、佛實に執著することなく、法實に執著することなく、僧實に執著することなく求めめるのです。同様に、苦を滅しようとすることなく、煩惱を斷じようとすることなく、涅槃を證らうとすることなく、正道を修行實踐しようとすることなく、何らの執著欲望もなく佛法の眞理を求めるのです。」

〔求むること無きを釋す〕(現代語譯)

舍利弗が佛法を求めるために來たことを彈呵する中の第二は、執著心を捨てなければ、佛法は求めることができない理由を釋き明します。所以は何んから以下がこれでありませぬ。

(訓讀文)

所以は何ん從り以下、第二に釋す。

見つ可し。

經典(求むること無きを釋す)

所以は者何ン。法ハ無シニ戲論。若シ言フハニ我當ニ見レ苦ヲ斷ジレ集ヲ證シレ滅ヲ修ス。道ヲ。是レ則チ戲論ナリ。非ナリレ求ムルニレ法ヲ也。

不思議章

經典訓讀文

所以は者何ん。法は戲論無し。若し我當に苦を見集を斷じ滅を證し道を修すべしと言ふは、是れ則ち戲論なり。法を求むるに非ざるなり。

經典現代語譯

維摩居士は言ひました。「執著心を捨てなければ佛法の究極の眞理を求めることができない理由を述べませう。佛法には戲論(執著心、妄分別から起る言論)はありません。若し、苦を滅すべきである、煩惱を斷ずべきである、涅槃を證るべきである、正道を修行實踐すべきである、と言ふのであれば、それは苦・煩惱・涅槃・正道に執著してゐる戲論なのです。それでは眞に佛法を求めることにはなりません。」

〔無相の形顯を擧げて釋す〕(現代語譯)

舍利弗が佛法を求めるために來たことを彈呵する中の第二は、佛法には差別の相が無いことについて種々の形を顯らかに示して、執著心を捨てなければ佛法を求めることができない理由を釋き明します。

(訓讀文)

第三に形顯して釋す。

經典(無相の形顯を擧げて釋す)

唯舍利弗。法ヲバ名ツクニ寂滅ト一。若シ行ズレバニ生滅ニ一。是レ求ムルナリニ生滅ヲ一。非ナリレ求ムルニ法ヲ也。法ヲバ名ツクニ無染ト一。若シ染セバニ於法乃至涅槃ニ一。是レ則チ染著ナリ。非ナリレ求ムルニ法ヲ也。法ハ無シニ行處一。若シ行ゼバニ於法ヲ一。是レ則チ行處ナリ。非ナリレ求ムルニ法ヲ也。法ハ無シニ取捨一。若シ取ヲ捨セバ法ヲ一。是レ則チ取捨ナリ。非ナリレ求ムルニ法ヲ也。法ニハ無シニ處所一。若シ著セバニ處所ニ一。是レ則チ著スレ處ニ。非ナリレ求ムルニ法ヲ也。法ヲバ名ツクニ無相ト一。若シ隨テレ相ニ識ラバ。是レ則チ求ムルナリレ相ヲ。非ナリレ求ム

ルニ法ヲ也。法ハ不レ可ラレ住ス。若シ住セバニ於法ニ。是レ則チ住スルナリ。法ニ。非ナリ。求ムルニ。法ヲ也。法ハ不レ可ラレ見・聞・覺・知ス。若シ行ゼバニ見・聞・覺・知ニ。是レ則チ見・聞・覺・知ナリ。非ナリ。求ムルニ。法ヲ也。法ヲバ名ツクニ無爲ト。若シ行ゼバニ有爲ニ。是レ求ムルナリニ有爲ヲ。非ナリ。求ムルニ。法ヲ也。

經典訓讀文

唯舍利弗。法をば寂滅と名づく。若し生滅に行ずれば、是れ生滅を求むるなり。法を求むるに非ざるなり。法をば無染と名づく。若し法乃至涅槃に染せば、是れ則ち染著なり。法を求むるに非ざるなり。法は行處無し。若し法を行ぜば、是れ則ち行處なり。法を求むるに非ざるなり。法は取捨無し。若し法を取捨せば、是れ則ち取捨なり。法を求むるに非ざるなり。法には處所無し。若し處所に著せば、是れ則ち處に著す。法を求むるに非ざるなり。法をば無相と名づく。若し相に随つて識らば、是れ則ち相を求むるなり。法を求むるに非ざるなり。法は住する可からず。若し法に住せば、是れ則ち法に住するなり。法を求むるに非ざるなり。法は見・聞・覺・知す可からず。若し見・聞・覺・知に行ぜば、是れ則ち見・聞・覺・知なり。法を求むるに非ざるなり。法をば無爲と名づく。若し有爲に行ぜば、是れ有爲を求むるなり。法を求むるに非ざるなり。

經典現代語譯

維摩居士は言ひました。「おい舍利弗さん。究極の眞理である佛法を寂滅（寂靜にして一切の相を離れてゐる、生滅は無い）と名づけます。しかるに生滅ある此の身に執着して修行すれば、それは生滅ある佛法を求めることになり、眞の佛法を求めることにはなりません。佛法を無染（一切のとははれが無い）と名づけます。しかるに佛法あるいは涅槃にとらはれて佛法を求めるならば、それはとらはれのある佛法であつて、眞の佛法を求めることにはなりません。佛法は絶對のものであつて行處（對象の世界）はありません。若し相對世界の此の世に執着して佛法を求めるならば、それは相對世界の佛法であつて、眞の佛法を求めることにはなりません。佛法には取捨（善きを取り悪しきを捨てる）はありません。若し取捨の分別を以て佛法を求めるならば、それは取捨の分別ある佛法であつて、眞の佛法を求めることにはなりません。佛法には處所（存在する場）はありません。若し佛法の存在に執着して求めるならば、それは存在に執着する佛法であつて、眞の佛法を求めることにはなりません。佛法を無相（相が無い）と名づけます。若し佛法

の相を認識しようとするならば、それは相ある佛法であつて、眞の佛法を求めることにはなりません。佛法には安住することはできません。若し佛法に安住することを求めるならば、それは安住できる佛法であつて、眞の佛法を求めることにはなりません。佛法は見る、聞く、覺る、知る、ことはできません。若し佛法を見、聞、覺、知の對象として求めるならば、それは見、聞、覺、知のできる佛法であつて、眞の佛法を求めることにはなりません。佛法を無爲（因縁所生を超越してある）と名づけます。若し因縁所生の此の世に執著して佛法を求めるならば、それは因縁所生の佛法であつて、眞の佛法を求めることにはなりません。」

〔求む可きこと無しと結す〕（現代語譯）

舍利弗が佛法を求めるために來たことを彈呵する中の第四は、佛法は執著心を以ては求める可きでないといふ結びの文言であります。經典を御覽なさい。

若し法を求むる者は、一切の法に於て應に求むる所無かるべしとは、唯一切の執著心、欲望を捨て去つて佛法を求めるならば、それこそ眞實にすぐれた佛法を求める修行のあり方だと名づけることができる、といふことを説き明してゐます。

（訓讀文）

第四に結す。見つ可し。

若し法を求むる者は、一切の法に於て應に求むる所無かるべしとは、唯應に求むる無きを以て求むることを爲さば乃ち眞に好き求法と名づくべしと明すなり。

經典（求む可きこと無しと結す）

是ノ故ニ舍利弗。若シ求ムルレ法ヲ者ハ。於テニ一切ノ法ニ一應ニ無カルレ所レ求ムル。

經典訓讀文

不思議章
是の故に舍利弗。若し法を求むる者は、一切の法に於て應に求むる所無かるべし。

經典現代語譯

維摩居士は言ひました。「舍利弗さん、以上述べた通りです。ですから佛法を求める者は、一切の眞理についてそれを求めようと
いふ執著心、欲望を起してはならないのです。」

〔時の衆は益を得るを明す〕（現代語譯）

維摩居士が舍利弗に對し、求めるといふことは即ち執著してゐるのだと彈呵し、「一切について求めてはならない、即ち執著心を
捨てなさい。」と説き明す中の第四は、維摩居士の説法を聞いた人々は利益を得たことを説き明します。是の語を説く時から以下が
これでありませう。

（訓讀文）訓讀文

是の語を説く時從り以下、其の求め有るを譏る中の第四に、時の衆は益を得るを明すなり。

經典（時の衆は益を得るを明す）

説クニ是ノ語ヲ一時。五百ノ天子。於テ諸法ノ中ニ得タリニ法眼淨ヲ一。

經典訓讀文

是の語を説く時、五百の天子、諸法の中に於て法眼淨を得たり。

經典現代語譯

維摩居士が以上の説法をした時、その會座にゐた五百人の天子は、諸々のさとりの中の法眼淨（眞理を正しく見る淨らかな眼）を
得ることができた。

〔座を燈王に借りて求むる所に應ずるを明すの科段分け〕（現代語譯）

爾そのときに長者維摩詰ちやうじやゆいまきつから以下は、此の不思議品の全體を六つの項目に大きく分けましたが、その第三に維摩居士は、須彌燈王しゆみとうおう如來から獅子座を借りてきて、それによつて參會者の求めに應じた、即ち參會者に座席を與へたことを説き明してゐます。その中を六項目に分けます。

〔訓讀文〕

爾そのときに長者維摩詰ちやうじやゆいまきつ從り以下、六の六段の中の第三に、座を燈王とうおうに借りて以て須もとむる所に應おうずるを明あかすなり。中なかに就つきて即すまはち六有ろくあり。

〔淨名は妙高の座を文殊に問ふ〕（現代語譯）

維摩居士は、須彌燈王如來から獅子座を借りてきて參會者の求めに應じたことを説き明す中の第一に、維摩居士は何れの處に高くすぐれ座席があるだらうかと文殊菩薩に質問しますが、そのことを説き明してゐます。然しながら與へるべき座席の所在を客人に質問するのは筋違ひのやうに思ひますが、その理由は次の通りであります。文殊菩薩は廣く衆生を教化濟度することは限りなく、從つて如何なる處へも行つてゐないといふことはありません。ですから必ず高くすぐれた座席の所在する處を知つてゐるにちがひありません。かつ座席を求めてゐるのは本來客人であり、その客人の心が満足するやうにと維摩居士は欲するのであります。それ故に逆ではありまするが客人の文殊菩薩に座席の所在を質問するのであります。

〔訓讀文〕

第一に淨名じやうみやうは文殊もんじゆに何れの處ところにか妙高みよたうの座有ざあるやと問とふを明あかす。然るに客きやくに問とふ所以ゆゑんは、文殊もんじゆは廣く化けすること無む方ほうなり。即ち所ところとして致いたらざる無なし。必かならず妙高みよたうの座有ざあるの處ところを知らん。且座かたざを求もとむるは本客ほんきやくに由よるなり。客きやくの情じやうの樂ねがふ所ところに從したがはんと欲ほつす。所以ゆゑんに反かへりて問とふなり。

經典（淨名は妙高の座を文殊に問ふ）

爾ノ時ニ長者維摩詰。問フニ文殊師利ニ。仁者遊ベリニ於無量千萬億阿僧祇ノ國ニ。何等ノ佛土ニカ有リヤトニ好キ上妙ノ功德成就セル獅子ノ座ニ。

經典訓讀文

爾そのときに長者ちやうじやゆいまきつ維摩詰もんじゆしり、文殊師利とに問ふ。仁者にんじや無量むりやうぜんまん千萬億阿僧祇あそぎの國くにに遊あそべり。何等なんらの佛土ぶつどにか好よき上妙じやうみやうの功德成就くどくじやうじゆせる獅子ししの座ざ有ありやと。

經典現代語譯

その時に維摩居士は、文殊菩薩に質問して言ひました。「貴方は衆生教化のために何億何千萬といふ數へきれない無量の諸佛の國に遊行なさいましたね。何れの佛の國に極めてすぐれた功德を成就してゐる獅子の座がございませうか。」と。

〔文殊答ふ〕〔現代語譯〕

維摩居士は、須彌燈王如來から獅子座を借りてきて參會者の求めに應じたことを説き明す中の第二に、文殊菩薩が獅子座の所在について答へることを説き明します。文殊の言はくから以下がこれでありませう。

（訓讀文）

第二に文殊の言はく従り以下、文殊の答へを明す。

經典（文殊答ふ）

文殊師利ノ言ク。居士。東方度リニ三十六恆河沙ノ國ラ一有リニ世界一。名ツクニ須彌相ト一。其ノ佛ヲ號スニ須彌燈王ト一。今現ニ在マヌレ彼佛ノ身ノ長ハ八萬四千由旬ナリ。其ノ獅子座ノ高サハ八萬四千由旬ニシテ嚴飾第一ナリト。

經典訓讀文

不思議章

文殊師利もんじゆしりの言いはく。居士こし、東方とうほう三十六恆河沙さんじゆろくごうがしやの國くにを度わたり世界せかい有り。須彌相しゆみそうと名なづく。其その佛ぶつを須彌燈王しゆみとうおうと號ごうす。今いま現げんに彼かに在ます。佛ぶつの身みの長たけは八萬四千由旬はちまんよんせんゆじゆんなり。其その獅子座ししざの高たかさは八萬四千由旬はちまんよんせんゆじゆんにして嚴飾ごんじきだい第一だいいちなりと。

經典現代語譯

文殊菩薩は答へて言ひました。「維摩居士さん、東方に向ひ三十六恆河沙の國（ガンジス河の砂の數ほど無數の國）を越えるところの一つの世界があり、須彌相と言ひます。その佛陀を須彌燈王如來と言ひ、現に彼の國に居られます。その如來の身の長は八萬四千由旬です。その獅子座の高さは八萬四千由旬で、莊嚴なること第一です。」と。（由旬 インドの距離の單位）

〔淨名は座を燈王如來に借る〕（現代語譯）

維摩居士は、須彌燈王如來から獅子座を借りてきて參會者の求めに應じたことを説き明す中の第三に、維摩居士は神通力を以て燈王如來から獅子座を借りることを説き明します。

維摩詰は神通力を現すから以下がこれでありす。

（訓讀文）

第三に維摩詰は神通力を現す從り以下、淨名は座を燈王に借るを明す。

經典（淨名は座を燈王如來に借る）

於テ是ニ長者維摩詰ハ現ズニ神通力ヲ一。

經典訓讀文

是に於て長者維摩詰は神通力を現す。

經典現代語譯

文殊菩薩の答へを聞いて維摩居士は、神通力を以て獅子座を燈王如來に請うた。

〔燈王如來は座を遣はす〕（現代語譯）

維摩居士は、須彌燈王如來から獅子座を借りてきて參會者の求めに應じたことを説き明す中の第四に、維摩居士の神通力の請ひに應じ、燈王如來は獅子座を方丈に送つてきたことを説き明します。即時に彼の佛はから以下がこれでありす。

（訓讀文）

第四に即時に彼の佛は從り以下、燈王佛は座を遣はすを明す。

經典（燈王如來は座を遣はす）

即時ニ彼ノ佛ハ遣シテニ三萬二千ノ獅子ノ之座ノ高廣ニシテ嚴淨ナルヲ。來ヲ入ス維摩詰ノ室ニ。

經典訓讀文

即時に彼の佛は三萬二千の獅子の座の高廣にして嚴淨なるを遣はして維摩詰の室に來入す。

經典現代語譯

維摩居士が請ふと即時に、燈王如來は高く廣く莊嚴清淨な三萬二千の獅子座を送つてきて、維摩居士の方丈の室の中に容れた。

〔大衆は未曾有の相を見る〕（現代語譯）

維摩居士は、須彌燈王如來から獅子座を借りてきて參會者の求めに應じたことを説き明す中の第五に、方丈に集つてきた大勢の人々は未曾有のありさまを見たことを述べます。諸の菩薩・大弟子から以下がこれでありす。

（訓讀文）

第五に諸の菩薩・大弟子從り以下、大衆は未曾有の相を見るを叙ぶ。

經典 (大衆は未會有の相を見る)

諸ノ菩薩・大弟子・釋・梵四天王等ハ昔ヨリ所ナリ。未ダ見。其ノ室廣博ニシテ悉ク皆包ヲ容スルニ三萬二千ノ獅子座ヲ一無シ。所ニ妨礙スル。於テモニ毘耶理城及ビ閻浮堤・四天下ニ。亦不ニ迫近ナラ。悉ク見ルニ如シ。故ノ。

經典訓讀文

諸ノ菩薩・大弟子・釋・梵・四天王等は昔より未だ見ざる所なり。其の室廣博にして悉く皆三萬二千の獅子座を包容するに妨礙する所無し。毘耶理城及び閻浮堤・四天下に於ても亦迫近ならず。悉く見るに故の如し。

經典現代語譯

諸々の菩薩・釋尊の大弟子・帝釋(1)・梵天(2)・四天王(3)たちは未だかつて見たことの無い光景であつた。維摩居士の方丈の居室が實に廣大で、三萬二千の獅子座を悉くその中に容れても何らの妨げは無かつた。毘耶理城及び閻浮堤(此の地上世界)・四天下(須彌山の四方にあると言はれる四大州)も何らちぢまることもなく、もとの通り見ることができた。

(1) 帝釋 ヲエーダ神話における最も有力な神であつたが後、佛教にとり入れられて梵天と共に佛法を守護する神とされた。彼の名は俗語で sakka とよばれるので「釋」と音寫され、神々の帝王とみなされるので「帝」といふ。佛教神話に於ては切利天の主で、須彌山頂の喜見城に住むといふ。

(2) 梵天 インド思想で萬有の根源ブラフマンを神格化したもので、佛教に入つて色界の初禪天をいふ。

(3) 四天王 須彌山の中腹にある四天王の主。帝釋天に仕へ、佛法の守護を念願とし、佛法に歸依する人々を守護する。持國天は東方を、增長天は南方を、廣目天は西方を、多聞天は(毘沙門天)は北方を守護する。

〔淨名は大衆に座に就くことを勸むの科段分け〕(現代語譯)

維摩居士は、須彌燈王如來から獅子座を借りてきて參會者の求めに應じたことを説き明す中の第六に、方丈に集つてきた大勢の

人たちに獅子座に坐るやう維摩居士が勧めることを説き明します。爾の時に維摩詰、文殊に語らくから以下がこれであります。その中についてそれ自體に二つの項目があります。

第一に、先ず方丈に集つてきた大勢の人たちに獅子座に坐るやう勧めます。

第二に、佛弟子の舍利弗に特別に勧めます。舍利弗は座席があればよいがと心の中で思つた主體者であります。

それ故に特別に舍利弗に勧めるのであります。

(訓讀文)

第六に爾の時に維摩詰、文殊に語らく従り以下、淨名は大衆に座に就くことを勧むるを明す。中に就きて自ら二有り。

第一に先づ大衆に勧む。

第二に別に身子に勧む。身子は是れ座を求むるの主なり。所以に別に之を勧むるなり。

〔大衆に勧む〕

維摩居士が獅子座に坐るやう勧める中の第一は、先づ方丈に集つてきた大勢の人たちに勧めるのですが、その中についても亦、三つの項目があります。

第一に集つてきた大勢の人たちに勧めます。

第二に、神通力を得てゐる菩薩は高い獅子座に昇ることができ、坐することを説き明します。

第三に、新たに發心したばかりの菩薩は、高い獅子座には昇ることができないことを説き明かします。經典を御覽なさい。

(訓讀文)

第一の大衆に勧むるに就きて亦三有り。

第一に勧む。

第二に神通有りて昇るを得ることを明す。

第三に新發は昇る能はざるを明す。
即ち見つ可し。

經典（大衆に勸む）

爾ノ時ニ維摩詰。語ラクニ文殊師利ニ。就テニ獅子座ニ。與ニ諸ノ菩薩・上人一俱ニ坐シテ。當ニニ自ラ身ヲ立ツルコト。身ヲ彼ノ如クスニ座像一。其ノ得タルニ神通ヲ一菩薩ハ即チ自ラ變ジテ。形ヲ爲テニ四萬二千由旬ト一坐スニ獅子座ニ。諸ノ新發意ノ菩薩及び大弟子ハ皆不レ能ハレ昇ルコト。

經典訓讀文

爾ノ時ニ維摩詰、文殊師利に語らく。獅子座に就きて諸の菩薩・上人と俱に坐して、當に自ら身を立つること彼の座像の如くすべしと。

其の神通を得たる菩薩は即ち自ら形を變じて四萬二千由旬と爲りて獅子座に坐す。諸の新發意の菩薩及び大弟子は皆昇ること能はず。

經典現代語譯

獅子座が方丈に置かれた時、維摩居士は文殊菩薩に語りかけ言ひました。「諸々の菩薩や佛弟子たちと一緒に獅子座にお坐り下さい。あの燈王如来がお坐りになつてをられるのと同様にゆつたりお坐り下さい。」と。

神通力を得てゐる菩薩は、高さ四萬二千由旬といふ大きな姿に自ら形を變へ、獅子座に坐つた。諸々の新たに發心したばかりの菩薩や釋尊の大弟子たちは皆、この高い獅子座には昇ることができなかつた。

〔別に身子に勸む〕（現代語譯）

維摩居士が獅子座に坐るやう勸める中の第二は、佛弟子の舍利弗に特別に勸めるのですが、その中についても亦、四つの項目が

あります。第一に、舍利弗に特別に勧めます。第二に、舍利弗は獅子座が高くとても昇ることはできませんと辭退することを説き明します。第三に、燈王如來を禮拜すれば獅子座に昇ることができる、維摩居士が教へることを説き明します。第四に、大勢の人たちは燈王如來を禮拜して、獅子座に昇り坐するを得たことを説き明します。

(訓讀文) 訓讀文

別に身子に勸むる中に就きて亦四有り。第一に勸む。第二に身子は能はずと辭するを明す。第三に淨名は燈王を禮するを教ふるを明す。第四に大衆は燈王を禮して昇るを得たるを明す。

經典 (別に身子に勸む)

爾ノ時ニ維摩詰。語ラクニ舍利弗ニ。就ケトニ獅子座ニ。

舍利弗ノ言ク。居士。此ノ座高廣ナリ。吾不ト能ハレ昇ルコト。

維摩詰ノ言ク。唯舍利弗。爲ニ須彌燈王如來ノ一作サバレ禮ヲ。乃チ可シト得レ坐スルコトヲ。

於テ是ニ心發意ノ菩薩及ビ大弟子ハ即チ爲ニ須彌燈王如來ノ一作シレ禮ヲ。便チ得タリ坐スルニ獅子座ニ。

經典訓讀文

爾の時に維摩詰、舍利弗に語らく。獅子座に就けど。

舍利弗の言はく。居士、此の座高廣なり。吾昇ること能はずと。

維摩詰の言はく。唯舍利弗。須彌燈王如來の爲に禮を作さば、乃ち坐することを得べしと。

是に於て心發意の菩薩及び大弟子は即ち須彌燈王如來の爲に禮を作し、便ち獅子座に坐するを得たり。

經典現代語譯

その時維摩居士は特別に舍利弗に語りかけ言ひました。「獅子座にお坐り下さい。」と。

舍利弗は言ひました。「維摩居士さん、此の獅子座は極めて高く大きく、私にはとても昇ることはできません。」と。

維摩居士は言ひました。「舍利弗さんそれはね。須彌燈王如來に感謝の念を以て禮拜すれば、獅子座に昇ることができますよ。」

そこで以て、新たに發心したばかりの菩薩や釋尊の大弟子たちは、須彌燈王如來に對して感謝の誠をささげて禮拜すると、不思議なことに高い獅子座に昇り坐することができた。

〔不思議の迹を現することを明すの科段分け〕（現代語譯）

舍利弗の言はく。未曾有なりから以下は、此の不思議品の全體を六つの項目に大きく分けましたが、その第四であつて、方丈に三萬二千の獅子座を容れたことを佛弟子舍利弗が讚嘆することに因つて、諸佛や菩薩には不思議な權智（教化のための手段をめぐらす智慧）と實智（眞理に通じた智慧）との二智があつて、此の世に種々の不可思議なありさまを現出することを説き明してゐます。此の中について亦二つの項目に分けます。

（訓讀文）

舍利弗の言はく。未曾有なり從り以下、六の大段の中の第四に、身子が嘆に因るを明す。仍ち廣く諸佛・菩薩に不思議の權と實との二智有り。能く不思議の迹を現するを明すなり。中に就きて亦二有り。

〔身子の嘆するを明す〕（現代語譯）

此の世に種々の不可思議なありさまを現出することを説き明す中の第一に、佛弟子舍利弗が、この小さな方丈に高く大きい獅子座を容れたことを未曾有でありますと、要約して讚嘆することを説き明かします。

（訓讀文）

第一に身子の略して嘆するを明す。

經典（身子の嘆ずるを明す）

舍利弗ノ言ク。居士。未曾有ナリ也。如キノ、是ノ小室ニ乃チ容ヲ受ス此ノ高廣之座ヲ。於テ毘耶理城ニ無シ所ニ妨礙スル。又於テモ閻浮堤ノ聚樂・城邑及ビ四天下ノ諸天・龍王・鬼神ノ宮殿ニ上。亦不トニ迫近一。

經典訓讀文

舍利弗の言はく。居士、未曾有なり。是の如きの小室に仍ち此の高廣の座を容受す。毘耶理城に於て妨礙する所無し。又閻浮堤の聚樂・城邑及び四天下の諸天・龍王・鬼神の宮殿に於ても、亦迫近ならずと。

經典現代語譯

舍利弗は言ひました。「維摩居士さん、未曾有のことですね。こんな小さな方丈の居室に高く大きい獅子座を全部容れてしまひましたね。それでゐて毘耶離城が何ら妨げになることもありません。地上世界の集落、都城、村里及び四天下の諸天・龍王・鬼神等宮殿も何らちぢまることもありません。」と。

〔不思議の迹を明すの科段分け〕（現代語譯）

維摩詰の言はくから以下は、此の世に種々の不可思議なありさまを現出することを説き明す中の第二に、佛弟子舍利弗が未曾有のことですと讚嘆することに因つて、維摩居士は、諸佛や菩薩には不可思議なことを現出する神通力を有してゐることを説き明します。その中について亦三つの項目に分けます。

（訓讀文）

第二に維摩詰の言はく從り以下、淨名は身子の嘆に因るを明して廣く不思議の迹を明す。中に就きて亦三有り。

〔迹を明さんと欲して其の本を擧ぐ〕（現代語譯）

諸佛や菩薩は不可思議なことを現出する神通力を有してゐることを説き明す中の第一は、此の世に不可思議なありさまを現出す

ることを明らかにしようとして、先づその神通力の根源となつてゐるものを挙げます。諸佛・菩薩に解脱有り。不思議と名づくといふ經典がこれであります。解脱とは、權智（教化のための手段をめぐらす智慧）と實智（眞理に通じた智慧）との二智であります。此の二智は共に煩惱を超越してゐます。煩惱の束縛から解き放たれてゐますから「解脱」と言ふのであります。諸佛や菩薩には、此の權智との二智が具つてゐて不思議な神通力の根源となつてゐます。それ故に此の世に於て種々の不可思議なありさまを現出することができるのであります。

（訓讀文）

第一に將に迹を明さんと欲して先づ其の本を擧ぐ。諸佛・菩薩に解脱有り。不思議と名づくなり。
解脱とは則ち是れ權と實との二智なり。此の二智は俱に累を出でたり。故に解脱と言ふ。
諸佛・菩薩に此の權と實との二智有りて不思議の本と爲すが故に、能く種種の不思議の迹を現することを明かすなり。

經典（迹を明さんと欲して其の本を擧ぐ）

維摩詰ノ言ク。唯舍利弗。諸佛・菩薩ニ有リニ解脱一。名ツクニ不可思議ト一。

經典訓讀文

維摩詰の言はく。唯舍利弗。諸佛・菩薩に解脱有り。不可思議と名づく。

經典現代語譯

維摩居士は言ひました。「舍利弗さんよ。諸佛や菩薩は煩惱の束縛を超越した解脱を得てゐます。これを不可思議と稱します。」

〔廣く不思議の釋を明す・結す〕（現代語譯）

不思議章
若し菩薩にして是の解脱に住する者はから以下は、諸佛や菩薩は不可思議なことを現出する神通力を有してゐることを説き明す中の第二であつて、此の世に於て不思議なありさまを種々現出することを説き明してゐます。

舍利弗。我今略して説くのみから以下は、右の第三であつて、此の項の結びの文言であります。

須彌山を芥子粒の中につつまこむ、大海を毛穴の中に入れる、諸々の風を口中に吸ひこむ、大火災の火を腹中に入れる、諸々の聲を佛陀の聲に變じ、神力を以て佛身を現じ、長きを願はない者には一劫を促めて七日とし、長きを願ふ者には七日を引き延ばして一劫と爲す、これらは皆解脱を得た菩薩が、此の世に於て不可思議なありさまを現出する、そのことであります。しかしながら此の不可思議を解釋するのに、三人の研究家の説があります。

第一の解釋は、須彌山も芥子粒も同じく實體の無い虚假なる故に、(芥子粒は大地・日光・水などに育まれたもので芥子粒には大自然が充滿してゐる。形は個別的であつてもその本性は同じ法界にあつて互ひに融通無礙であるから)、須彌山を芥子粒の中につつむことができる、と云ひます。

第二の解釋は、須彌山は眞實に芥子粒の中に入るのではない。ただ聖人は神通力を以て觀察者にそのやうに見させるのである、と云ひます。

第三の解釋は、眞實には須彌山が芥子粒の中に入つてゐる、入つてゐないかについて知ることとはできない。その確たる根據を知ることとはできないが須彌は芥子の中に入つてゐる。それ故に不思議と名づけるのである、と云ひます。

(訓讀文)

第二に若し善薩にして是の解脱に住する者は従り以下、廣く不思議の迹を明す。

第三に舍利弗。我今略して説くのみ従り以下、結するなり。

山を苞み、海を呑み、風を吸ひ・火を服し、聲を變じ・質を改め、長を促め・短を演ぶ。皆是れ不思議の迹なり。然るに不思議を釋するに三家有り。一に云はく。須彌と芥子と同じく是れ虚假なるが故に相容ることを得るなりと。二に云はく。須彌は實には芥子の中に入るに非ず。但聖人は神力をもつて觀者に見せしむるなりと。三に云はく。實には入るをも知らず、亦入らざるをも知らず。其の然る所以を知らずして猶然なり。故に不思議と名づくるなりと。

經典（廣く不思議の迹を明す結す）

若シ菩薩ニシテ住スルニ是ノ解脫ニ一者ハ。以テニ須彌之高廣ナルヲ一内ルルニ芥子ノ中ニ一無シレ所ニ増減スル一。須彌山王ノ本相如シレ故ノ。而モ四天王切利ノ諸天ハ不レ覺ラニ不レ知ラニ己ガ之所ヲ入ル。唯應キレ度ス者ノミ乃チ見ルニ須彌ノ入ルヲ一芥子ノ中ニ一。是ヲ名ツクニ不可思議解脫ノ法門ト一。又以テニ四大海ノ水ヲ一入ルニ一毛孔ニ一。不レ燒マサニ魚鼈龜鼈ノ水性之屬ヲ一。而モ彼ノ大海ノ本性如シレ故ノ。諸龍・鬼神・阿修羅不レ覺ラニ不レ知ラニ己ガ之所ヲ入ル。於テモニ此ノ衆生ニ一亦無シレ所レ燒マス。

又舍利弗。住スルニ不可思議解脫ニ一菩薩ハ斷チ取テ三千大世界ヲ一。如クニ陶家ノ輪著ケテニ右ノ掌ノ中ニ一擲ツニ過タル恆沙ヲ世界之外ニ一。其ノ中ノ衆生ハ不レ覺ラニ不レ知ラニ己ガ之所ヲ往ク。又復還テ置クニ本ノ處ニ一。都テ不レ使メニ人ヲシテ有ラニ往來ノ想ヲ一。而モ此ノ世界ノ本相如シレ故ノ。

又舍利弗。或ハ有リテニ衆生一樂ウテニ久ク住スルヲ一世ニ而可キレ度ス者ニハ。菩薩ハ即チ演テニ七日ヲ一以テ爲シニ一劫ト一。令ムニ彼ノ衆生ヲシテ謂ハニ之ヲ一劫ト一。或ハ有リテニ衆生一不シテレ樂ハニ久ク住スルヲ一而可キレ度ス者ニハ。菩薩即チ促メテニ一劫ヲ一以テ爲シニ七日ト一。令ムニ彼ノ衆生ヲシテ謂ハニ之ヲ七日ト一。

又舍利弗。住スルニ不可思議解脫ニ一菩薩ハ以テニ一切佛土ノ嚴飾之事ヲ一集メテ在テニ一國ニ一示スニ於衆生ニ一。又菩薩ハ以テニ一切佛土ノ衆生ヲ一置テニ之ヲ右ノ掌ニ一。飛ビテ到リニ十方ニ一遍ク示スニ一切ニ一。而モ不レ動カ本ノ處ヲ一。

又舍利弗。十方ノ衆生ノ供ニ養スルノ諸佛ヲ一之具。菩薩ハ於テニ一毛孔ニ一皆令ムレ得セレ見ルコトヲ。又十方國土ノ所有日・月・星宿ヲ於テニ一毛孔ニ一普ク使ムレ見セレ之ヲ。

不思議章

又舍利弗。十方世界ノ所有諸ノ風ヲ菩薩ハ悉ク能ク吸キ著シテ口中ニ一而モ身ハ不レ損ハ。外ノ諸ノ樹木モ亦不ニ摧ケ折レ一。又十方世界ノ劫

盡テ燒ケル時。以テ一切ノ火ヲ一内ルルニ於腹中ニ一火事如ニシテ故ノ而モ不レ爲サレ害ヲ。

又於テ下方ノ過恆河沙等ノ諸佛ノ世界ニ一取テ一佛土ヲ一舉テ著クルコトニ上方ノ過恆河沙無數ノ世界ニ一如クシテ持テ針ノ鋒ヲ一舉ルガ中一棗葉ヲ而モ無シレ所レ燒マス

又舍利弗。住スルニ不可思議解脱ニ一菩薩ハ。能ク以テ神通ヲ一現ジテ作リニ佛身ト一。或ハ現ジニ辟支佛ノ身ヲ一。或ハ現ジニ帝釋ノ身ヲ一。或ハ現ジニ梵王ノ身ヲ一。或ハ現ジニ世王ノ身ヲ一。或ハ現ズニ轉輪聖王ノ身ヲ一。

又十方世界ノ所有衆聲。上中下ノ音。皆能ク變ジテレ之ヲ令メレ作テ佛ノ聲ト一。演ニ出シ無常・苦・空・無我之音及ヒ十方諸佛ノ所説ノ種種之法ヲ一。皆於テ其ノ中ニ一普ク令ムレ得セレ聞クコトヲ。

(以上は、広く不思議の迹を明す。)

舍利弗。我今略シテ説クノミニ菩薩ノ不可思議解脱之力ヲ一。若シ廣ク説カバ者窮ムトモレ劫ヲ不ランレ盡キ。

(以上は、結す。)

經典訓讀文

若シ菩薩にして是の解脱に住する者は、須彌の高廣なるを以て芥子の中に内るるに増減する所無し。須彌山王の本相故の如し。而も四天王・切利の諸天は己が入る所を知らず覺らず。唯度すべき者のみ乃ち須彌の芥子の中に入るを見る。是を不可思議解脱の法門と名づく。又四大海の水を以て一毛孔に入る。魚鼈・鼉・鼉の水性の屬を燒まさず。而も彼の大海の本性格の如し。諸龍・鬼神・阿修羅等己が入る所を知らず覺らず。此の衆生に於ても亦燒ます所無し。

不思議章

又舍利弗。不可思議解脱に住する菩薩は三千大世界を斷ち取りて、陶家の輪の如く右の掌の中に著けて恆沙を過ぎたる世界の外

に擲つ。其の中の衆生は己が往く所を知らず覺らず。又復還りて本の處に置くに、都て人をして往來の想ひを有らしめず。而も此の世界の本相故の如し。

又舍利弗。或は衆生有りて久しく世に住するを樂うて度す可き者には、菩薩は即ち七日を演べて以て一劫と爲し、彼の衆生をして之を一劫と謂はしむ。或は衆生有りて久しく住するを樂はずして度す可き者には、菩薩は即ち一劫を促めて以て七日と爲し、彼の衆生をして之を七日と謂はしむ。

又舍利弗。不可思議解脱に住する菩薩は一切佛土の嚴飾の事を以て集めて一國に在りて衆生に示す。又菩薩は一切佛土の衆生を以て之を右の掌に置きて飛びて十方に到り遍く一切に示す。而も本の處を動かす。

又舍利弗。十方の衆生の諸佛を供養するの具、菩薩は一毛孔に於て皆見ることを得しむ。又十方國土の所有日月・星宿を一毛孔に於て普く之を見せしむ。

又舍利弗。十方世界の所有諸の風を菩薩は悉く能く口中に吸著して而も身は損はず。外の諸の樹木も亦摧け折れず。又十方世界の劫盡きて焼ける時、一切の火を以て腹中に内るるに火事故の如くにして而も害を爲さず。又下方の過恆河沙等の諸佛の世界に於て、一佛土を取りて擧げて上方の過恆河沙無數の世界に著くこと針の鋒を持ちて一粟葉を擧ぐるが如くして而も燒ます所無し。

不思議章

又舍利弗。不可思議解脱に住する菩薩は、能く神通を以て現じて佛身と作り、或は辟支佛の身を現じ、或は聲聞の身を現じ、或は帝釋の身を現じ、或は梵王の身を現じ、或は世王の身を現じ、或は轉輪聖王の身を現す。

是の時に大迦葉から以下は、此の不思議品の全體を六つの項目に大きく分けましたが、その第五であつて、維摩居士の説法を讚嘆して迦葉尊者は、自分のさとり境地をはるかに超えてゐると己の至らざることを憂へなげき、新たに佛道を學ぶ菩薩たちに菩提心（無常絶對のさとりを求めて修行し、衆生を教化濟度する）を發すやう勸めることを説き明してゐます。此の中についてそれ自體に三つの項目があります。

第一に、經典編纂者は、迦葉尊者が不思議解脱の説法を聞いて「未曾有である」と讚嘆の辭を述べることを説き明してゐます。

第二に、舍利弗に謂ふから以下は、正しく己の至らざることを憂へなげくことを述べてゐます。

第三に、大迦葉是の語を説く時から以下は、三萬二千の天子たちが菩提心を發すことを説き明してゐます。

(訓讀文)

是の時に大迦葉従り以下、六の大段の中の第五に、迦葉自ら分を絶すと慨嘆して新學の發心を勸むることを明すなり。中に就きて自ら三有り。

第一に經家、迦葉は不思議を聞きて未曾有なりと嘆ずることを敘ぶるを明すなり。

第二に舍利弗に謂ふ従り以下、正しく慨嘆の事を出す。

第三大迦葉是の語を説く時従り以下、三萬二千の天子の發心するを明すなり。

〔迦葉、未曾有なりと嘆ず〕

(この箇所について太子『義疏』は科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

經典(迦葉、未曾有なりと嘆ず)

章是ノ時ニ大迦葉。聞テレ説クラニ菩薩ノ不可思議解脱ノ法門ヲ一。歎ズニ未曾有ナリト一。

經典訓讀文

不思議

是の時に大迦葉、菩薩の不可思議解脱の法門を説くを聞いて、未曾有なりと歎す。

經典現代語譯

維摩居士が不可思議解脱の境地に到達してゐる菩薩の種々不思議な力を説き終つた時、迦葉尊者は「未曾有の説法である。」と讚嘆しました。

〔正しく慨嘆の事を出す〕（現代語譯）

迦葉尊者が新たに佛道を學ぶ菩薩たちに菩提心を發すやう勸める中の第二に、正しく己の至らざることを憂へなげくことを説き明しますが、この中についてそれ自體に四つの項目があります。

第一に、聲聞の人たちは正しいさとりを開く境地に少しも到達してゐないので、盲者と同様であると説き明します。

第二に、智者はから以下は、菩薩はよく菩提心を發すことを述べてゐます。

第三に、我等何爲れぞから以下は、聲聞・緣學の二乗の人たちはさとりの境地から遠く離れてゐることに氣づきます。その愚かさを皆憂ひ嘆き、號泣する聲は全世界を震はす如くであらうと説き明してゐます。

第四に、一切の菩薩はから以下は、菩薩は大いなる利益を得、大いに喜んで此の法を受け入れることを説き明してをります。その理由は、一たび此の眞理の教へを聞いて迷ひある生死の世界を超越するならば、一切の惡魔も菩薩の爲すことを妨害できないからであります。まして衆生の求めに應じて衆生を教化濟度する菩薩に對しては、尚更妨害できません。

（訓讀文）

第二に正しく慨嘆を明す中に就きて、自ら四有り。

第一に聲聞は絶えて成佛の分無きが故に、盲者の如しと明す。

第二に智者は従り以下、菩薩は能く發心することを暢ぶるなり。

第三に我等何爲れぞ従り以下、二乗は失ふ所甚だ重し。皆應に號泣して三千に振ふべしと明すなり。

第四に一切の菩薩は従り以下、菩薩は利を得る處重し。應に欣慶すべしと明すなり。然る所以は、一たび此の理を聞きて即ち生死を超えなば、魔も燒すこと能はず。而も況んや應を行ずる者をや。

〔聲聞は盲者の如しと明す〕

(この中の四項目について太子『義疏』は、科段分けを示されたのみで、そのほかの説明はない。)

經典(聲聞は盲者の如しと明す)

謂フニ舍利弗ニ。譬バ如ク下有テ人於テ盲者ノ前ニ。現ズレドモ衆ノ色像ヲ一非ルガ彼ノ所ニ見ル。一切ノ聲聞ハ聞ケドモ是ノ不可思議解脱ノ法門ヲ一不ルハ能ハニ解了スルコト一爲スレ若シト此ノ也。

經典訓讀文

舍利弗に謂ふ。譬へば人有りて盲者の前に於て、衆の色像を現すれども彼の見る所に非ざるが如く、一切の聲聞は是の不可思議解脱の法門を聞けども、解了すること能はざるは此の若しと爲すなり。

經典現代語譯

迦葉尊者は舍利弗に言ひました。

「譬へば、ある人が盲者を前にして諸々の色や像を見せても、盲者はそれを見ることが出来ないやうに、聲聞の人たちは維摩居士さんの説く不可思議解脱の教へを聞いても理解することはできない。聲聞が理解できないのは、盲者がものを見ることが出来ないと同様なのです。」

經典(菩薩は發心することを暢ぶ)

智者ハ聞キテ是ヲ其レ誰カ不ラン發サニ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ一

不思議章

經典訓讀文

智者ちしやは是これを聞ききて其それ誰たれか阿耨多羅三藐三菩提心あのくたらさんみやくさんぼだいしんを發おこさざらん。

經典現代語譯

「智者たる菩薩さんたちは、この維摩居士さんの説法を聞いて誰しもが阿耨多羅三藐三菩提心あのくたらさんみやくさんぼだいしん（無常絶對のさとりを求め、衆生を教化濟度しようと願ふ心）を發すにちがひありません。」

經典（二乗は號泣すべしと明す）

我等何爲われらなんすレソ永ク斷なげチニ其ノ根こんヲ一於テニ此ノ大乘だいじやうニ一。已ニ如クナルヤニ敗種さいしゆノ一。一切ノ聲聞しやうもんハ聞テニ是ノ不可思議解脫ふかしぎげだつノ法門ほうもんヲ一。皆應みなまさニ號泣ごうきゆうシ聲こゑハ震さんぜんフニ三千大千世界さんぜんだいせんせかいニ一。

經典訓讀文

我等何爲われらなんすレぞ永そく其こんの根こんを此この大乗だいじやうに於おいて斷たち、已すでに敗種はいしゆの如ごとくなるや。一切いっさいの聲聞しやうもんは是この不可思議解脫ふかしぎげだつの法門ほうもんを聞ききて。皆應みなまさに號泣ごうきゆうし聲こゑは三千大千世界さんぜんだいせんせかいを震ふるふべし。

經典現代語譯

「私たち二乗は、どうして永い間此の大乗の教へに目覺める機根をもたず、さとりに到達し得ない腐敗した種子と同じやうなのであらうか。一切の聲聞の人たちは、此の維摩居士さんの不可思議解脫の教へを聞いて、皆己の愚かさを憂ひ嘆いて號泣し、その泣き聲は全世界を震はす如くであるに違ひありません。」

經典（菩薩は欣慶すべしと明す）

一切ノ菩薩ぼさつハ應おニ大ニ欣慶きんけいシテ頂ちやうヲ受ス。此ノ法ほふヲ一。若シ有テニ菩薩ぼさつ一信しんヲ解げセン不可思議解脫ふかしぎげだつノ法門ほうもんヲ一者ハ。一切ノ魔衆ましゆモ無なケンニ如ごとク何トスルコト之ヲ一。

經典訓讀文

一切の菩薩は應に大いに欣慶して此の法を頂受すべし。若し菩薩有りて不可思議解脱の法門を信解せん者は、一切の魔衆も之を如何とすること無けん。

經典現代語譯

「一切の菩薩は大いに喜んで此の教を當然お受けするに違ひありません。維摩居士さんの説く不可思議解説の教へを確信し理解し得た菩薩に對しては、一切の惡魔たちがこれを妨害しようとしても如何ともすることができません。」

〔天子の發心するを明す〕（現代語譯）

迦葉尊者が新たに佛道を學ぶ菩薩たちに菩提心を發すやう勧める中の第三に、天子たちが利益を得たことを説き明します。經典を御覽なさい。

（訓讀文）

第三に益を得るを明す。則ち見つ可し。

經典（天子の發心するを明す）

大迦葉説クニ此ノ語ヲ一時。三萬二千ノ天子ハ皆發シキニ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ一。

經典訓讀文

大迦葉此の語を説く時、三萬二千の天子は皆阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。

經典現代語譯

迦葉尊者が此の教へを説いた時、三萬二千人の天子たちは皆、阿耨多羅三藐三菩提心（無上絶對のさとりを求め、衆生を教化濟度しよ

不思議章

うと願ふ心）を發しました。

〔淨名は迦葉の嘆を述成することを明す及び此の項の科段分け〕

爾その時に維摩詰ゆいまきつ、大迦葉たいかしやうに語るから以下は、此の不思議品の全體を六つの項目に大きく分けましたが、その第六であつて、維摩居士は不思議解脱の菩薩は魔王に化身することを述べて、迦葉尊者の讚嘆は眞實であることを成立せしめます。

迦葉尊者は上述の讚嘆するに際して、若し不可思議解脱の教へを信ずることが出来れば、惡魔がこれを妨害しようとしても何らの手出しもできないと言ひました。而るに現實に今、新たに佛道を學ばんとする菩薩たちは、惡魔の爲に心をかき亂されてゐます。惡魔は何の手出しもできない、とは言へないではないかといふ疑問があらませう。その理由を釋き明して、不可思議解脱の境地にある菩薩は、新學の菩薩の心を堅固ならしめる爲に魔王に化身して惱ますのである、と云ひます。凡夫は威徳力がありませんから、そのやうに教へ導くことはできません。此の中について四つの項目があります。

第一に、不可思議解脱の菩薩は衆生を教化濟度しようとするが爲に、神通力を現はして魔王に化身することを正しく說き明します。

第二に、所以は何んから以下は、魔王に化身できる理由を釋き明します。

第三に、凡夫はから以下は、凡夫は力が無く衆生の教化濟度はできないことを說き明します。

第四に、是を…名づくから以下は、結びの文言であります。

以上の四項目は皆經典を御覽なさい。

(訓讀文)

爾その時に維摩詰ゆいまきつ、大迦葉たいかしやうに語る從り以下、六の分段の中の第六に、淨名は迦葉の嘆を述成することを明す。迦葉は上に若し能く不思議を信ずれば魔も之を如何ともすること無しと言へり。而るに今現に新學の菩薩は魔の爲に擾亂せらる。云何ぞ之を如何ともすること無しと言はんや。所以に釋して皆是れ不思議解脱に住する菩薩と云ふ。凡夫は下劣な

り。何ぞ是の如きを得んや。

中に就きて即ち四有り。

第一に正しく菩薩は物を化せんと欲するが爲に現じて魔王と作るを明す。

第二に所以は何ん従り以下。魔王と作ることを釋す。

第三に凡夫は従り以下。凡夫は能はずといふことを明す。

第四に是を名づく従り以下。結す。

皆見つ可し。

經典（菩薩は物を化せんが爲に魔王と作るを明す）

爾ノ時ニ維摩詰。語ルニ大迦葉ニ。仁者。十方ノ無量阿僧祇ノ世界ノ中ニ作ルニ魔王ト一者ハ。多クハ是レ住セルニ不可思議解脱ニ一菩薩ナリ。以テノニ方便力ヲ一故ニ教ニ化シ衆生ヲ一現ジテ作ルニ魔王ト一。又迦葉。十方無量ノ菩薩。或ハ有テ人從テ乞ハンニ手足耳鼻・頭目髓腦・血肉皮骨・聚落城邑・妻子奴婢・象馬車乘・金銀琉璃・磈磈磈磈・珊瑚琥珀・眞珠河貝・衣服飲食ヲ一。如ク此ノ乞フ者ハ。多クハ是レ住スルニ不可思議解脱ニ一菩薩ナリ。以テニ方便力ヲ一而モ往テ試ミレ之ヲ。令ムニ其ヲシテ堅固ナリ一。

經典訓讀文

爾の時に維摩詰。大迦葉に語る。仁者。十方の無量阿僧祇の世界の中に魔王と作る者は、多くは是れ不可思議解脱に住せる菩薩なり。方便力を以ての故に衆生を教化し現じて魔王と作る。又迦葉、十方無量の菩薩、或は人有りて従つて手足耳鼻・頭目髓腦・血肉皮骨・聚落城邑・妻子奴婢・象馬車乘・金銀琉璃・磈磈磈磈・珊瑚琥珀・眞珠河貝・衣服飲食を乞はん。此の如く乞ふ者は、多くは是れ不可思議解脱に住する菩薩なり。方便力を以て而も往いて之を試み、其をして堅固ならしむ。

經典現代語譯

迦葉尊者が讚嘆し終つた時、維摩居士は語りました。

「迦葉さんよ。十方の無量無数の世界の中に於て魔王の姿をしてゐる人の多くは不可思議解脱の境地に到達してゐる菩薩なのです。方便力（衆生を導く巧みな手だて）あるが故に、神通力を現はして魔王に化身して衆生を教化濟度するのです。又迦葉さんよ。十方の無量無数の不可思議解脱の菩薩は、或る人に對して手、足、耳、鼻、頭、目、腦みそ、血、肉、皮、骨、村や町や都市、妻子や召使ひ、象や馬の乗り物、金銀や琉璃、七寶や碼瑙、珊瑚や琥珀、眞珠や美しい玉、衣服や飲食物を、私に與へて下さいと乞ひます。このやうに乞ふ人の多くは、不可思議解脱の境地に到達してゐる菩薩なのです。方便力を以て出かけて行つて乞ふ。それは物惜みの心を捨てさせるべく試みるのであつて、衆生の心を堅固ならしめるのです。

經典（魔王と作るを釋す）

所以ハ者何ン。住スルニ不可思議解脱ニ一菩薩ハ有リニ威徳力一。故ニ行ジテニ逼迫ラ一。示スニ諸ノ衆生ニ如ノレ是ノ難事ラ一。

經典訓讀文

所以は何ん。不可思議解脱に住する菩薩は威徳力有り。故に逼迫を行じて、諸の衆生に是の如きの難事を示す。

經典現代語譯

「何故魔王に化身できるかと申しますと、不可思議解脱の境地に到達してゐる菩薩は威嚴に満ちた徳と力とがあります。それ故諸々の衆生に難しい行を示し、それを修習するやう強く迫るのです。

經典（凡夫は能はずといふことを明す）

凡夫ハ下劣ニシテ無シレ有ルコトニ力勢一。不レ能ハ如クレ是ノ逼ニ迫スルコト菩薩ラ一。譬ヘバ如シニ龍象ノ蹴踏ハ非ルガニ驢ノ所ニ可堪フル。

經典訓讀文

凡夫は下劣にして力勢有ること無し。是の如く菩薩を逼迫すること能はず。譬へば龍象の蹴踏は驢の堪ふる所に非ざるが如し。

不思議章

經典現代語譯

「凡夫は修行が低く劣つてゐるので偉大な力はありません。不思議解脱の菩薩のやうに新學の菩薩に強く迫ることはできません。譬へば龍や象が蹴つたり踏みついたりした場合、ひ弱な驢ろばはそれに堪へることができないのと同様です。」

經典（結す）

是レヲ名ツク下 住スルニ 不可思議解脱ニ 一菩薩ノ智慧ト方便之門ト。

經典訓讀文

是これを不可思議解脱ふかしぎげだつに住じゆうする菩薩ぼさつの智慧ちゐと方便ほうべんの門もんと名なづく。

經典現代語譯

「以上の私（維摩居士）が説いたことを、不可思議解脱の境地にある菩薩の智慧及び方便の教へと名づけます。」

聖徳太子佛典講説

「維摩經義疏の現代語譯と研究」(中巻)

平成二十六年六月

初版頒価 千五百円

編者 磯貝保博 山内健生 澤部壽孫

発行者 公益社団法人 国民文化研究会

理事長 今 林 賢 郁

印刷所 麻屋三英社

國民文化研究會・聖德太子研究會著

聖德太子佛典講說

維摩經義疏の現代語譯と研究

(中卷)

